

芥沢遺跡 II

——「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書——

2007年3月

茅野市教育委員会

芥沢遺跡 II

——「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書——

2007年3月

茅野市教育委員会

序 文

八ヶ岳の西南麓に広がる茅野市は、棚畠遺跡出土の国宝土偶『縄文のビーナス』、中ッ原遺跡出土の重要文化財土偶『仮面の女神』をはじめとして、国特別史跡尖石・与助尾根遺跡、国史跡上ノ段遺跡、国史跡駒形遺跡などの縄文時代の遺跡が多数あることから、縄文文化の宝庫『縄文王国』と称されています。

ここに報告する芥沢遺跡は平成15・16年度に県営中山間総合整備事業御柱の里地区の施工に伴い、遺跡の保護措置として記録保存を前提に茅野市教育委員会が発掘調査を実施したものです。

本遺跡は、今まで小規模な発掘調査が行われたことはありました
が、県営中山間総合整備事業に伴い、平成14年度に事業予定地で試
掘調査を行い、併せて周辺で踏査による遺物表面採集を実施した結
果、遺跡範囲は35,000m²の広がりをもっていることが判明し、今回
の発掘調査は遺跡北西側、約1/3の範囲が対象になりました。

発掘調査の結果、縄文時代早期末から前期前半の竪穴住居址が38
軒、平安時代の竪穴住居址3軒、落し穴11基を含む数多くの土坑が
確認され、遺跡の全体像が垣間見えてきました。

本遺跡が立地する宮川水系の流域には国史跡の阿久遺跡を代表と
して、縄文時代早期末から前期の集落が数多く点在しています。芥
沢遺跡はこのような遺跡の中で、広い面積を持つが短期間の断続で
形成された集落であったことが判明しました。

発掘調査では、居住域と生産域が同じ調査区内で見つかっています
が、周辺遺跡の調査成果を含めた情報を基に八ヶ岳西南麓における
縄文時代早期末から前期のより具体的な生活の様子が今後解明さ
れると思われます。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地権者、基盤整備実行委
員会、長野県諒訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課の皆様
の深いご理解とご協力に感謝すると共に、調査ならびに作業にあた
られた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼
申し上げます。

平成19年3月

茅野市教育委員会

教育長 牛山 英彦

例　　言

1. 本書は、長野県諒訪地方事務所長と茅野市長との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成15・16年度県営中山間総合整備事業（広域連携型）御柱の里地区に伴う、長野県茅野市芥沢遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、長野県諒訪地方事務所土地改良課からの委託金と、文化財国庫補助平成14・15・16・17・18年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成14・15・16・17・18年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第2節2.調査の体制として記載してある。
3. 試掘調査は平成14年12月11日から平成14年12月20日、発掘調査は平成15年度調査を平成15年6月18日から平成15年12月15日、平成16年度調査を平成16年8月2日から平成16年11月25日までを行い、出土品の整理は発掘調査終了後、平成15・16・17年度に実施し、報告書の刊行は平成18年度に茅野市教育委員会文化財課が行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第1章第2節に記してある。
5. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡　　例

1. 測査区の基準点は国家座標基準点による。なお平成15年4月から測量原点は世界測地系座標を使用することとされているが平成14年度以前に実施している芥沢遺跡及び周辺の遺跡で実施した過去の発掘調査時設定軸と合わせるために日本測地系座標を用いて軸設定をした。遺構全体図の数値は同平面直角座標系第Ⅳ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
2. 本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/60、上器拓本1/3、土器実測図は、1/4の縮尺を基本とした。石器については3cmの基準尺を個々に記載してある。
3. 土層の色調については『新版標準十色帖』の表示に基づいて示した。
4. 掘図中における遺構部分のスクリーントーンは焼土を示す。

目 次

序 文

茅野市教育委員会教育長 牛山英彦

例 言・凡 例

第Ⅰ章 経過.....	1
第1節 発掘調査に至る経過.....	1
1. 調査に至るまでの協議.....	1
2. 本調査に至るまでの協議経過と諸事務.....	1
第2節 発掘調査作業の経過.....	7
1. 発掘調査の方法とその経過.....	7
2. 調査の体制.....	7
3. 調査日誌（抄）.....	8
第3節 発掘調査に伴う諸事業の記録.....	12
1. 成果の公表.....	12
2. 平成16年度発掘予定区の保存.....	15
第4節 整理作業と報告書刊行.....	16
1. 遺物整理と報告書作成業.....	16
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	17
第1節 地理的環境.....	17
1. 遺跡の位置と地理的環境.....	17
2. 遺跡の立地.....	17
第2節 遺跡の歴史的環境.....	18
1. 調査の歴史と周辺遺跡の地理的位置.....	18
2. 土器の研究史.....	22
第Ⅲ章 遺跡の層序と調査区の概要.....	25
第1節 調査区の基本層序.....	25
1. 土層の基本的な堆積状況.....	25
2. 上層の成因と性格について.....	25
第2節 発掘した遺構・遺物の概要.....	26
1. 遺構の概要.....	26
2. 遺物の概要.....	26

第Ⅳ章 造構と遺物	27
第1節 壴穴式住居址	27
1. 第1号住居址	27
2. 第2号住居址	27
3. 第3号住居址	27
4. 第4号住居址	32
5. 第5号住居址	32
6. 第6号住居址	32
7. 第7号住居址	40
8. 第8号住居址	40
9. 第9号住居址	40
10. 第10号住居址	40
11. 第11号住居址	45
12. 第12号住居址	45
13. 第13号住居址	45
14. 第14号住居址	45
15. 第15号住居址	51
16. 第16号住居址	51
17. 第17号住居址	51
18. 第18号住居址	51
19. 第19・21号住居址	51
20. 第20号住居址	58
21. 第22・23・32号住居址	58
22. 第24号住居址	58
23. 第25号住居址	61
24. 第26・33号住居址	61
25. 第27・28号住居址	61
26. 第29号住居址	66
27. 第30号住居址	66
28. 第31・34号住居址	66
29. 第35号住居址	73
30. 第36号住居址	73
31. 第38号住居址	73
32. 第37号住居址	73
33. 第39号住居址	75
34. 第40号住居址	75
35. 第41号住居址	75

第2節 焼土址	75
1. 第3号焼土址	75
2. 第1・2・4号焼土址	75
3. 第5号焼土址	75
4. 第6・7・8号焼土址	78
第3節 集石	78
1. 第1号集石炉	78
2. 第2号集石炉	78
3. 第1号石團炉	78
第4節 土坑	80
1. 落し穴	80
2. 第9号土坑	80
3. 第54号土坑	81
4. 第189・190号土坑	81
第5節 溝址	
1. 第1号溝址	81
2. 第2号溝址	81
第6節 断層	93
第7節 その他	93
 まとめ	101
引用参考文献	104
付 表	106
 図 版	
抄 錄	

第Ⅰ章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過

1. 調査に至るまでの協議

芥沢遺跡が事業地内に含まれている県営中山間地域総合整備事業（大沢地区）地区内埋蔵文化財発掘調査について、平成12年5月1日、茅野市土地改良課から照会があった。茅野市教育委員会文化財課では芥沢遺跡が規模、範囲について不明確であったため、協議に先立ち、当該事業地区内及び周辺で表面探査を行った。芥沢遺跡は昭和26年的小規模発掘調査以来、繩文時代早期から前期を中心とする集落遺跡であることが判明していたが、表面探査の結果、遺跡範囲はおよそ35,000m²の広範囲に及ぶ台地全域に広がっており、該当する保護対象部分は遺跡北側の約20,000m²であることを確認した。表面探査は周辺地域も含めて実施したため芥沢遺跡から南に300m離れた地点で柏木遺跡が見つかっている。同年6月23日には県営は場整備事業に係る埋蔵文化財保護協議を長野県教育委員会文化財・生涯学習課から原明芳指導主事の派遣を頂き、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課を交えて実施した。保護協議では諏訪地方事務所から事業内容と具体的な工程が示され、保護対象区域の台地は全域を削平し、その発生上で谷を埋める計画が明らかになった。協議の結果、削平が計画されているため埋蔵文化財のやむを得ない保護措置として記録保存を前提とした発掘調査を実施することが決定した。事前の表面探査の結果から遺物の散布状況は希薄であることが確認されたため、平成13年度、作物の収穫後に試掘調査を実施し、遺構の分布範囲と密度の絞り込みをすることになった。

2. 本調査に至るまでの協議経過と諸事務

調査に至るまでの協議経過

平成13年度は市教委文化財課が職員配置換えによる実質的な調査員減と他地区的農業基盤整備事業に伴う発掘調査と試掘調査が優先されることになったため、御柱の里地区に伴う調査は一時停止の状況となった。

平成13年10月18日に県営中山間総合整備事業御柱の里地区大沢・青柳換地地区地権者総会が開かれ、市文化財課からは保存対象となる埋蔵文化財について該当する芥沢遺跡と柏木遺跡の概要説明を行った。

同年11月19日に行った平成14年度以降実施の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財保護協議で諏訪地方事務所土地改良課から御柱の里地区大沢工区の事業と埋蔵文化財保護に対する取り組みの説明があり、柏木遺跡、芥沢遺跡が該当するため、既に地権者と埋蔵保護について話し合いを持ち始めているとの報告があった。工事は平成15年から3年かけての予定で、平成14年度は青柳が工区となり、富士見側から着手。大沢工区は3年間の工事期間で、面積は均等割とする計画が示された。県教育委員会・市文化財課から柏木遺跡は平成14年度に発掘調査し、遺構がなければ減額する。芥沢遺跡は14年の収穫後に試掘調査を行い、内容を明らかにして協議を再び行うこととし、本工事着手に先立ち20,000m²以上の発掘調査を実施し、発掘調査は茅野市教育委員会に委託する。発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分（9.5%）については文化財保護側が負担することを確認した。

平成14年10月17日に平成15年度以降実施の場整備事業に伴う埋蔵文化財保護協議を行い、諏訪地方事務

所土地改良課から本工事は現在青柳地区を施工中である。2遺跡がある大沢地区的施工面積は約16haであり、3工区を3年計画（平成15～17年度）で施工する。地元には2年休耕（1年発掘、1年工事）で話を進めており「芥沢遺跡を南北に横断する舗装道路は現状のままである。道路は既に設計済みであり、調査範囲はどう確定するか」と説明及び質疑があり、市教委文化財課は「11月中頃から試掘を予定したい。舗装道路の東側は遺構の検出は間違いないだろうが、西側にどれだけ遺跡が延びるか推測し難い。試掘は遺跡西側の広がりをおさえ、遺構の密度も把握したい。遺跡の北側である中野沢川額は低いので、この部分だけでも盛土で設計してもらえば調査面積が減となる」と回答。県教育委員会から試掘後、1月か2月に保護協議を行い、結果をみて設計を詰める一と示された。

調査範囲確定の試掘調査は平成14年12月11日～12月20日に承諾書の提出されている19筆に54本、1,752m²のトレンチで調査を実施、発掘が必要となる面積は20,000m²以上に及ぶことが判明する。この調査の際、周辺の踏査も行っているが予定区東端に隣接している名取家の墓地で中世の五輪塔が祀られているのを確認した。

名取家は大沢集落の最上部に屋敷を構えていたが直系の子孫は大沢を離れてしまっていることから詳細は不明である。墓地内に「祖先追孝碑」が建てられており碑文には

祭 近世以來累代之靈

我祖源往元居近江永祿二年様來神宮寺為郷土經數代而移天狗山藩主
賜姓及地乃建社焉後移大澤之地至今寔昭和十年建追孝碑記以為念云
との出来を記してある。

五輪塔は墓地区画内南側、碑の斜め前に据えられており、安山岩系の石材を用いて一辺が21cmで方形の地輪、球形で径21cmの水輪、四角錐状で最大片26.5cmの火輪、半球形で径15cmの風輪、宝珠形で径15cmの空輪から成り、総高は71cmを測る。刻まれている梵字は風雨にさらされてはいるが現在でも判読は可能である。

この五輪塔も金沢の中世を解明するための貴重な資料である。

事業費

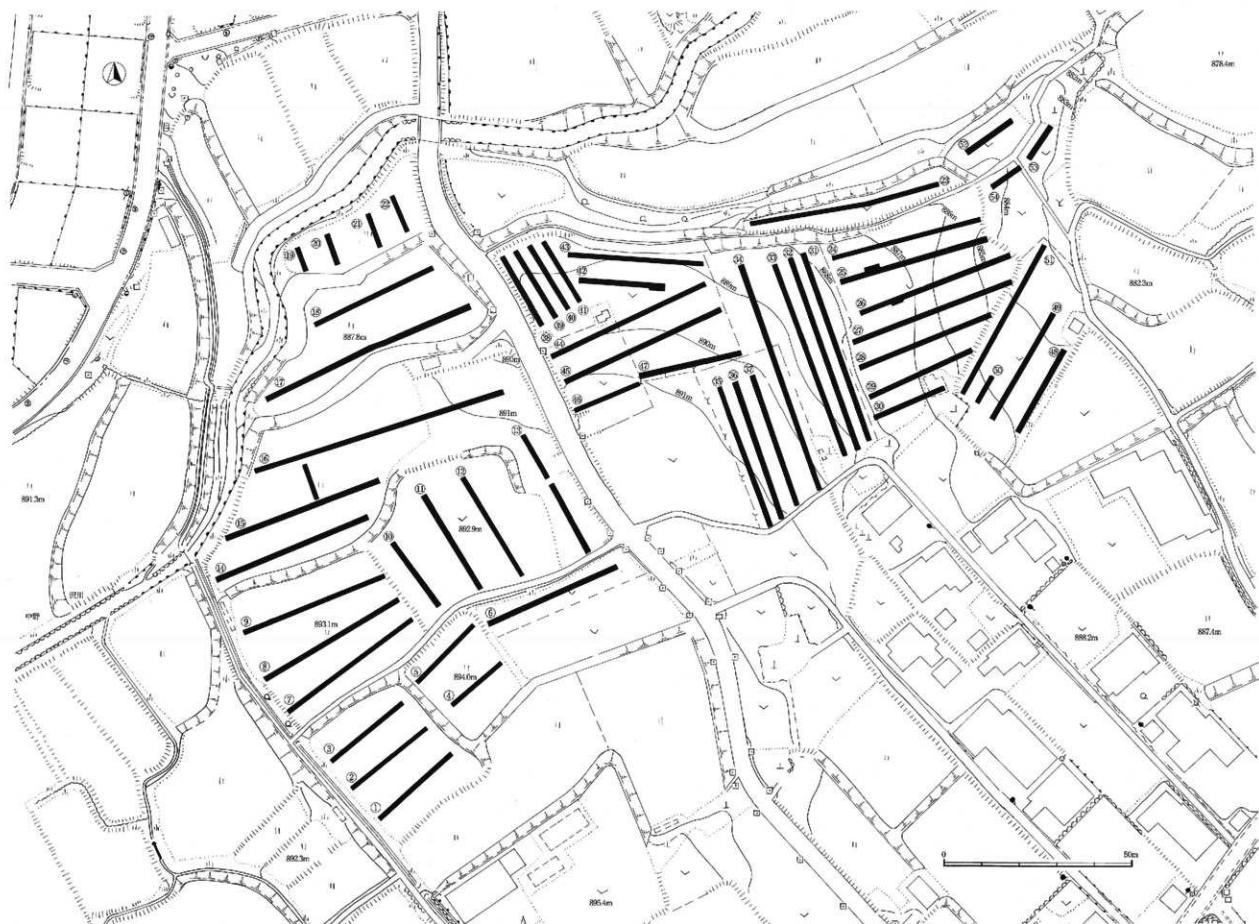
平成14年度は試掘調査を実施することとして当初1,200,000円（文化財保護側負担1,200,000円）で事業を計画したが、地権者の作付けの都合により調査ができるない予定区が生じたため、調査費1,000,000円（文化財保護側負担1,000,000円）に変更を行った。

平成15年度発掘調査費は当初40,000,000円（農政側負担36,200,000円、文化財保護側負担3,800,000円）で事業を計画したが、表土剥ぎの結果、開田された際に行われた削平により実質的な調査面積が減少したため、調査費24,00,000円（農政側負担21,720,000円、文化財保護側負担2,280,000円）に変更を行った。

平成16年度調査費は当初36,000,000円（農政側負担32,580,000円、文化財保護側負担3,420,000円）で事業を計画したが、新年度になってから諒訪地方事務所土地改良課は予算見直しで盛土による保護措置を執るために調査区を削平部と道路敷きの分として、調査面積を減らし、減額したい旨の申し入れがあり、8月になつてから調査費10,000,000円（農政側負担9,050,000円、文化財保護側負担950,000円）で契約にこぎつけた。調査区内に遺構密度が薄い部分と耕作による擾乱部分があったため、最終的に調査費は9,500,000円（農政側負担8,597,000円、文化財保護側負担903,000円）に変更を行った。



第1回 芥沢遺跡の五輪塔



第2図 芥沢遺跡平成14年度試掘 トレンチの位置図 1/1000

平成17年度は6,000,000円（農政側負担5,430,000円、文化財保護側負担570,000円）で契約し、整理作業を行った。

平成18年度は報告書作成作業を行い2,000,000円（農政負担1,810,000円、文化財保護側負担190,000円）で事業を計画した。

なお、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘調査に至る文化財補助金申請等事務経過

平成14年度

平成14年4月8日 14教文第1-27号 平成14年度文化財関係国庫事業について（通知）

平成14年4月9日 14教文第2-27号 平成14年度文化財保護事業の内示について（通知）

平成14年4月15日 14教文第4-1号 平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成14年5月30日 14教文第1-27号 平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定（通知）

平成14年6月3日 14教文第4-2号 平成14年度文化財保護事業補助金申請書提出

平成15年1月14日 14教文第91-1号 平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出

平成15年2月26日 14教文第91-2号 平成14年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出

平成15年3月20日 14教文第103-7号 平成14年度国宝重要文化財保存整備費補助金実績報告書提出

平成15年度

平成15年4月7日 15教文第1-25号 平成15年度文化財関係国庫事業について（通知）

平成15年4月7日 15教文第2-25号 平成15年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）

平成15年4月16日 15教文第3-2号 平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成15年4月16日 15教文第3-3号 平成15年度文化財保護事業補助金交付申請書提出

平成15年5月30日 15教文第1号 平成15年度文化財関係国庫補助事業補助金交付決定（通知）

平成15年6月2日 15教文第2号 平成15年度文化財保護事業補助金交付決定

平成16年1月19日 15教文第131-3・4号 平成15年度市内遺跡発掘調査等補助金計画変更承認申請書提出

平成16年3月5日 15教文第2-25号 平成15年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）

平成16年3月19日 15教文第157-6・7号 平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成16年度

平成16年4月21日 16教文第6-1号 平成16年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成16年4月21日 16教文第6-2号 平成16年度文化財保護事業補助金交付申請書提出

平成16年6月16日 16教文第1号の35 平成16年度文化財関係国庫補助事業補助金交付決定（通知）

平成17年1月18日 16教文第111-1・2号 平成16年度市内遺跡発掘調査等補助金計画変更承認申請書提出

平成17年2月14日 16教文第2-35号 平成16年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）

平成17年3月25日 16教文第133-6・7号 平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成17年度

- 平成17年 4月11日 17教文第1号 平成17年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成17年 6月 2日 17教文第2-35号 平成17年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）
平成17年 4月15日 17教文第4-2号 平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成17年 6月13日 17教文第4-3号 平成17年度文化財保護事業補助金交付申請書提出
平成17年 6月15日 17教文第2-35号 平成17年度文化財保護事業補助金交付決定（通知）
平成18年 1月18日 17教文第110-2号 平成17年度『市内遺跡発掘調査等事業』補助金計画変更承認申請書提出
平成18年 2月28日 17教文第1-35号 平成17年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）
平成18年 3月30日 17教文第133-2・3号 平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金『市内遺跡発掘調査等事業』、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成18年度

- 平成18年 4月 3日 18教文第1-3号 平成18年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（市内遺跡発掘調査等）申請書提出
平成17年 6月 1日 18教文第1-19号 平成18年度文化財保護事業補助金の交付決定（通知）
平成17年 4月15日 17教文第4-2号 平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成17年 6月13日 17教文第4-3号 平成17年度文化財保護事業補助金交付申請書提出
平成17年 6月15日 17教文第2-35号 平成17年度文化財保護事業補助金交付決定（通知）
平成18年 1月18日 17教文第110-2号 平成17年度『市内遺跡発掘調査等事業』補助金計画変更承認申請書提出
平成18年 2月28日 17教文第1-35号 平成17年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）
平成18年 3月30日 17教文第133-2・3号 平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金『市内遺跡発掘調査等事業』、文化財保護事業補助金実績報告書提出

発掘諸法令事務の経過

- 平成14年 4月11日 14教文第3-3号 芥沢遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条3第1項）の提出
平成15年 1月 7日 14教文第89-2号 芥沢遺跡発掘終了報告の提出
平成15年12月15日 15教文第123-1号 芥沢遺跡発掘終了報告の提出
平成15年12月15日 15教文第123-2号 芥沢遺跡埋蔵物見届けと保管証の提出
平成15年12月25日 15教文第10-103号 芥沢遺跡埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）
平成16年 5月18日 16教文第19-2号 芥沢遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条3第1項）の提出【計画変更】
平成16年11月26日 16教文第97-2号 芥沢遺跡発掘終了報告の提出
平成16年11月26日 16教文第97-1号 芥沢遺跡埋蔵物見届けと保管証の提出
平成16年12月24日 16教文第6-97号 芥沢遺跡埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

第2節 発掘調査作業の経過

1. 発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法

表面採集と試掘調査により遺跡は、台地全体の広範囲に広がっていることが把握された。この結果をもとに調査範囲を決定したが、盛り土による保護措置をとる区画が生じたため発掘範囲は減少することになり、最終調査面積は12,615m²となった。調査区のグリッド設定は、日本座標X=-6700.000、Y=-27650.000、標高890.165mを基準とし、遺構密度が薄いためグリッドは10mピッチで設定した。

遺構測量

地形と土坑の測量は写真測量を実施しこの図を基本としたが、住居址、窓と穴及び遺物の平面分布、遺物の出土状態や上坑内の様等については、遺方測量や平板測量の成果を写真測量図に反映させ修正を加えている。基本土層の観察は、水田、畑地内は耕作等の関係より安定した上層堆積を示している地点はほとんど無いため、調査区西側G-15グリッド上で上層の遺存状態が良好な地点の東西方向で行っている。なお、発掘現場における諸記録は百瀬一郎、遠藤佳子、篠原リカ子、宮坂ひとみ、森浩子が携わった。

2. 調査の体制

調査主体者	両角 源美	(茅野市教育委員会教育長平成16年9月30日まで)
	牛山 英彦	(茅野市教育委員会教育長平成16年10月1日より)
事務局	伊藤 修平	(茅野市教育委員会教育部長平成15年3月31日より)
	宮坂 謙・	(茅野市教育委員会教育長平成15年4月1日より平成18年3月31日まで)
	金子 強	(茅野市教育委員会教育次長平成18年3月31日より)
	小平 廣泰	(文化財課長)
	守矢 吕文	(文化財課文化財係長)
	小池 岳史	百瀬 一郎(現場担当) 小林 健治(平成15年9月30日まで) 柳川 英司
調査補助員	太田 友子	小松 とよみ 武居 八千代 原 敏江 矢崎 つな子
発掘調査・整理作業協力者		
	青木 政喜	稻垣 幸子 鹿飼 還雄 牛山 晴雄 遠藤 佳子 金井 まさみ 北原 常彦 酒井 みさを
	篠原 リカ子	立岩 貴江子 田中 洋二郎 中川 智史 名取 國雄 名取 末彦 野澤 明夫 野澤 みさ子
	原 徳治	藤原 一登 藤原 きよ江 北條 嘉久男 増木 三訓 宮坂 功 宮坂 ひとみ 森 浩子
	柳沢 省一	柳沢 宏 山田 千広 山田 博司 渡辺 郁夫
発掘調査参加者		
	小池 喜良(岡谷南高校)	稻垣 幸子(立正大学博物館実習) 竹内 若菜(信州大学博物館実習) 上橋 恵里(国士館大学博物館実習) 豊平小学校6年1部(北澤 淳担任 38人) 博物館活用指定学級 木川 雅人、
	宮坂 孝史(茅野北部中学校職場体験学習)	篠川 智香、松崎 杏里(岡谷北部中学校職場体験学習)

発掘調査・遺物整理期間中、長野県諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課並びに、中山間総合整備事業御柱の里地区青柳・大沢換地区実行委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めるこ

とができた。謹んで謝意を表したい。また下記の方々より特に有益なご指導・ご助言・資料の提供を頂いた。ここに記して感謝を申し上げる。

藤森 みち子 戸沢 充則 長崎 元廣 高見 俊樹 五味 裕史 田中 総 小林 公明 麻生 城司
小松 隆史 小林 俊治 名取 洋之 小林 文人 名取 喜市 山田 富美恵

業務委託

事業を迅速に進めるに当たり、測量、実測については下記の業者に委託し事業を進めた。

基準杭測量：株式会社鐵水茅野支店 支店長 花井 陽二（茅野市本町西5番34号）

航空測量：新日本航業株式会社 代表取締役 工藤 八一（小諸市甲1176-4）

石器実測：国際航業株式会社長野営業所 所長 古磯 直樹（長野市鶴賀町1393-3番地 富士火災長野ビル2F）

上器実測：株式会社東京航業研究所 代表取締役 中本 直士（埼玉県川越市伊佐沼28-1）

3. 調査日誌（抄）

平成14年度調査（発掘調査）

12月11日 道路西側の台地南側より重機を用いてト

レンチの表土剥ぎを開始し、土坑群を確認する。西側では礫層を検出する。

12月12日 闇田による削平部を確認する。

12月13日 調査予定区は全体的にローム層までの層序が薄く、遺構密度もムラがあることが判明。計測作業を始める。

12月16日 東側の調査区に重機を移動。遺構の密度は濃くないが全域に散在している。

12月17日 前夜の雨で雪融けが進んだため重機を使って全景写真の撮影をする。トレンチの表土剥ぎを進める。

12月18日 遺跡を継続している道路近くまで移動、遺構の密度が濃くなる。焼土と落とし穴と思われる土坑を確認する。

12月19~20日 埋め戻し作業を行う。

平成15年度調査（発掘調査）

6月18日 重機により西側調査区の南東側から表土剥ぎを開始する。表土は薄く、焼土址を3箇所検出する。

6月19日 表土剥ぎに合わせ焼土集積を開始、発生土は耕土と基礎土に分けて集積する。谷部

の掘り下げ、西側は礫多く、南側からの遺物出土量が減る。

6月23日 発掘作業員加わり、遺構検出作業を始める。縄文時代前期初頭の住居址3軒検出。以後同期の住居址を次々に検出する。

7月1日 金沢地区的発掘作業員加わる。

7月15日 平安時代の住居址検出。

7月17日 西側の水路が詰まり、調査区内まで水が流れ込む事態が発生、草刈りを行う。

7月24日 再度、水路溢水、復旧作業を行う。

7月25日 金沢歴史同好会宮坂武夫会長、金沢小学校の先生を案内し来跡、作業を見学する。

7月29日 表土剥ぎ終了。

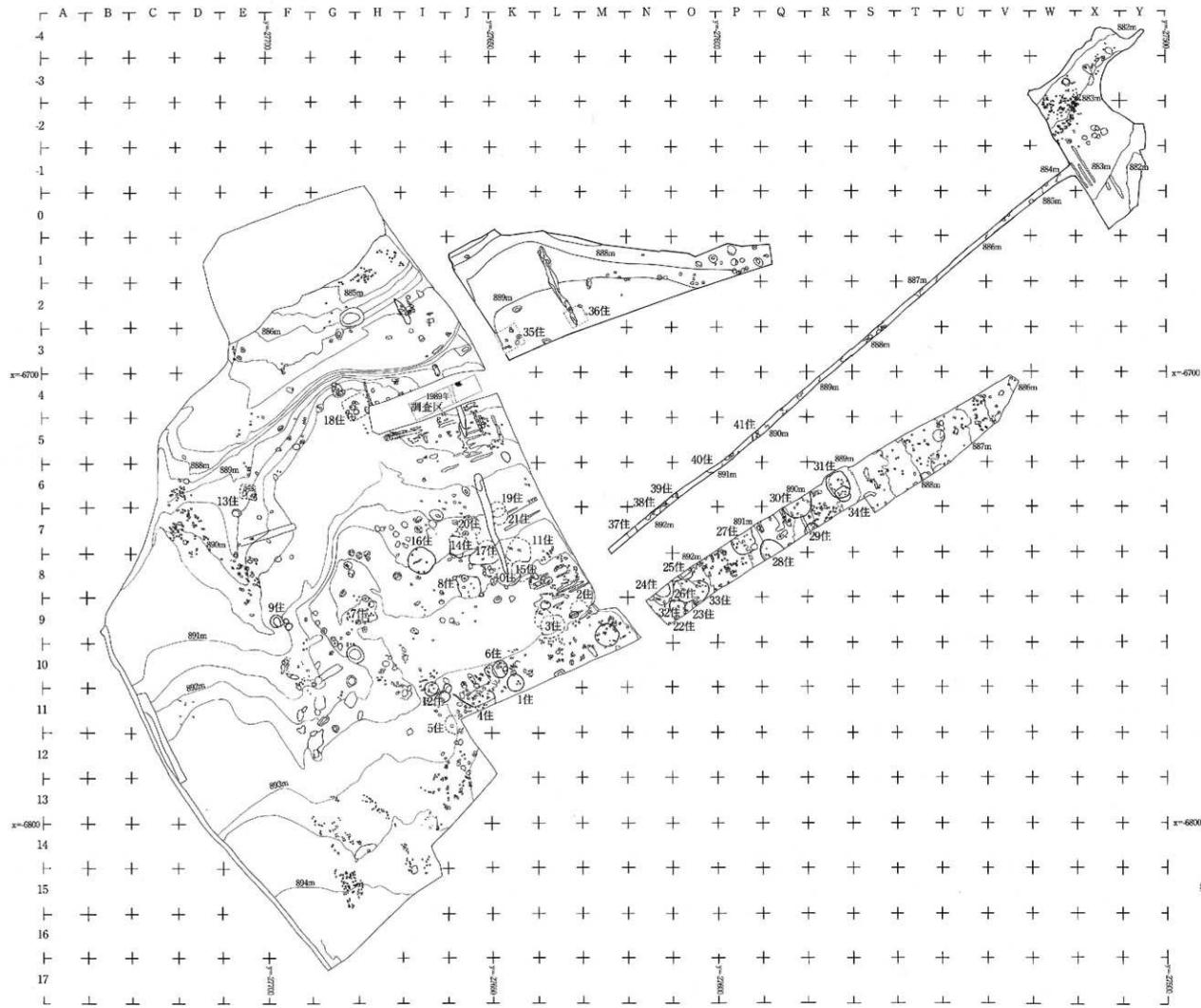
8月1日 調査区が広いため遺構検出と破碎帯部検出の2班に作業員を分けて進める。

8月6日 基準杭測量開始。1号住居址設定する。八ヶ岳総合博物館の実務実習生受け入れで発掘調査の実習を行う。

8月11日 2回目の八ヶ岳総合博物館の実務実習生を受け入れ発掘調査の実習を行う。

8月12日 耕作による攪乱が調査区東側の道路沿いに帯状になっていることが判明する。

8月18日 集積してあった発生土の一部が崩落を起こしたため作業中止する。



第3図 茅沢道路沿線分布
グリッド設置図 1/800

- 8月25日 遺構検出作業は終了する。
- 8月26日 住居址の分布図作成を始める。
- 9月1日 遺構の掘り下げ開始する。
- 9月2日 本年度本工事業者と今後の発掘調査と本工事の工程等を打ち合わせる。
- 9月3日 本工事業者技術部と発掘で発生した廃土の本工事使用などについて現地打ち合わせをする。
- 9月4日 遺構外から内耳土器の破片が出土する。
- 9月5日 金沢歴史同好会の見学について宮坂武夫会長打合せに来跡。
- 9月8日 航空測量準備の散水作業を行うが乾燥が著しく散水した端から乾いてしまう。
- 9月9日 地形測量を中心とする1回目の航空測量を実施、補備測量を開始する。
- 9月12日 金沢歴史同好会が見学に来跡。
- 9月19日 基本層序の図化と観察をする。
- 9月26日 小平文化財課長の案内で伊藤勝助役来跡。
- 10月3日 博物館指定学級で豊平小学校6年1部(北澤淳担任38名)を受け入れる。長野日報で取材に来跡。
- 10月6日 八ヶ岳初冠雪。朝冷え込む。
- 10月8日 小林俊治委員長来跡。
- 10月9日 名取洋之換地担当来跡。
- 10月28日 茅野北部中学校の職場体験で2名を受け入れる。
- 10月29日 本工事業者から調査区内に工事用の仮設道路を造りたいとの要請があり切り渡しについて協議を行う。
- 10月30日 名取洋之換地担当切り渡しについて来跡。
- 11月13日 長野日報で取材に来跡。
- 11月20日 雨天のため2回目の航空測量は延期にするが補備測量は開始する。
- 11月21日 航空測量実施。終了後、見学会の準備をする。
- 11月22日 芥沢遺跡現地説明会を実施する。内外から70人が集まり、遺構、遺物の見学を行う。
- 11月26日 戸沢充則尖石繩文考古館名誉館長が守矢文化財係長の案内で来跡し、昭和26年に実施した第1回の芥沢遺跡発掘調査状況と土器について説明を受ける。
- 12月1日 記録用のカメラが故障していたため、急遽遺構写真の撮り直しをする。
- 12月2日 前日夜、調査済みの落し穴に鹿が落ち、逃げ出すために多数の足跡が穴周辺と底に残されていた。
- 12月4日 断層部分の深掘りを試みる。
- 12月8日 旧石器が出土した周辺の深掘りをする。遺物を収蔵庫に運搬開始する。
- 12月10日 現地で航空測量の図面校正を行う。
- 12月15日 挖り上げの写真撮影。長野県振込地方事務所土地改良課に引き渡しの連絡をする。
- 12月15日～平成16年3月19日 遺物洗浄と注記作業を行う。



第4図 戸沢氏の説明

平成16年度調査（発掘調査）

- 平成16年度は前述の理由から契約が遅れたため、5月10日～5月31日にかけて発掘道具の点検、整備を行い、6月14日～7月21日まで前年度の遺物の注記作業を行った。
- 8月2日 北西部から表土剥ぎ開始。
- 8月4日 北西部の表土剥ぎ終了。
- 8月5日 重機東側に移動、表土剥ぎ。遺構検出作業開始。
- 8月6日 重機南側に移動、表土剥ぎ。
- 8月12日 長野県教育委員会より指示のあった頂部に重機で通しのトレンチを入れる。
- 8月24日 東側での遺構検出を開始する。

- 8月31日 前日、台風で機材をおいてあったテント
1棟が風圧で潰される。
- 9月3日 長野県教育委員会から綿田弘実文化財生涯学習課指導主事の派遣を受けて現地保護協議を行い、原則として残る用地内の遺跡については保護柵を設けて盛り土保存することが決定する。午後、小林委員長、名取換地担当保護方法の確認に来跡する。
- 9月8日 調査区内の墓地と事業用の杭について小林委員長立合の下で撤去を実施する。長野県諏訪地方事務所土地改良課諏訪係長遺跡の保護方法について確認のため来跡する。
- 9月10日 写真撮影のために清掃作業を開始する。
- 9月13日 基準杭打ち作業を開始する。
- 9月21日 保存地区に植えられている桑の根がローム層まで達していることが判明、重機による抜根では遺構を破壊してしまう可能性が生じたため手作業によりローム層上で根切りをすることになる。
- 10月13日 土坑を掘り始める。
- 10月14日 岡谷北部中学校体験学習発掘で2年4部の2名が発掘体験する。
- 10月15日 八ヶ岳初冠雪、冷え込む。
- 10月19~21日 台風23号で発掘作業中止、図面整理をする。
- 10月25日 東調査区で地割れ痕を検出する。
- 10月29日 航空測量準備と補備測量を行う。
- 10月30日 休日であるが天候の関係で航空測量を実施する。
- 11月1日 長野日報、読売新聞で取材に来跡。
- 11月3日 芥沢遺跡現地説明会を実施する。内外から50人が集まり、遺構、遺物の見学を行う。
- 11月4日 遺構の掘り抜き開始。
- 11月9日 掘り抜きと収集作業を行う。
- 11月25日 航空測量図面の現地校正を行う。
- 11月15~30日 航空測量図面の校正を行う。
- 12月1日~平成17年1月5日 遺物洗浄、注記を行う。
- 1月6日~2月25日 遺物洗浄、注記、復元を行う。
- 2月28日 遺物洗浄、注記、復元。写真、図面整理を行う。
- 3月1~25日 土器復元。写真、図面整理を行う。

第3節 発掘調査に伴う諸事業の記録

1. 成果の公表

遺跡見学会・速報による公表

調査状況を公表するために、遺跡現地見学会を平成15・16年度とも航空測量後に行った。併せて新聞各紙を通じて報道発表された。また地元の金沢小学校の先生や金沢歴史同好会の見学も随時受け入れた。

遺跡の速報についても、迅速に発掘成果を広く公表することを目的に平成15・16年度の発掘調査に関わる調査速報を下記のとおり実施し、広く一般に公開・普及に努めている。

各年度の調査速報は、平成16・17年2月11日に源藤考古学研究会主催の第16・17回諏訪地区遺跡調査研究発表会において成果発表を行った。また直接市民に調査内容を知ってもらう一環として年度末に市内全戸配布する「茅野市の博物館・文化財課だより八ヶ岳通信」22・23号で年度毎の調査概要報告を行った。

平成17年12月1日株式会社ジャパン通信情報センター発行の「文化財発掘出土情報」通巻289号の「各地の動向」に記事が掲載されている。

公開と企画展

できるだけ早く成果を公開するため、土器復元作業終了後の平成17年12月3日から平成18年3月21日まで茅野市尖石縄文考古館が開催した平成17年度企画展「速報縄文の里茅野を掘る Vol. 2 '01~'05」に展示を行った。



第5図 芥沢遺跡と天狗山遺跡の遺構分布図（天狗山遺跡周辺は造成前の地形）1/1600

行い、期間中の平成18年1月15日には遺跡調査スライド報告会を実施している。

2. 平成16年度発掘予定区の保存

当初10,000m²の発掘調査を予定していた平成16年度調査予定区が、平成16年6月2日の協議で県土地改良課から、本年度予算を見直す中で事業変更概要が示され、これから設計変更を行い、耕土は盛り土として保存するため全面発掘から部分発掘に変えたい—という方針が示された。市教委文化財課では日程的な問題もあり今までの協議経過で全面が切り土になることと遺構の密度は南側が濃く、残りの分についても密度は薄いがほぼ全体に遺構は散在していることが判明しており、さらに国庫補助の内示を受けていたため全面発掘調査を予定して準備作業をしていった。埋蔵文化財保護措置で最善の方法である保存となるならば遺跡の記録保存の必要性も無くなり、本来歓迎するところであるが、試掘調査の結果から、工事に際しては現況の耕土が薄い上、浅いところでは表土から12cmで遺構確認面に達してしまうため耕土の掘取りは不可能であることを示した。県教委文化財生涯学習課の上田典男指導主事からは調査面積が大幅に変更となるので、埋蔵文化財発掘通知（57条第3項）の再提出の必要性が示され、表土剥ぎに際しては台地頂部に通しのトレンチを入れ耕土の厚さ確認して本工事の盛り土の参考にしておくようにとの指示を受けた。8月から発掘調査に着手したが、頂部の耕土厚が判明した9月3日現地を確認しながら保護協議を行い、現状では耕土の掘取りで遺跡が破壊されてしまい、保護層を盛ってから耕土を乗せるようになるが土の確保ができるか不透明で、耕土を剥ぐと遺物の包含層を破壊してしまうため現況に手付けられない状況にある。本工事に当たってはブルドーザーの使用は絶対に不可であることを市教委から示した。県土地改良課からはブルドーザーは用いずバックホーで行う予定と工法が示され、耕土は全く削れないか問い合わせがあったが、県教委文化財生涯学習課の綿田弘夫指導主事は遺跡の保護方法として通常保護する場合はローム層から10~20cm厚の保護層を設けて上の耕土を剥ぐが、現状では無理であるとの説明があり、保護方法については地元と再協議をして方針を決めることになった。

地元の了解も得られた平成17年7月19日に盛り土の工事が開始された。保護層の問題については事前に、厚く盛る所の確保は可能であるが、薄い所は確保ができないため県教委文化財生涯学習課の指示を受け、現況に35cm以上の耕土を盛って対応することにした。施工当日現地確認の結果、南側の計画高が現況より低く設定されていることが判明し、県土地改良課に連絡、勾配変更ができないため計画高を上げて対応することで了解を得た。また耕土が不足していることから発掘調査の済んでいる道路敷きから砂を含まないロームを切り出し耕土に使うこととなり、ロームが耕土に達する直前の深さ2.5mまで掘り下げた。盛り土が終了した部分から地廻しの転圧のためにブルドーザーを使用したいとの申し入れがあり、県教委との協議の結果、バックホーの自重よりも軽い6tの押しブルドーザーを使い工事を進めることになった。7月25日まで盛り土は行われたが東端の発掘調査終了部分については耕土不足となるためロームを切って基盤土を入れロームを乗せる予定とし、この部分については後日、本工事の際に立ち会うことになった。8月30日東端部分の立合をするがこの1ヶ月の間に状況が大きく変化し、総体的な土量は確保できているが本工事で使う基盤土が不足し確保できる見込みが立たないという事態が発生していた。そのため東端部分の工法については現況に耕土だけを盛る方法に変更したいとの申し入れがあり、耕土を盛る確認をしてから施工業者に引き渡しをした。

芥沢遺跡北東側の遺構密度が濃い部分は以上のような経緯で盛り土による保護措置がとられ、整備事業が執り行われた。茅野市で実施してきた農業基盤整備事業に伴う発掘調査で調査範囲を年度内に県土地改良課

の事業計画変更により埋蔵文化財の保護措置を保存という方法に変更し、調査面積を縮小したのは初めてのことであった。

第4節 整理作業と報告書刊行

1. 遺物整理と報告書作成作業

遺物の整理と土器の復元

遺物整理は、各年度の調査終了後から開始した。遺構・遺物の内、縄文時代早期末から前期初頭の資料に重点を置き整理を実施した。住居址覆土内からの遺物については、その出土位置や出土層位、また、覆土内に含有されている疊との併存関係等に注意しその出土位置を記録に留めた。表土から遺構確認面まで極めて浅い状況ながら重機を用いて土砂を除去したため、時期別の遺物包含層の状況については観察することができず、重複については、遺構検出時に判明した重複関係をもとに遺構との併存関係を判断しているため曖昧な遺物も生じているが、基本的には遺構覆土内のものは一括り取り扱っている。

発掘調査が平成15・16年度の2年間に亘り行われたことと、遺物の総量は整理用コンテナに28箱と面積に比べて少量だったが、特に縄文時代早期末前期初頭の土器には脆い破片が多く、洗浄中に崩壊してしまう土器片もあったため遺物洗浄は予定外に手間取った。遺物の注記略号は遺跡番号189、遺構名、地点・層位の順としたが、遺構外からの遺物についてはグリッド番号を付し、発生上内からの遺物については表面採集の表を用いて行っている。

土器は器形が判明するものについて復元作業を行った。復元には石膏を用い器形復元に重点を置いたが、時期決定資料については、図上復元も行っている。土器復元は田中洋二郎が担当した。

遺構平面図等・写真の整理

遺構平面図は、航空写真測量により得られた1/20の原図を、現場に於いて遺構と対照し校正を行い、また、住居址、集石、土坑、一括上器出土状態等については、平板測量等により平面図を作成し、航空写真測量図と合成した。住居址は床面しか確認できないものもあり、遺構検出時にプランを把握して平面図を作成して調査を開始している。土層断面図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握を目的に行ったが、前述のように遺構相互の重複関係が判明しにくい住居も多かった。航空写真測量を導入し省力化を図ったが、補助測量、図化表現には課題が残るものもある。

調査における記録は、測量図、写真記録を採用している。写真記録はカラーリバーサル・モノクロネガ・カラー・ネガの3種類のフィルムで撮影し、ネガはモノクロを現像後ベタ焼きし、カラー・ネガはラッシュプリントしてファイル保存をしている。なお、原稿執筆用・報告書図版用にはキャビネ版以上のプリントを利用した。

遺物実測と報告書作成

遺構・遺物については、資料化に努めたが全てを図化するには至ってはいない。また、報告書においては、頁数の関係からこれらの全てを図示することはできなかった。

現場に於いて作成した図については、報告書中にできる限り図示するように配慮した。なお、報告書中に於いて本來調査された遺構・遺物全体を掲載し論考すべきであるが、時間的・予算的制約があり、すべてを記載することはできなかった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

芥沢遺跡は、青柳駅から西に500mの茅野市金沢大沢に位置する。金沢地区は諏訪湖に注ぐ宮川とその支流の河川によって形成された谷合に主な集落があり、北西方向に緩やかに傾斜している。芥沢遺跡は大沢集落の北側、標高は884m~894mの台地上にあり、遺跡範囲は約35,000m²の広がりを確認している。

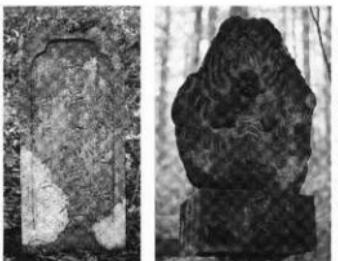
金沢地区には交通の要衝として栄えてきた歴史があり、現在でも信州と首都圏を結んでいる中央自動車道、国道20号線、JR中央東線等の幹線が通過し、江戸時代には甲州街道の宿駅が置かれ、特に大沢から金沢駅（松倉駅）を越え伊那方面に向かう高速街道と八ヶ岳南麓の山浦方面への分岐点でもあった関係で商業の要所としても栄え、参勤交代の際には甲州街道を上がってくる高島藩の他に、高遠藩、飯田藩が高速街道を利用した記録がある。更に古い道筋としては鎌倉街道という地名が大沢から天狗山の東、金沢近隣公園の西などに残っている。

主要道とは異なるが諏訪神社（現諏訪大社）上社御射山祭のため御射山社（原山様）に向かう参道を御射山道と呼んでいる。金沢の宿中から宮川を渡り、穂屋之木明神を経て、祢宜坂を登り、御射山社の社域に至るがこれも古くからの道であろう。

2. 遺跡の立地

金沢は糸魚川～静岡構造線上にある。西には赤石山脈北端の入笠山系の急斜面が迫り、東は八ヶ岳の山裾が広がっている。芥沢遺跡は、入笠山系の大沢山（1,312.6m）山麓で、宮川支流の大沢川と中野沢川の侵食により形成された北東側に傾斜する台地上にある。地質は苦鉄質岩類・緑色岩類・粘板岩類など火成岩や堆積岩の円礫上にローム層が堆積し、この上有機物が分解してできた腐葉土が覆っている。平成15年度調査区の西側からは糸魚川・静岡構造線の大規模な活断層による南北方向の破砕帯が見つかっている。同年、発掘後の本工事で耕土の鶴取りに立ち合った際、調査区西側で検出された破砕帯は西側の入笠山系の山裾まで統いており幅は50m以上に達していることを確認した。平成16年に本工事に伴い、西側山裾の立ち合いを行ったが斜面には厚さ1m以上の粘土層が広範囲に存在していた。

大沢から芝平峠（標高1,450m）に登る途中に武田信玄が吊るし掘り（露天掘り）で金を探査した跡と伝えられている掘り鉢状の窟みが20ヶ所以上残っている金雞金山がある。金山内には千軒平湿原（標高1,431.6m）があり、千軒堤と呼ばれている築堤址を見ることができる。湿原の北側には天保十一年の年号が刻まれた墓石がある。湿原は中野沢川の北を流れている金川の水源となっている。湿原から北ノ沢下った左側に明治時代に金鉱採掘特許を記念して建てられた不動明王座像が祀られ



第六回 天保の墓石と明治の不動明王像

ている。

金川からはかつて鉱石粉砕用の石臼が見つかっており、金沢小学校にはこの石臼の他に碗かけ法による砂金採取に用いられたという伝世品の搔り鉢も展示されている。

地下水位が高いこともあって涌水は遺跡近くの下田園の大清水のように音を立てて噴出しているものを見始めとして各所にあり、天狗山遺跡のあった鉄塔付近

と農道に接する水田内の南側にも少ない水量ではあるが湧き出していた。総じて一帯の水量が豊富で、雨後には調査区内でイモリを多数見かける機会があった。しかし、農業基盤整備後、大清水の湧水量は激減してしまっている。

内陸的気候の茅野市の中でも金沢は西側に聳え立つ入笠山系を背にし、諏訪湖のある北西側に傾斜している影響から、夏は暑く、冬は寒い。また昼夜の寒暖の差も大きく、市内の集落としては最も降水量が多い。



第7図 整備事業前の下田園湧水噴出口周辺

第2節 遺跡の歴史的環境

1. 調査の歴史と周辺遺跡の地理的関係

金沢地区には諏訪における考古学研究の契機となった発掘がいくつかあるので、主なものを列記しておく。

最初の学術的な考古学調査が行われたのは1920（大正9）年に信濃教育会諏訪部会の依頼を受けて郡史編纂資料収集のため諏訪を訪れた島井龍藏によるもので、舟木芝平の俗称ケツヨリで発掘調査を行い住居址と推測される竪穴を掘っている。記録によれば糸切り底の須恵器や弥生土器らしきものもあり、出土した土器片の中には縄文時代早期の精円押型文土器が含まれていた。ケツヨリ遺跡の発掘調査報告1922（大正11）年に八幡一郎が『東京人類學雑誌』で行い、八幡は押型文土器研究の先駆者となっていく。この発掘時の遺物は現在も金沢小学校に保管されているが、昭和50年代中頃に行われた校舎改築時に他の遺跡の出土遺物と混じってしまったため、分別ができなくなっている。調査された住居址一帯も後にゴミ捨て場となってしまい、現在は林の中に埋もれて平らになっている。

1924（大正13）年に『諏訪史』第一巻が発行され、ケツヨリ遺跡は「金沢村木船竪穴跡」として訂正を加えて報告されている。また、諏訪郡先史時代遺物発見地名表で金澤村にはハゴヤ、芥澤、西畠、狐塚、原山、橋木澤、久保畠、茂左衛門塙、古屋敷、竹原上（ケツヨリ）、芝平、金澤畔、金澤山が、原始時代遺物発見地名表に矢ノ口、諏訪郡古墳調査表には稚子塚が記載されている。昭和20年代には清陵高校の生徒らが芥澤遺跡の発掘を幾回も行っているが、記録として残っているのは1951（昭和26）年の小発掘で諏訪考古学研究

所を主宰していた藤森榮一と清陵生であった戸澤充則、松澤亜生らにより、道路沿いの極狭い範囲が調査され、縄文時代早期末前期初頭の住居址の一部を発見している。この発掘調査については『諏訪考古学第8号』に次のような記載があるので転記しておく。

小報 一最近のニュースから一

⑤縄文式前期初頭の新遺跡調査

研究所では26年度文部省人文科学研究費による調査の一部として、11月11、12日の両日、金沢村大沢にある古式遺跡を試掘調査した。この遺跡は同人松澤亜生君の発見になるもので、静岡県の木島式類似の土器を主体とし、若干の黒浜式を混える單純遺跡で、諏訪地方としては最初の発見である。尚今回の調査には清陵高校長千野光茂博士も参加された。本誌第九号に結果が報告される予定である。〔但し9号は未刊筆者註〕

戸沢によるとこの発掘は少人数で行い、他には土器は拓本を取り、勝写版刷りの『大沢遺跡』としてまとめたとのことなので再三探していただいたが行方不明のことである。

この時出土している遺物については、1983年長崎元廣らにより再確認がなされ、隆帶系と沈線系の両者が存在していることが明確にされている。

1956（昭和31）年にまとめられた『信濃史料第1巻上』考古資料編の遺跡地名表では大沢と芥沢が別遺跡として並記されているが備考の文献から判断すると芥沢遺跡を混同しているようである。

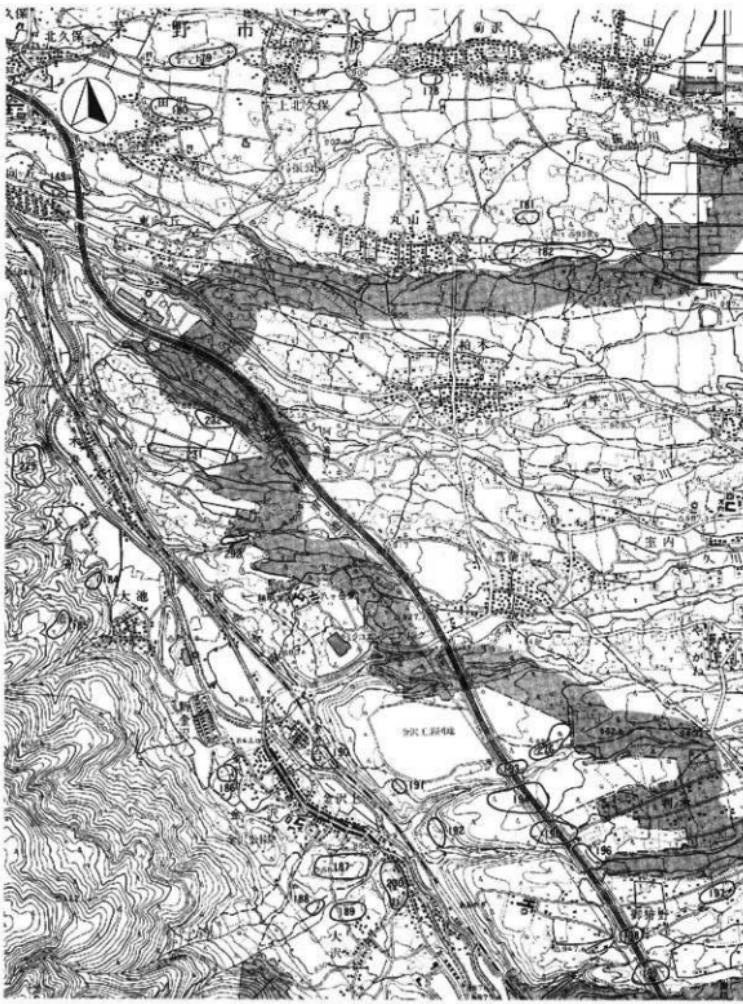
1975～1978（昭和50～53）年には中央自動車道建設に伴う発掘調査が金沢でも行われた。中でも注目される遺物に判ノ木山西遺跡で出土した縄文時代早期の条痕文系土器群がある。判ノ木山西タイプと呼ばれている早期後葉の土器で、この発見により八ヶ岳西南麓に位置する遺跡で空白となっていた同期の性格解明が進んだ。

1986年（平成6年）に『茅野市史上巻原始古代』が発行され、芥沢遺跡の今までの調査と研究成果について総的にまとめられている。

1989年（平成元年）には諏訪南インター林間工業団地地下水道施設用地に係り芥沢遺跡の小規模な発掘調査を実施し、諏訪考古学研究所の発掘で見つかったと同時期の土器が出土している。狭い範囲の調査であったがこの調査により芥沢遺跡における同期土器群の編年的な位置や系統関係の内容充実が図られてい



第8図 芥沢遺跡第1次調査にて 左から戸澤・藤森・松沢



②長峰道路 ③照敷添道跡 ④古御堂遺跡 ⑤神垣外道跡 ⑥大悦直路 ⑦大從南道跡 ⑧ケフヨリ道跡 ⑨芝平道跡 ⑩駒湯の山道跡
⑪向坂道跡 ⑫天狗山道跡 ⑬芥沢道跡 ⑭金沢台道跡 ⑮表の山道跡 ⑯中平道跡 ⑰上の平道跡 ⑲利の木山西道跡
⑳利の木山東道跡 ㉑金山沢北道跡 ㉒波瀬沢上道跡 ㉓銅村野道跡 ㉔銀敷沢道跡 ㉕シラザレ城跡道跡 ㉖はごや道跡 ㉗阿久尻道跡
㉘下原山・茂佐久保道跡 ㉙下原山道跡 ㉚久保畠道跡

第9図 芥沢遺跡位置と周辺の遺跡

る。この時には、中世以降の遺物も出土している。

1990～1991年（平成2～3年）金沢工業団地造成に伴い阿久尻遺跡の発掘調査が実施された。方形柱穴列が19基検出され、隣接する国史跡で縄文時代窓の転換と云われた阿久遺跡とともに縄文時代前期前葉の集落論に多くの問題点を投げかけている遺跡である。

1992年（平成4年）金沢住宅団地（現在の旭ヶ丘）宅地造成に伴い芥沢遺跡と中野沢川を挟んで相対する天狗山遺跡の発掘調査を実施、断続的ではあるが縄文時代早期から平安時代末期までの生活址を確認している。縄文時代早期の押型土器を作り住居址、焼石炉など居住の痕跡と早期末～前期前半のムラが形成されていた時期の住居から出土している遺物の中には数形式にわたる東海系の土器が認められる。金沢で初めて見つかった弥生時代後期の住居址からは、箱清水式・座光寺原式・中島式の土器が出土していることから両文化圏の接点であったことが伺える。平安時代の住居址は芥沢遺跡と対向するように展開しており、複数の竪や柱穴の位置から建替えが数回に及んで認められた例もある。集落に位置する住居址の軸方向と構成から判断すると規則性を持ち集落形成がなされた可能性も考えられる。また時代の特定はできなかったが生産域の遺構である落し穴も複数検出しているので、時期により居住域、あるいは生産域として利用された遺跡である。

2002年（平成14年）中山間総合整備事業御柱の里地区に伴い発掘調査を実施した柏木遺跡は、芥沢遺跡から南西に400m離れた大沢山の山裾に位置しており、事業計画が示されてから新たに見つかった遺跡であるが、検出した同類の遺構（落し穴）から芥沢遺跡、天狗山遺跡と極めて深い関係を持つ生産域の遺跡として捉えることができた。遺物には中世の内耳土器の破片もあり、遺跡の立地が金鶴金山の登り口にあることから、今後、中世の金沢を考察する上でも興味深い遺跡である。

上記以外の周辺遺跡としては、天狗山遺跡の北東に芥沢遺跡とは中野沢川を挟んで対する北側に縄文時代前期から中期の土器片や石器類が採集された記録のある向坂遺跡が位置しているが天狗山遺跡の調査、芥沢遺跡の発掘時にも表面採集を試みたが遺物は全く採集できなかったため、遺構密度が薄い遺跡と思われる。

芥沢遺跡と大沢側を挟んだ東側のはごや遺跡からは明治時代中頃にはほぼ完形の土器が出土し、大正11年に『源訪史』第一巻の編纂に伴って地元の金沢小学校、信濃教育会源訪部会等の関係者により掲載された記録がある。出土品は縄文時代中期の遺物が多く、厚手土器、薄手土器、石器、石棒、四石、磨石斧なども出土していることから、規模の大きな集落遺跡の可能性がある。

芥沢遺跡を含む遺跡名については金沢村史刊行会が1992年（平成4年）発行している『信州金沢の歴史』において一遺跡名をつける場合地名と同じ名称にしてほしいものである。地元としては従来からの地籍名と同じ名称のほうが親しみもあり混乱もしない。一との記載があり、同書においては遺跡名に芥沢（五味沢）を用い、字名から古新井遺跡と同一遺跡について3つの遺跡名を使用してある。しかし、遺跡登録以前の同一遺跡でも複数の遺跡名を使用してある場合、その後の研究等に混乱を生ずることが多々生じている。また、小字名を新たに遺跡名とする場合は芥沢遺跡の対岸にある天狗山遺跡（小字は馬飼場、笹の山、山の神）のように小字名とは異なる遺跡は従来の遺跡名が使用できなくなってしまい、芥沢遺跡の場合も遺跡範囲が小字名の古新井、屋敷添に跨っているためどちらを用いればよいかという問題も生じる。茅野市教育委員会では周知の遺跡以外を新遺跡として登録する際には、原則として発見した地点の小字名を用いているが、芥沢遺跡は前述の『源訪史』第一巻には記載があり、学史的にも若名な遺跡である。

なお周知の遺跡について長野県教育委員会がまとめた1980年（昭和55年）発行の『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書 昭和54年度』から遺跡名と共に現在の遺跡番号-189を使用している。

芥沢遺跡と同じ糸魚川—静岡構造線上の富士見町上葛木に位置する釜無川左岸の坂平遺跡は、「地改良整備事業に伴い1996年から発掘調査され、2004年『坂平ハケ岳南麓における前期初頭から前業の集落址』として富士見町教育委員会から報告書が刊行された。芥沢遺跡と坂平遺跡は約11km離れているが前期初頭の遺構・遺物の出土状況が芥沢遺跡と似通っていることから、小林公明は糸魚川線上に主要な交通路があったことを同書で想定している。

2. 土器の研究史

芥沢遺跡の発掘調査でまず注目されたのは土器についてである。1953年発行の『川岸村史』で戸沢光則が1951年の発掘で出土した土器について、同書第2編先史時代第1章川岸村周辺における先史時代土器の研究一諏訪郡地方の編年学的調査の概要第一項繩文式土器1.早期繩文式土器で次のように型式設定している。

早期から前期に移る間を埋める一形式として、関東地方では花積下層式という土器があるが、これは底が若干の尖底を除くほか、多くは平底になる。土器の姿の上に現れた大きな変化であろう。この形式にあたるものは諏訪地方では最近、金沢市大沢から単純に近い形で検出されたので、大沢式という名を付けた。これは無文粗製の土器とセンペイ土器が主体をなすもので、静岡県の木島式と同じ。後略

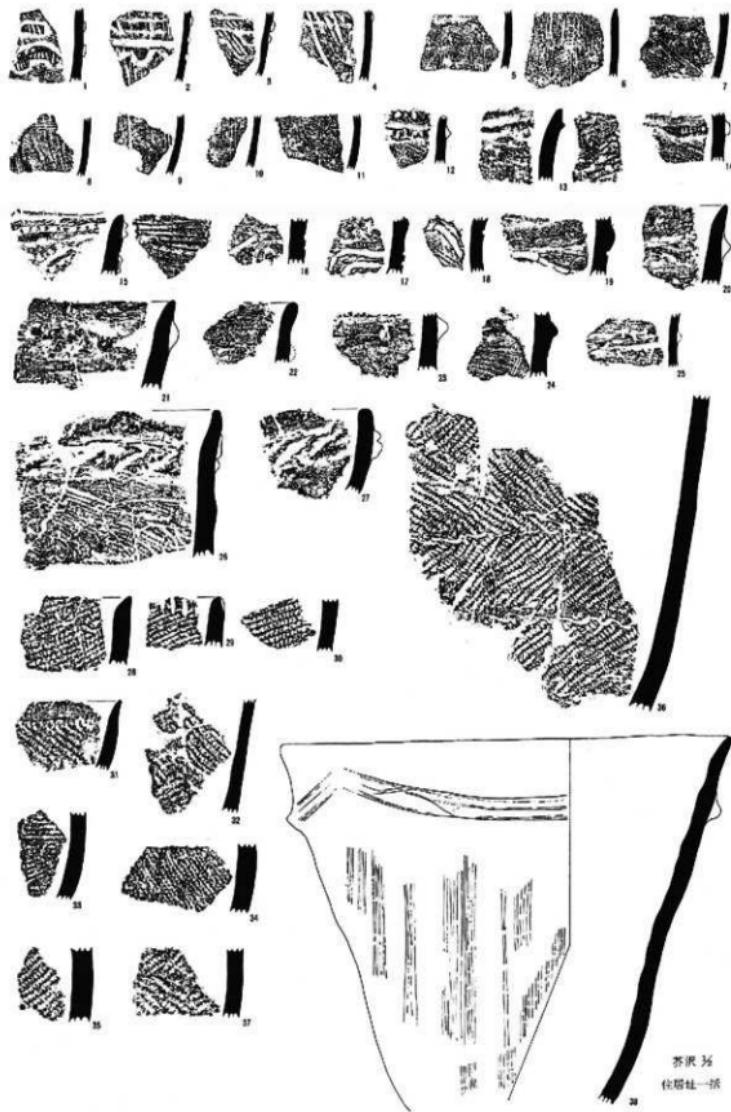
戸沢によると当時見つかった土器を一括して大沢式と命名したため現在の分類からするとかなり大まかな型式設定で内容も具体的ではなかったと話している。

1956年(昭和31年)の『信濃史料第1巻上』考古資料篇の編年表で東海の木島(石塚下層)、関東の花積下層に平行する前期最初頭土器として、大澤は現在の佐久穂町の中松井と中部山地に並記されており、「同下」同第2要説B繩文式文化2)前期繩文式土器には

前期初頭にあっては、いまだ早期末葉同様に、東西両日本各地方に分布の中心をおく花積下層式・木島式が各別箇の分布範囲を示すこと、換言すれば、いまだ信濃獨特の土器の存在が明瞭でないことが、まず注意される。この點、南佐久郡畠八村中松井・諏訪郡茅野町金澤地区大澤兩遺跡の発掘結果によつて、その大要を知ることができる。前者は、縞維を多量に含み羽状縞維を主とする中厚手の粗雑な土器に、多少貝殻条痕のある一群の土器を出しし、後者では木島式が主體となって、僅かに數片の花積下層式的な土器が併出したといふ。この事實は、兩遺跡の地理的状況に起因するものであり、中松井遺跡のある千曲川上流地域には、少なくとも北關東方面からの影響であらう。花積下層式土器が點々と出土してをり、逆に天龍川、木曾川流域の東海或いは關西地方に繋がる地域からは花積下層式に編年的位置を同じくする木島式土器の存在が認められてゐる。後略との記載がある。

1975年、地元大澤をフィールドとする茅野高社会科クラブ考古班員の小林一史は「大澤遺跡紹介」として芥沢遺跡について同班の研究紀要「かやの」削刊号に報文と共に遺跡略図を掲載している。中でも遺物について①表面採集の結果、縞維土器片(縞文前期)、中期土器片などが見つかっており、多量の石器の他には指状器・石錐を採集していること、②近傍の狭い範囲から岩石片が10数片、粗雑な石器3点、縞維土器7点、柱状石核1点が見つかっており、特に注目すべきだとしてそれまでの研究の中心であった土器だけではなく、石器についても関心を寄せている。

1983年、前述のように長崎元廣は1951年の発掘で出土した土器について岡化をして『神奈川考古第17号』の「長野県における縞文時代早期末・前期初頭土器集成図版」で資料報告をする(第9図)。同年12月3・4に開催された神奈川考古同人会縞文研究グループによる「シンポジウム縞文時代早期末・前期初頭の諸問題」で長崎は資料について2時期(2型式)の混在が過渡的な土器としながら幅広で斜めに切られた隆帯が



第10図 「長野県における純文時代早期・前期初頭土器集成図集」に掲載された1次発掘出土土器 1/3

付き、下に簡単な条痕が付いた土器については、今後注目すべき資料で、花積下層の最古段階に伴うとの考え方を示し、また無文隆帯文土器については渋谷昌彦から今後の課題として残して置いた方がよいとの指摘を受けている。1988年に宮下龍司は『長野県史考古資料編遺構・遺物』でこの集成図集をもとに芥沢遺跡では隆帯文系土器群に壇屋式土器が共伴していることに注目をしている。

諏訪南インター林間工業団地地下水道施設用地に係り芥沢遺跡の小規模な発掘調査を実施した守矢昌文は1990年発行の『芥沢遺跡』で出土した縄文時代早期末から前期初頭の土器群について分類、分析し、特に様相をまとめ、段階的な位置づけを行っている。この土器の一部については1994年『塙田遺跡』で下平博行が「塙田式」の設定をする際に他遺跡における様相と他形式との共伴関係資料として取り上げている。

2004年刊行された『坂平ハケ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』で縄文時代の土器を担当した小松隆史は坂平遺跡が前期初頭のド吉井段階で壇状に粘土紐を貼り付けて繊維を混入する在地系の土器が主体を占め木島式と花積下層式が併出していることを指摘している。この前期初頭の土器群については渋谷昌彦によって細分化され「坂平式土器」として2006年に型式設定された。以上が20世紀中頃から注目されていた芥沢遺跡と近隣遺跡出土の土器を中心とした縄文時代早期末・前期初頭の在地系土器研究歴史であるが細分化に対する時間幅の設定などに未だ多くの問題を抱えている。

第Ⅲ章 遺跡の層序と調査区の概要

第1節 調査区の基本的層序

1. 土層の基本的な堆積状況

基本層序の概要

本遺跡の立地している尾根状台地は、八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫・火碎流を基盤として、この上にロームが堆積する。台地西側から西山の山裾にかけてはロームの堆積は認められず糸魚川・静岡構造線破碎帯の碎けた礫層が続いており、両層の上部を有機物腐食物の堆積物である黒色土が覆う形で台地全体を形成している。

調査区全体は畑地造成により、地形が改変されており、特に台地南側斜面部は近代の水田開削時に削り取られて、台地頂部から台地斜面部にかけて上層の堆積状況を調べられる箇所は少ない。上層観察は調査区内で最も土層堆積状態の良好な西側で、緩やかな台地斜面の土層状態を観察している。発掘調査で少量の遺物が検出されているが、生活面の分層には至ってはいない。

- I層 農作土：色調は黒褐色（10YR1.7/1）を呈する。粒子が細かく、粘性が強い、締まりのある土質で、内部に少量のロームと炭化物粒子を含有する。現在耕作されている畑の耕土で地表に歓痕が観察される。
- II層 黒色土：調査区の頂部には薄く、斜面に至るにつれ厚く堆積している土層で、I層に近似する性質を持つが5mm以下の礫を少量含む。色調は黒色（10YR1.7/1）を呈する。
- III層 黒色土：I層に近似する性質を持ち2mm以下のローム粒子を少量含む。色調は黒色（10YR1.7/1）を呈する。
- IV層 暗褐色土：調査区全体に割合安定して堆積している上層で、色調は暗褐色（10YR2/2）を呈し、粒子は細かく締まりが有り、2mm以下のロームを多量に含む。本層中で遺構の検出が可能となる。

2. 土層の成因と性格について

土層の状態

土層はI層からIV層の4群に分類した。I層は現在の畑地耕作に関わる土層群である。II層内は農耕機械等による擾乱を受けている状況が観察される。III層は安定した土層で、調査区の各地で認められた。IV層が遺物の包含層にあたり、遺物が混在する形で認められた。覆土とは色調に差があるために、掘り込みの判断が可能になる。本来はIV層上が生活面となりこの層より遺構の掘り込みがなされたと考えられる。遺構内の覆土は基本的にIV層に類似する土層である。なお、ナイフ形石器が出土したことから周囲のローム層を部分的に掘り下げたが、他にII石器時代の遺物の包含は確認されなかった。

第2節 発掘した遺構・遺物の概要

1. 遺構の概要

検出された遺構の概要

本遺跡から検出された時期決定が可能な遺構は、縄文時代早期末、前期初頭、平安時代に帰属するもので、縄文時代早期末・前期初頭の遺構が主体を占める。集落の変遷を考える上で重要な資料が得られている。

検出された遺構 検出された竪穴住居址の番号は、調査が2年度にわたっているため調査着手順に通し番号を付し、土坑番号も同様の順番付けをしている。

住居址は第1号から第41号まで付しており、縄文時代の住居址は第13・18・35・36号を除く37軒でこの番号に沿って、第IV章は記されている。縄文時代早期末・前期初頭の住居址は37軒を確認しているが平面プランを確実に把握できているのは4軒だけである。なお、住居址としたものの中には、地床炉の焼土を伴う例が多く、掘り方はロームにまで達するが凹凸が激しく、地床炉の焼土はほとんどが掘り方より上層面で検出され、ロームまで達していないものもある。前述のように遺構の残存状況が良好でなく壁体・ガ・床の確認はできないが河床礫を用いた固定石皿を掘え、円石と少量の土器片が組み合わされて見つかる等の遺物出土状況や柱穴の検出状況から住居址として取り扱っているものもある。

土坑については、一応番号を付したものは、平成15年度174基、平成16年度65基の合計239基を設定したが、整理作業時に擾乱及び近代以降の穴と判明したものは除外したため229基を登録している。十坑の中で特筆すべき上坑は、上面が楕円形を呈し列をなす落し穴の存在で、周辺や本遺跡における配置等に注目される。

集石遺構は調査区北西舞台地肩から2基の集石炉が見つかっている。

2. 遺物の概要

旧石器時代の遺物

旧石器時代に確実に帰属すると思われる遺物は1点得られており、平成15年度調査区の台地頂部J-11グリッドから黒曜石のナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺物

遺物の主体を占めるものは縄文時代早期末前期初頭の遺物である。少量ではあるが中期中葉の土器片と表裏繩文土器と後期前半の浅鉢の破片が各1点見つかっている。

復元された土器は全て底部が欠損しており、ほぼ完形のものの6点、口縁部あるいは脚部で器形復元ができる上器が6点ある。

石器は全てを資料化することはできず、また、図示したものも限定されている。注目される石器としては、砾塊の一部を剥離し粗雑な刃部を形成した石器や量的に多く出土している緑色岩の剝片などがある。

黒曜石は製品・素材・原石を含めて3,501点に及び総重量は14,870.3gを量る。黒曜石の原産地を背景とした霧ヶ峰南麓に位置する遺跡を除けば、その重量は割合多いと言えよう。チャートは13点、113.4gと少ない。他に水晶が4点、4.1gある。

平安時代・中世の遺物

平安時代の遺物は住居址の残りが少ないため、芥沢遺跡対岸の天狗山遺跡の同期の住居に比べ量が少ない。中世に帰属する遺物では内耳土器の破片が出している。

第IV章 遺構と遺物

第1節 積穴住居址

1. 第1号住居址（第11図、図版11）

本址は調査区のK-10・11グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居の中央部で長径3.00m×短径2.63mの円形を呈していた。長軸方向はN-85°-Wを示す。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。床面まで耕作による削平を受けているが、東側から焼土を検出しており、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。ここが地床炉であると思われるが、削平等の影響で検出された平面形は不整形である。

遺物は土器が厚手で纖維を多量に含む胴下部破片と少量の薄手で纖維を含まない東海系の土器片が出土しており、國上器形復元以外の総重量は1,910gが出上している。石器は緑色岩系の周囲に調整痕を持つ疊が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

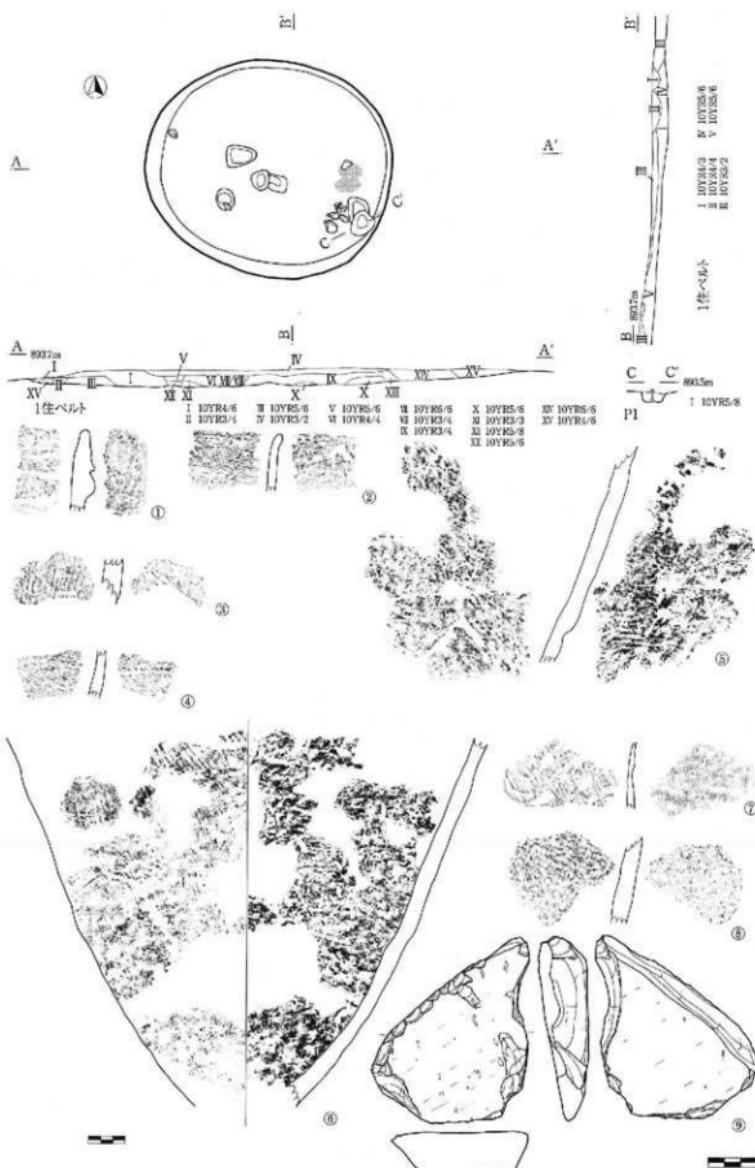
2. 第2号住居址（第12図、図版12）

本址は調査区のLM-9グリッドで確認されたものである。住居址は1号住居址の北東台地の平坦面に位置する。旧作業道内に一部が掛かり残りも耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。南西側を落し穴の第62号土坑によって切られているが切り合っている所から南東側では弧状に立ち上がり何わせる落ち込みを検出しており径は4.5m以上になる。内部構造は住居址の北西側が削平と耕作による攢乱が著しく壁や周溝だけでなく残存する床の境も不明瞭である。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。床面まで耕作による削平を受けているが、ローム面まで焼土が達している地床炉を中央付近で検出している。焼土は南北方向に長く検出し加熱を受け硬化したブロックが認められ、ローム面まで達している。ここが地床炉であると思われるが、削平等の影響で検出された平面形は不整形である。

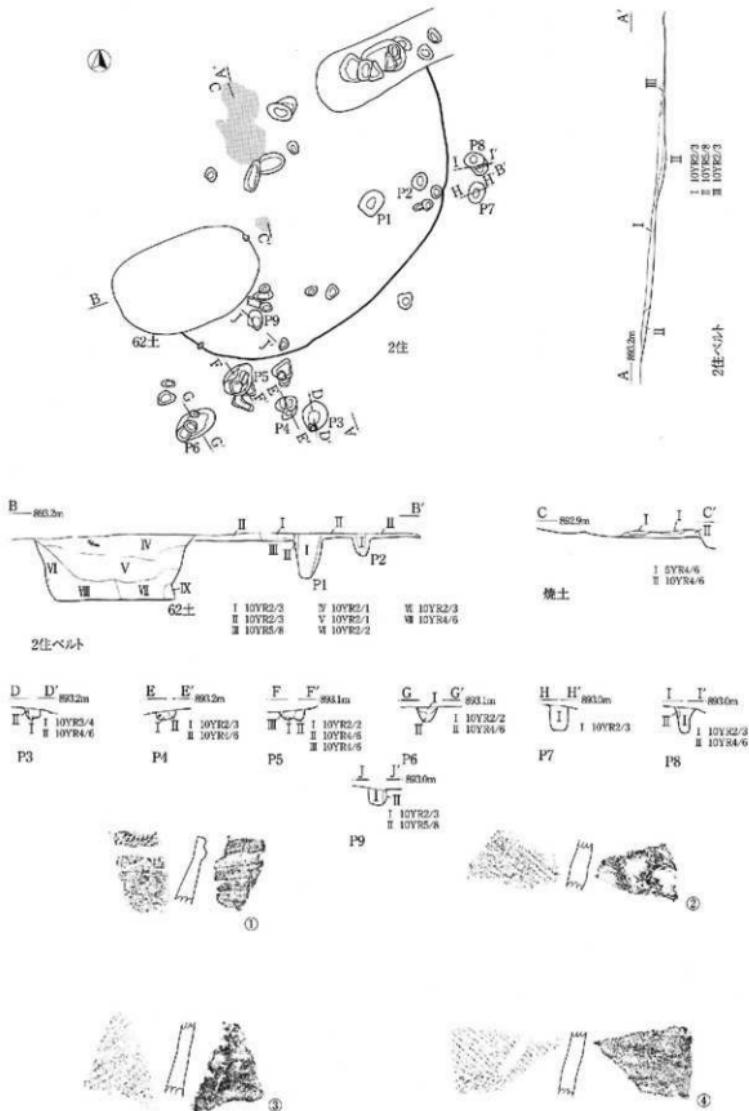
遺物は少量の土器片が出土している。いずれも纖維を含み神ノ木台式併行の口縁部の破片と羽状の細かな縄文を施した土器があり、総重量は400gが出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。なお戸沢充則によるとこの住居址付近が1951年の発掘調査地点の可能性があるとのことである。

3. 第3号住居址（第13・14図、図版13）

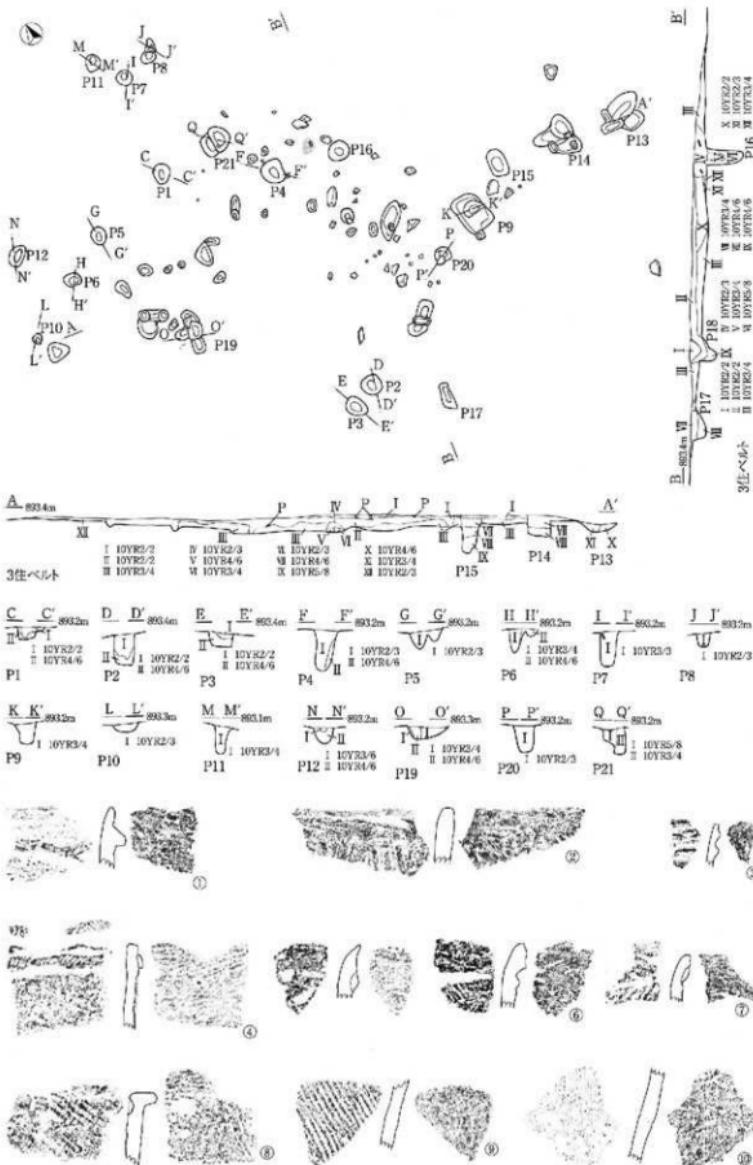
本址は調査区のKL-9グリッドで確認されたものである。2号住居址南西側に隣接する台地の平坦面に位置する。長径約6.5m×短径約5mのほんやりした落ち込みと遺物出土の確認ができたため住居址として調査を進めた。平面プランの把握には至らなかったが、中央やや北寄りで焼土を検出している。掘り方を確認するため掘り下げて行くと落ち込みの境界が検出面とはば同化してしまった。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、境界から皿状に窪む中央付近までの比高差は16cmを測る。検出状況は軟弱である。床面は遺構検出面とはば同面になると思われる壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思



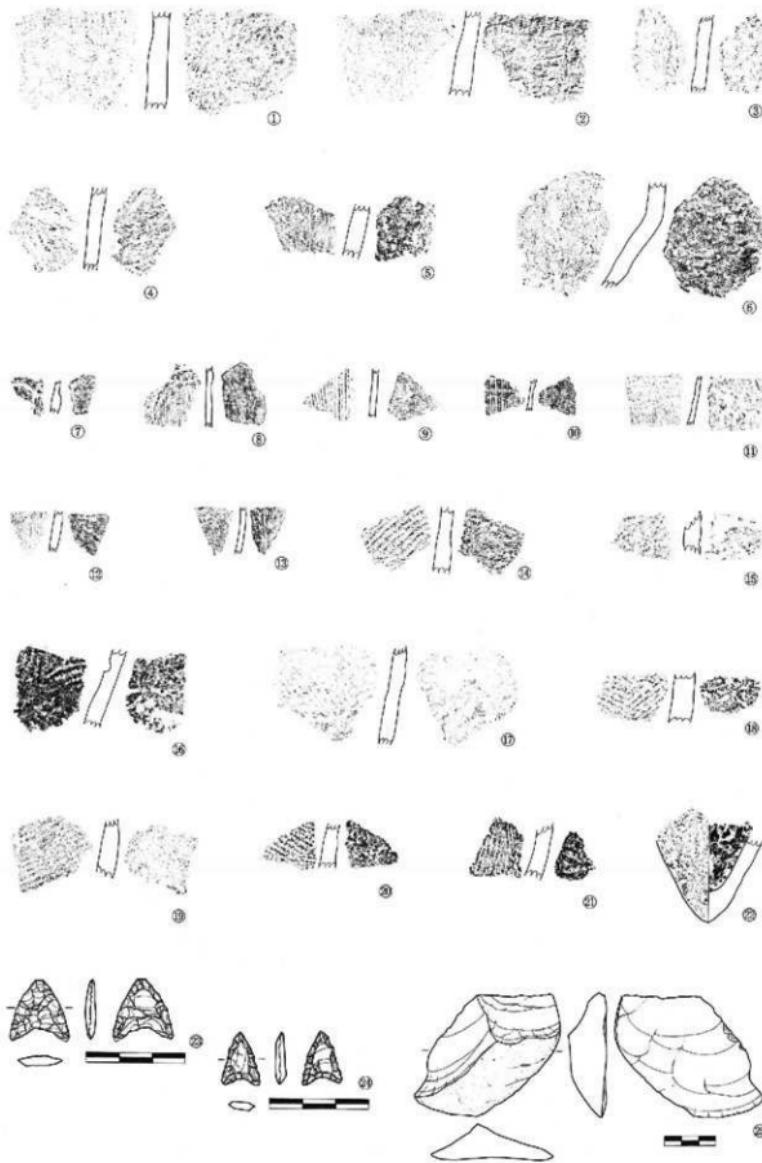
第111図 第1号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、⑥(1/4)



第12図 第2号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第13図 第3号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第14図 第3号住居址遺物(1/3)、②④(2/3)、⑤(1/3)

われるピットは検出されていない。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められるが、ローム面までは達していない。

遺物は在地系下吉井式土器と神ノ木台式併行の口縁部の破片と東海系の土器と羽状縞文、擦痕のある繊維土器があり、総重量は2,150gが出土している。石器は黒曜石の石鎚と緑色岩の調整痕のある剥片が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

4. 第4号住居址（第15・16上図、図版14）

第1号住居址の南西側JK-11グリッドで確認されたものである。台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、東側では壁の明瞭な立ち上がりを確認している。検出した長径は6.10mで短径側は調査区外に続いているため短径は3.40m以上になる。長軸方向はN-60°-Eを示す。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。床面は軟弱で、中央やや東側からローム面まで達する焼土を検出しておらず、検出状況から地床炉である。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。床面同様、検出状況は軟弱である。

遺物は在地系下吉井式土器と神ノ木台式併行の口縁部の破片と東海系の土器や羽状縞文を施し、擦痕のある土器などがあり、総重量は2,120gが出土している。石器は黒曜石の石鎚と緑色岩の調整痕のある剥片が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む底部と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土している。石器は一部に欠損はあるが黒曜石の石鎚7点が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

5. 第5号住居址（第16下・17・18図、図版15）

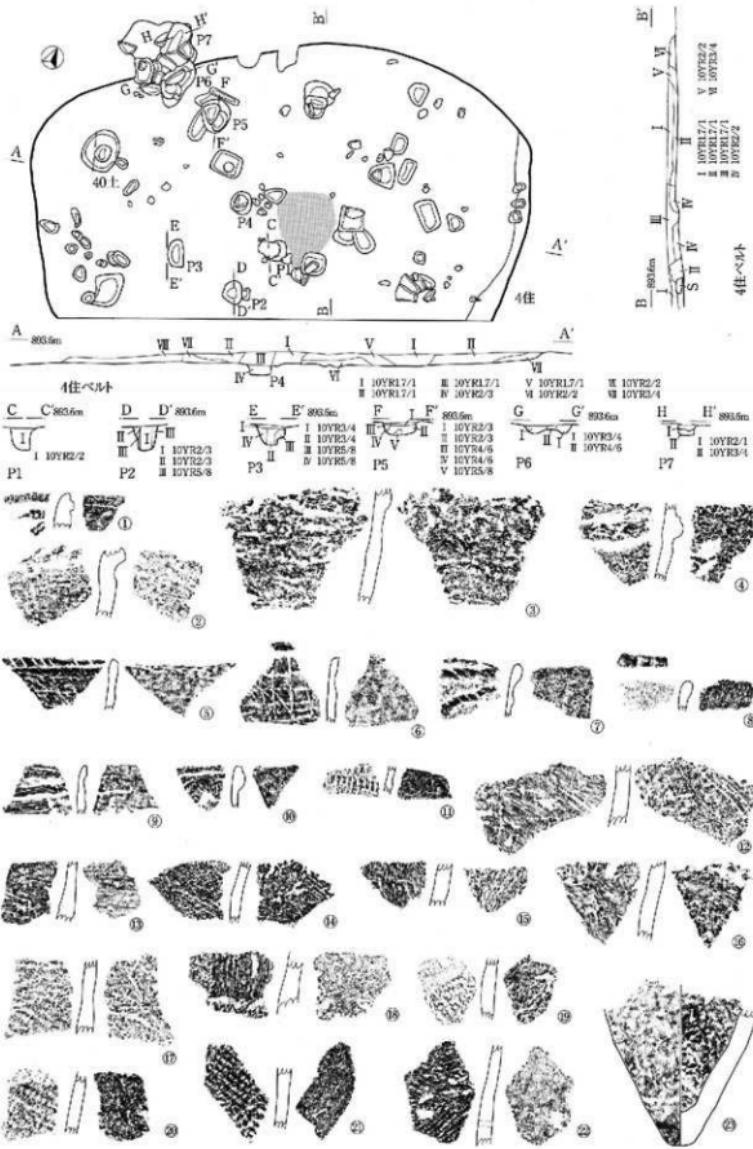
4号住居址の南西IJ-11グリッドで試掘のトレンチで確認されたものである。住居址は台地の平坦面が西側に緩やかに傾斜し始める位置にある。暗褐色土層の中に遺構があるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、径約6mになると思われ中央東寄りに地床炉があり、西寄りには台石がある。

遺物は前期初頭の土器片の他に中期中葉の土器が南側より出土しており、総重量は7,150gである。石器は本遺跡でよく見ることができる緑色岩系の石材を用いた刃部調整痕を持つ櫛器、打製石斧、欠損部のある凹石、台石は2点、黒曜石の石鎚が1点出土している。焼土を中心とする本址は前期初頭に帰属しよう。

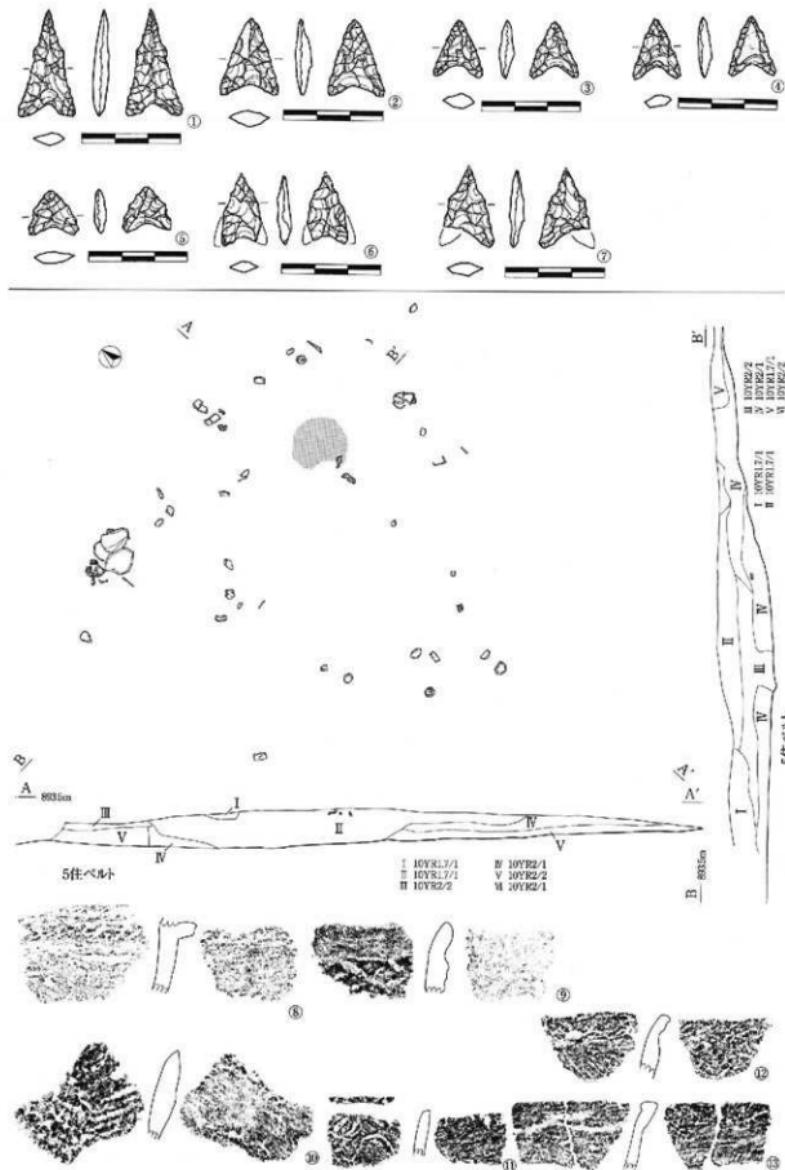
6. 第6号住居址（第19・20図、図版16）

1号住居址北西のK-10グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により搅乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。西側で僅かな壁の立ち上がりが確認されているが、本址に伴う確実な遺構は他に中央部付近に3個所の焼土がある。5m×3mの範囲から遺物が出土しているが、内部構造は不明で、明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方も軟弱である。焼土の一部はローム面まで達しているところもあり、平面形は不整形であるが地床炉である。

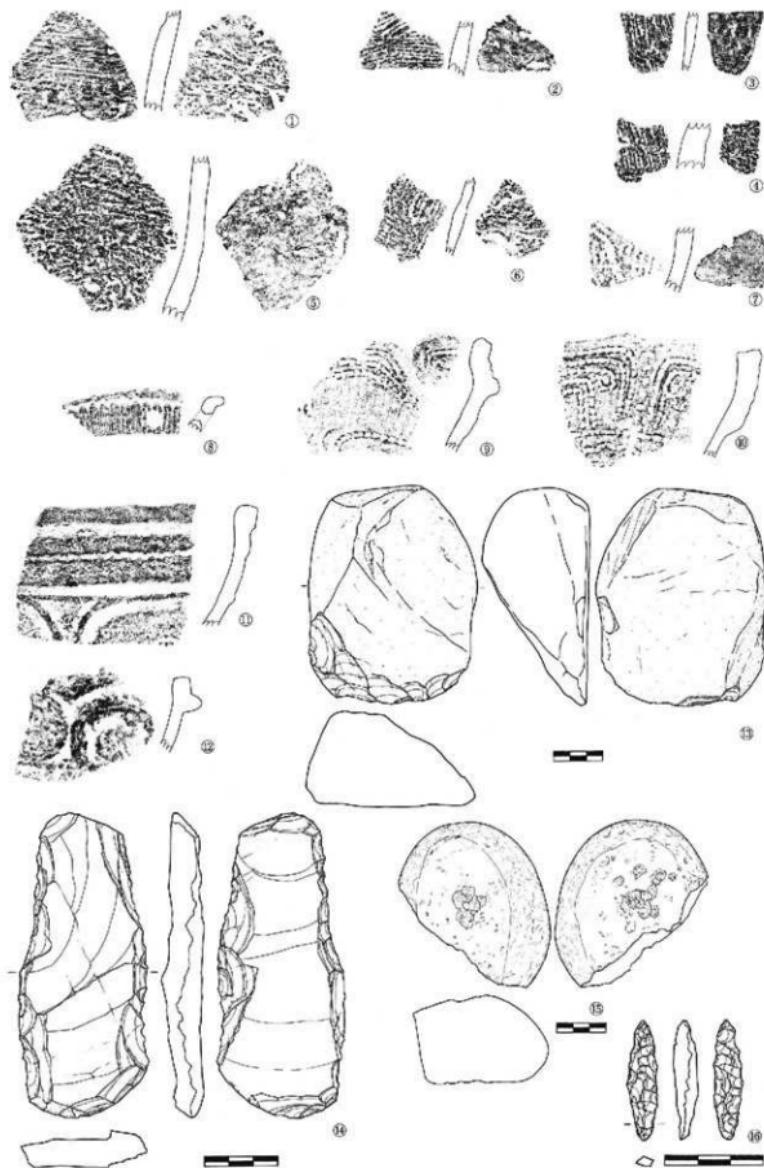
遺物は器形を図上復元できた土器に内外を指頭圧痕で調整し器厚を薄くして、口縁は口唇が波状で1.5cm～2cmの折り返しをしてやや厚く仕上げその下に2条の粘土紐が廻り、左上から右下に細縞文を施してある土器がある。出土している厚手で繊維を多量に含む土器片の中には縫隙帶状に廻っている隆帯の高さが2cmに及んでいるものがある。他に東海系の土器片もあり、図上器形復元以外の総重量は1,900gが出土している。石器は黒曜石の石鎚が3点、同プランク1点、撲指状器1点、砂岩の刃部調整痕を持つ櫛器、凹石が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。



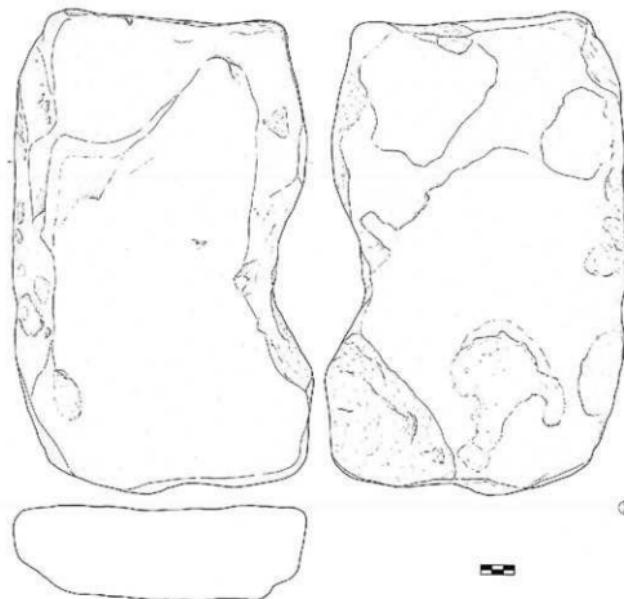
第15図 第4号男性居址(1/60)、同遺物(1/3)



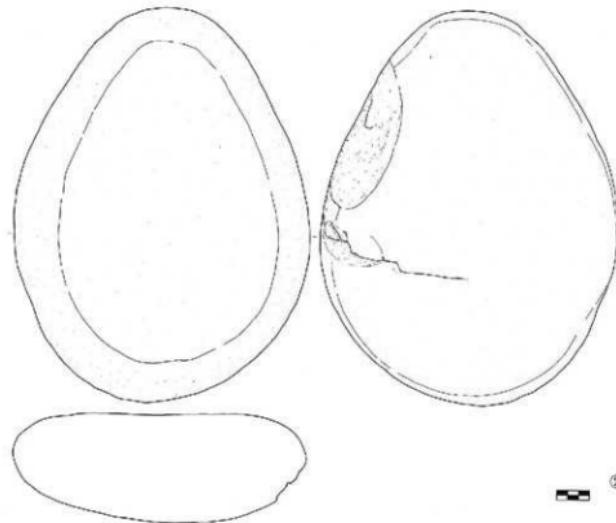
第16図 第4号住居址遺物(1/3)、第5号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第17圖 第5號住居址遺物(1/3)、⑭(1/2)、⑯(2/3)



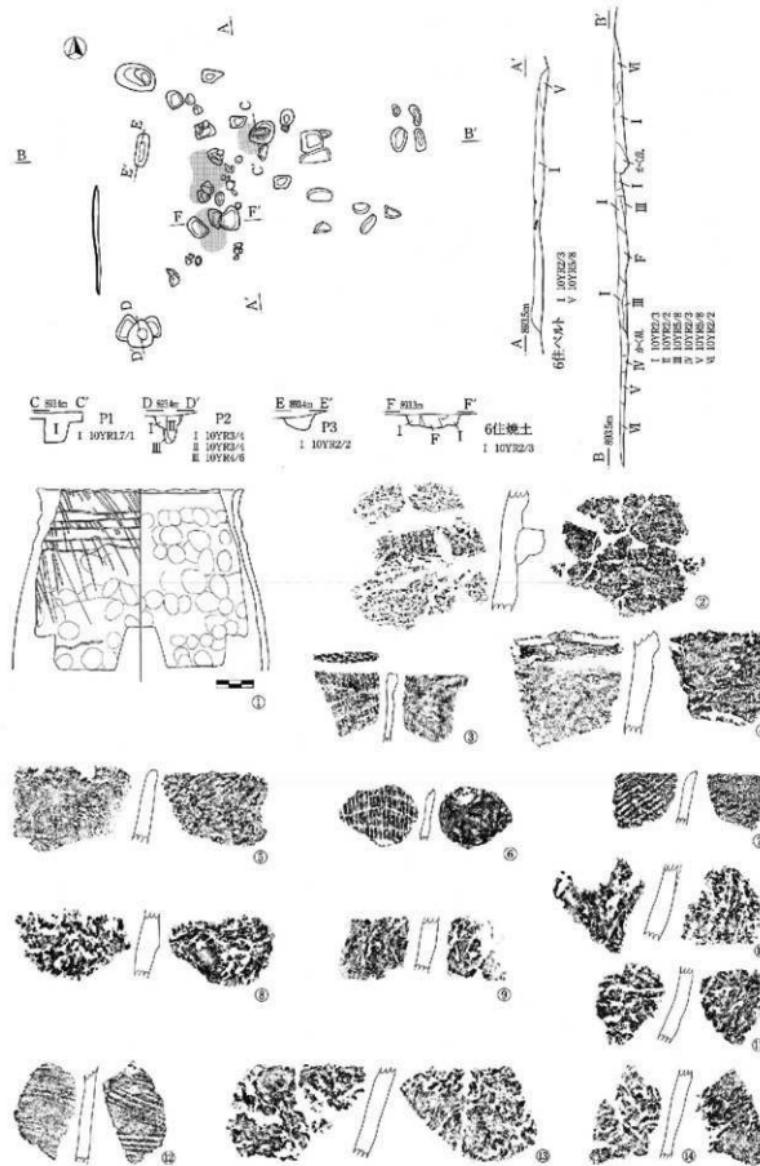
①



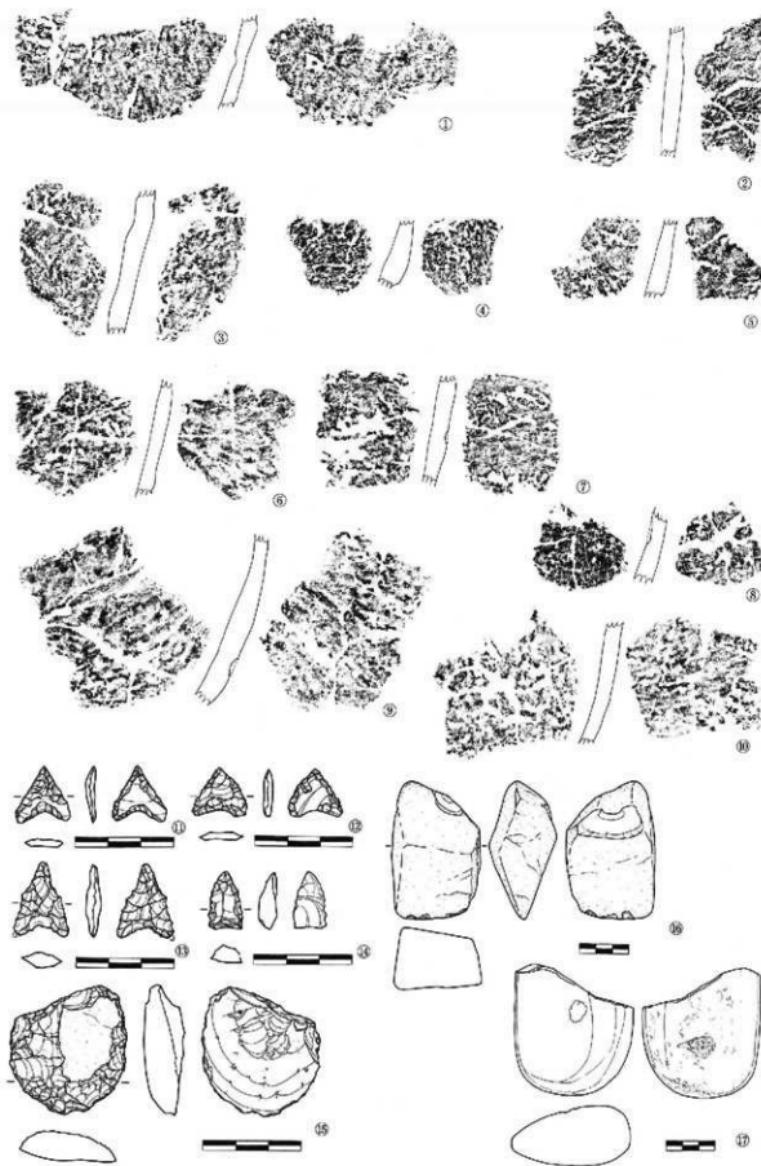
②



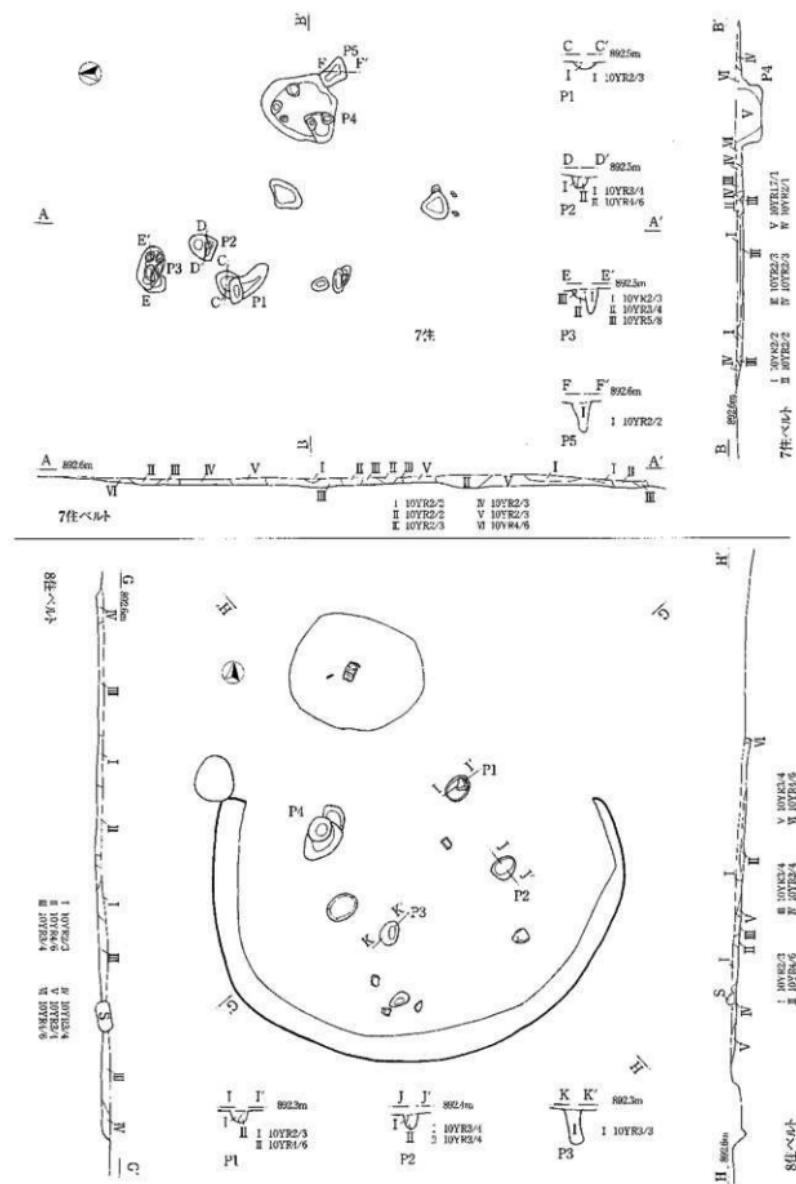
第18图 第5号住居址遺物(1/5)



第19図 第6号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



第20図 第6号住居址遺物(1/3)、⑪⑫⑬⑭⑯(2/3)



第21図 第7号住居址(1/60)、第8号住居址(1/60)

7. 第7号住居址（第21上図、図版17）

本址は台地西側面に位置するGH-9グリッドで確認されたものである。長径約7m×短径約4.5mのはんやりした隅丸長方形の落ち込みが見られたことから住居址として調査に取り組んだ。この覆土内には極細かい黒曜石の細片が混じっていたが掘り方を確認するため下げたところプランは不明になってしまった。掘り方底面も軟弱で壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットの検出もない。本址の北側から2基の集石炉が検出されているのでこれに伴う施設の可能性もある。

固化できる遺物の出土は無かった。時期についても不明である。

8. 第8号住居址（第21下・22図、図版18）

本址は調査区のJ-8グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置し、132号土坑と切り合い関係があり新旧は住居が新しい。北側は耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは長径約5.2mの円形を呈すと思われる。壁は最大で12cmの高さがあるが周溝は遺存していない。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。焼上の検出もないが中央やや西寄りに台石が据えられていた。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は132号土坑上面から口唇に4単位の突起が付き、口縁から崩部が全周し底部を欠損する擦痕のある厚手で繊維を多量に含む土器が全周して復元ができるおり、他の土器片も多量の繊維を含んでおり、圓上器形復元以外の総重量は250gが出土している。石器は黒曜石の石錐、緑色岩系の刃部調整痕を持つ砾と台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

9. 第9号住居址（第23上図、図版19）

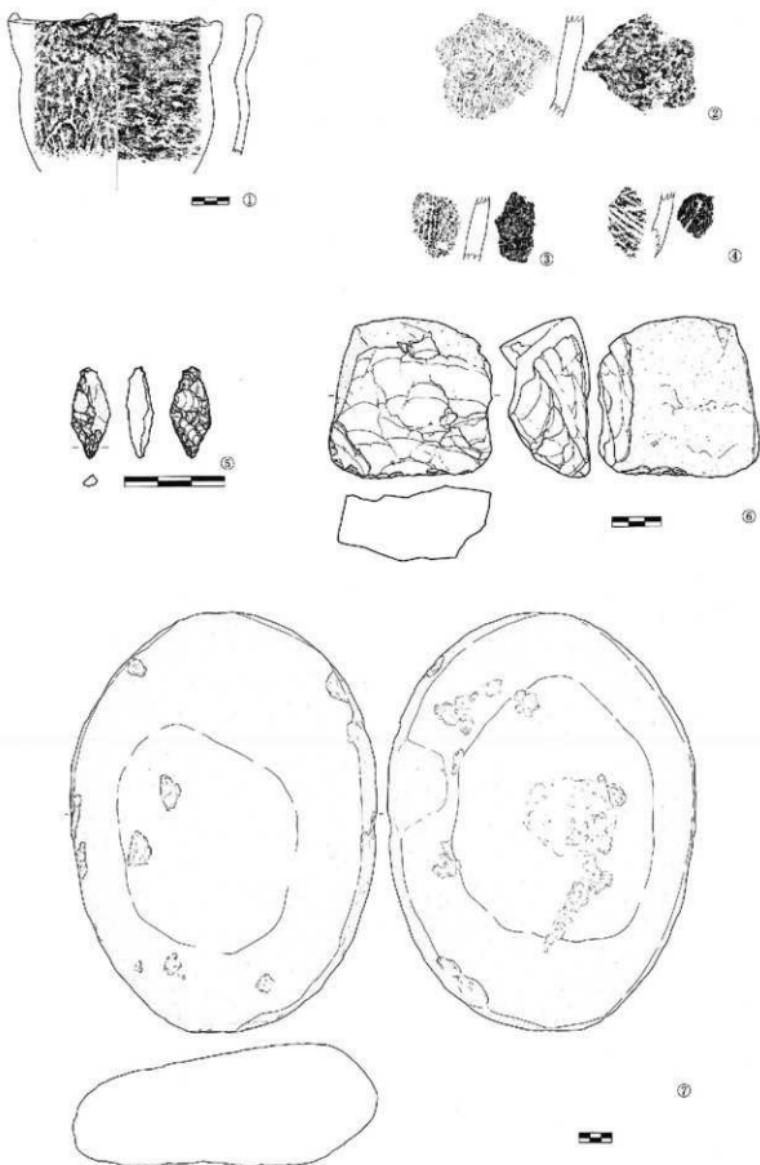
7号住居址の西側F-9グリッドの台地肩斜面で確認されたものである。平面プランは歪んだ楕円形で、長径2.75m×短径2.23m×深さ0.5mで、長軸方向はN-27°-Wを示す。内部構造は床、壁面ともに堅く縮まり、底面は破碎帶の砾層まで達している。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。焼土の検出はなく、東側は段状になる。

遺物は固化していないが3点、30gの繊維土器片が出土しており、石器は黒曜石の石錐が1点出土している。本址の時期は早期末前期初頭に帰属すると思われる。

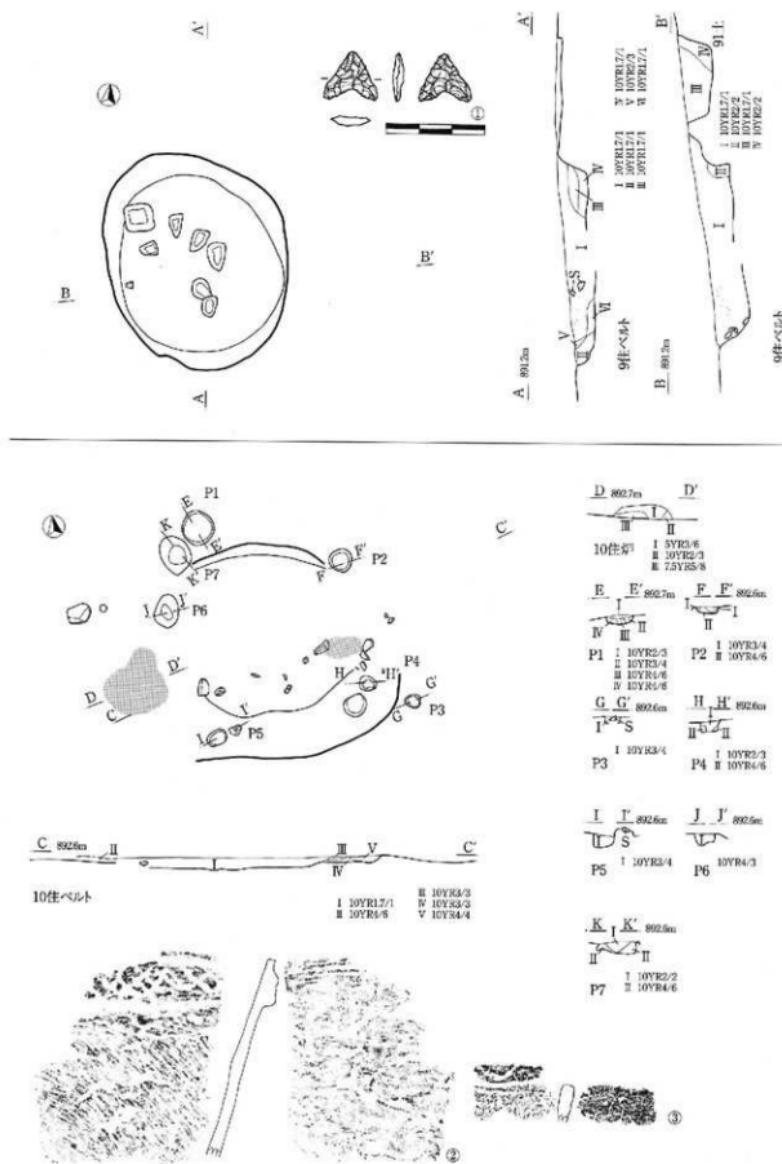
10. 第10号住居址（第23下・24上図、図版20）

8号住居址東側のK-8グリッドで確認された住居址で台地の平坦面に位置し東側の15号住居址、北側の溝址1と切り合い関係がある。本址周辺から北側は耕作による擾乱が著しく切り合いによる遺構の新旧関係が判断できない住居址が多い。本址も全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居の中央部の長径約2.7mの円形を呈すと思われる部分で西側の上層面で地床炉の焼上を確認している。内部構造は住居址上面全体が、擾乱を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。地床炉の検出状況から床面下まで耕作による削平を受けており、掘り方は緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪み、検出状況は軟弱である。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。

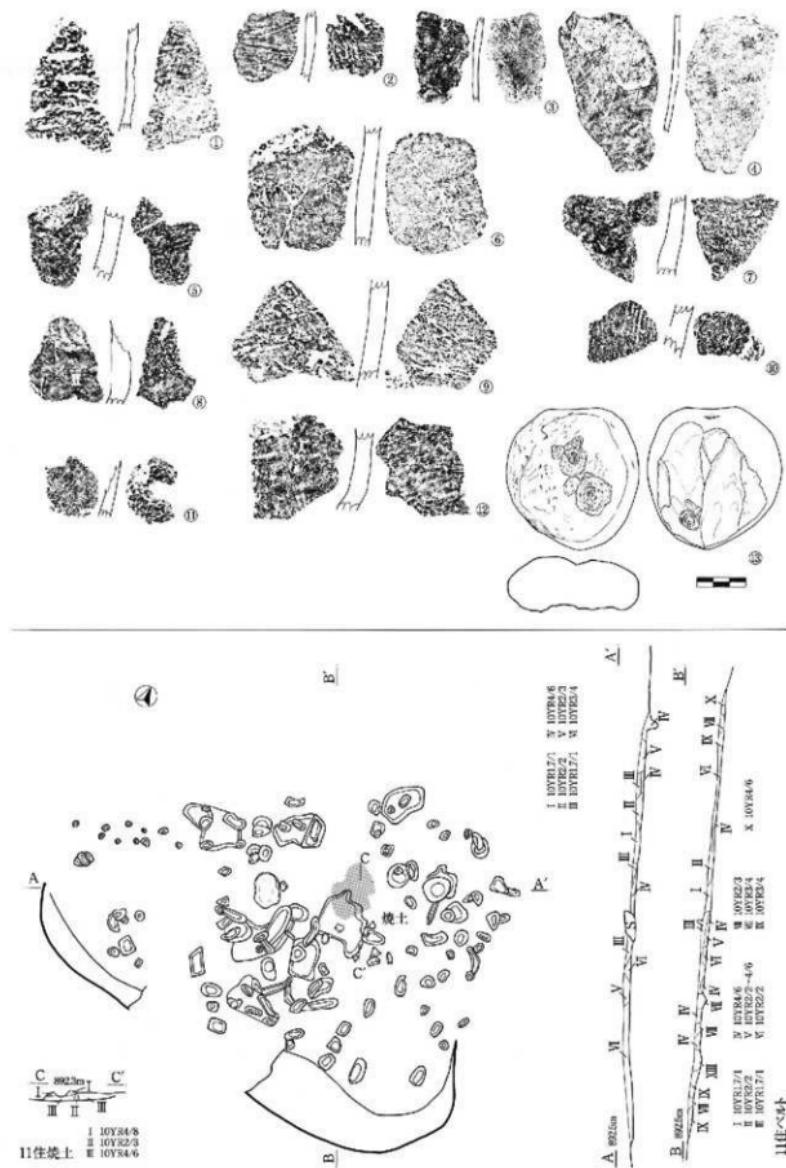
遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む壺状工具による斜格子目が刻まれた隆帯付き条痕文土器口縁の破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片があり、総重量は700gが出土している。石器は緑色岩系の凹石が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。



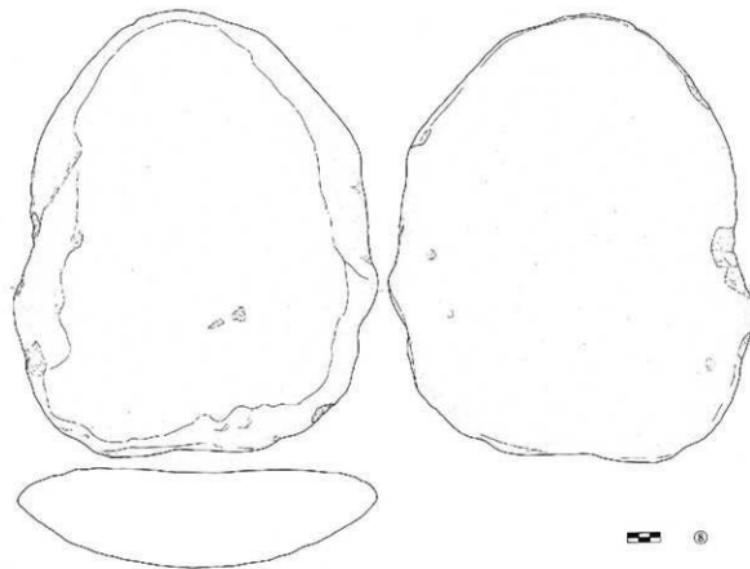
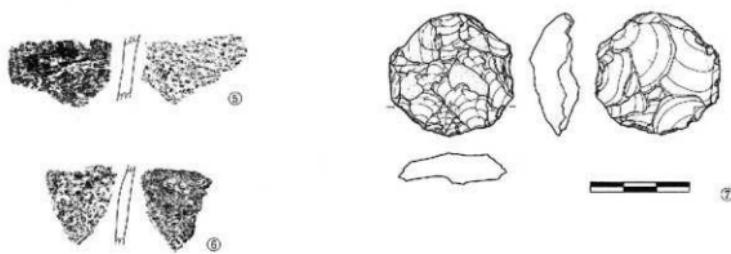
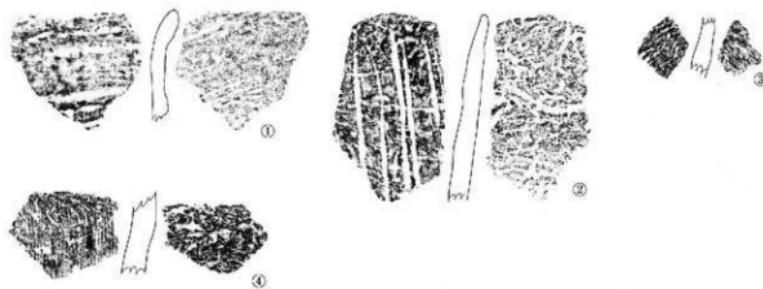
第22図 第8号住居址遺物(1/3)、①(1/4)、⑦(1/5)、⑤(2/3)



第23図 第9号住居址(1/60)、同遺物①(2/3)、第10号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第24図 第10号住居址遺物(1/3)、第11号住居址(1/60)



第25圖 第11號住居址遺物(1/3)、(7)(2/3)、(8)(1/5)

11. 第11号住居址（第24下・25図、図版21）

本址は10号住居址北側K-7・8グリッドで確認されたもので15号住居址と切り合い関係にある。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居南側の壁と中央部付近の焼土で長径は5.7m以上になる。内部構造は耕作による擾乱が著しく床面にも凹凸が多い。検出している壁と床の一番低いところの比高差は25cmを測る。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。北側の床面は削平も受けているが、掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。ほぼ中央と思われる付近で焼土を検出しており、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土の南北側から台石が出土している。

遺物は上器が厚手で繊維を含む胴下部破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片があり、総重量は300gが出土している。石器は黒曜石の搔器と安山岩の台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

12. 第12号住居址（第26・27・28図、図版22）

本址は5号住居址北側J-11グリッドで確認されたもので台地の平坦部から西側に向かい傾斜する肩に位置する。西側が耕作により擾乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。残存していたのは住居の東側で、壁の検出面と皿状の床の最深部との比高差は26cmを測る。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝は遺存しておらず、明らかに主柱穴になると思われるピットや焼土は検出されていない。住居の北側から台石が出土している。

遺物は小規模な住居であるが多様性に富み、土器が厚手で繊維を多量に含む条痕整形した1/3周ほど残存し器形が図上復元できた胴部破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片、沈線文、羽状縞文の土器片が出土しており、図上器形復元以外の総重量は1,400gが出土している。石器は磨石、台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

13. 第13号住居址（第29上図、図版23）

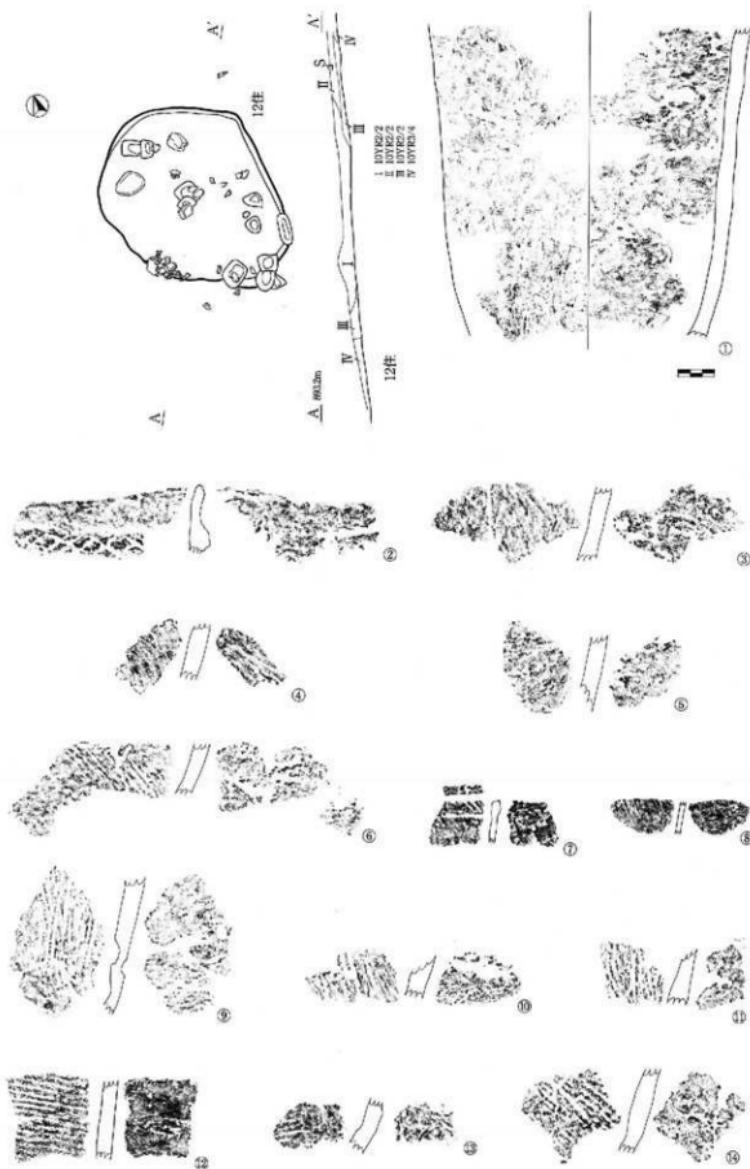
本址は調査区北西向き斜面のE-6グリッドで確認した平安時代の住居である。一部を除き耕作等による擾乱で失われているため平面プランを把握することはできなかった。残存していたのは住居の北東側、東側壁付近だけで床の一部は礫層に達しており、竈の火床も検出している。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。

遺物は灰釉陶器重の器形が図上復元できている。他に土師器壺、同窓に繊維土器が混在しており、総重量は160gが出土している。

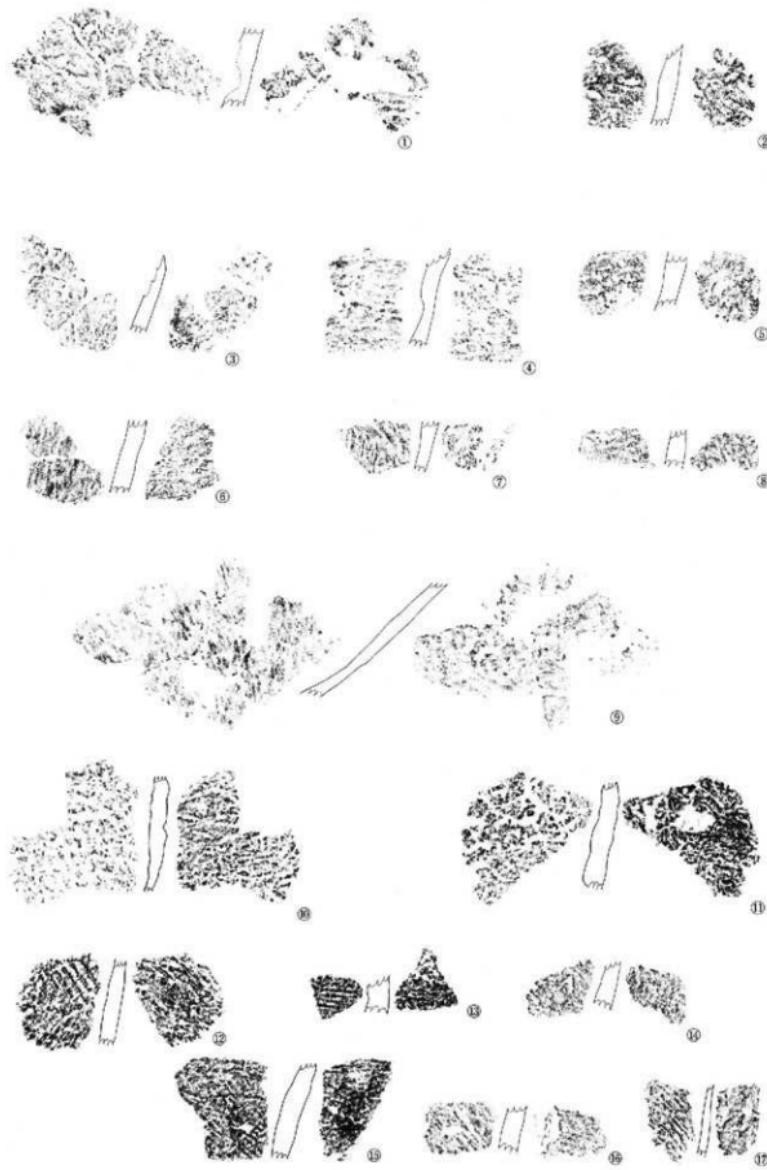
14. 第14号住居址（第29下図、図版24）

8号住居址北側J-7・8グリッドで確認されたもので台地の平坦面に位置し17・20号住居址と切り合い関係にあり17住に対しては14住が新であるが20住については北西側が耕作等により擾乱されているために新旧関係は判明できず、全体の平面プランも把握することはできなかったが、長径は6.2m以上を測る。内部構造は地床炉を検出しており、焼土の検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

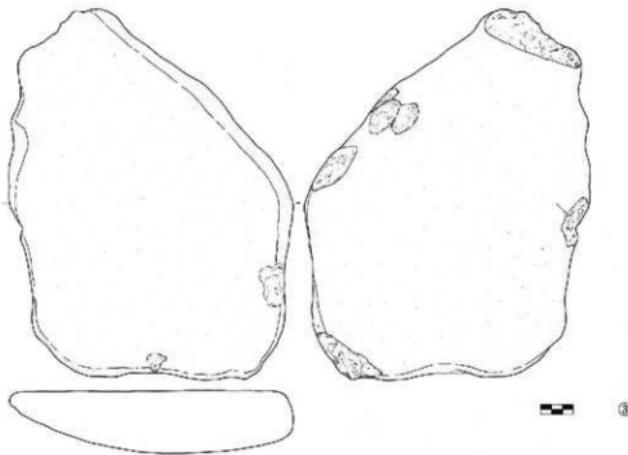
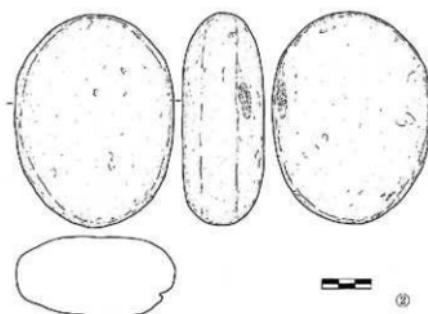
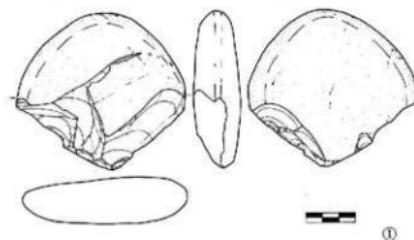
土器は細片が多く接合もできなかったことから同化していないが厚手で繊維を多量に含む多様性に富む破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土している。繊維土器には3cm以下ではあるが尖底土



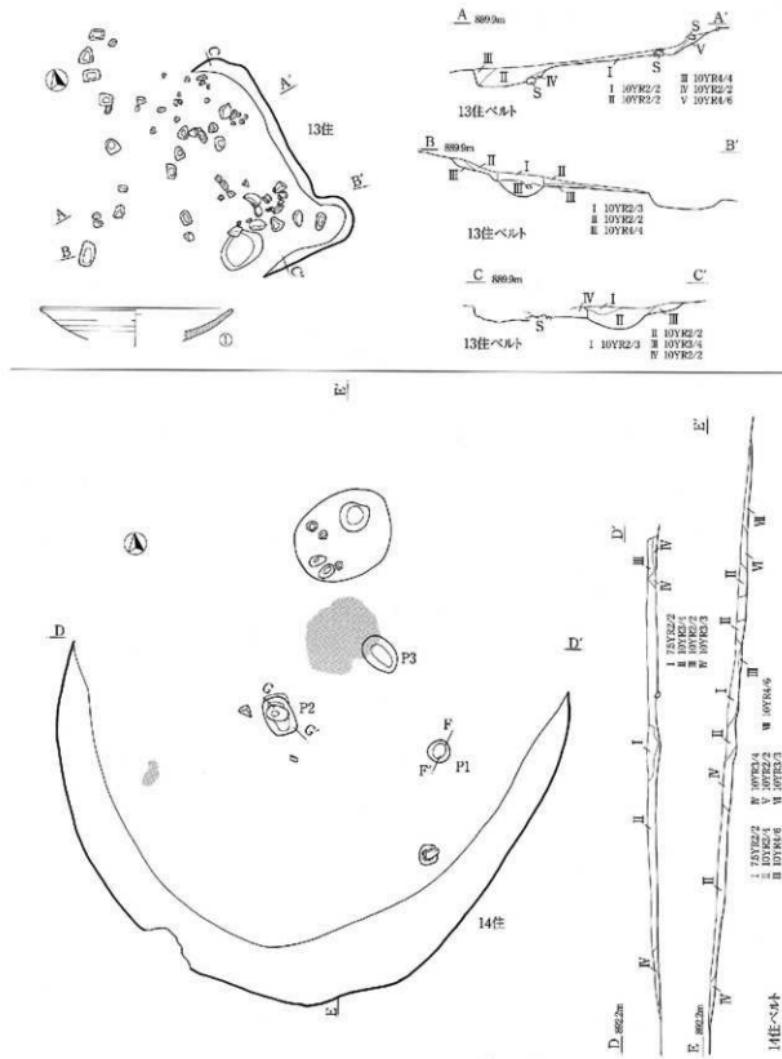
第26図 第12号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



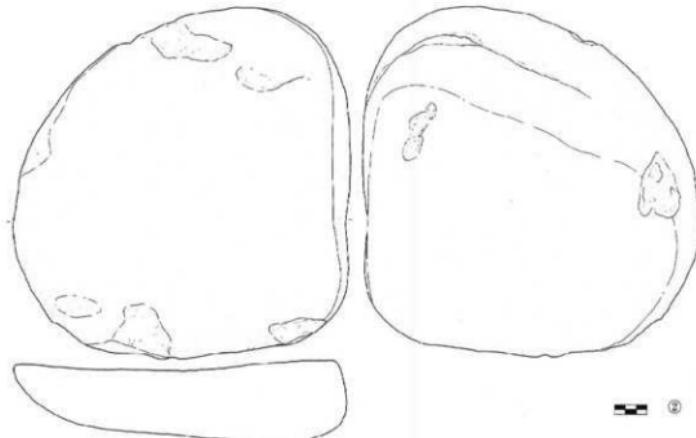
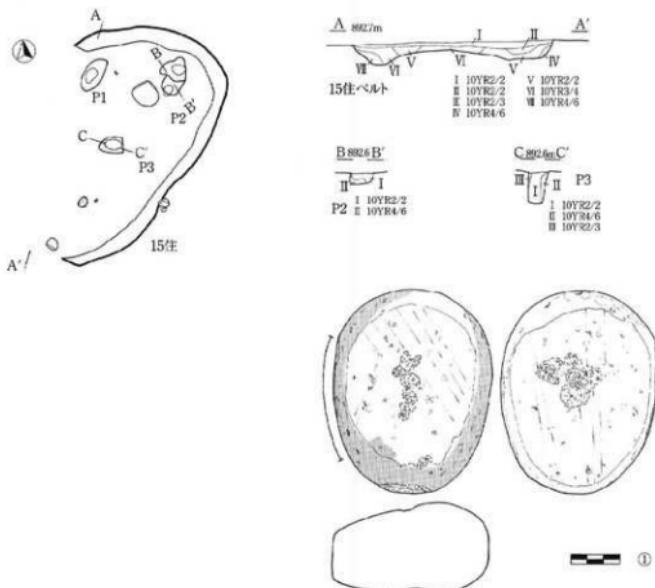
第27図 第12号住居址遺物(1/3)



第28图 第12号住居址遗物(1/3)、③(1/5)



第29図 第13号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第14号住居址(1/60)、同遺物(2/3)



第30図 第15号住居址(1/60)、同遺物①(1/3)、②(1/5)

器の底部もあり、総重量は300gが出土している。石器は石鎚が1点出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

15. 第15号住居址（第30図、図版25）

本址は10号住居址東側、11号住居址南側と切り合っている。全体が耕作等により擾乱されているために切り合いの新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかったが、東側に残存していたのは住居の一部を確認しており長径は3.1m以上になる。残存部からは台石が出土している。

遺物は台石の他に縁辺に炭化物が付着した凹石が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

16. 第16号住居址（第31上図、図版26）

本址は14号住居址南西側のI-7・8グリッドで確認されたものである。平面形プランは長径6.20m×短径5.82mのはば円形を呈していた。長径方向はN-90°-Eを示す。内部構造は最大の比高差14cmで壁を検出しておらず、床の掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝、明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。中央から西側にかけて細長く焼上を検出しておらず、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。

掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。遺物は陶化できる土器ではなく、黒曜石の石鎚1点が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

17. 第17号住居址（第31下図・32図、図版27）

本址は調査区のJK-7・8グリッドで確認され14号住居址と溝址1と切り合い関係にあり、本址、14住、溝1の順に新しくなる。切り合いと耕作による擾乱で全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から長径6.4m以上を測る。内部構造は住居址北側が、擾乱を受けているため不明な点が多く明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。焼上を南側の東と西から検出している。加熱を受け硬化したブロックが認められるがローム面までは達していないため炉は擾乱部にあると思われる。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は上器が厚手で繊維を多量に含む在地系下吉井式土器と薄手の東海形土器が図上復元できており、図上器形復元以外の総重量は1,360gが出土している。石器は黒曜石の石鎚と台石が出土しており、本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

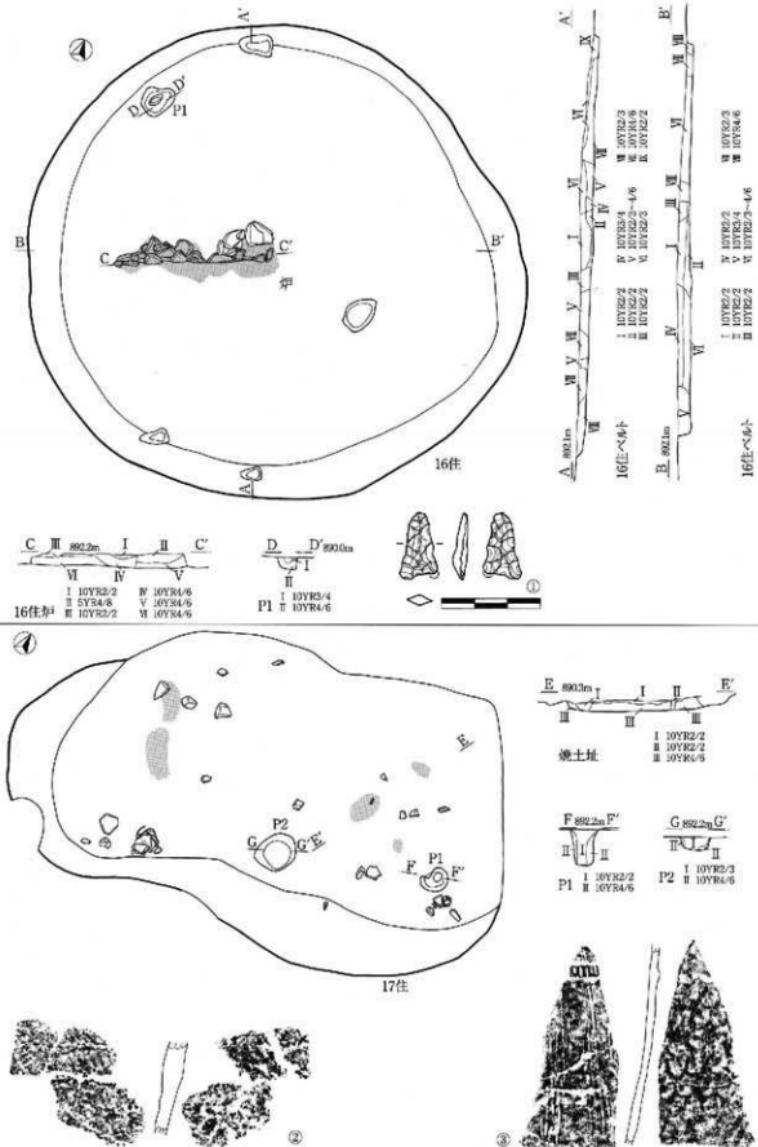
18. 第18号住居址（第33上図、図版28）

本址は15年度調査区北端 GH-4・5グリッド台地肩の平坦面で確認された平安時代の住居址である。耕作等により床下まで削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、主柱穴の検出状況から長軸5.88m 主軸方向はN-56°-Eを示す。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは7本を確認でき、南北側3本、南東側2本、北東側2本で南北側では3個所窓の火床を確認している。住居中央の床下土坑内から1点ではあるが壺胴部の破片が出土している。

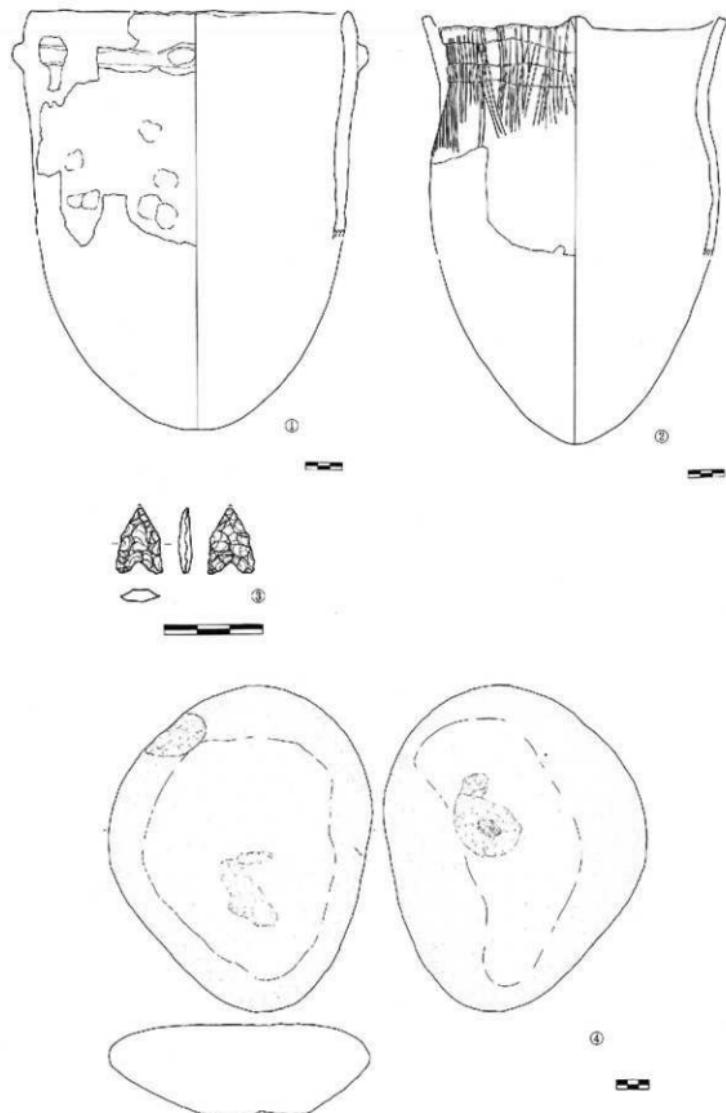
遺物は灰釉陶器の皿、碗の器形と土師器高台付坏の高台部が図上復元できた他に土師器の坏、壺の破片が出土しており、総重量は300gが出土している。

19. 第19・21号住居址（第33下図、図版29）

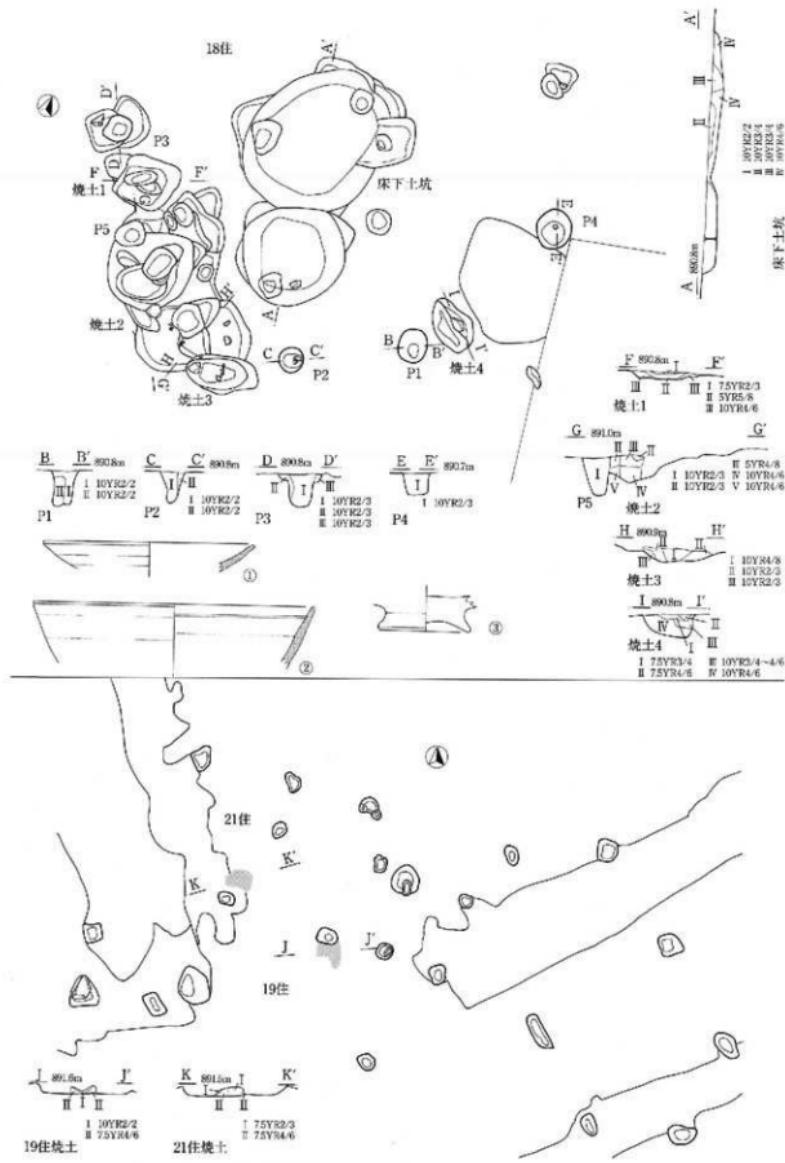
19号住居址は11号住居址北側K-6・7グリッドで確認されたものである。全体が耕作による擾乱で遺構として捉えられたのは焼土だけで、K-7グリッドで確認した21号住居址と切り合い関係にあるが21住も擾



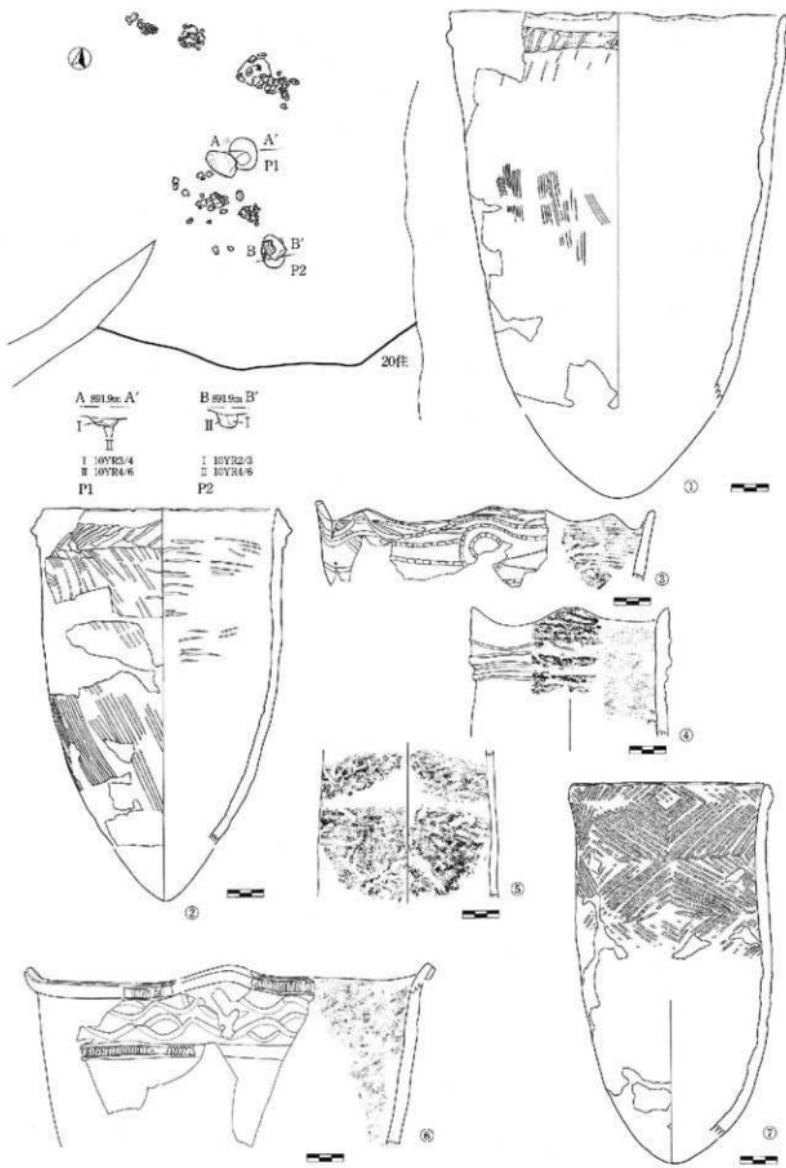
第31図 第16号住居址(1/60)、同遺物(2/3)、第17号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

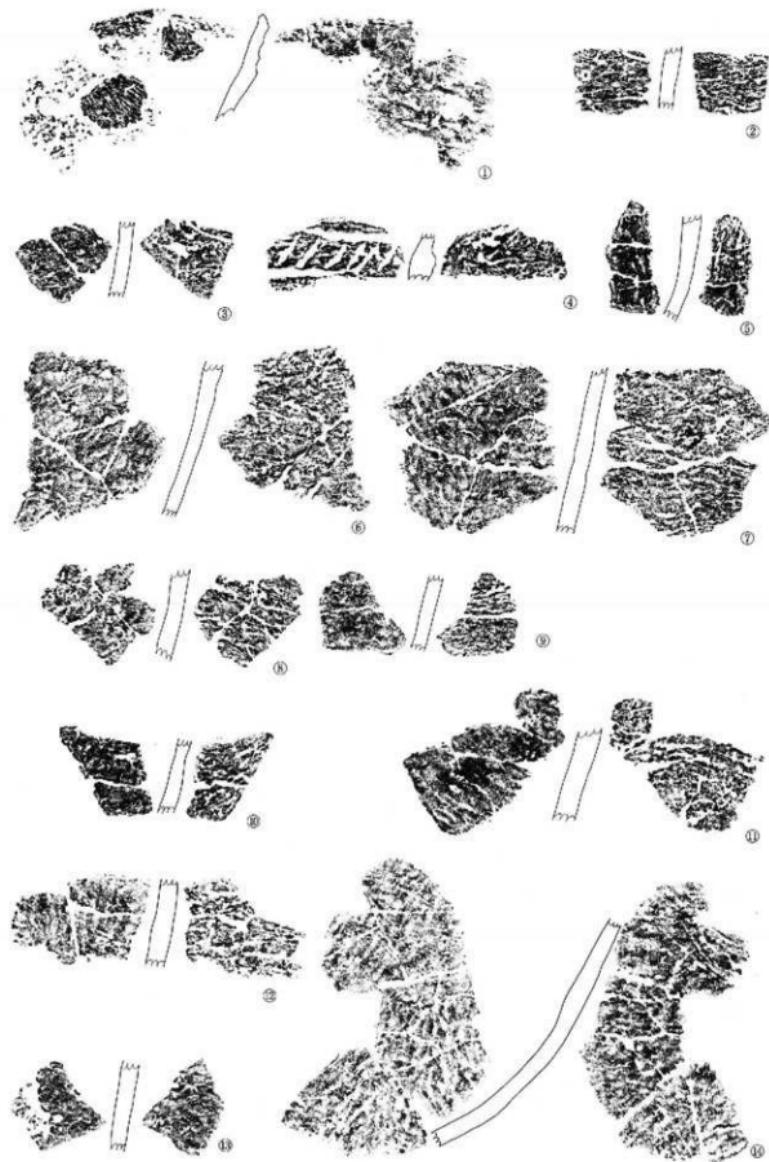


第32图 第17号住居址遺物(1/4)、③(2/3)

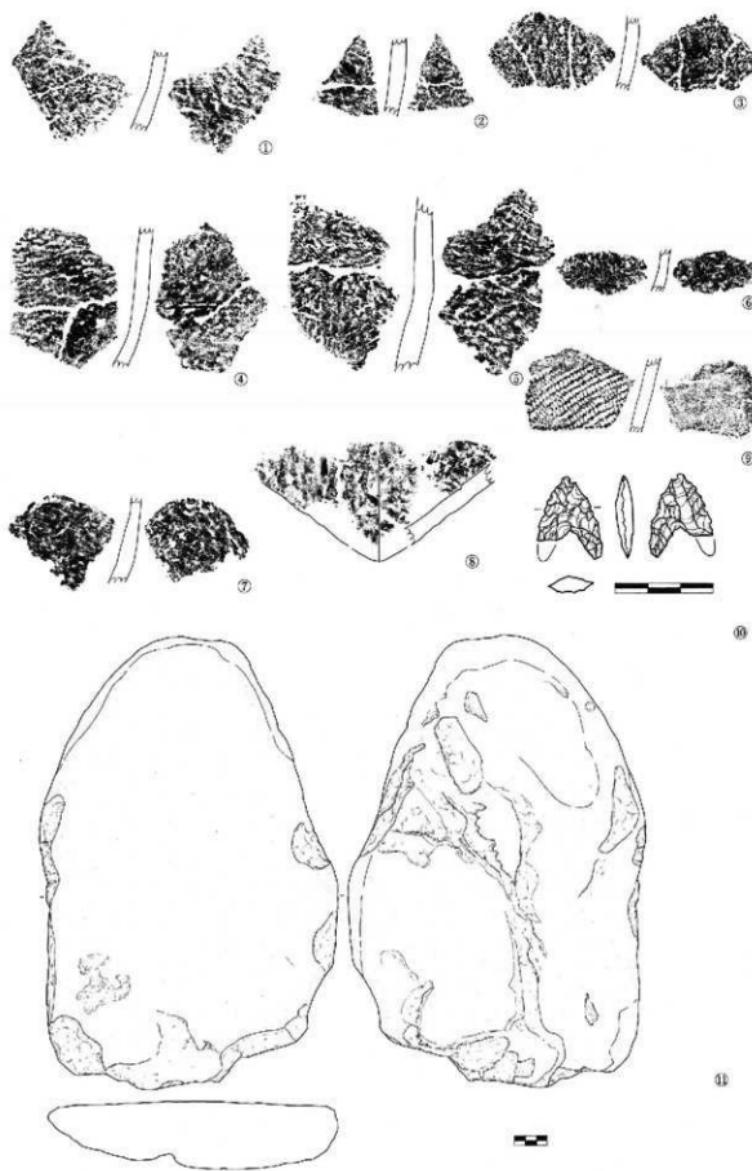


第33図 第18号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第19号・21号住居址(1/60)





第35圖 第20號住居址遺物(1/3)



第36図 第20号住居址遺物(1/3)、@ (2/3)、⑪ (1/5)

乱が著しく遺構として捉えられたのは19件と同じく焼土はロームまで達している地床が一部であろう。

遺物は繊維を多量に含む土器片が少量出土しているがいずれも耕作によるローリングを受け割れ口は丸くなっている、総重量は800gが出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属すると思われる。

20. 第20号住居址（第34・35・36図、図版30・31）

本址は14号住居址の北側と切り合い関係にあるJ-7グリッドで確認されたもので平成15年度調査区の中では遺物が最も出土した住居である。上面が耕作により搅乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時の状況から長径は4m以上になる。掘り方を確認するため掘り下げたところ淡く見えていたプランは消えてしまった。検出状況は軟弱である。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに柱穴になると思われるピットは検出されていない。遺物が出土している中央付近に据え置かれたような台石があり、下のピット内から少量の焼土を検出しており、台石北側は狭い範囲であるがロームまで焼土が達している所がある。

遺物は台石の南東側から肥厚口縁で羽状網文の尖底土器が押し潰れてはいたがほぼ完形で出土しており、中から別個体の羽状網文土器の破片（第36図⑨）が出土している。器形を図上復元できた土器が他に6点あり、図上器形復元以外の総重量は2,980gが出土している。本址からは2点底部の形状が分かる土器片があり丸底と鈍角の尖底部が出土している。遺跡全体の土器の種類、個体数に対し、底部の出土点数は他の時期の住居に比べると著しく少ない。石器は石鏃と台石などが出土している。ド吉井・花積下層式併行、在地系ド吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

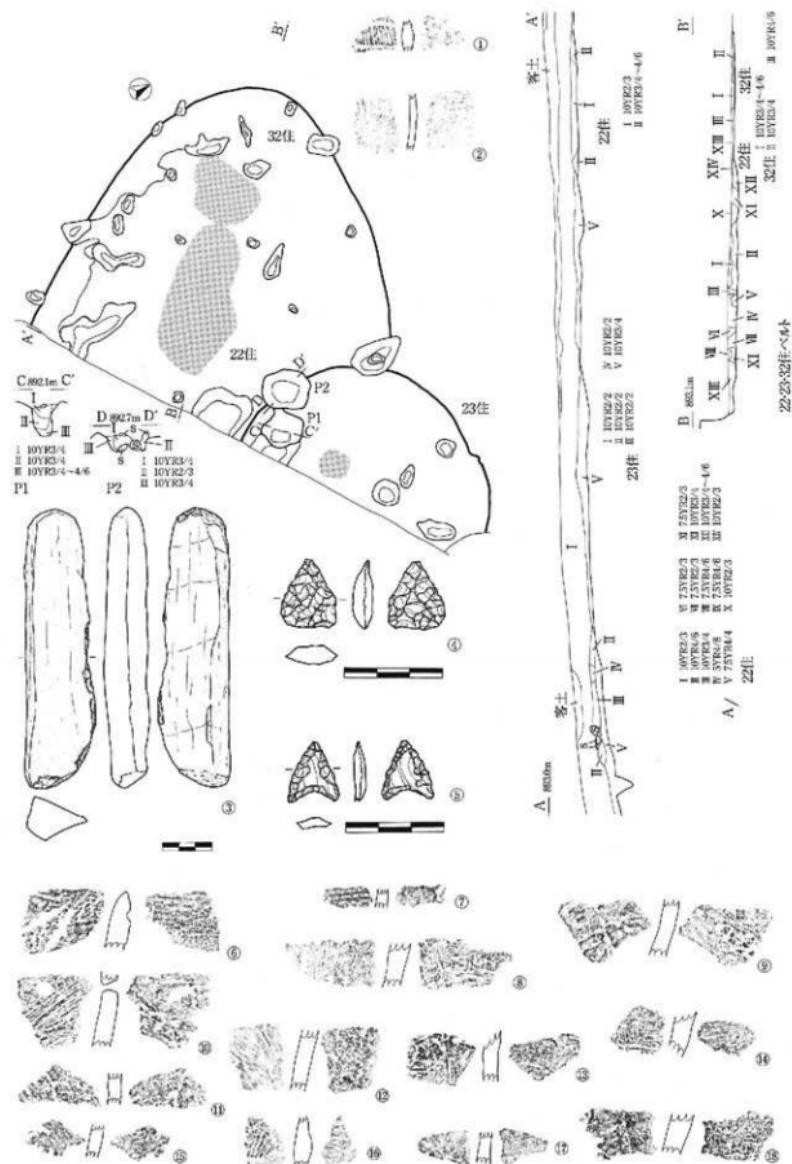
21. 第22・23・32号住居址（第37図、図版32・33・10-①）

第22号住居址から16年度調査区となる。22号住居址は遺跡を継続する市道築のNO-9グリッドで確認されたもので北側が32号住居址、東側が23号住居址と切り合い関係になり、南側は調査区外となっている。遺構検出時に広く焼土を検出したため1軒の住居として調査を開始したが北側の焼土付近は南側に比べ掘り方が浅いことから別の住居と判明し32号住居として設定した。いずれの焼土も検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。切り合い、未調査区があるため平面プランは不明であるが長径は4.4m以上を測る。焼土の厚さは最大12cmである。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。北側の32号住居址もNO-9グリッドで確認されたもので掘り方が極めて浅く焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状で僅かに窪む。検出状況は軟弱である。平面プランは不明であるが長径は2.6m以上を測る。焼土の厚さは最大10cmで周囲の掘り方より掘り込まれている。32号住居が22号住居を切っているため時間差は新である。23号住居はO-9グリッドで確認されたもので22号住居と西側が切り合っているが焼の付近にローム層内まで客土が成されていたため新旧関係は判別できなかった。平面プランも南東側半分以上が調査区外となるため不明であるが長径は3.2m以上を測る。掘り方の中央やや西寄りで焼土を検出している。住居は3軒とも掘り方は浅く、搅乱が深く及んでいるところもあり、壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに柱穴になると想われるピットは検出されていない。

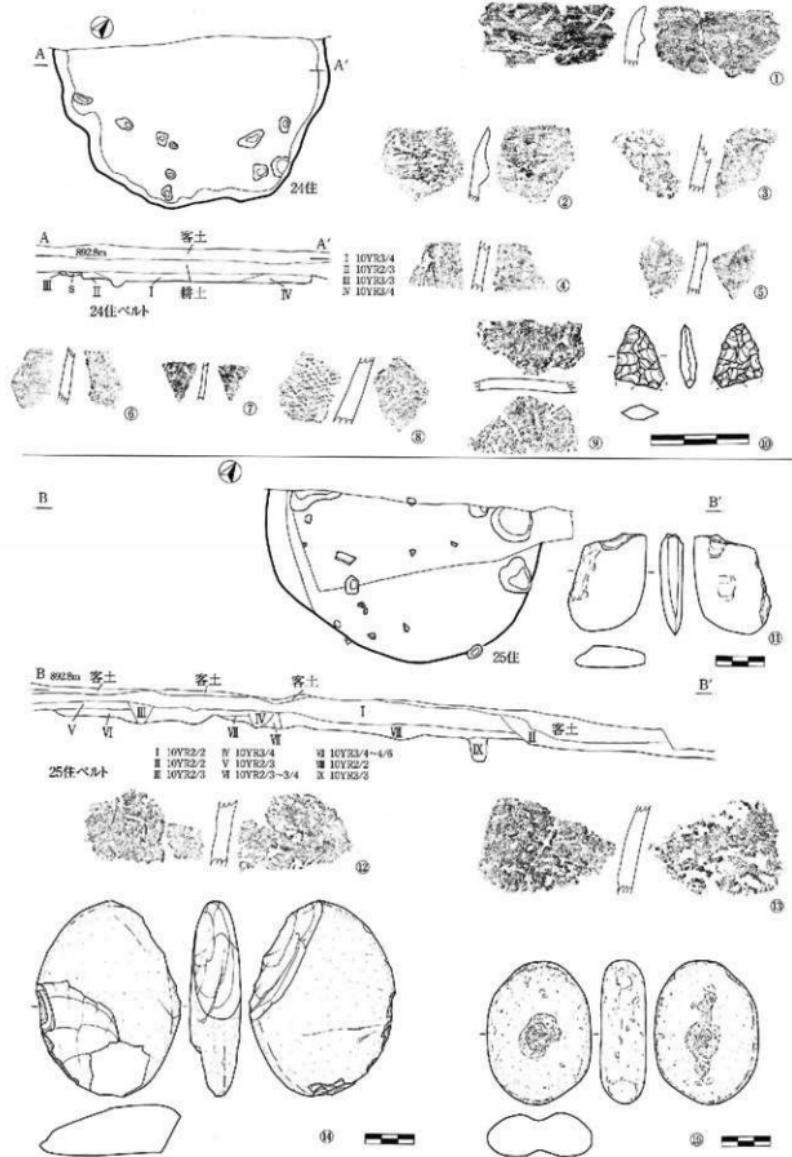
遺物は22号住居址から厚手で繊維を多量に含む条痕文土器の細片や薄手で繊維を含まない東海系の上器などがあり、150gが出土しており、石器は石鏃、砥石が出土。23号住居址からは厚手で繊維を多量に含む絶縁帯压痕文、条痕文上器などがあり、総重量は330gが出土している。32号住居址からも薄手で繊維を含まない東海系の土器細片があり、総重量は40gである。時期はいずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

22. 第24号住居址（第38上図、図版34・10-①）

22号住居址北西のN-8グリッドで確認されたものである。東側が26号住居と切り合っており、検出時に



第37図 第22号・23号・32号住居址(1/60)、第22号住居址遺物①②③(1/3)、第23号住居址遺物(1/3)、④⑤(2/3)



第38図 第24号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第25号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

は土色で新旧関係が分かり、本址が新である。住居の北西側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.8m以上を測れたが掘り方で確認した際には長径3.3m以上であった。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。南側で台石様の礫が出土しているが検出状況から判断すると擾乱で紛れ込んだ可能性がある。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む条痕文と沈線文の土器破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の上器片が出土しており、総重量は440gである。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

23. 第25号住居址（第38下図、図版35・10—①）

本址は24号住居址の北東O-8グリッドで確認されたものである。南側が26号住居と切り合っているが耕作の擾乱で新旧関係は判明しなかった。住居の北西側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできず長径は3.4m以上を測れたが、境は掘り方の下まで方形に擾乱されており、調査区外まで続いている。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む土器破片があり、総重量は130gが出土している。石器は基部を欠損した磨製石斧、剥離痕のある礫、凹石などが出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

24. 第26・33号住居址（第39・40図、図版36・10—①）

26号住居址は23号住居址北側のO-8・9グリッドで確認されたもので東側が33号住居と切り合っている。検出時には周溝が22・24・25号住居と接し、いずれの住居址からも切られているため本址が一番古いと考えられる。耕作による擾乱が著しかったため当初1軒の住居として発掘を進めたが24・32号住居の状況から2軒であることが判明した。しかし新旧関係については判断できなかった。平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.4m以上を測れたが東については全く不明である。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土部が地床炉になると思われるが焼土下に186号土坑が存在している。遺物は焼上より西側に集中している。

33号住居址はO-8・9グリッドで確認されたもので26号住居同様の擾乱のため全体の平面プランを把握することはできなかったが、掘り方から長径3.7m以上を測る。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は焼上に向かってごく緩やかな傾斜を持ち、浅い皿状に窪み、検出状況は軟弱である。この焼土は26号住居の焼土と近接しているが加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもあり地床炉である。地床炉周辺から遺物の出土はなかった。

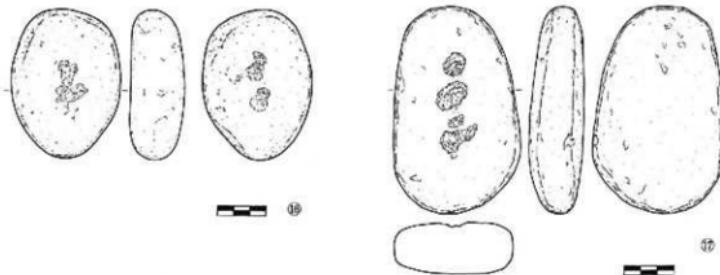
遺物は26号住居から土器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の上器片があり、総重量は1,130gが出土している。石器は黒摩石の經型石匙、石鏃と凹石が出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

25. 第27・28号住居址（第41・42図、図版37・38・10—①）

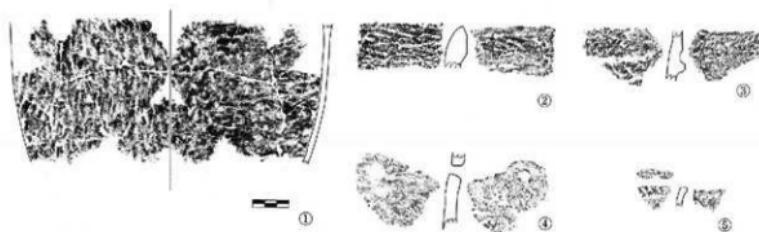
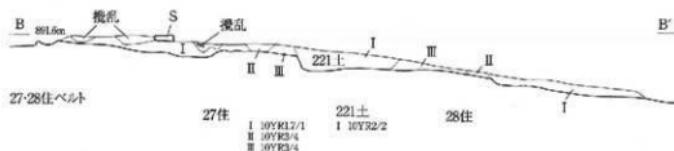
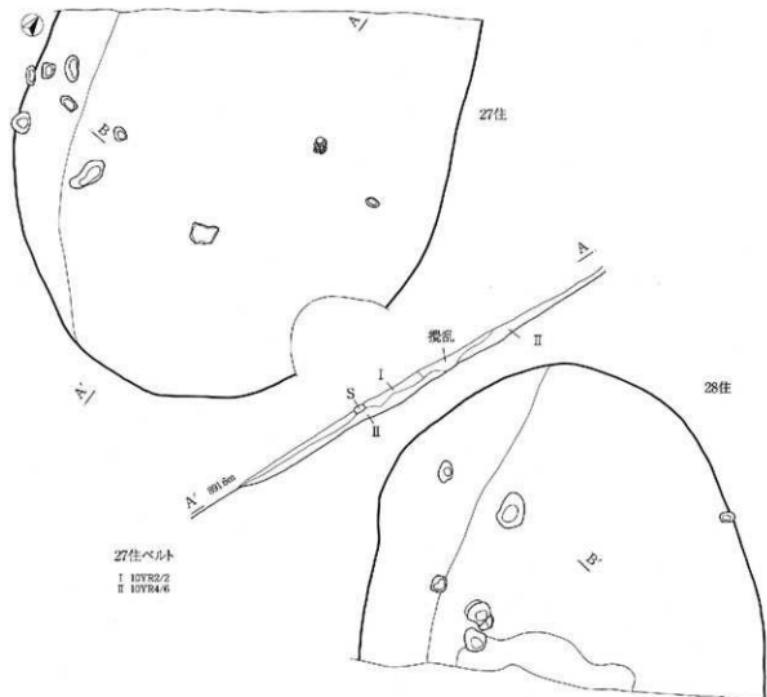
27号住居址は25号住居址北東側のP-7・8グリッドで確認されたもので南東側が28号住居と近接している。耕作による擾乱が著しく、ローム内までトレッシャーによる深耕の痕が残っていた。北側が調査区外となるため平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.1m以上を測れた。内部構造は西側に緩やかで僅かな壁の立ち上がりが認められるが周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴にな



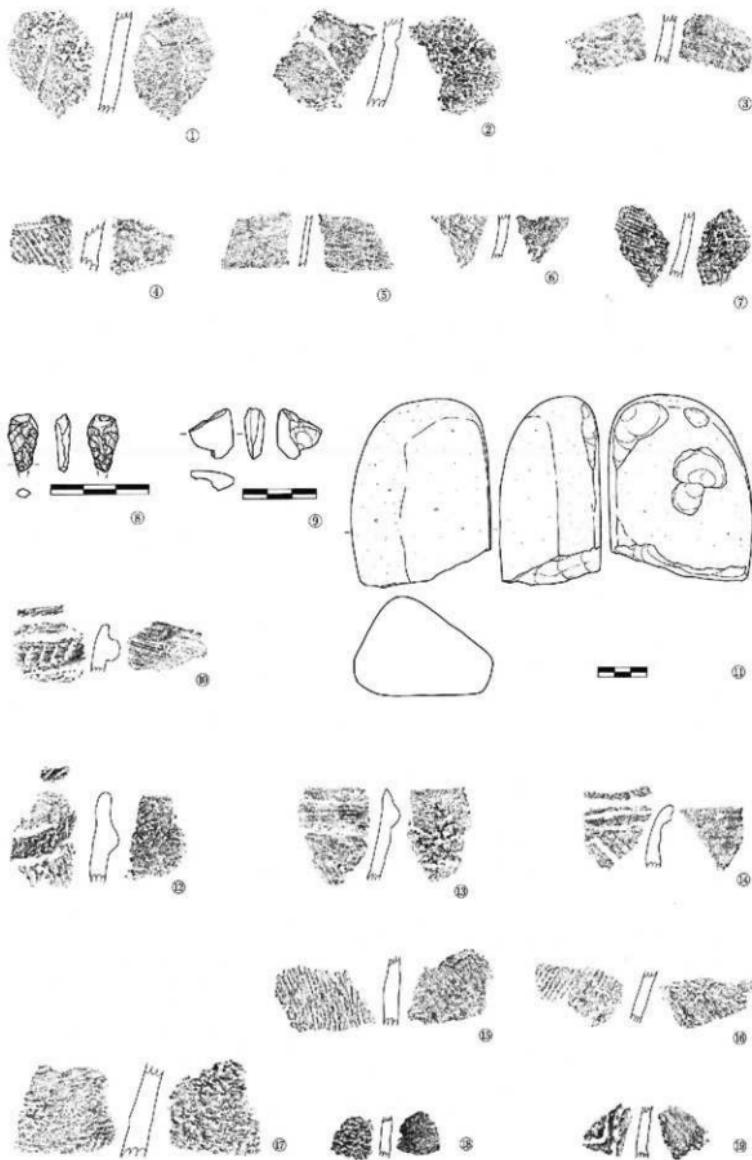
第39図 第26号・33号住居址(1/60)、同遺物(1/3)。



第40图 第26号住居址遗物(1/3)、④-⑮(2/3)



第41図 第27号・28号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



第42図 第27号・28号住居址遺物(1/3)、⑧⑨(2/3)

ると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土は検出されていない。遺物は中央やや東寄りから岡上器形復元できる薄手指頭片・真土器が出土している。

28号住居址はPQ-7・8グリッドで確認されたもので27号住居同様の擾乱と南側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径4.9m以上を測っている。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているが北西側で12cmの壁の立ち上がりを確認している。周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かってごく緩やかな傾斜を持ち、浅い皿状に窪み、検出状況は軟弱である。住居のほぼ中央付近、調査区外にかけて擾乱の穴があいている。焼土址は検出されていない。

遺物はいずれの住居からも上器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の土器片が出土しており、27号住居址からは、岡上器形復元以外で総重量は470gが、28号住居からは総重量は400gが出土している。石器は27号住居址から黒曜石の石錐と敲打痕のある磨石が出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

26. 第29号住居址（第43上図、図版39・10-①）

本址は28号住居址北東側のQR-7グリッドで確認されたもので南東側は調査区外となっている。耕作による擾乱が著しくローム内までトレッチャによる深耕の痕が残っており、焼土址も切られていた。このような状況で平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径3.5m以上を測られた。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土部が地床炉になる。遺物は焼土周辺より集中して出土しており、厚手で繊維を多量に含む土器と少量の東海系の土器片が出土しており、総重量は220gである。時期は早期末前期初頭に帰属しよう。

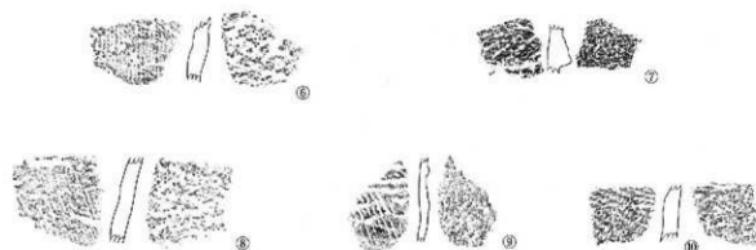
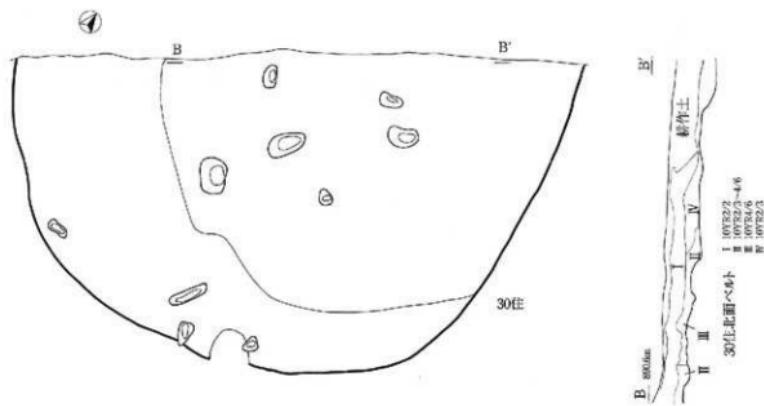
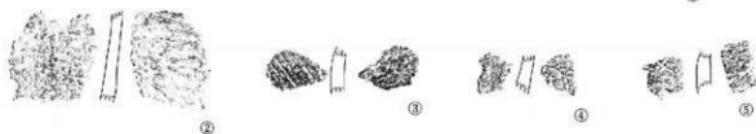
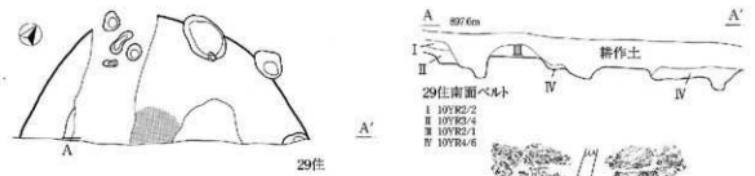
27. 第30号住居址（第43下図、図版40・10-①）

本址は29号住居址北西側のQR-6・7グリッドで確認されたものである。耕作による擾乱が著しくローム内までトレッチャによる深耕の痕が残っていた。平面プランは北西側が調査区外となるため把握することはできなかったが、検出時には長径6.9m以上を測られた。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるビットは検出されていない。掘り方は中央に向かって皿状に窪み、検出状況は軟弱である。焼土は検出されていない。

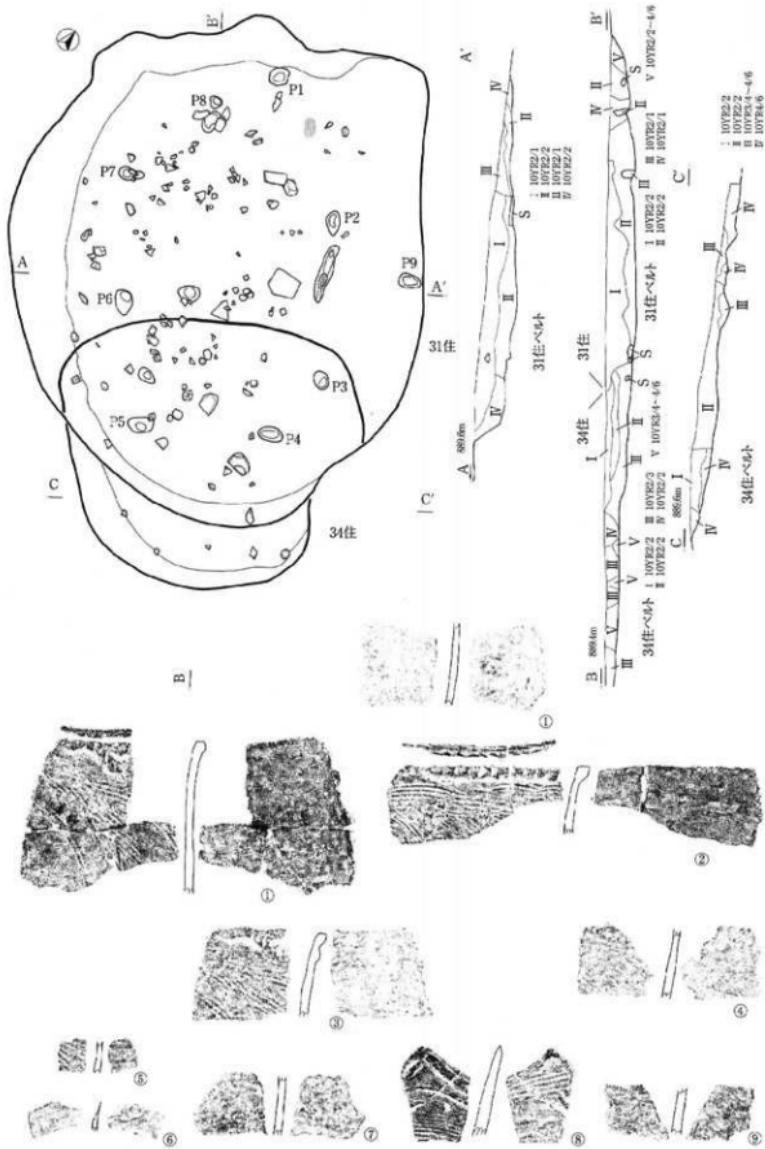
遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の土器片が出土しており、総重量は400gを測る。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

28. 第31・34号住居址（第44・45・46・47・48図、図版41・42・10-①）

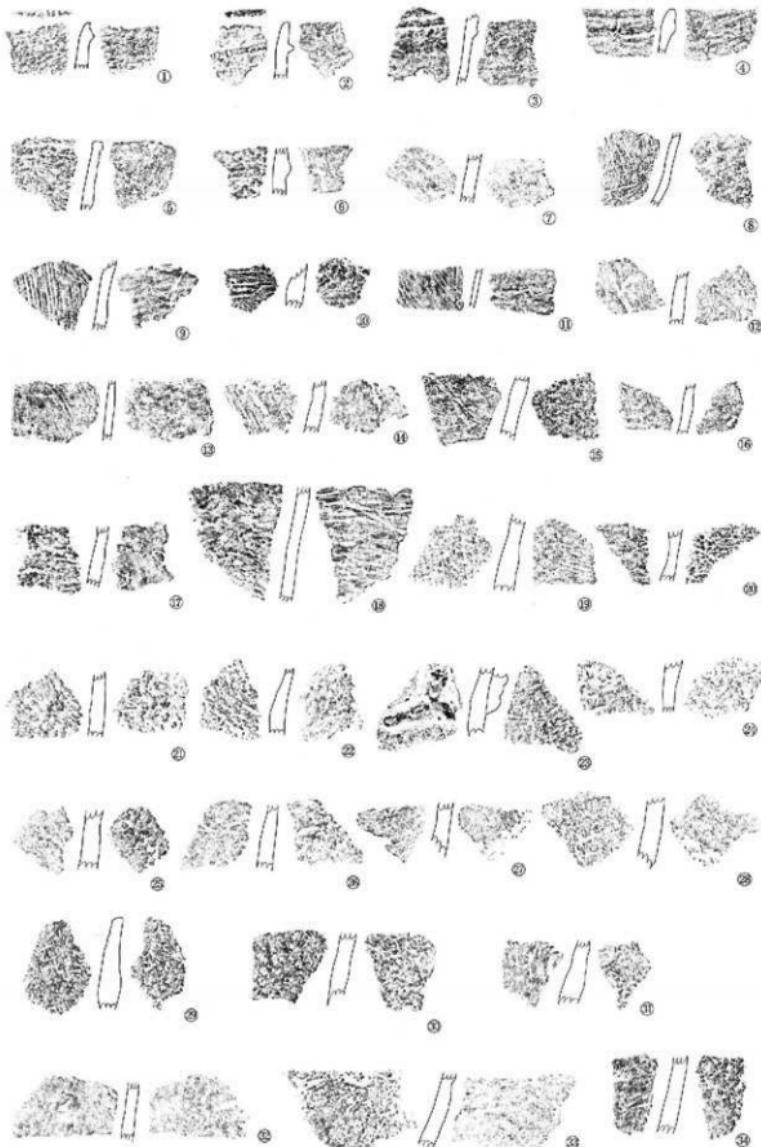
31号住居址は30号住居址北側のR-6グリッドで確認されたもので南東側が34号住居址と切り合っている。検出時には当初1軒の住居として調査を開始しようとしたが南東側が張り出したようになっていたため、断面観察用のベルトを十字ではなく半に設定した。本址は墓地脇で耕土も厚く他の住居に比べると耕作による擾乱は確認面まで及んでいなかった。調査を進めると2軒であることが判明し、新Ⅲ関係については34号住居址で出土した遺物のレベルが31号住居址より明らかに高く、34住南西隅の床とほぼ同じか上の高さから出土しているため本址が旧で上面に小形の34住が重複していると判断した。平面プランは長径6.30m×短径5.04m、長径方向はN-31°Wを示す歪んだ橢円形を呈す。壁高は最大38cmを測る。床は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝は遺存していない。明らかな主柱穴



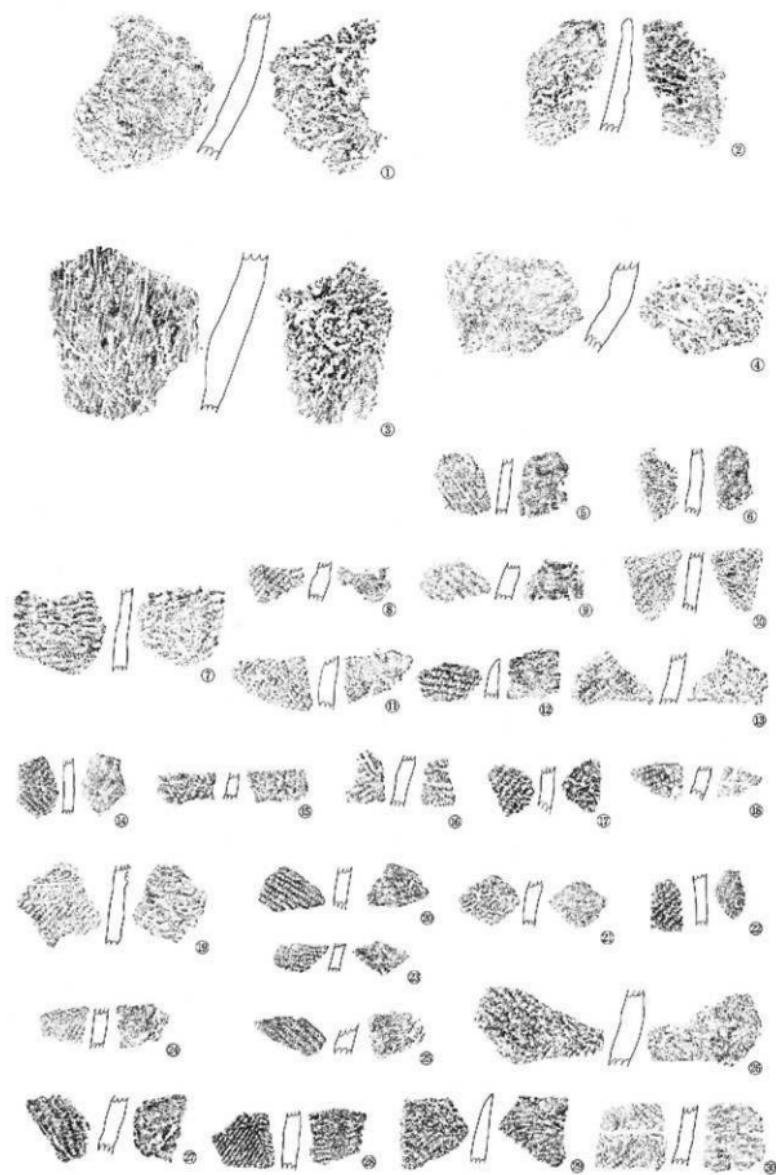
第43図 第29号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第30号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第44図 第31・34号住居址(1/60)、第31号住居址遺物(1/3)



第45図 第31号住居址遺物(1/3)



第46图 第31号住居址遺物(1/3)

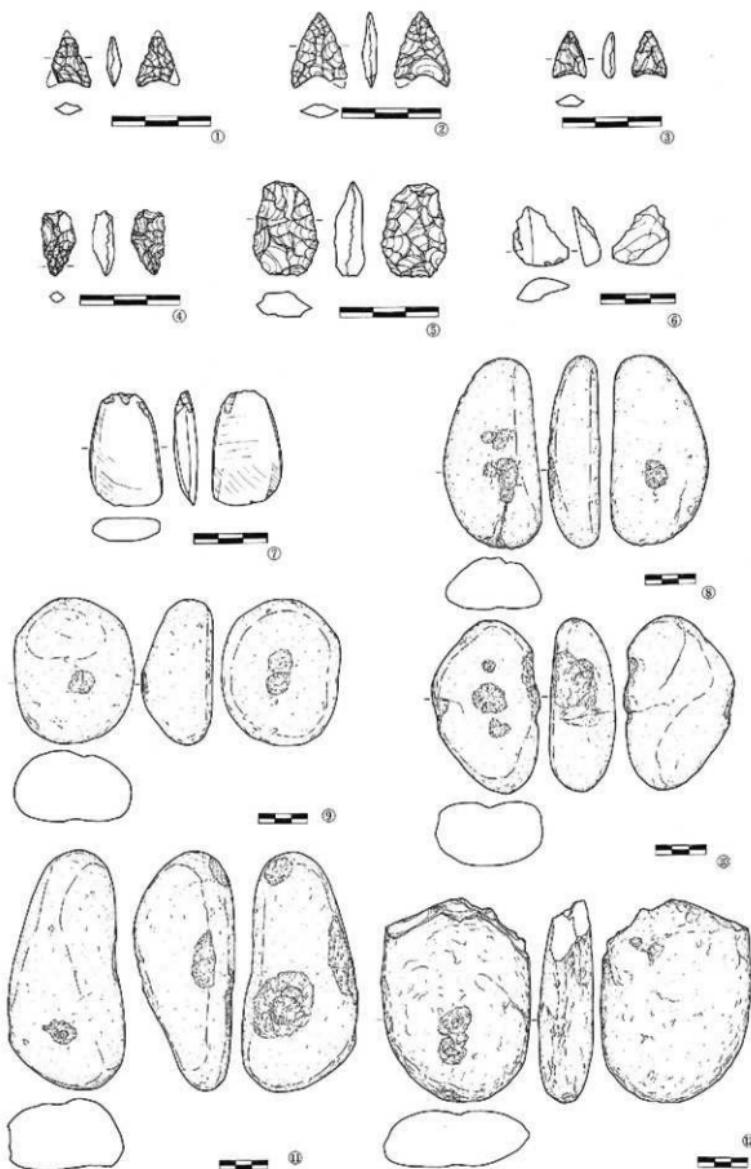
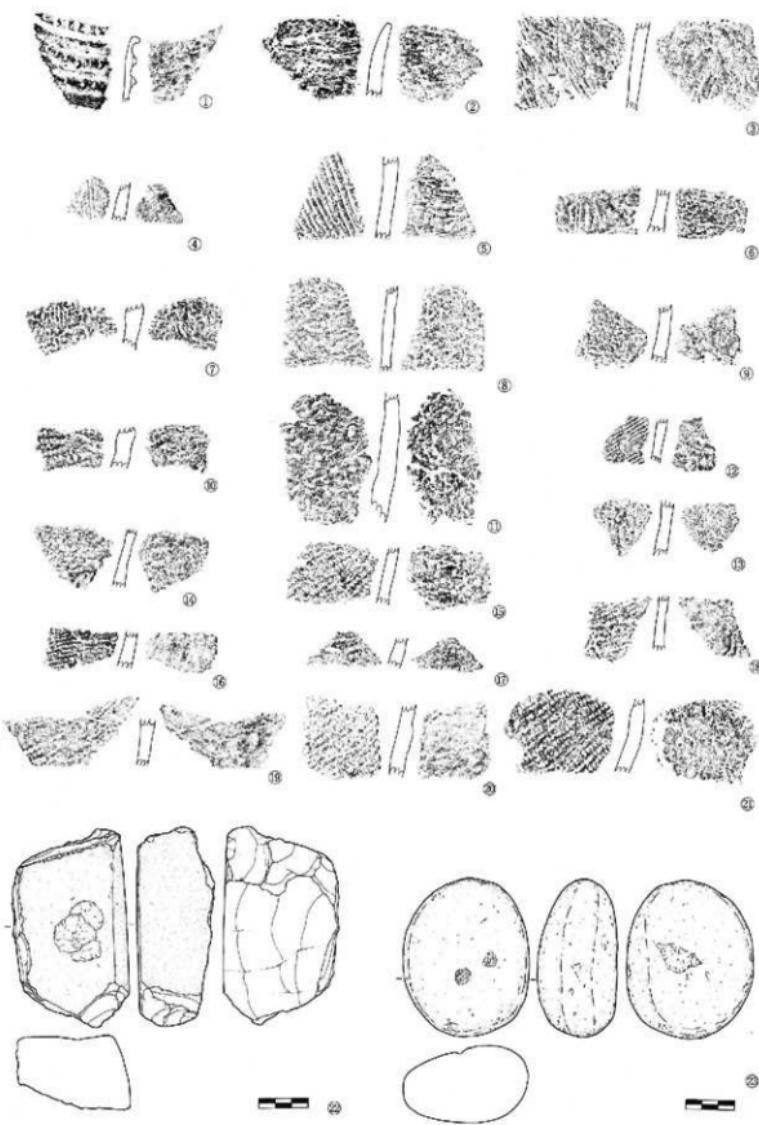


图47 第31号住居址遗物(1/3)、(8)(1/2)



第48图 第34号住居址遺物(1/3)

は検出されていない。柱穴になると思われるピットはP1、P2、P3、P4、P5、P6、P7、P8になると思われるがP2、P3、P4、P5、P9の壁下から底面にかけては西南西-東北東方向に亀裂の痕が検出されている。中央やや東寄りから平らな板状の礫が出土しているが擦痕は見られない。焼土址の検出はなかった。遺物は34号住居址北側の塙付近から北側の床に近い高さから多く出土しており、上器の総重量は3,600gが出土している。

34号住居址は31号住居址の上面に掛かって確認されたもので検出時の平面プランは長径3.78m×短径3.34mを測り、長径方向はN-70°-Eを示す。壁高は最大17cmを測る。床は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱で切り合い部分は明瞭ではない。周溝は遺存していない。明らかに主柱穴と判断できるピットの検出はない。焼土址の検出はなかった。土器の出土は前述のように34号住居址の床に近い高さからで総重量は800gを計る。

遺物は31号住居址から薄手で鄭状の器具で波状の文様を施した東海系の上器片や波状口縁で繊維をあまり含まない条痕文の土器片、口縁部に横走、輻走する陣帶を持つ繊維土器、厚手で繊維を多量に含む土器など多様な破片が出土している。石器は黒曜石の石礫、磨製石斧、凹石などが出土している。34号住居址からも同様の土器が出土しているが東海系の上器片は大幅に減り、前期初頭に属する土器が増えている。時期はいずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

29. 第35号住居址（第49上図、図版43-①②・9-①）

本址は18号住居址東北側のK-2・3グリッドで確認されたもので西側が芥沢遺跡を報断している市道により削り取られている。耕作による擾乱がロームまで達しているため検出できたのは床の一部分と竈の火床、床下土坑である。内部構造は壁や周溝が遺存していないため不明である。明らかに主柱穴になるとと思われるピットの検出もない。

遺物は灰釉陶器の皿が図上器形復元できているがほかに土器の高台付き壺、小形壺などが出土している

30. 第36号住居址（第49左中図、図版43-③・9-①）

本址は35号住居址東側のM-2グリッドで確認されたもので溝址2により切られている。耕作による擾乱は35号住居址より深いロームまで達しているため検出できたのは竈の火床底だけである。

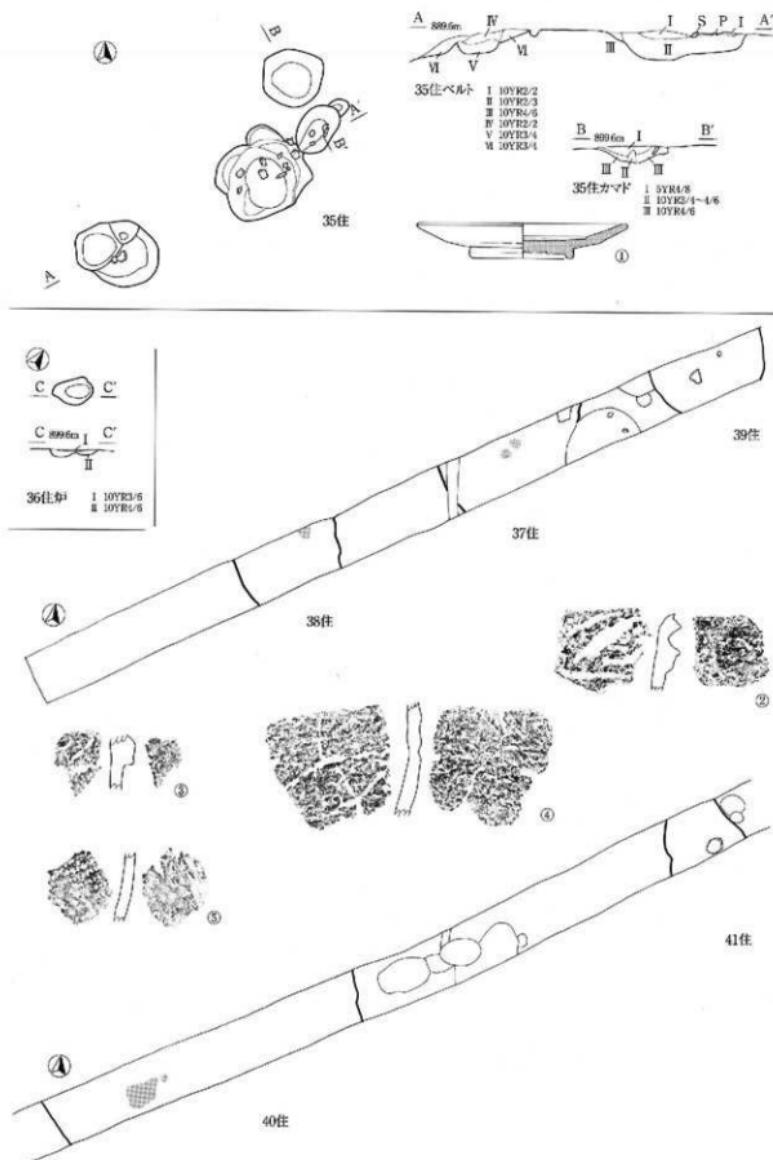
検出時以後に伴う作業では遺物の出土がなかった。但し、表土剥ぎの際に本址付近から平安時代の灰釉陶器碗、瓶頸部の破片などが出土している。

31. 第38号住居址（第49下図、図版10-①）

本址から、長野県教育委員会文化財・生涯学習課の指示により行ったトレンチによる遺構の確認調査で検出した住居址となるが保存地区内の調査のため作業を取り上げたのは時期決定の土器片だけで石器類はそのまま埋め戻してある。土器片を取り上げる際にもトレンチ外への拡張作業は行っていない。21号住居址北側のN-7グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.9m以上を測れた。北側の境界に掛かり焼土を検出しており、焼土付近から繊維土器が出土しており、重量は50gを計る。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

32. 第37号住居址（第49下図、図版10-①）

38号住居址北東側のN-6・7グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径4m以上を測れた。西側壁の立ち上がりは斜めにトレンチによる擾乱を受けており、東側も他の遺構により切られている。遺物は繊維土器の集中部が2個所あり、総重量は300gが出土している。平板状の繊維が調査区外に続いた状態で検出されている。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。



第49図 第35号・第36号・第37号・第38号・第39号・第40号・第41号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

33. 第39号住居址（第49下図、図版10-①）

37号住居址北東側のNO-6グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.9m以上を測れた。東側で炭化物が出土しており、平板状の割れた礫が確認されている。織維土器を1点確認しているが保存地区に統一しているため取り上げていない。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

34. 第40号住居址（第49下図、図版10-①）

39号住居址北東側のOP-5・6グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径8.3m以上を測っている。しかし東側は擾乱されているため、2軒となるか、焼土が見つかっている寄りを中心として規模が縮小する可能性もある。遺物は見つかっていない。

35. 第41号住居址（第49下図、図版10-①）

40号住居址北東側のPQ-5グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.2m以上を測れた。遺物は平板状の礫が南側から検出されているが土器は出土していない。本址は早期末前期初頭に帰属すると思われる。

第2節 焼土址

検出時に焼土が確認されたがロームまで達しておらず、内部構造の全容を把握するまでは至らなかった遺構を焼上址としているが住居址に伴う焼土と捉えられる可能性が無いとは言い切れない。

1. 第3号焼土址（第50図）

本址は2号住居址南東のM-9グリッドで確認されたものである。遺構検出時に焼土を確認したため住居として調査を開始したが焼土がロームまで達していないことから焼土址とした。床や棟も不明であるがローム漸移層で軟弱な面があり、図の輪郭線は特に軟弱な範囲を示す。

遺物は織維土器、東海系の土器小片と石器で黒曜石の搔器が出土しており、総量は107.1gである。

2. 第1・2・4号焼土址（第51上図）

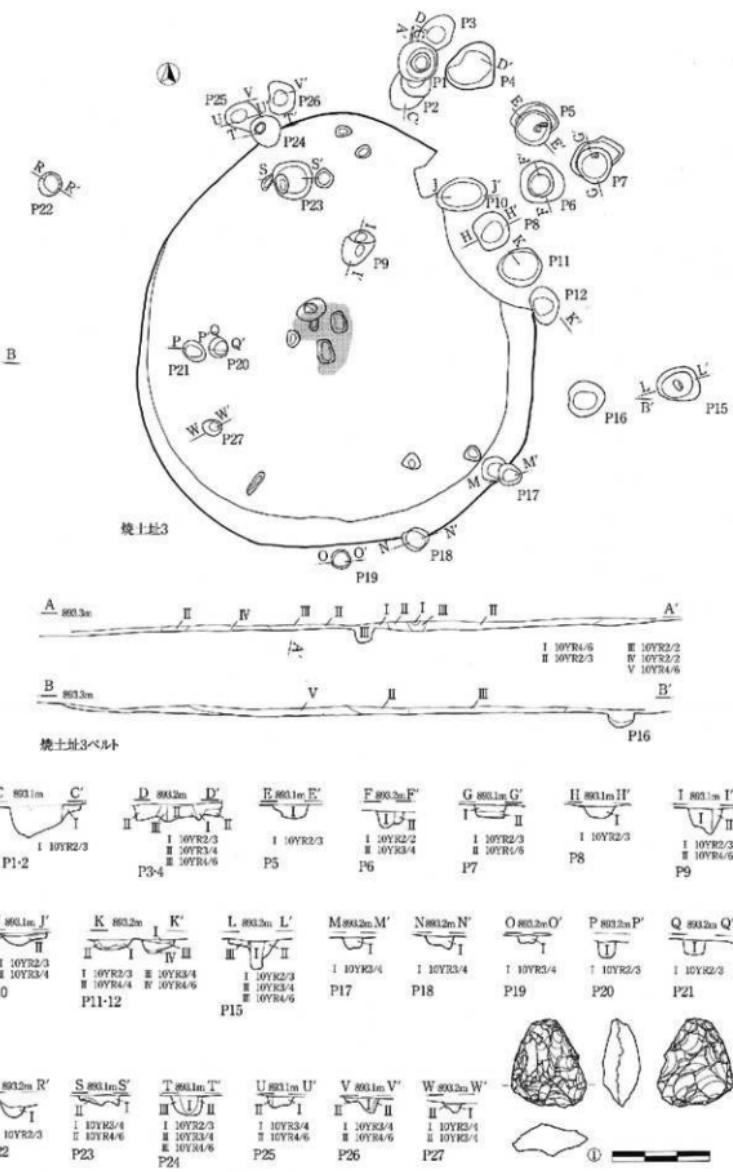
1号焼土址は2号住居址南西のL-9グリッドで確認されたものである。本址の西、約1.5mで開田に伴う切り土の崖となり比高差は40cmである。全体が耕作等により擾乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から47.5gの黒曜石が出土している。

2号焼土址は1号焼土址の東側、2号住居址寄りのL-9グリッドで確認されたものである。浅い掘り方があるが焼土はロームに達していない。全体が耕作等により擾乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から織維土器1点と黒曜石が53.9g出土している。

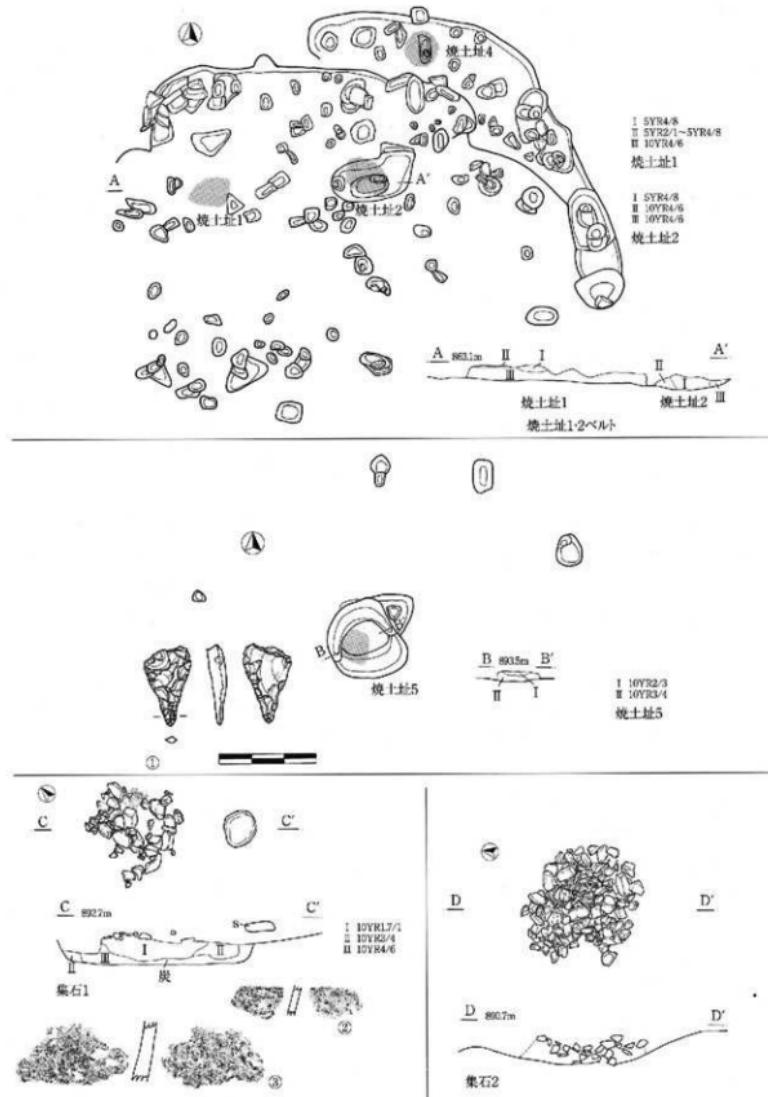
4号焼土址は2号焼土址北側のL-9グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により擾乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から薄手指頭圧痕細繩文土器と黒曜石が16.9g出土している。

3. 第5号焼土址（第51中図）

5号焼土址は3号住居址南のL-10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により擾乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から織維土器の小片と黒曜石が6.7g出土している。



第50図 第3号焼土址(1/60)、同遺物(1/3)



第51図 第1号・2号・5号焼土址(1/60)、同遺物(2/3)、第1号・2号集石炉(1/60)

4. 第6・7・8号焼土址

6号焼土址は1号住居址北西のK-10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により搅乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランは試掘の際にトレンチで切ってしまったため把握することはできなかった。周辺から織維土器の小片と黒曜石が6.7g出土している。

7号焼土址は3号焼土址南東のM-10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により搅乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランは南側が調査区外に統いているため把握することはできなかった。遺物の出土はない。

8号焼土址は2号住居址東のM-9グリッドで確認されたものである。耕作用道路と市道の取り付け部に当たり、全体が耕作等により搅乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。遺物の出土はない。

第3節 集石

芳沢遺跡を主構成する縄文時代早期末前期は屋外から屋内に炉が入ってくる過渡期にあたる。調査した住居にも地床炉を持つ家、持たない家があるが火を用いた調理施設の一種として集石炉が見つかっている。集石炉は赤変した拳人位の被熱破砕繖からなり本遺跡の場合2基検出されているがいずれも台地先端の肩に立地している。

1. 第1号集石炉（第51左下図、図版76-①②）

本址は7号住居址北、16号住居址西側で調査区のG-8グリッドで確認されたものである。集石炉の北西約2mの付近から開田により1.5mロームが削り取られていた。本址は水田の直下で検出したため構成する繖の上面には床上が食い込んでいる。重複関係を有している遺構はない。平面プランは長軸方向がN-42°-Wを向く長軸82cm、短軸82cmを測るが短軸側は約60cm幅で残りは集石炉を使用したときの移動によると見ることができる。被熱破砕を受けている影響で構成している繖の総数は47個である。繖は1層で検出されているため上部は削られてしまっている可能性がある。掘り方は皿状で繖との間には炭を含み、中心の20cm程の範囲では特に炭の量が多くなる。集石の南東側に30cm離れて台石状の河床繖がある。

遺物は南西側から厚手の織維土器と中から東海系の土器片が出土している。

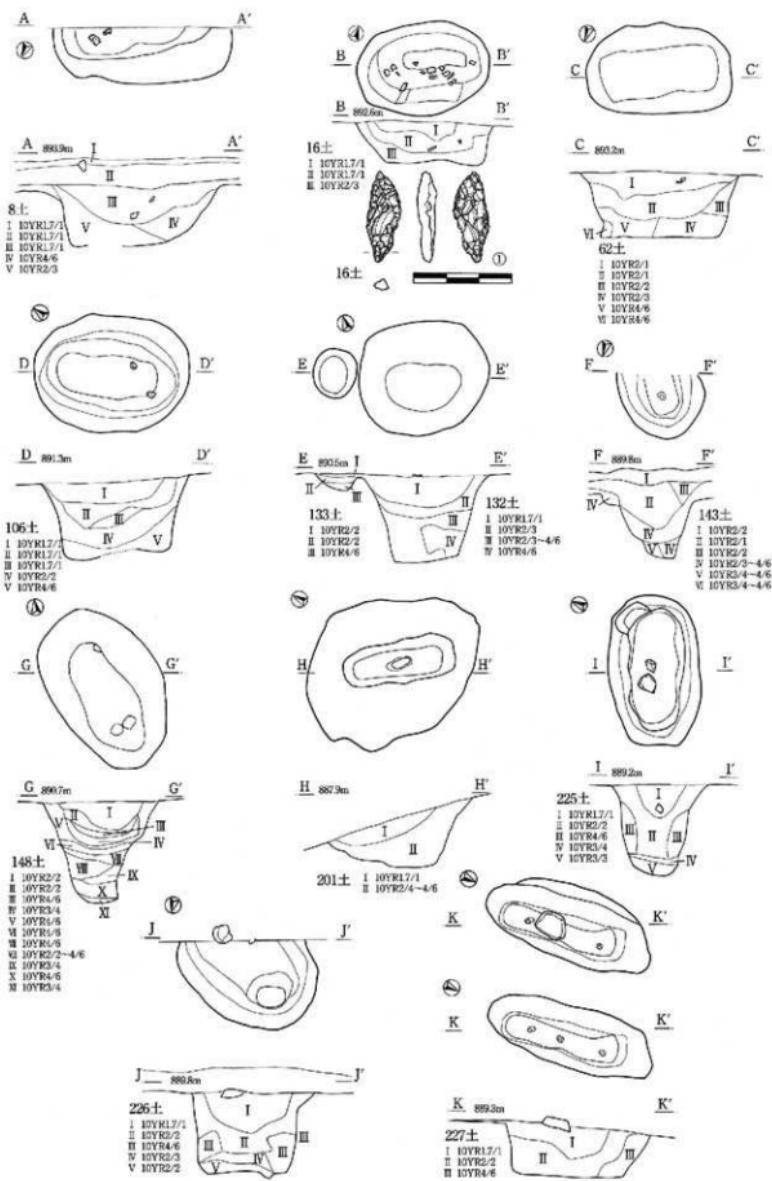
2. 第2号集石炉（第51右下図、図版76-③）

本址は18号住居址西側で調査区のG-4グリッドで確認されたものである。水田造成された平場と原地形の斜面との境に位置している。重複関係を有している遺構はないが、平面プランは長軸方向がN-11°-Wを向く長軸104cm、短軸102cmを測るほぼ円形で、被熱破砕を受けている影響で構成している繖の総数は195個である。繖は下側が膨らむ凸レンズ形を呈し中心部は3~5個が折り重なり3mm以下の炭化物少量が間に挟まっている。掘り方は皿状で坑底の中心は繖の最も厚く重なっている所から約30cm西側に寄る。西側の掘り方は斜面により削られている。

遺物は出土していない。

3. 第1号石圓炉（図版77）

本址は溝址2に接するL-2グリッドで確認されたものである。竈の火床の位置から判断すると床下まで削平されている36号住居址と重複関係があると思われる。平面プランは長軸方向がN-65°-Eを向く長軸58cm、短軸48cm、深さ16cmを測るほぼ円形で、坑底には平らになるように3枚の石を敷き、花弁状に上部



第52図 第8・16・62・106・132・133・143・148・201・225～227号土坑(1/60)

が閉形に石を立て巡らしてある。同様の遺構は隣の天狗山遺跡からも見つかっているが焼土、炭化物の検出はなかったため配石遺構としてあった。本址は内部から1.3cm以下の炭化物が見つかったことといずれの釋も被熱により赤変していることから炉と捉えた。

炉内から遺物の出土はなかったが炉西側で溝址Ⅱとの間から長さ11.1cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm、重量95.6gの狭長な黒曜石の剥片が出土している。

第4節 土坑

土坑としたものは人工的に上中に穿たれた穴の中で近世以後の金属製農耕具で掘られた穴を除き、形状、遺物の出土状況で設定している。整理番号は239番まで付しているが住居内の土坑で整理作業段階において住居に伴う施設と判断した土坑の出土遺物は住居址の出土遺物として図化してある。個々の土坑については巻末に一覧表としてある。

1. 落し穴（第46図、図版44～50）

形状から性格付けがなされている土坑に落し穴がある。茅野市における落し穴の考古学的研究は1965年と古く北山の城之平遺跡で宮坂英式が23個所の豊穴の発掘を行った。宮坂はこの豊穴を「落し穴」に該当するものと考察し、更に集団的な狩猟の存在まで指摘していることに始まる。近年の大規模開発に伴う発掘調査で市内の落し穴の様相については2006年守矢昌文がまとめている。

井沢遺跡で調査した落し穴は標高887～893mの間に11基あり、平面形は検出面が横円あるいは長円形になり、底面は上面を細長くした形状か隅丸長方形となり、円形あるいは隅丸正方形になる土坑は1基もない。壁面、底面はいずれも堅く結まっている。坑底まで最も深いのは第106号土坑で遺構検出面から157cmを測る。106号土坑は調査中に鹿が落ちた跡が残っており（図版46-②）、土坑の縁には脚を掛け逃げだした時に付いた蹄の痕（図版46-③）があった。本来はこの上に有機物の分解した暗褐色土が堆積していたため2m近い深さがあり、十分落し穴としての機能をもっていたと思われる。底面の長軸方向から北東～南西方に向長軸を持つ第8・62・16・225号土坑が1組、北西～南東方向に長軸を持つ第106・148・143・201号土坑が1組、この中間に東～西方向に長軸を持つ第132・226号土坑が1組となり、これに直交する北～南方向に長軸を持つ第227号土坑がある。坑底ピットは第143・201・227号土坑で検出されており、第132・225・226・227号土坑内からは獣に用いられたと思われる蹄が出土している。

2. 第9号土坑（第53図9土、図版51-①②）

本址は1号住居址北で試掘の際に確認されていた。K-10グリッドに位置し、台地中央の頂部に近い付近に占地する。本址と重複関係を有している遺構はない。平面プランは長径方向がN-26°-Wを向く長径1.15m、短径1.07mのほぼ円形を呈する。掘り方はしっかりとおり、壁は直線的に外反する形で立ち上がり、深さは確認面より16cmを測る。坑底は微妙に中央部が陥むが、全体的には平坦で堅硬である。土層の状況は：覆土は4層に分層でき、I、II層は後からの掘削によるものである。遺物が出土したのはIII層の底面付近からで粒子は細かく結まりがあり強い粘性を有し2mm以下のローム粒子を全体に含む黒褐色土で3mm以下の炭化物少量を含んでいる。出土しているのはいずれも緑色岩の石器類で打製石斧の刃部1点と剥片2点である。その状況より人為的に埋め戻しているものと捉えられる。緑色岩による石器（図版83）は本址を中心とするJK-10・11グリッドを中心とする範囲から出土している。石器の特徴として剥片、礫を刃部調整までしていく使用痕がほとんど認められず後は鋭いが表面は風化している石器類が多い。形状として定形を

持つのは本址出土の基部で折れている打製石斧の刃部（第53図9上④、図版83最上段左から2番目）がある。

3. 第54号土坑（第55図54土、図版55-②）

本址は調査区のIJ-11グリッドで確認されたものである。台地の西側肩に近い範囲に占地し、南東側に12号住居址が近接する。切り合いはなく、平面プランは長径方向がN-44°-Wを向く長径2.20m、短径2.05mの長楕円形を呈する。土坑の掘り方はしっかりとおり、上がりは垂直に近い形で立ち上がり、深さは確認面より26cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪む傾向が認められるが、全体的には平坦である。

遺物は降帯付き条痕文土器、東海系の土器片が出土しており、焼土の検出はなかったが住居の可能性もある。本址は出土している土器から早期末期に帰属しよう。

4. 第189・190号土坑（第60図189・190土、図版73-②③、74-①②③）

189号土坑は東端調査区のX-2グリッドで確認されたもので北東に延びている台地支脈の瘦尾根頂部から僅か南東側に傾斜し始める斜面に占地し、東側は190号土坑と切り合い、周辺には北側に第191・223号土坑、東側に第192・224号土坑、西側に第188号土坑等、同じ形状の群として捉えられるような土坑が集中する。

本址と190号土坑の底面には地割れの痕（図版74③）が残されている。重複は切り合っている所にちょうどピットが位置するため新旧関係は不明である。2基の土坑底に残されている地割れは西北西-東南東方向に走っている。芥沢遺跡と同じ金沢地区内にあり約2.5km北側に離れている阿久尻遺跡から見つかった地割れがほぼ同方向に走っている。これについては平成5年度刊行されている報告書で松島信幸、寺平宏が分析の結果、地震による開口地割れで、発生を6,300~6,500前の縄文時代前期としている。土坑調査による切り合いは不明であるが地割れ溝による段差は坑底ではなく、土坑の形状も歪んでいないことから地割れの発生は本址形成以前であることは間違いないであろう。

遺物の出土はなかったが土坑下の斜面から寛永通宝と文久永宝が1枚ずつ出土している。

第5節 溝址

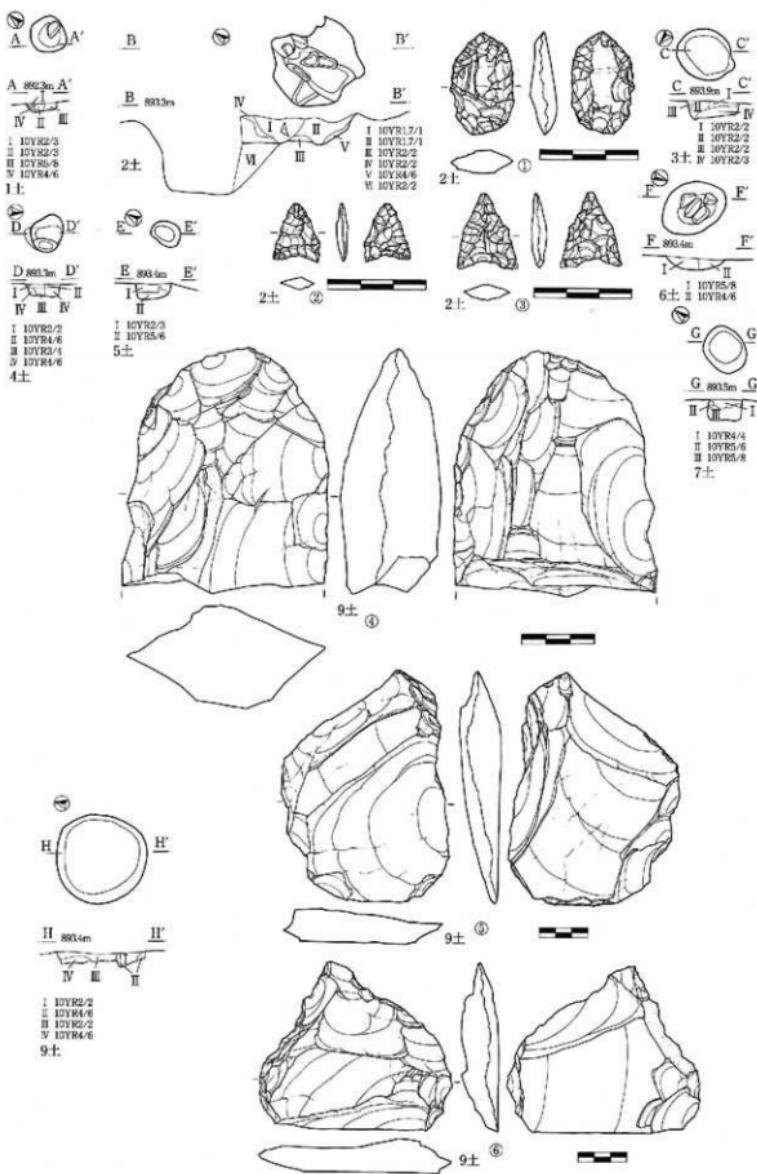
溝址は各年度調査区でそれぞれ1本、計2本を検出している。いずれも南東-北西方向で中野沢川に直交するように見つかっており、これは遺跡内を縱断する市道と同じ方向である。

1. 第1号溝址（第62・63左図、図版78）

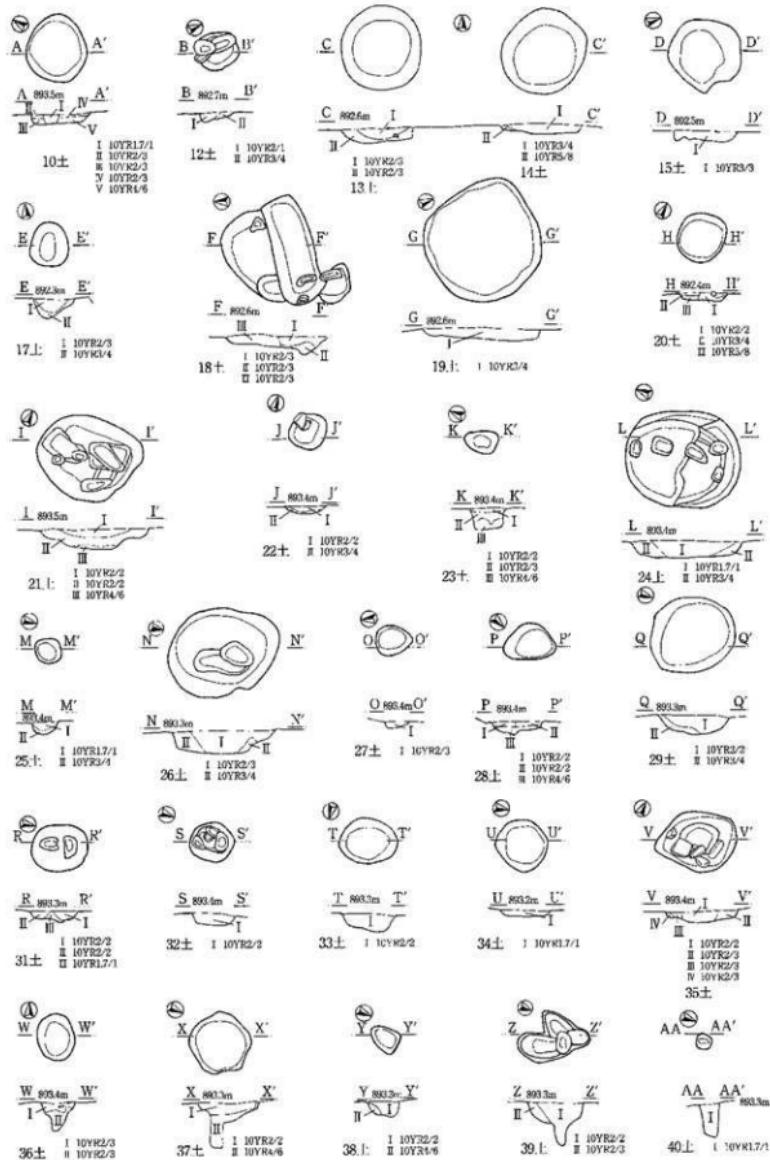
本址は平成15年度調査区のK-8、K-7、J-7、J-6、J-5、J-4、I-3、I-2、II-2グリッドで断続しながら確認されたものである。この溝は1989年調査の溝址1の続きで、今回の調査ではJ-4グリッド内に該当する。検出した始点は切り合い関係にある10号住居址北西側で17号住居址の東側、耕作による攪乱が著しい21・19号住居址西側に接し、走行方向はN-22°-Wで東側に最大7m程湾曲しながら所々で複列になっている。長さ66m、最大幅はI-3グリッドの複列部で2.4m、単列ではJ-6グリッドで1.8m、深さは25cmを測る。遺物は縄文時代早期末期、中期初頭の土器、15~16世紀の内耳土器、18世紀前半の灰釉陶器製塼の一部を含む江戸時代以後の多様な陶磁器の片断と調整痕のある石器が出土している。

2. 第2号溝址（第63右図）

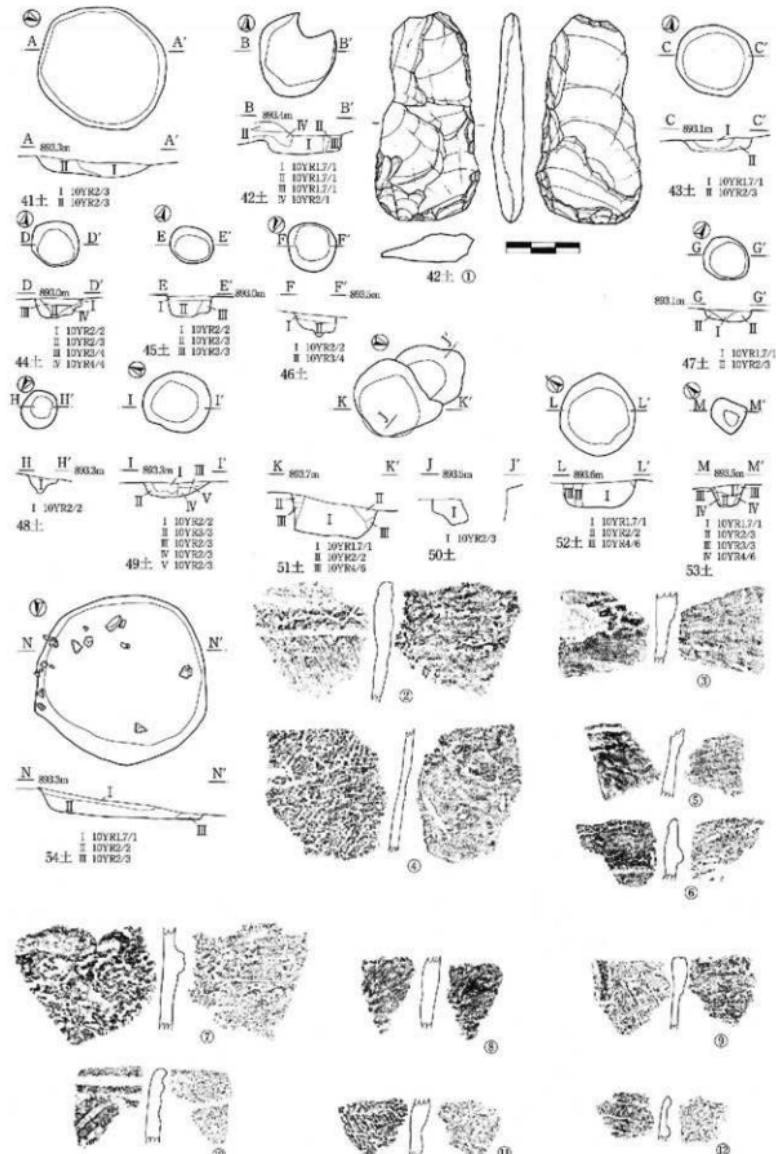
本址は平成16年度調査区のL-2、L-1グリッドで確認されたものである。検出した始点は調査区内であるが保存区内に続いている可能性は高い。16年度の南西側の調査区は続きになる周辺が耕作による攪乱が



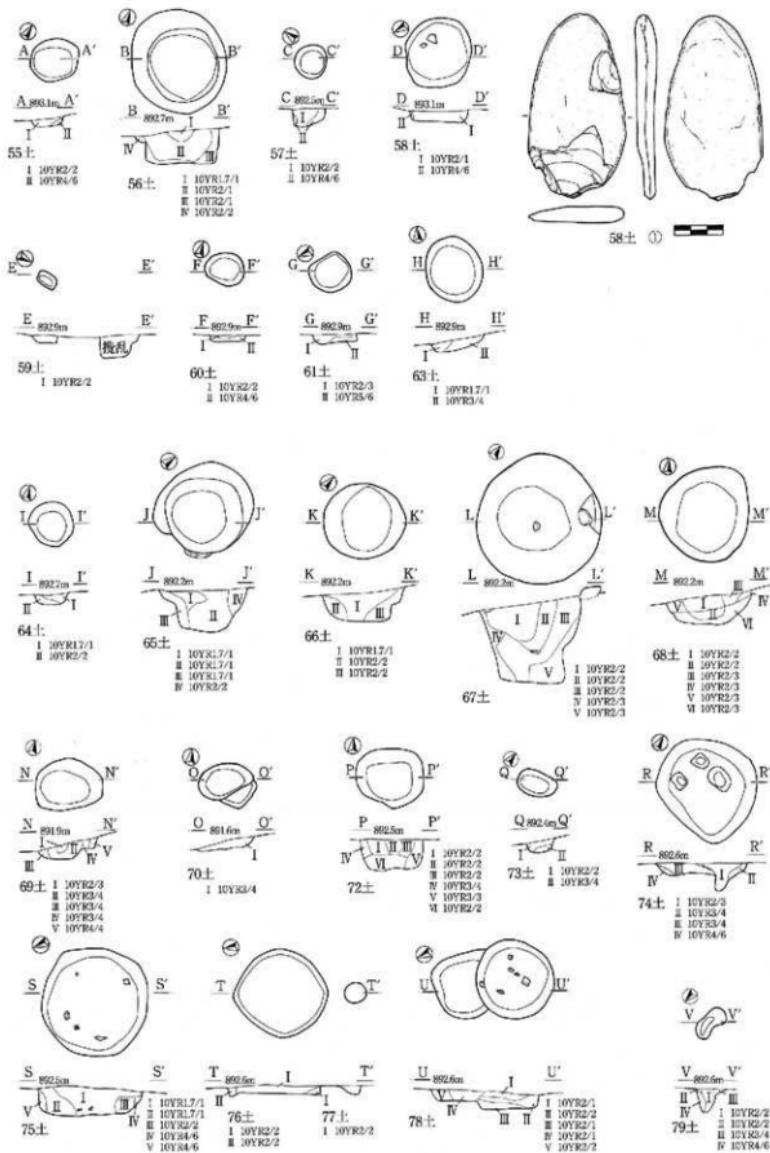
第53図 第1～7・9号土坑(1/60)、遺物①②③(2/3)、④(1/2)、⑤⑥(1/3)



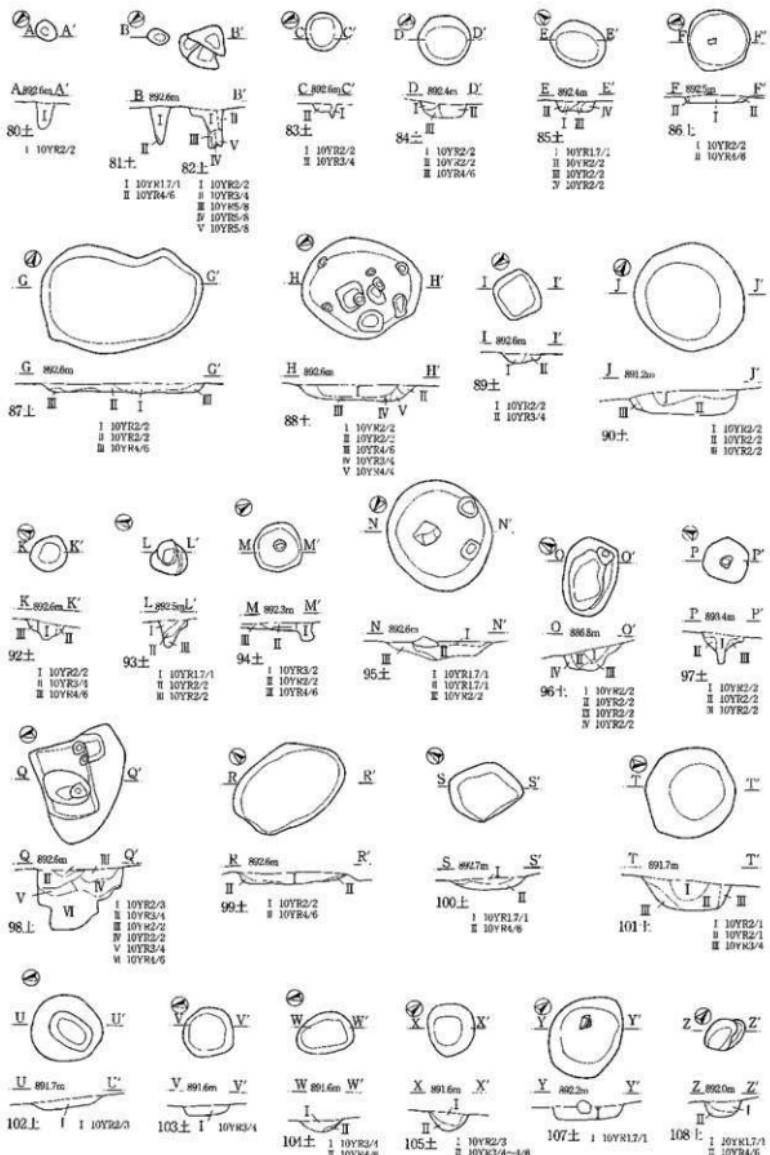
第54圖 第10-12~15-17~29-31~40號土坑(1/60)



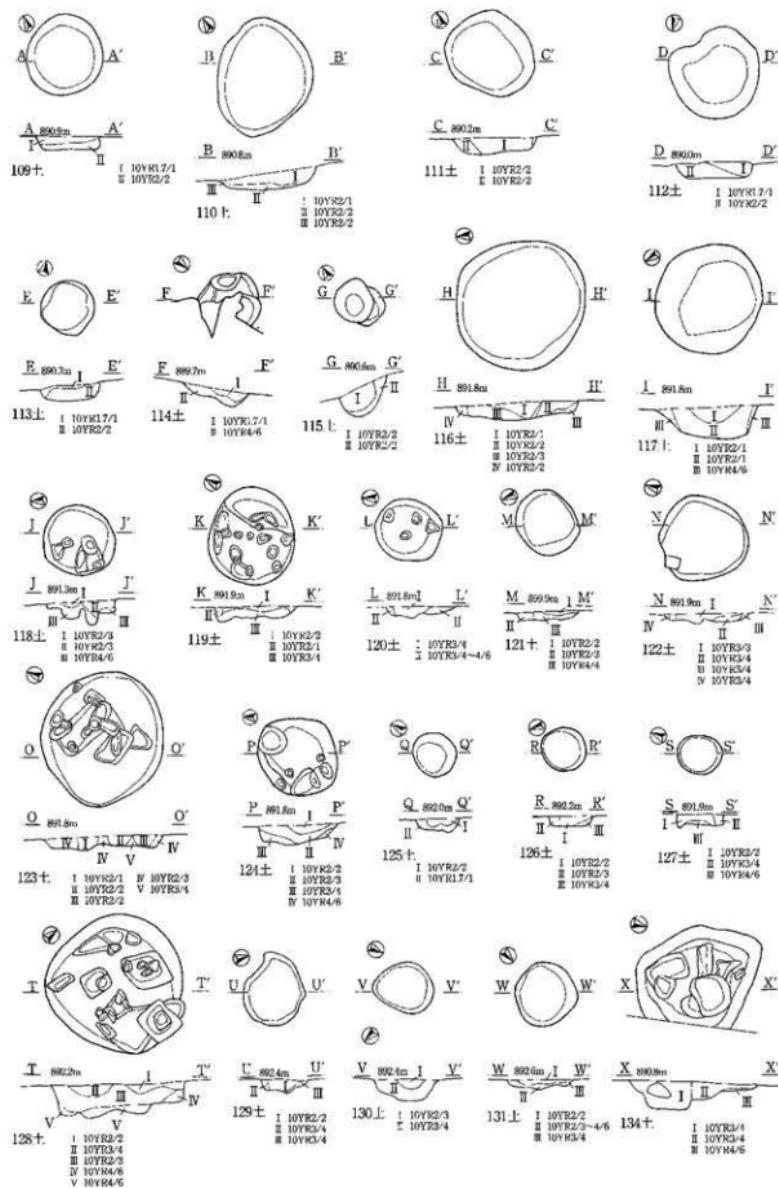
第55圖 第41~54号土坑(1/60)、遺物(1/3)



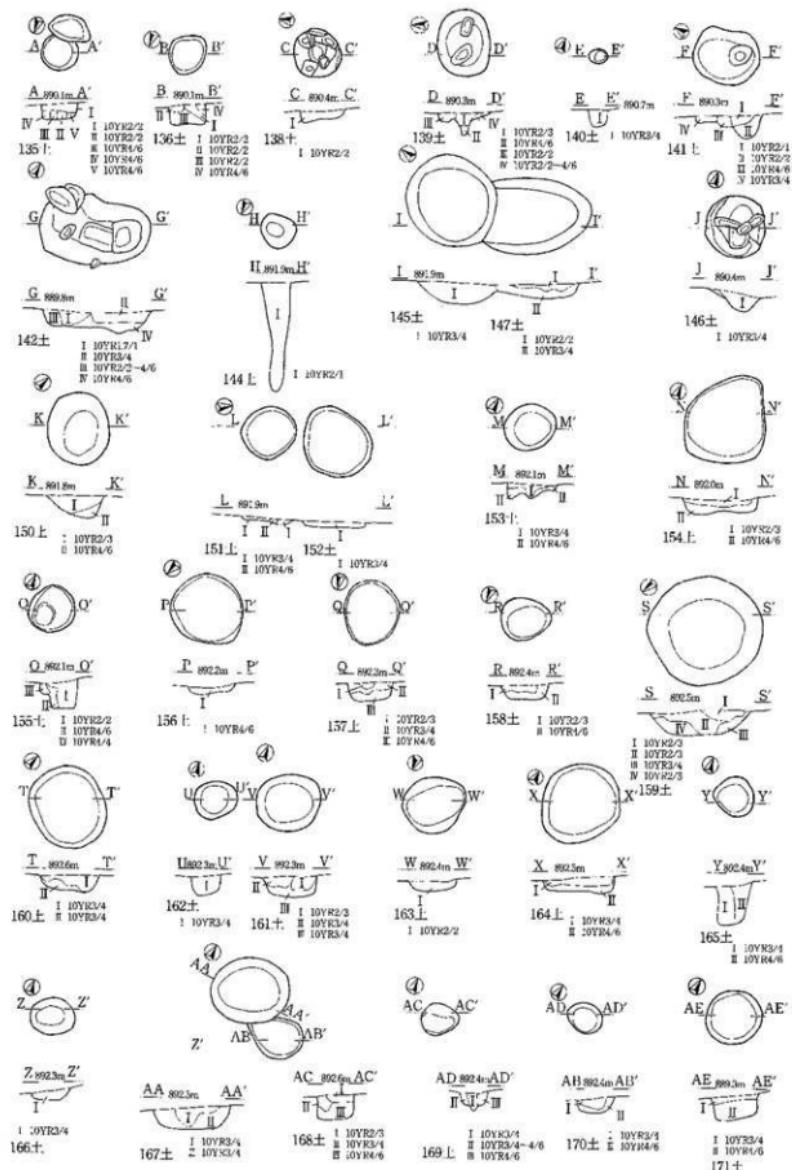
第56図 第55~61・63~70・72~79号土坑(1/60)、遺物(1/3)



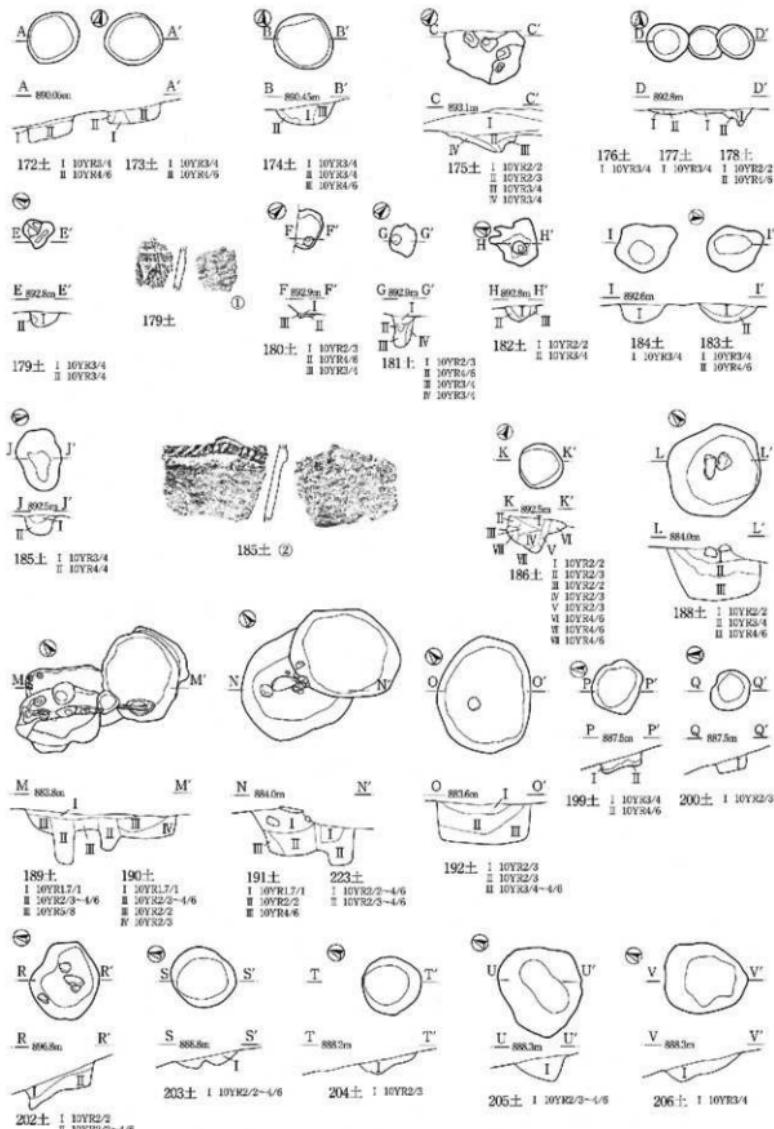
第57図 第80~90・92~105・107・108号坑(1/60)



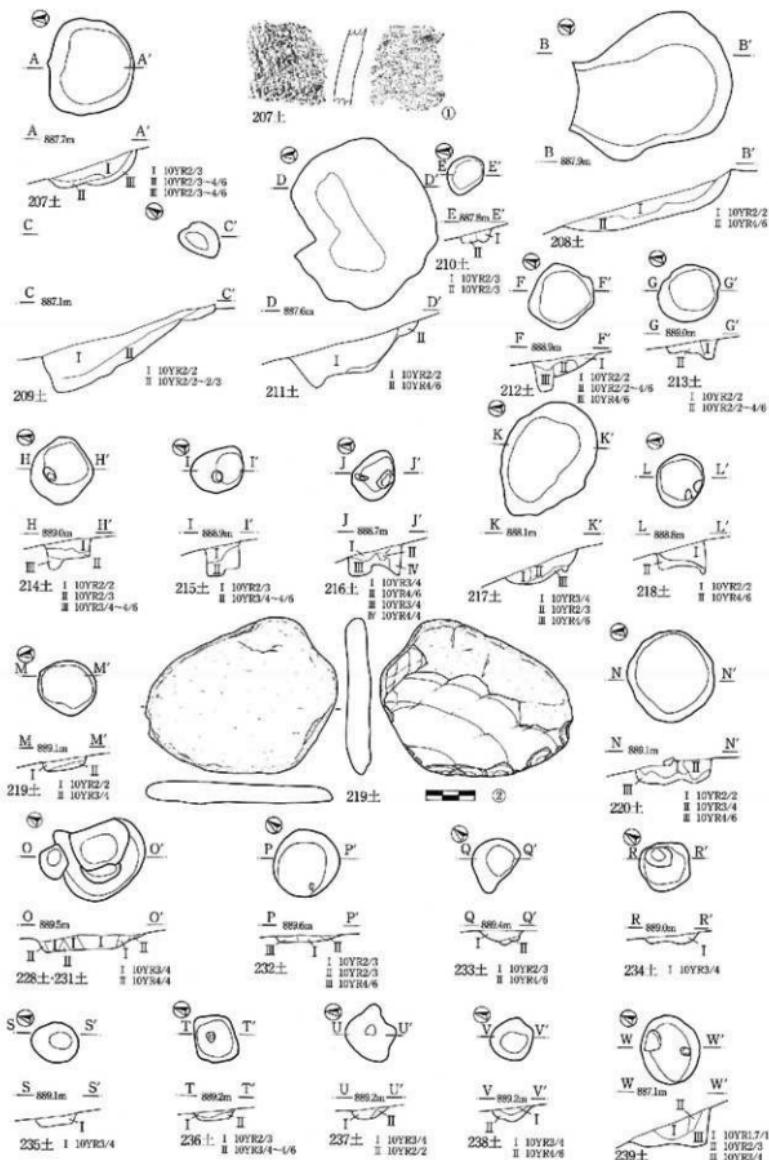
第58図 第109~131・134分土壤(1/60)



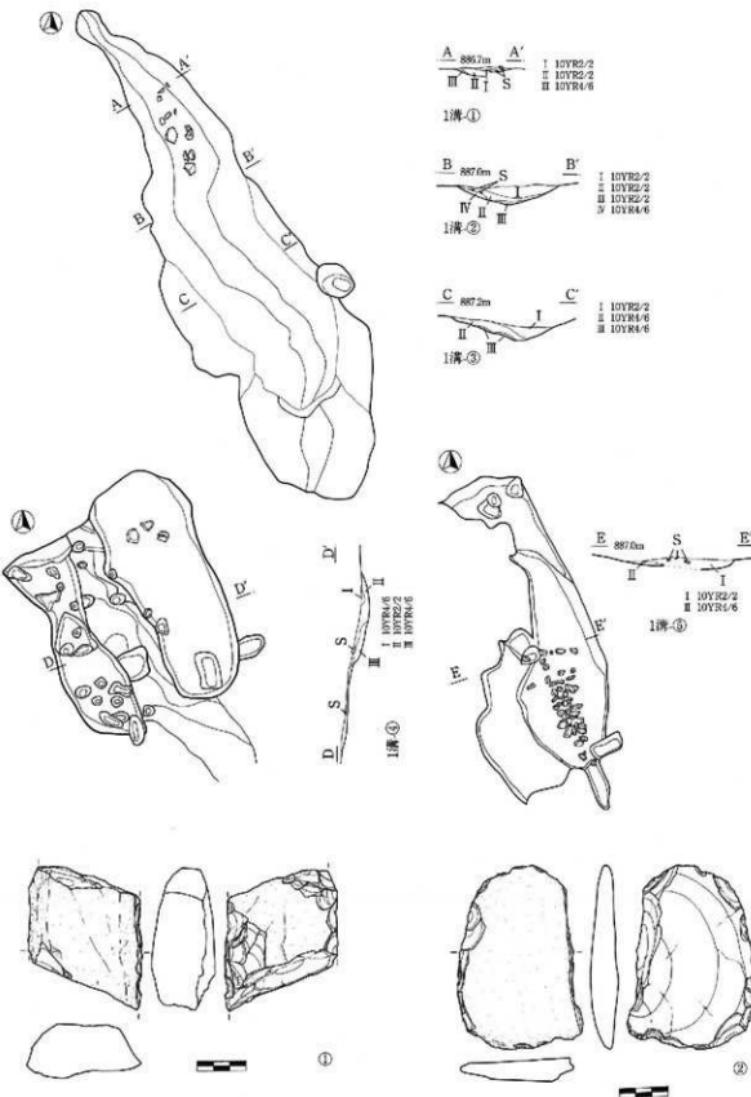
第59圖 第135·136·138~142·144~147·150~171号土坑(1/60)



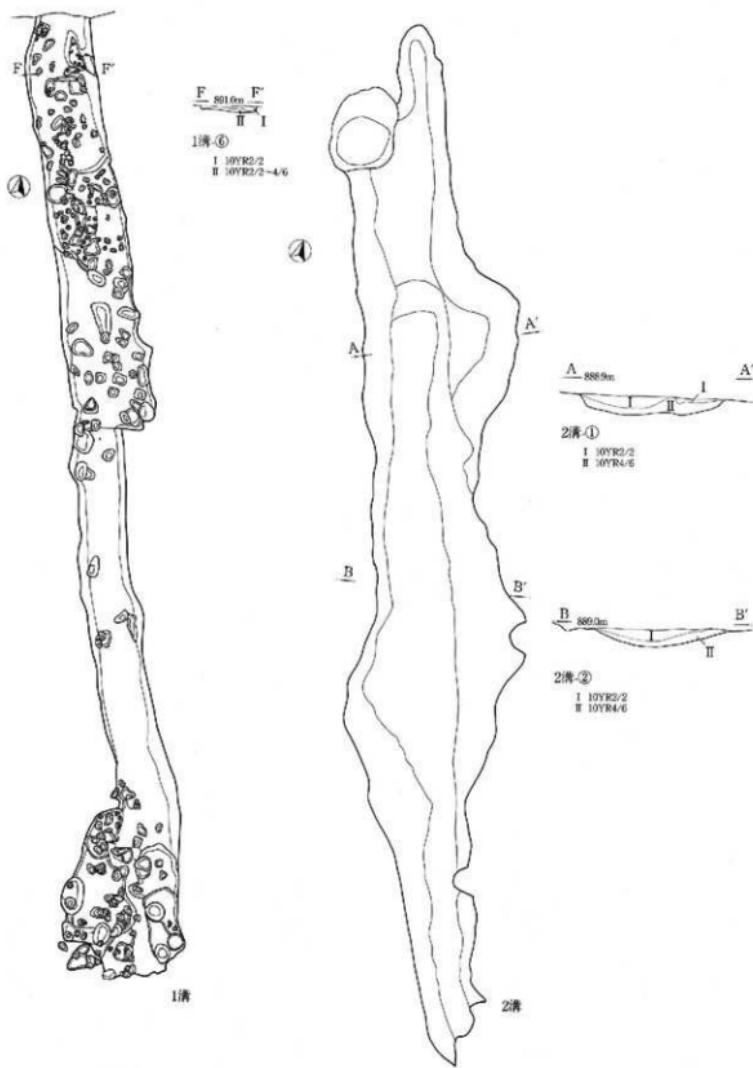
第60圖 第172~186~188~192~199~200~202~206號土坑(1/60)、遺物(1/3)



第61図 第207~220・228~239土坑(1/60)、遺物(1/3)



第62圖 第1號溝址(1/60)、同遺物(1/3)



第63圖 第1號溝址(1/120)、第2號溝址(1/60)

著しいため確認されてはいない。走行方向は N-25°-W で僅かに蛇行している。長さ12.7m、最大幅は1.9m、深さは26cmを測る。遺物は縄文時代早期末前期の土器が出上している。

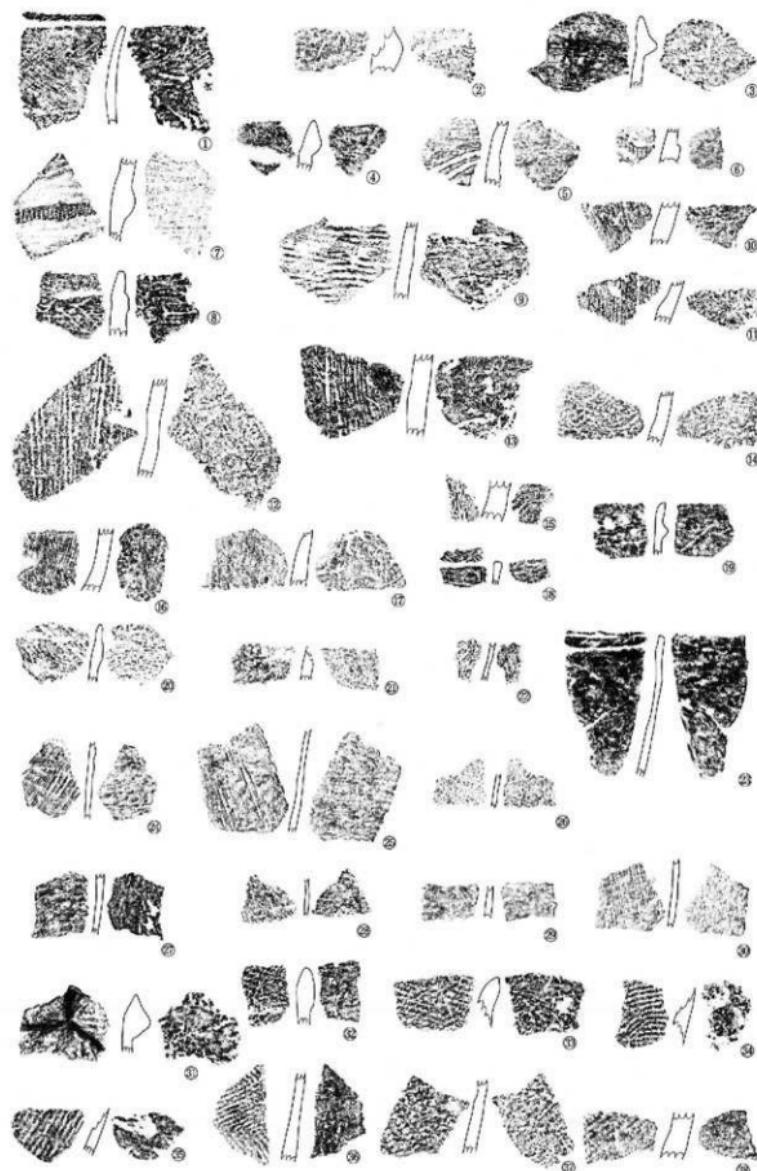
第6節 断層（図版79②③・80）

調査区内で断層に伴う破片帶とロームの境を1-14、E-6、E-4グリッドのラインで西側に湾曲しながら検出し、F-12、E-6グリッド間ではこれに伴う谷地形を検出した。谷にトレンチを入れて断面の観察を行ったが底面は平らで礫層になっており、覆土は強い圧力で碎けた礫、及びその転石と砂からなる。本事の際、調査区外西側で立合を行ったが水田の床上を剥ぐと全面が同様の礫層で検出境界から約100m離れた西側の山裾までこの状態が続き、山裾には厚さ1m程度で灰白色の粘土層が断層方向に続いている。

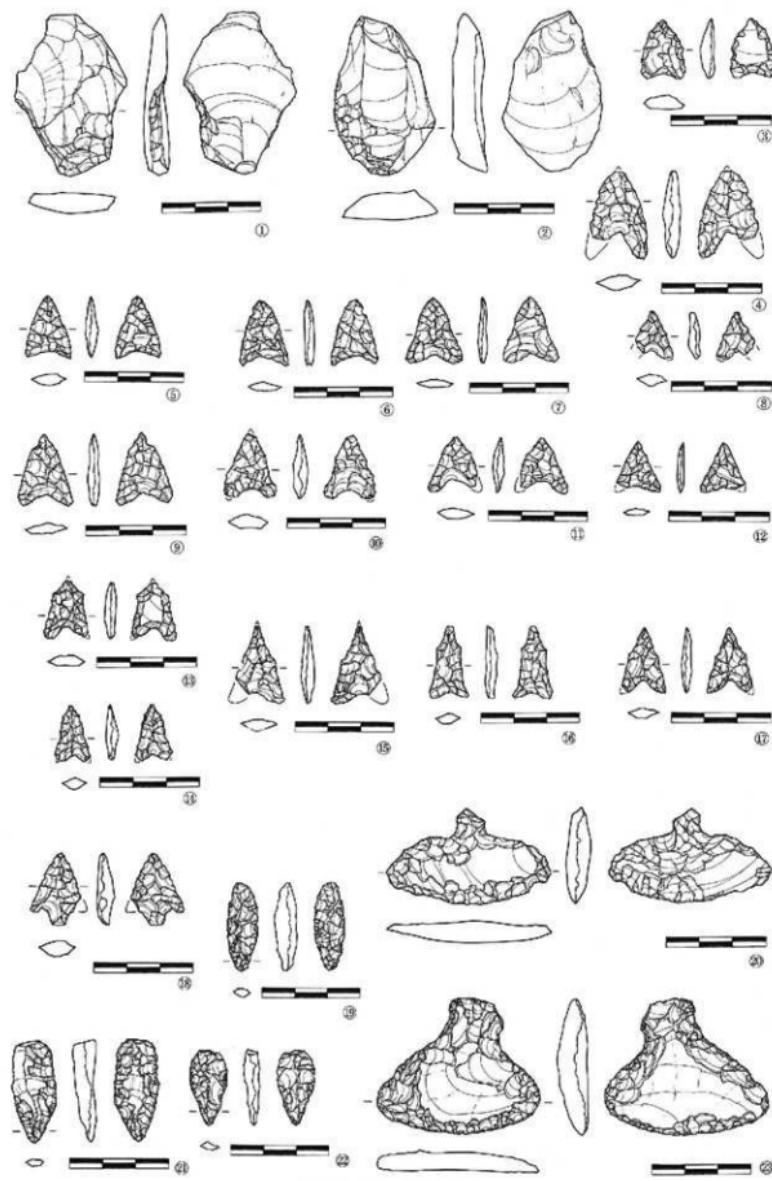
礫層内から遺物の出土はないがH-15グリッドで水田床土と礫層の境界から乳棒状磨製石斧の基部が1点出土している。

第7節 その他

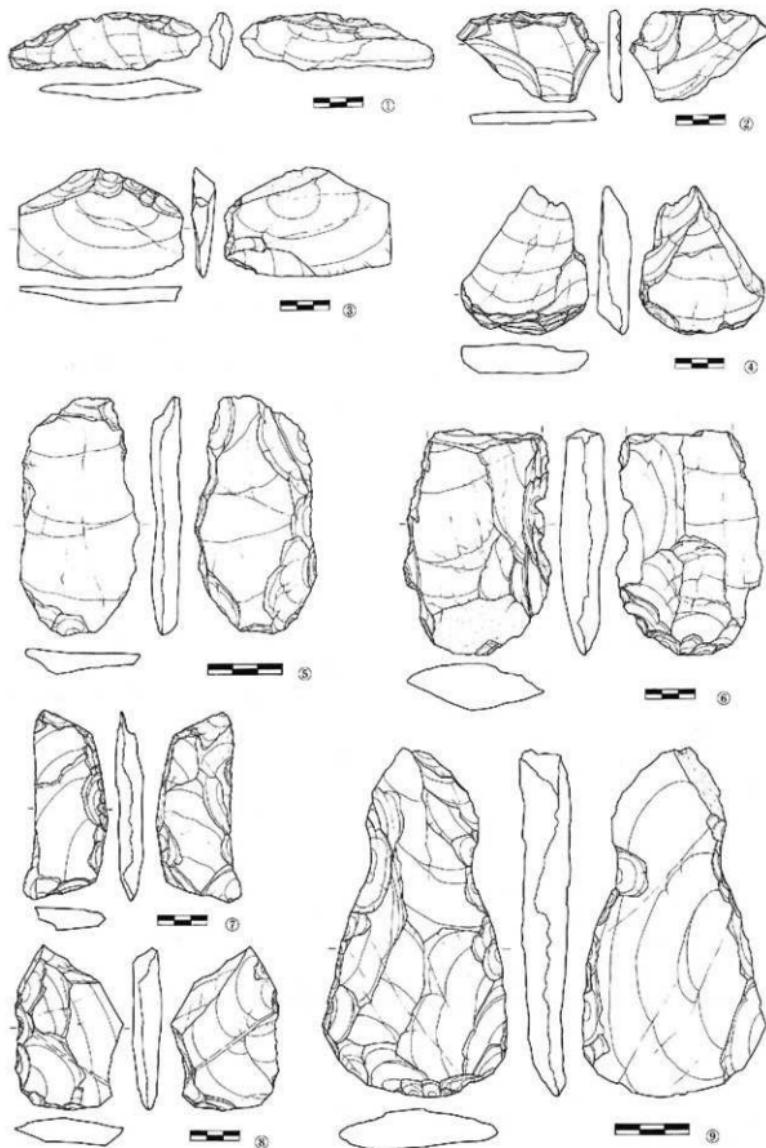
J-11グリッドの擾乱部から旧石器時代後期のナイフ形石器（第65①図）が出土したため出土地点を中心にして10m四方の深堀を平成15年12月8～10日の3日間にわたって実施した。深さはローム検出面から平均50cm下げたが遺物は黒曜石細片も出土することがなかったため、礫層には達しなかったが検出作業を終了した。



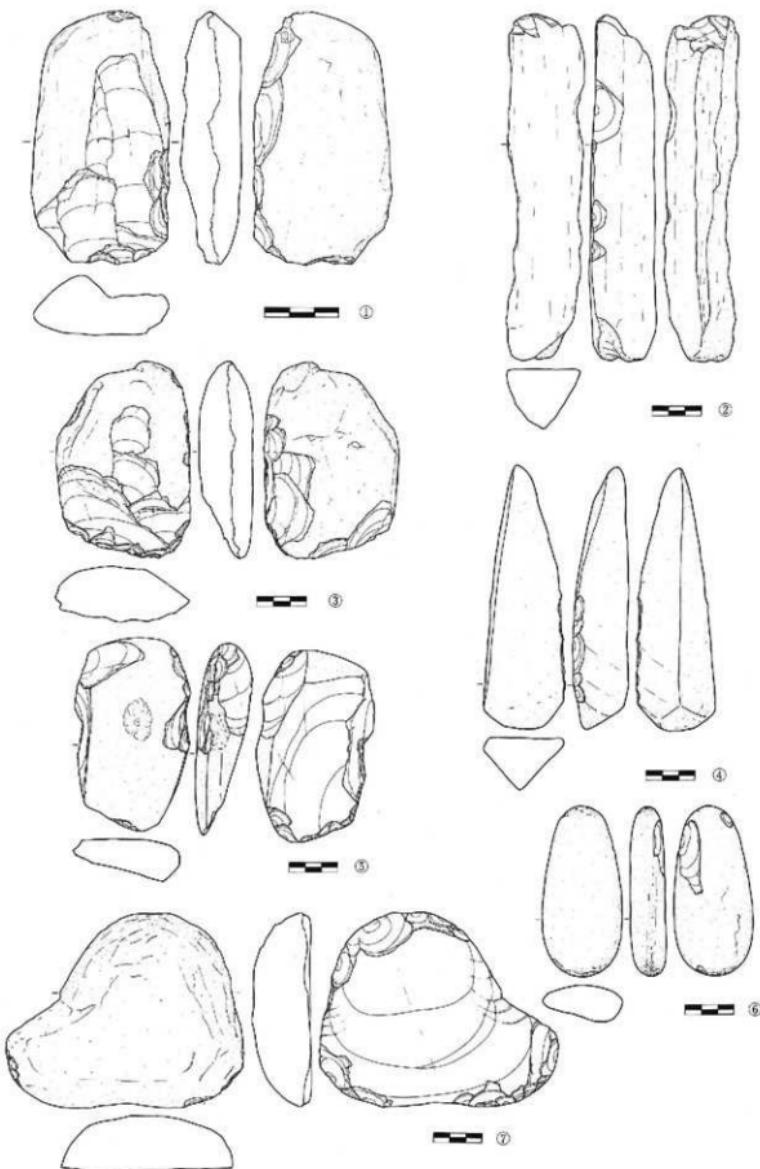
第64図 グリット遺物(1/3)



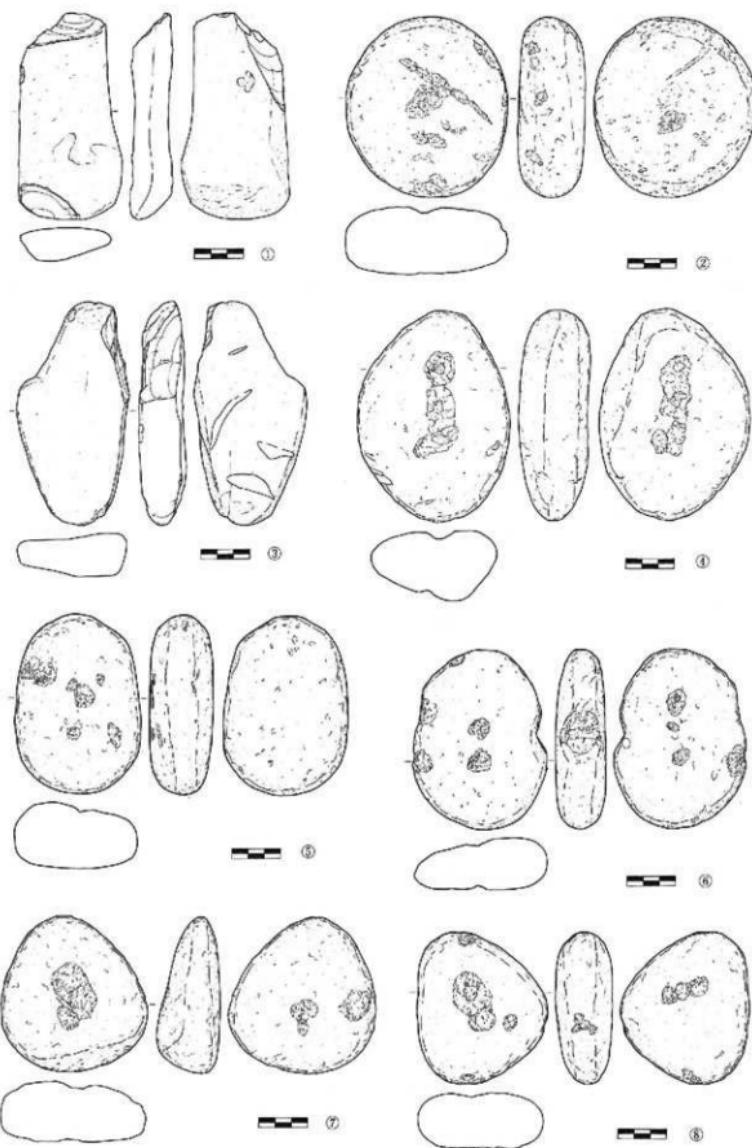
第65図 グリット遺物 (2/3)



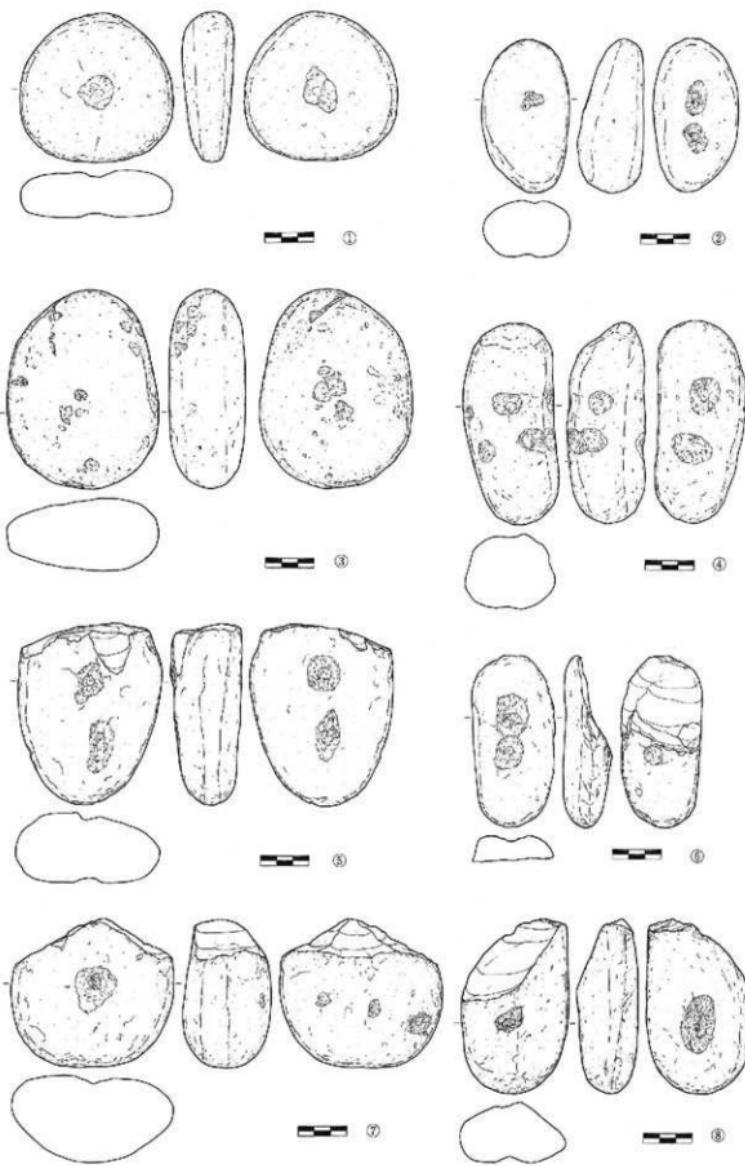
第66図 グリット遺物(1/3)、(5)(9)(1/2)



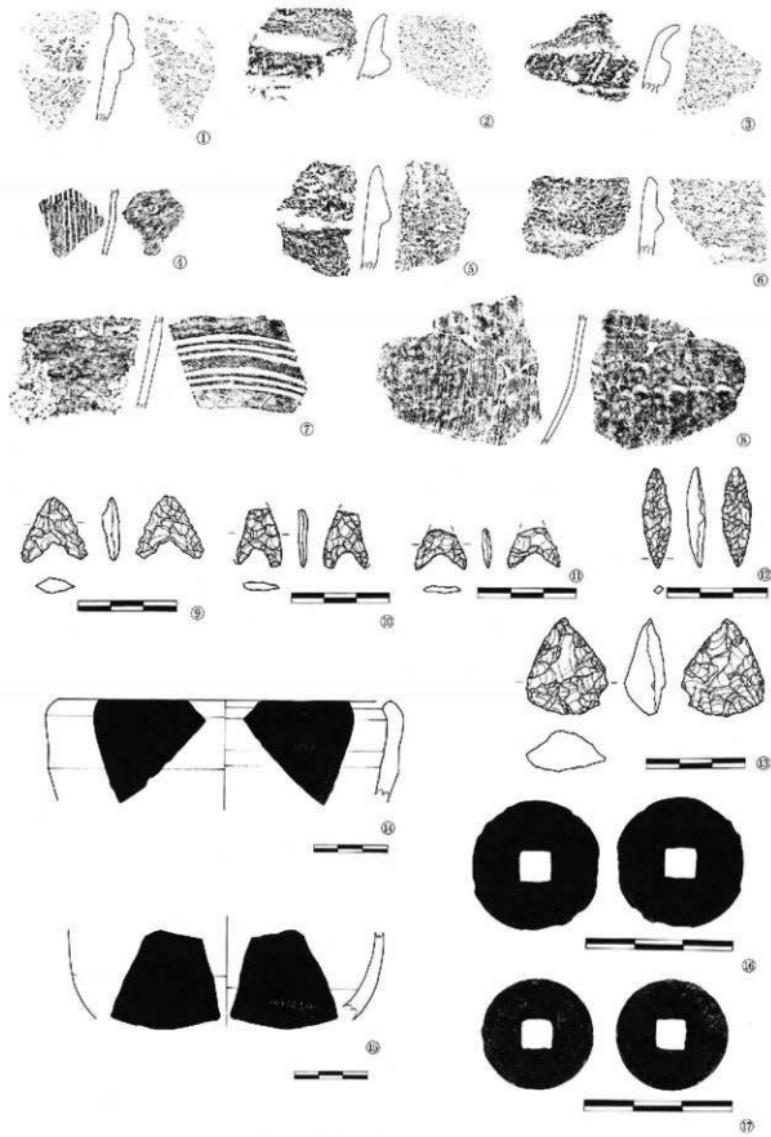
第67図 グリット遺物(1/3)、①(1/2)



第68図 グリット遺物(1/3)



第69図 グリット遺物(1/3)



第70図 表採(1/3)⑨～⑬(2/3)⑭～⑯(1/1)

まとめ

芥沢遺跡は赤石山系支脈の大沢山山麓で武田信玄により開発されたと伝えられている金鶴金山の根を流れる大沢川と中野沢川に形成された丘陵上に広がっている。周囲には向坂遺跡、ハゴヤ遺跡、柏木遺跡、天狗山遺跡など縄文時代と平安時代を主とする遺跡があり、1924年に信濃教育會源訪部會が発行した「諏訪史第一卷」源訪郡先史時代遺物発見地名表の金沢村の項には既に記載がある古くから知られている遺跡である。

1951年小発掘が源訪考古学研究所によって試みられて、道路沿いのごく狭い範囲を発掘して縄文時代早期末から前期初頭の住居址の一部を確認したとされている。この時出土した上器については、1983年再分類がなされて、出土した土器は縄文時代早期末前期初頭の降帯系と沈線系の両者が存在していることが明確になっている。1989年に水道に係る小規模な発掘調査を茅野市教育委員会で実施し、前回の発掘と同時期の上器が見つかっている。この調査により芥沢遺跡における同期上器群の編年的な位置や系統関係の内容充実が図られている。更に発掘の際、金山伝承に関わる可能性もある中世以降の遺物も出土している。1992年に中野沢川対岸の鬼ヶ丘宅地造成に伴う天狗山遺跡の発掘調査を実施したところ、縄文時代早期から平安時代末期までの断続的な生活址を確認した。落し穴も複列で検出しており、時期によって居住域、生産域が入れ替わる生活域となっていた遺跡であったことが判明した。2002年、芥沢遺跡の南西400mで今回と同じ調査原因により柏木遺跡の発掘を行い落し穴が調査されており、芥沢遺跡、天狗山遺跡と極めて深い関係を持つ生産域の遺跡として捉えられている。

芥沢遺跡及び周辺遺跡の調査成果をもとに今回の発掘調査に取り組んだ。調査区の標高は884m～894mの遺跡内では低い地区にある。検出されている遺構で時期決定が可能なものは縄文時代早期末前期初頭と平安時代に帰属する竪穴住居址があり、時期不明の遺構として焼上址、集石炉、落し穴を含む土坑などがある。平成15年度の調査では住居址、上坑のほかに調査区の西側において糸魚川・静岡構造線破碎帶の一部も見つかっている。居住域の住居址と生産域である落し穴が併存することから時期によりムラが造られ、また別の時期には狩り場として使われたことが判明してきている。前述のように周辺で発掘を実施している天狗山遺跡からは本遺跡を主構成している縄文時代早期末～前期前半にかけてのムラと落し穴が同様に切り合い関係をもって見つかっており、遺構の立地から居住域と生産域が交互に換わったと考えられる。

芥沢遺跡の集落について 発掘対象となったのは集落の北側半分であるが住居址は41軒を調査。縄文時代早期末前期初頭の住居37軒、平安時代の住居4軒を発掘した。試掘の成果を含めると盛り土保存した地区、及び南側半分の事業地外にかけて同期の集落が環状を呈して存在している可能性が想定できるようになった。平成15年度調査区は開拓により、平成16年度調査区は遺構検出面までの深さが最も浅いところで12cm、平均しても約20cmしかなく、耕土直下はすぐ検出面という状況で、耕作による擾乱が床下やローム層内まで及んでいる所もかなりあるため遺構の残存率は良好ではなかった。平成16年度調査予定区の半分以上が盛り土により保存されることになったため、発掘面積が減少、細長い調査区となった。保存部分については平成14年度の試掘と平成16年度のトレレンチによる試掘調査の結果、相当数の住居が弧状に廻って存在していることを確認している。環状集落北側外周端の標高は890～891mで、この端から20～30mは北側に向かってなだらかに傾斜しているが途中から急傾斜になって中野沢川に落ち込んでおり、川沿いでは水田耕作がされていた。今回調査区外となっている南側は大きな地形の変化は見られず耕土も厚いため遺構の保存状態は発掘調査区に比べ良好に残っていると思われる。

芥沢遺跡で見つかっている多くの縄文時代早期末前期初頭の住居は中央が緩やかに窓む床面を持ち、遺構

検出面が床と重なるところもあって壁が検出されず、床も軟弱であった。同じ時期の遺跡で軟弱な床を持つ住居の検出例は平成8年から発掘調査された富上見町の坂平遺跡にも見ることができる。

住居址の形態は、次のように大別が可能である。①柱を持つものと無いもの、②遺物の出土量の多い住居址と少ない住居址、③固定式石皿が有る家、無い家。④土器の出土はほとんど無く、砂より細かい黒曜石の細片が多数出土するものなどの特徴がある。この時期は住店に炉が外から屋内に入ってくる移行期にあたり、火を焚くための穴や石割いも無く、遺構検出の際に住店内から焼けた土がまとまって壠方より上で検出されている。地床炉は一般的にロームの床上に設けられ焼土の形成はローム内まで達しているが、本遺跡のように遺構検出時に見つかることは火災住居の可能性、あるいは生活面の床がローム層直上より上にあったことを示唆すると思われるが焼土の検出状況から後者と判断している。また柱穴については後の時期のように重量が掛かる桁や梁を支えることに堪えうると考えられる柱穴は見つからず、炭化材の出土も無い、床下の壠方には多数の無秩序な穴が穿たれた跡が確認できただけである。この傾向は中野沢川を挟んだ天狗山遺跡の発掘でも同様に見ることができた。

以上のことから芥沢遺跡における同期の集落は①住居は建てる際に堅穴を掘ってから、有機物が分解してきた暗褐色の土とロームが混じる床を造る。床土の中には遺物や大きなロームブロックがほとんど混じらず、硬い状態で床は残っていない。床上を除くと凹凸の激しいローム面が現れプランも不明瞭になってしまふことから掘ってすぐ振陸修正していたと考えられる。②住居の件数が他の時期に比べ多く形状も様々であることから用途によって別棟になっていた可能性があり、また居住が短期間であったため床面や壁面が軟弱で堅固な柱も必要ななかったとするのが妥当であろう。③構造線に直交する方向の開口地割れを確認している住居址と土坑がある。集落東端、第31号住居址のピット内側で柴から底に掛けて構造線と直交する方向に地割れの確認ができる。他に地割れ方向が分かる遺構は東端の墓地脇の土坑群にもある。縄文時代前期の時代観を変えたといわれている国史跡の阿久尻遺跡に隣接し、本遺跡から約2.5km北側に離れているが同じ金沢地区内の縄文時代前期前半の遺跡として阿久尻遺跡がある。国史跡の阿久尻遺跡とともに縄文時代前期前半の集落論について多くの問題点を投げかけているが、同遺跡で見つかっている地割れも芥沢遺跡と同じ西北西-東南東方向に走っている。阿久尻遺跡の地割れについては6,300~6,500年前に発生した地震による開口地割れとしており、縄文時代前期が該当する。芥沢遺跡は12,000m²以上の広範囲に及び2年度にわたる発掘調査の結果、縄文時代早期末期初頭までを契機として中期後半と後期の土器は散在が明らかに縄文時代の同期後と分かれる遺構は今回の調査では見つかっていない。構造線の内側にあった芥沢の集落は縄文時代前期の地割れを伴う地震により壊滅に至ってしまったのであろうか。

遺物は、器形復元できる土器は少ないが籠状の隆扁付き織維土器の他に東海系の土器も入り込んできている。石器は以前より黒曜石の石鎚が多く拾える遺跡として有名だったこともあり、今回の踏査、試掘調査、発掘調査を通じて黒曜石の出土量は多い。石材にはチャートや水晶を用いた石器もあり、水晶は原産地として金峰山を中心とする山梨県が有名で源流に原産地は確認されていないため搬入品である。小形の磨製石斧が出上している住居内もある。

平安時代の住居はいずれも残存状況が良くないため遺構として見つかっているのは僅かな壁、床下土坑、窓など住居の一部分で、床まで削平されてしまっている住居では窓の火床の一部や柱穴が検出されただけである。遺物は灰釉陶器の皿、土師器壊などの出土はあるが住居の残存状況が良好ではないため1軒に占める遺物出土量は極めて少なく、窓の火床だけを検出した住居は表土剥ぎの際に出土した遺物の状況から住居址と判断したものが1軒ある。

落とし穴について 平成15年度に発掘調査の終えた落し穴に鹿が落ちて逃げた痕を見ついたことがあったが、平成16年度も夜になると鹿が出てきたため朝になると調査区内には鹿の足跡が並んで残っていることが頻繁にあった。落し穴は検出面が長径約2m、短径1.2~1.3mの楕円形か長円形で、坑底に向かって搖鉢か漏斗状に掘られており、坑底は長径1.3~1.4m、短径20~70cmと狭長になっている。最も深い落し穴は遺構が検出されたローム直上面からでも1.8mを測り、尾根の延びている方向に対し長径が直交するように設けらる傾向があり、これは、柏木遺跡の落し穴でも同様で、落し穴の種類が多かった天狗山遺跡で検出している同類の落し穴とともに傾向を示す。平成16年度に調査した4基の中で倒木痕と重なっている1基を除く3基には人頭大の石が入っており、落し穴による狩猟道具のひとつとして礫が用いられたとも考えられる。前年度調査区の落し穴も含めて実際に鹿が歩いた跡を見ると楕円形の長径方向が鹿の進路に対して直交して並んでいることが判明した。2年度にわたり実際の鹿道を確認できたことは当時の人々が獸道をよく知つてワナとなる落し穴の設置をしていたことを再確認した。

土坑について 東端の調査区で土坑群が見つかっている。馬の背状の南側緩やかな斜面に位置し、直径は1~1.5m、深さが40~70cmであったかも桶のような形をしており、石が入っている土坑や上面をロームで張り、蓋をしたようにしていた土坑もある。地割れと重なっている土坑から判断すると明らかに地割れが古い。土坑群の見つかった調査区の東側に隣接して大沢の旧家である名取家の墓地が隣接してある。この墓地内には中世の五輪塔が祀られている。なお、土坑群直下の調査区境付近からは文久永宝が一枚出土している。

溝について 遺跡を南北に縱断する道路とはほぼ同じ方向に平成15年度調査区で1本、6個所、平成16年度調査区でも1本、1個所の溝址が見つかっている。時期の特定はできていないが礫がまとまって検出しており、内耳土器破片の出土もあった。新田である大沢は南北方向に細長く区画された地割りを持つ特徴があり、集落内は東西方向の幹線道路が分断している。地割りはこの道路に交差して南北に数本の小路が延びており、南端には同族「まき」の祝神、幹線周辺の上の小路と下の小路の間は「まき」の家々が並んでおり、北側にやや離れて墓域が形成されている。今回の発掘調査区は墓域と中野沢川の間であるが、かつてはこの地割りに統いて南北方向に長く分割されていたようである。しかし過去に行われた水田整備による改変でその面影は若干失われ、更に今回の整備事業により様相は一変してしまっている。溝址はこの地割りに伴う遺構の可能性もあるが断続している点や検出した深さも浅く判明はしなかった。

地元における芥沢遺跡は関心が高く、今回の発掘調査に当たっては関係各位からご高配、ご協力を頂き、大沢区だけでなく茅野市の歴史を知る上で一定の成果を上げることができた。1951年源訪考古学研究所によって行われた1回目の発掘について藤森栄一は『日石器の狩人』に掲載した写真のキャプションに「昭和26年芥沢遺跡調査のとき。たのしいところだった。」と付けている。この調査に参加した戸沢充則は平成15年、寒風吹き荒ぶる中で来跡した際に現地で「我が青春の芥沢」と熱く語られ貴重な話を伺え、その後「当時の発掘は5人位の少人数で行った。藤森先生はよく写真に直接字を書いており、芥沢発掘と記されている写真の文字は藤森先生によるもの」と発掘調査の状況や大沢式の設定に至った出土土器についても再三話を聞く機会を得ることができた。しかし調査担当者が整理作業中も、他の発掘調査も行わなければならない状況となつたため、本書において教示いただいた事を生かし切れているとは言えず、更に分析、考察面にも不十分な点がある。芥沢遺跡の全容は見つかった遺構、遺物だけでなく、隣接する糸魚川・静岡構造線上に位置する諏訪地方の遺跡を含めて解析していくことが、縄文時代早期末前期初頭のハケ岳西南麓における社会構造を復元する鍵となろう。出土している土器の時間差、石器の用途などには未だ不明な事も多々あり課題を残す結果となっており、今後稿を改める予定である。

引用参考文献

- 八幡一郎「信濃國金澤村堅穴」『東京人類學雜誌』37ノ9號 東京人類學會 1922
鳥居龍藏「源訪史 第一卷」信濃教育會源訪部會 1924
源訪史談會源訪郡史編纂部『金澤村史料』 1934
戸澤充則編集「小報」『源訪考古學第8号』源訪考古學研究所 1952
戸沢充則・藤森栄一「先史原始時代」「川岸村誌」川岸村誌刊行會 1953
大場繁雄監修「信濃史稿第1卷上」「信濃史稿第1卷下」信濃史稿刊行會 1956
藤森栄一「源訪考古學研究所」「田石器の狩人」学生社 1965
宮坂英次・宮坂虎次「別福城之平野穴群遺構跡」「蓼科尖石考古熊研究報告書第II冊」茅野市尖石考古館 1966
小林・史「大沢遺跡紹介」「かやの」創刊号 茅野高社会科考古班 1975
長野県教育委員会「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書 昭和54年度」 1980
小林秀雄他「判ノ木山西遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村(その3)昭和51・52年度—」長野県教育委員会 1981
並沢浩他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その3 昭和51・52・53年度—『阿久連跡』本文編」長野県教育委員会 1982
長崎元廣他「長野県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集」「(シンボジウム'83) 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題上器資料集成図集」「神奈川考古第17号」「神奈川考古同人会 1983
神奈川考古同人会「シンボジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題記録・論考集」「神奈川考古第18号」 1984
守矢昌文「高風呂遺跡出土縄文土器の分類と変遷—特に縄文早期末から前期初頭にかけて—」「高風呂遺跡—昭和59年度県営運動場事業湯川地区内埋蔵文化財発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 1986
宮坂虎次他「縄文時代」「茅野市史上卷原始・古代」茅野市教育委員会 1986
宮下健司「縄文時代早期の土器」「長野県史 考古資料編全一巻(四) 遺構・遺物」長野県史刊行會 1988
守矢昌文「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について—高風呂遺跡出土の縄文施文系の土器群を中心として—」「会報3」源訪考古学研究会 1989
守矢昌文「芥沢遺跡—源訪南インター林間工業団地上水道施設用地に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 1990
茅野市教育委員会 1991 「茅野市遺跡台帳」
官坂武夫「原始と古代」「信州金沢の歴史」金沢村史刊行會 1992
松島信幸・守平宏「阿久尻遺跡の地形地質」「阿久尻遺跡—黒巖金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 1993
百瀬一郎「天狗山遺跡—金沢住宅團地」宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—茅野市教育委員会 1993
下平博行「塙田式」の設定とその様相について「塙田遺跡」御代田町教育委員会 1994
守矢昌文「上の平遺跡 平成6年度県営運動場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 1995
守矢昌文「梵天原遺跡—平成7年度県営運動場整備事業櫻木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 1996
小野正文「山梨県の考古学編年2 縄文時代の編年(3)早期」「山梨県史資料編2 原始・古代2」山梨県 1999
百瀬一郎「下尾根遺跡—県営運動場整備事業荒原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 2001
百瀬一郎「柏木遺跡—中山間総合整備事業御柱の里地区に伴う発掘調査報告書—」茅野市教育委員会 2003
百瀬一郎「茅野市芥沢遺跡」「第16回源訪地区遺跡調査研究發表会」源訪考古学研究会 2004

- 小林公明「坂平遺跡の時代」『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』長野県富士見町教育委員会
2004
- 小松隆史「縄文時代の遺構・遺物土器」『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』長野県富士見町教育
委員会 2004
- 百瀬一郎「茅野市芥沢遺跡」『第17回諏訪地区遺跡調査研究発表会』諏訪考古学研究会 2005
- 百瀬一郎「芥沢遺跡の調査について」『速報縄文の里茅野を掘る Vol.2 '01～'05』茅野市尖石縄文考古館 2006
- 守矢昌文「八ヶ岳西南麓・竜ヶ峰南麓における縄文時代の落し穴について」『新尖石縄文考古館開館5周年記念考古
論文集』茅野市尖石縄文考古館 2006
- 滝谷昌彦「坂平式土器の設定」『長野県考古学会誌118 横口昇一追悼号』長野県考古学会 2006

①土坑一覧

上坑 No.	図面 番号	図版 番号	グリッド No.	上 端		下 溝		深さ (cm)	長軸方向	固化した遺物	その他 (本回収の遺物性)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
1	53回1土		L.9	46	42	26	25	14	N-11°-W	-	
2	53回2土		L.9	110	108	(70)	45	32	N-89°-E	石器	(条文、縞文の織維土器、薄手指揮圧痕文土器)
3	53回3土		N.9	73	60	57	43	24	N-77°-E	-	(沈縞文の織維土器)
4	53回4土		L.9	40	40	48	25	16	N-18°-W	-	
5	53回5土		L.10	39	24	25	8	14	N-2°-W	-	
6	53回6土		L.10	84	62	47	33	12	N-47°-W	-	
7	53回7土		L.10	58	47	38	35	26	N-13°-E	-	
8	52回8土	44-(3)	L.10	220	168	(70)(40)	122	34	N-65°-E	-	落し穴
9	53回9土	51-(1)、(2)	K.10	115	107	93	87	16	N-26°-W	打製石斧、剥離 質のある薄片	
10	54回10土		K.10	85	74	67	62	11	N-50°-E	-	(鐵器土器)
11		51-(3)	J.8	112	90	70	66	15	N-29°-W	-	(鐵器土器)
12	54回12土		K.9	56	46	48	33	8	N-0°	-	(鐵器土器、薄手指揮圧痕 縞文土器)
13	54回13土	51-(3)	I.9	116	103	76	62	15	N-40°-E	-	
14	54回14土		J.9	116	96	81	73	11	N-42°-E	-	
15	54回15土		I.9	93	90	65	55	20	N-88°-E	-	落し穴
16	52回16土	44-(3) 45-(1)	K.9	167	118	138	84	109	(N-56°-E)	石器	(条文縞維土器、薄手指揮 圧痕縞文土器)
17	54回17土		J.8	53	48	30	20	14	N-20°-E	-	
18	54回18土		L.9	73	56	58	48	22	N-33°-E	-	(羽状縞文織維土器)
19	54回19土	52-(2)	K-L.9	156	146	138	128	14	N-45°-W	-	(条文縞維土器、薄手指揮 圧痕縞文土器)
20	54回20土	52-(3)	I.8	65	59	47	43	10	N-27°-E	-	
21	54回21土		J10-11	144	125	120	103	26	N-83°-E	-	
22	54回22土		J10	47	41	33	26	10	N-25°-E	-	
23	54回23土		J10	40	26	24	16	26	N-12°-W	-	
24	54回24土		J10	142	116	126	83	25	N-13°-W	-	
25	54回25土		J11	39	32	27	20	16	N-18°-E	-	
26	54回26土	53-(1)、(2)	J10	140	110	118	85	28	N-34°-W	-	
27	54回27土		J10	45	37	30	31	8	N-8°-W	-	
28	54回28土		J10	67	45	47	35	16	N-45°-W	-	
29	54回29土		J10	115	95	102	75	27	N-64°-W	-	
31	54回31土		J11	70	57	58	44	14	N-16°-W	-	
32	54回32土		J10	57	48	45	29	15	N-21°-W	-	
33	54回33土		J11	78	52	46	35	22	N-81°-W	-	
34	54回34土		J11	76	67	57	54	8	N-84°-W	-	
35	54回35土		J10-11	102	75	88	64	14	N-46°-E	-	
36	54回36土	53-(3)	K.11	58	45	42	30	34	N-30°-W	-	
37	54回37土		J11	77	75	62	61	56	N-82°-E	-	
38	54回38土		J11	33	22	20	13	18	N-10°-E	-	
39	54回39土		J11	74	37	63	25	54	N-8°-E	-	
40	54回40土		J11	20	18	14	7	40	N-2°-W	-	
41	55回41土	I-J10 I-J11	160	150	145	135	16	N-3°-E	-	(薄手指揮圧痕縞文土器、 中期中幕の土器)	
42	55回42土		J12	125	110	90	88	22	N-50°-E	打製石斧	
43	55回43土	54-(1)	J12	95	89	79	65	14	N-75°-E	-	
44	55回44土		J12	59	55	43	40	24	N-32°-E	-	
45	55回45土		J12	55	45	30	26	20	N-60°-E	-	
46	55回46土		J13	60	59	43	42	17	N-70°-E	-	
47	55回47土		J12	58	51	48	45	14	N-58°-E	-	

上坡 Na	回収 番号	回収 番号	グリッド No	上 番	下 番	深さ (cm)	長軸方向	固化した遺物	その他 (未固化的遺物他)
48	55回48上		J13	46	40	26	23	16	N-10°-W
49	55回49上		J12	84	75	56	47	15	N-15°-W
50	55回50上	54-③	J12	90	(60)	50	36	32	N-13°-E
51	55回51上	54-②、③	J12	80	70	80	70	44	N-31°-E
52	55回52上	55-①	J12	102	95	80	73	30	N-32°-E
53	55回53上		J13	40	35	20	15	20	N-14°-W
54	55回54上	55-③	J11	220	205	190	178	26	N-44°-W 土器(縄文前期 初期)
55	56回55上		H11	59	50	50	35	10	N-42°-E
56	56回56上	55-③ 56-①	H11	130	110	90	84	42	N-45°-W
57	56回57上		H11	49	44	27	25	23	N-47°-E
58	56回58上		H11	97	82	70	63	14	N-15°-W 陶瓶底のある 土器
59	56回59上		L9	35	23	12	8	10	N-37°-W (縄文の風化 の進んだ土器)
60	56回60上		L8・9	49	40	33	28	7	N-81°-W
61	56回61上		M8	53	48	47	37	12	N-19°-E
62	52回62土	45-②、③	L9	178	112	146	58	72	N-62°-E 落し穴、(射状純文織維上 器)
63	56回63土		J11	80	74	69	59	12	N-32°-W
64	56回64土		J11	55	40	40	34	12	N-46°-W
65	56回65土	56-②、③	G10	126	110	65	62	51	N-30°-E
66	56回66土	57-①	G9	100	92	75	63	38	N-65°-E
67	56回67土	57-②、③	G9	160	155	90	73	102	N-31°-W
68	56回68土	58-①、②	G9	115	110	85	73	33	N-15°-W (底部)
69	56回69土		F9	85	62	62	40	20	N-70°-E
70	56回70土		F9	68	38	48	28	12	N-68°-E
72	56回72土		G9	89	70	60	47	40	N-73°-W
73	56回73土		G10	50	30	35	18	16	N-70°-E
74	56回74土		H9	135	123	105	93	34	N-33°-W
75	56回75土	58-③ 59-①	H10	135	134	110	104	31	N-55°-W (葉基土器底部、厚手指頭压 痕織維上器、中期半載竹 管門土器)
76	56回76土		H10	122	117	101	98	11	N-70°-W
77	56回77土		H10	25	14	19	6	10	N-17°-E
78	56回78土	59-②、③	H10	100	93	84	78	22	N-19°-E (中筋中茎の風化が進んで いる土器)
79	56回79土		H10	41	18	27	7	28	N-8°-W
80	57回80土		H10	27	22	11	9	32	N-88°-E
81	57回81土		H·H10	27	18	10	9	48	N-38°-E
82	57回82土		H2	43	29	18	13	48	N-84°-E
83	57回83土		H10	44	39	27	24	18	N-8°-W
84	57回84土		H110	60	58	39	30	15	N-14°-W
85	57回85土		H10	72	49	35	27	12	N-16°-W
86	57回86土	60-①	H10	136	105	133	108	10	NO-40°-E (厚手指頭压痕 指文土器)
87	57回87土	60-②	H9	190	125	180	100	15	N-62°-E
88	57回88土	60-③	H9	149	126	125	100	21	N-29°-E
89	57回89土	61-①	H9	65	60	52	45	14	N-58°-E
90	57回90土	61-②	F9	138	131	95	90	32	N-75°-E
91	57回91土	61-③	F9	103	102	65	60	39	N-68°-E
92	57回92土		K8	38	17	32	16	20	N-42°-W
93	57回93土		L8	45	43	22	21	34	N-0°
94	57回94土		H10	60	53	46	36	20	N-13°-W
95	57回95土	62-①、②	H8・9	139	131	106	104	22	N-37°-W
96	57回96土		I2	95	65	80	51	27	N-80°-W

土坑 No	岡番号	図版 番号	グリッド No	上 端	下 端	深さ (cm)	長軸方向	固化した遺物	その他 (未固化的遺物)
97	57岡97上		L.10	63	52	10	8	34	N-1°-E
98	57岡98上	62-(3)	K.8	45	38	29	15	74	N-25°-E
99	57岡99上	63-(1)	K.8	145	102	130	80	12	N-70°-W
									(条痕文、羽状縞文の織維土器、薄手指頭圧痕縞文土器)
100	57岡100上		L.8	92	74	72	54	16	N-23°-W
101	57岡101上	63-(2)	L.7	118	82	70	63	34	N-55°-W
102	57岡102上	63-(3)	J.7	86	82	56	36	12	N-40°-W
103	57岡103上		J.7	66	51	47	47	13	N-34°-W
104	57岡104上		J.6	67	53	51	33	19	N-22°-E
105	57岡105上		J.6・7	65	58	36	35	25	N-43°-W
106	57岡106上	45-(1)、 (3)、(6)	J.6	193	146	108	56	158	N-27°-W
107	57岡107上	64-(1)、(2)	G.9・10	105	85	70	65	14	N-23°-W
108	57岡108上		G.10	42	33	30	18	22	N-15°-W
109	58岡109上	64-(3)	F.8	98	93	77	72	21	N-2°-E
110	58岡110上	65-(1)	F.8	148	116	129	98	20	N-32°-E
111	58岡111上	65-(2)	E-F.7	109	97	98	67	21	N-23°-W
112	58岡112上		E.7	115	108	75	72	20	N-13°-W
113	58岡113上		F.7	66	65	55	52	20	N-20°-W
114	58岡114上		F.5	74	(28)	64	(24)	19	N-40°-W
115	58岡115上		F.5	55	47	27	21	36	N-27°-E
116	58岡116上		I.7	165	160	148	135	20	N-58°-W
117	58岡117上	65-(3)	H-I.7	131	128	86	25	40	N-37°-W
118	58岡118上	66-(1)	H.7	98	95	72	70	31	N-43°-E
119	58岡119上		H.7	121	109	100	95	17	N-57°-E
120	58岡120上		I.7	81	76	60	58	24	N-16°-E
121	58岡121上	66-(2)	I.7	80	70	64	62	10	N-59°-E
122	58岡122上	66-(2)	I.7	105	102	92	92	13	N-59°-E
123	58岡123上	66-(3)	I.7	160	150	150	130	16	N-38°-E
124	58岡124上	67-(1)	J.4	130	103	90	75	22	N-43°-E
125	58岡125上		H.7・8	54	51	34	31	15	N-0°
126	58岡126上		I.8	56	53	46	42	12	N-75°-W
127	58岡127上	67-(2)	H.7	53	50	43	42	17	N-26°-E
128	58岡128上	67-(3)	H.8	172	158	153	140	41	N-63°-W
129	58岡129上		H.10	86	74	76	62	17	N-61°-W
130	58岡130上		H.8	74	60	60	52	24	N-30°-W
131	58岡131上	68-(1)	G.8	81	80	70	64	12	N-45°-E
132	58岡132上	47-(1)、(2)	J.8	160	155	75	68	147	N-56°-E
133	58岡133上		J.8	61	56	42	35	23	N-0°
134	58岡134上		H.4	167	(120)	100	85	35	N-38°-W
135	58岡135上		H.7	128	98	100	68	19	N-28°-W
136	59岡136上		H.7	55	45	38	35	23	N-34°-E
137			M.10	73	(35)	52	(29)	17	N-70°-E
138	59岡138上		J.8	70	58	60	52	13	N-27°-E
139	59岡139上		J.8	82	65	58	45	27	N-80°-E
140	59岡140上		K.8	23	20	13	13	20	N-70°-E
141	59岡141上		J.7・8	81	78	63	53	27	N-55°-W
142	59岡142上		I.7	156	89	116	39	25	N-0°
143	52岡143上	47-(2)、 48-(1)	H.3	100	(85)		38	110	N-30°-W
144	59岡144上		H.7	55	(60)				落し穴
145	59岡145上		H.7・8	138	135	111	110	26	N-48°-W

上坑 No	因番号	図版 番号	グリッド No	上 墓	F 端	深さ (cm)	兵輪方向	因化した遺物	その他 (未因化の遺物)
146	59回146上		J 5	77	72	69	59	20 N-42° -W	
147	59回147土		H 8	(113)	95	(100)	68	16 N-25° -W	
148	52回148土	48-(2)	K 5	267	135	132	50	124 N-28° -W	落し穴、(風化が著しい鐵錠 土器)
150	59回150上		J 7	90	76	52	40	25 N-57° -W	
151	59回151土	68-(2)	J 7	68	64	58	53	7 N-0°	
152	59回152土	68-(2)	J 7	95	79	81	73	8 N-70° -E	
153	59回153土		J 7	63	56	44	40	15 N-47° -E	(傳手土器小片)
154	59回154上	68-(3)	H 7	123	103	110	87	20 N-32° -E	
155	59回155土		H 7	60	52	23	21	33 N-43° -E	
156	59回156土	69-(1)	H 7	89	85	80	75	10 N-56° -E	
157	59回157土	69-(2)	H 8	78	69	75	64	25 N-10° -W	
158	59回158土		G 8	60	52	46	38	21 N-60° -E	
159	59回159土	69-(3)	G 8	140	132	92	85	21 N-23° -E	
160	59回160上	70-(1)	FG 8	103	89	87	73	20 N-77° -W	
161	59回161土	70-(2)	G 8	81	73	56	50	27 N-38° -E	
162	59回162土	70-(3)	G 8	52	44	35	33	24 N-42° -E	
163	59回163土		G 8	80	70	70	44	13 N-38° -E	
164	59回164土	70-(3)	G 9	105	96	85	79	23 N-2° -W	
165	59回165土		G 9	50	49	38	35	51 N-24° -W	
166	59回166上		G 9	57	45	35	20	13 N-59° -E	
167	59回167土	71-(1)	G 9	97	80	75	53	29 N-50° -E	
168	59回168土		G 9	48	40	(42)	20	30 N-33° -E	(風化、剥落の激しい土器)
169	59回169土		G 9	36	35	26	25	22 N-60° -E	
170	59回170土	71-(1)	G 9	(62)	50	(55)	40	19 N-80° -E	
171	59回171土	71-(2)	G 9	72	65	56	52	25 N-35° -E	
172	60回172土		F 9	65	60	52	50	20 N-66° -E	
173	60回173土		F 9	72	65	60	54	15 N-65° -E	
174	60回174土	71-(3)	G 9	70	67	59	55	25 N-41° -W	
175	60回175土	72-(1)	N 8・9	92	(75)	(45)	40	22 N-55° -E	
176	60回176土	72-(2)	N 9	(52)	46	30	5	N-80° -W	
177	60回177土	72-(3)	N 9	50	45	35	35	5 N-40° -W	
178	60回178土	72-(2)	N 9	50	42	35	32	21 N-45° -W	
179	60回179土		N 9	34	12	20	5	15 N-60° -W	薄手折鉢压瓦綴 縦文土器
180	60回180土		N 9	50	(32)	40	(30)	8 N-42° -W	
181	60回181土		N 9	33	30	15	12	38 N-25° -E	(薄手折鉢压縦編縦文土器)
182	60回182土	72-(3)	N 9	58	52	33	32	19 N-30° -E	
183	60回183土		O 9	70	60	43	25	24 N-30° -W	(鐵錠土器)
184	60回184土		O 9	75	62	31	30	22 N-29° -W	(鐵錠土器)
185	60回185土	73-(1)	O 9	75	45	37	16	24 N-80° -W	条板文土器
186	60回186土		O 8	54	53	50	40	44 N-35° -W	
187	-		O 8	39	23	14	13	42 N-65° -E	
188	60回188土		X-2	123	105	90	70	44 N-79° -E	
189	60回189土	73-(2), 74-(2),(3)	X-2	118	105	104	77	68 N-85° -W	
190	60回190土	73-(3), 74-(1), (2),(3)	X-2	118	109	93	82	60 N-23° -E	
191	60回191土	74-(4),(5) 75-(1)	X-2	205	125	100	100	56 N-89° -E	
192	60回192土	74-(6),(7), 75-(1)	X-2	150	138	135	100	50 N-13° -W	
193	-	75-(3)	X-3	155	138	116	82	27 N-28° -W	
194	-	75-(3)	X-3	(83)	(88)	(51)	(49)	37 N-38° -W	

土地 No	図版 番号	図版 番号	グリッド No	上 端			下 端			深さ (cm)	長軸方向	固化した遺物	その他 (本図化の遺物他)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
199	60図199+		Q1	68	65	60	45	16	N-65°-E				
200	60図200上		Q1	52	48	32	31	16	N-30°-W				
201	52図201+	48-③	P-Q1	140	50	110	32	75	N-28°-W			落し穴	
202	60図202上		P1	99	75	72	52	28	N-65°-W				
203	60図203+		P1	75	68	60	55	15	N-43°-E				
204	60図204上		P1	73	72	52	48	28	N-25°-E				
205	60図205+		P1	108	98	73	32	33	N-29°-E				
206	60図206上		P1	102	85	63	60	20	N-19°-W				
207	61図207+		P1	120	112	100	78	27	N-35°-W	馬糞繩文土器			
208	61図208上		P1	188	149	(167)	100	26	N-17°-W				
209	61図209+		P1	50	38	28	17	54	N-13°-W			青磁	
210	61図210上		O-P1	50	40	42	30	15	N-45°-W				
211	61図211+		O-P1	200	148	125	34	49	N-15°-W				
212	61図212上		O1-2	75	72	65	60	39	N-65°-W				
213	61図213+		O1-2	80	68	52	50	27	N-40°-W				
214	61図214上		O1-2	83	73	54	52	27	N-0°				
215	61図215+		O1	65	50	35	34	38	N-27°-W				
216	61図216上		O1	64	42	42	35	40	N-60°-W				
217	61図217+		O1	155	106	108	70	26	N-60°-W				
218	61図218上		O1	65	56	50	50	29	N-89°-W				
219	61図219上		N1	71	69	62	55	13	N-15°-W	剥離質のある扁平盤		鐵雜土器	
220	61図220上	75-④	N1	113	105	97	86	28	N-85°-E				
221			P7	155	145	136	130	28	N-72°-W				
222	61図223+	74-⑤、 75-①、 ②、③	X-2									191土と切り合い	
224		74-④、 75-①	X-2									192上と切り合い	
225	52図225上	49-①、 ②、③	K2	185 (150)	115 67	135	35	101	N-75°-W			落し穴	
226	52図226上	50-①	L3	150 (110)	(130) 108	(95)	70	100	N-37°-E			落し穴、(条痕文繩文土器、 麻子形頭形灰土器)	
227	52図227上	50-②、③	M1-2	215 (155)	71 42	142	25	93	N-4°-W			落し穴、(沈痕文繩文土器)	
228	61図228上	75-④	K3	45	35	20	18	14	N-75°-E				
229	61図229上	75-⑤	K3	110	(90)	90	(70)	19	N-59°-W				
230	61図230+		K3	74	44	44	30	17	N-48°-W				
231	61図231上	75-⑥	K3	49	(35)	35	(20)	8	N-30°-W				
232	61図232+	75-⑦	K3	85	75	(70)	(60)	8	N-86°-W				
233	61図233上		M2	62	47	33	32	19	N-89°-W				
234	61図234+		M1	61	60	50	45	11	N-30°-W				
235	61図235上		M1	56	50	26	20	11	N-74°-E				
236	61図236+		M1	59	50	45	40	13	N-65°-E				
237	61図237土		M-N1	70	56	13	10	13	N-83°-E				
238	61図238土		N1	53	50	32	25	17	N-90°-W				
239	61図239土	75-⑧	J1	85	75	70	45	46	N-55°-E				

②土器観察表

団番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎上	L1径cm	高さcm	備考
11-①	1住	深鉢	口縁、2本の隆唇が裏り、口唇と脣に左上から右方に斜行する刷目による調整	にぶい褐色 7.5YR5/4	織維を含む			
11-②	1住	深鉢	口縁、L1唇厚く、やや外反する条痕による調整	暗褐色 10YR4/6	織維を含む			11-④と接合
11-③	1住	深鉢	沈文、肩部	明褐色 7.5YR5/6	織維を含む			
11-④	1住	深鉢	条痕による調整、肩部	暗褐色 10YR4/6	織維を含む			11-②と接合
11-⑤	1住	深鉢	条痕による調整、肩部	灰褐色 10YR4/2	織維を含む			
11-⑥	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	肩下部、上部余唇による調整、底部欠損するが尖底になると思われる	褐色 7.5YR4/6	織維を含む			
11-⑦	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	指頭圧痕、萼手横縞文、頭部に液状粘土貼付、胴体	明褐色 10YR6/6	-			
11-⑧	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	羽状縞文、肩部	褐色 7.5YR6/6	織維を含む			
12-①	2住	深鉢	口縁、口唇、脣唇に貝殻腹縁が施されている、器腹は条痕	褐色 7.5YR4/6	織維少量含む			
12-②	2住	深鉢	縞文、肩部	暗褐色 10YR3/4	織維を含む			
12-③	2住	深鉢	羽状縞文、肩部	灰褐色 10YR6/2	織維を含む			
12-④	2住	深鉢	羽状縞文、肩部	にぶい黄褐色 10YR5/3	織維を含む			
13-①	3住1	深鉢	口縁、断面三角形の隆唇1本開き、擦痕で調整	灰褐色 10YR4/2	織維を含む			
13-②	3住	深鉢	口縁、L1唇肥厚、脣に貝殻腹縁を施文	褐色 10YR4/4	織維を含む			
13-③	3住	深鉢	口縁、断面三角降唇2本が開き、薄手横圧痕	褐色 10YR4/4	織維を含む			
13-④	3住	深鉢	口縁、口唇、脣唇に貝殻腹縁が施されている器腹は条痕	褐色 7.5YR4/4	織維を含む			
13-⑤	3住	深鉢	口縁、口唇外側に開き低い隆唇、貝殻腹縁を斜めに施文	暗褐色 10YR3/3	織維を含む			
13-⑥	3住	深鉢	口縁、横に大比較が開き、條条件压痕外側に施文した山形の筋条件压痕	赤褐色 5YR4/6	織維を含む			
13-⑦	3住	深鉢	口縁、縞文、外側に開く	にぶい黄褐色 10YR4/3	織維を含む			
13-⑧	3住1	深鉢	口縁L1唇平縫、外側に張り出す、羽状縞文	明褐色 10YR6/6	織維を含む			
13-⑨	3住	深鉢	肩部、縞文	にぶい黄褐色 10YR4/3	織維を含む			
13-⑩	3住	深鉢	肩部、条痕	褐色 7.5YR6/8	織維を含む			
14-①	3住	深鉢	肩部、条痕	明褐色 7.5YR5/6	織維を含む			
14-②	3住	深鉢	肩部、条痕	黒褐色 10YR3/2	織維を含む			
14-③	3住	深鉢	肩部、条痕	にぶい黄褐色 10YR4/3	織維を含む			
14-④	3住	深鉢	肩部、縞文	黄褐色 10YR5/6	織維を含む			
14-⑤	3住	深鉢	肩部、条痕	にぶい黄褐色 10YR7/4	織維を含む			
14-⑥	3住	深鉢	底部、擦痕	褐色 7.5YR4/4	織維を含む			
14-⑦	3住	深鉢	羽状縞上縫、帖付、指頭圧痕、薄手縞文	にぶい黄褐色 10YR5/3	-			
14-⑧	3住	深鉢	貼上縫帖付、指頭圧痕、薄手縞文	にぶい黄褐色 10YR5/4	-			
14-⑨	3住	深鉢	粘土縫帖付、指頭圧痕、薄手縞文	褐色 7.5YR4/3	-			
14-⑩	3住	深鉢	粘土縫帖付、指頭圧痕、薄手縞文	にぶい褐色 7.5YR5/4	-			
14-⑪	3住	深鉢	貼上縫帖付、指頭圧痕、薄手縞文	灰褐色 10YR6/2	-			
14-⑫	3住	深鉢	指頭圧痕、薄手縞文	にぶい黄褐色 10YR5/3	-			
14-⑬	3住	深鉢	指頭圧痕、薄手縞文	灰褐色 10YR5/2	-			

図書号	用土区記	巻種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
14-④	3住	深鉢	羽状繩文、胴部	明黄褐色 10YR6/6	機織を含む			
14-⑩	3住	深鉢	羽状繩文、胴部	褐 7.5YR6/6	機織を含む			
14-⑪	3住1	深鉢	羽状繩文、胴部	褐 7.5YR6/6	機織を含む			
14-⑫	3住	深鉢	羽状繩文、胴部	明褐色 7.5YR5/6	機織を含む			
14-⑬	3住	深鉢	羽状繩文、胴部	黒褐色 10YR5/2	機織を含む			
14-⑭	3住	深鉢	条痕、胴部	にぶい褐色 7.5YR5/4	機織を含む			
14-⑮	3住	深鉢	羽状繩文、胴部	にぶい黄褐色 10YR4/3	機織を含む			
14-⑯	3住	深鉢	绳文、胴部	明褐色 7.5YR5/6	機織を含む			
14-⑰	3住	深鉢	条痕、先底部	明黄褐色 10YR6/6	機織を含む			
15-①	4住	深鉢	口縁、粘土紐輪付内側具蓋表層	黒褐色 10YR3/2	機織を含む			
15-②	4住	深鉢	隆帯、条痕	黒褐色 10YR1/3	機織を含む			
15-③	4住	深鉢	隆帯	黒褐色 10YR1/3	機織を含む			
15-④	4住	深鉢	隆帯、条痕	褐色 7.5YR4/3	機織を含む			
15-⑤	4住	深鉢	口縁、口唇に粘土紐輪付斜行する筋目有り、薄手繩文	にぶい黄褐色 10YR6/3	-			
15-⑥	4住	深鉢	口縁、口唇に粘土紐輪付	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	-			
15-⑦	4住	深鉢	口縁、口唇に刻み、薄手繩文	褐色 10YR4/4	機織を含む			
15-⑧	4住	深鉢	口縁、細かい状況口唇	明黄褐色 10YR6/6	機織を含む			
15-⑨	4住	深鉢	口縁、粘土紐輪上、平行細線	明黄褐色 10YR7/6	-			
15-⑩	4住	深鉢	口縁、口唇と隆帯に貝殻施縁	褐色 7.5YR4/3	機織を含む			
15-⑪	4住	深鉢	薄手繩文	黒褐色 10YR3/2	-			
15-⑫	4住	深鉢	条痕	褐色 7.5YR4/6	機織を含む			
15-⑬	4住	深鉢	繩文	にぶい黄褐色 10YR4/3	機織を含む			
15-⑭	4住	深鉢	条痕	褐色 7.5YR4/4	機織を含む			
15-⑮	4住	深鉢	条痕	明褐色 7.5YR5/6	機織を含む			
15-⑯	4住	深鉢	条痕、底部に近い	黄褐色 10YR5/8	機織を含む			
15-⑰	4住	深鉢	羽状繩文	暗褐色 10YR3/3	機織を含む			
15-⑱	4住	深鉢	条痕	褐色 10YR4/6	機織を含む			
15-⑲	4住	深鉢	羽状繩文	褐色 7.5YR4/6	機織を含む			
15-⑳	4住	深鉢	条痕	黒褐色 10YR5/8	機織を含む			
15-㉑	4住	深鉢	羽状繩文	黄褐色 10YR5/6	機織を含む			
15-㉒	4住	深鉢	条痕	にぶい褐色 10YR4/3	機織を含む			
15-㉓	4住36上	深鉢	尖底土器底部、指痕による压痕	褐色 10YR4/6	機織を含む			
16-①	5住42	深鉢	口縁、隆、斜割石上からん下、条痕	褐色 7.5YR4/3	機織を含む			
16-②	5住35	深鉢	口縁、低い隆起、斜格子口、擦痕	褐色 7.5YR4/3	機織を含む			
16-③	5住21	深鉢	口縁、波状口縁、繩文	暗褐色 7.5YR3/4	機織を含む			
16-④	5住18	深鉢	口縁、口唇施縁、条痕	黒褐色 10YR3/2	機織を含む			
16-⑤	5住	深鉢	口縁、口唇斜削、格縄	褐色 10YR4/4	機織を含む			
16-⑥	5住	深鉢	口縁、口唇、隆帯、擦痕	にぶい黄褐色 10YR5/4	機織を含む			
17-①	5住18	深鉢	胴部、条痕	にぶい黄褐色 10YR4/3	機織を含む			
17-②	5住10	深鉢	胴部、繩文	にぶい黄褐色 10YR4/3	機織を含む			
17-③	5住	深鉢	胴部、薄手繩文	にぶい黄褐色 10YR5/4	-			
17-④	5住	深鉢	胴部、条痕	黒褐色 7.5YR3/1	機織を含む			
17-⑤	5住10	深鉢	底部、条痕	明褐色 7.5YR5/6	機織を含む			
17-⑥	5住6	深鉢	胴部、羽状繩文	明黄褐色 10YR6/6	機織を含む			

図番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
17-⑦	5住18	深鉢	口縁、甌文	にぶい黄澄 10YR6/4	織維を含む			
17-⑧	5住19	深鉢	口縁	褐	7.5YR4/4	織維を含む		中期
17-⑨	5住	深鉢	口縁	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		中期
17-⑩	5住6	深鉢	口縁	暗褐色	7.5YR5/4	織維を含む		中期
17-⑪	5住14	深鉢	口縁	にぶい黄澄 10YR7/4	織維を含む			中期
17-⑫	5住14	深鉢	口縁	にぶい黄澄 10YR7/4	織維を含む			中期
19-①	6住1600	深鉢	指廻正直、口縁は口唇が波状、2条の筋上端、無縞文	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
19-②	6住2	深鉢	口縁、口唇は欠損するが、左上から右下に斜行する刻み口が入った隆帯、高い隆帯を持ち、条痕	明褐色	7.5YR5/6	多量に含む		
19-③	6住3	深鉢	口縁、薄手縦線文	にぶい米色 10YR6/3	織維を含む			
19-④	6住12	深鉢	口唇欠損断面三角隆帯、擦痕	にぶい黄澄 10YR5/4	織維を含む			
19-⑤	6住	深鉢	口唇、擦痕	黄褐色	10YR5/6	織維を含む		
19-⑥	6住	深鉢	口唇欠損、薄手縦線文、崩部	泥褐色	10YR2/2	織維を含む		
19-⑦	6住	深鉢	口縫丸文	灰黃褐色	10YR4/2	織維を含む		
19-⑧	6住	深鉢	擦痕	灰黃褐色	10YR6/6	多量に含む		
19-⑨	6住	深鉢	擦痕	にぶい褐 7.5YR5/4	織維を含む			
19-⑩	6住	深鉢	擦痕	にぶい黄褐色 10YR5/4	多量に含む			
19-⑪	6住14	深鉢	擦痕	明黄色	10YR6/6	織維を含む		
19-⑫	6住	深鉢	条痕	暗褐色	7.5YR3/3	織維を含む		
19-⑬	6住、6住14	深鉢	擦痕	明黄色	10YR6/6	多量に含む		
19-⑭	6住14	深鉢	擦痕	明褐色	10YR5/6	織維を含む		
20-①	6住19	深鉢	擦痕	暗褐色	7.5YR3/3	織維を含む		
20-②	6住14	深鉢	擦痕	明黄色	10YR6/6	多量に含む		
20-③	6住	深鉢	擦痕	黄褐色	10YR5/6	多量に含む		
20-④	6住、6住19	深鉢	擦痕	黄褐色	10YR6/6	多量に含む		
20-⑤	6住14	深鉢	擦痕	黄褐色	10YR5/8	多量に含む		
20-⑥	6住14	深鉢	擦痕	黄褐色	10YR5/8	多量に含む		
20-⑦	6住14	深鉢	擦痕	黄褐色	10YR5/8	多量に含む		
20-⑧	6住	深鉢	擦痕	褐	10YR4/4	多量に含む		
20-⑨	6住、6住19	深鉢	擦痕	褐	7.5YR4/4	多量に含む		
20-⑩	6住	深鉢	擦痕	褐	7.5YR4/4	多量に含む		
22-①	8住(132十)	深鉢	底部欠損、4單位の突起有り、条痕、外側斜行・内側源部上張	褐	10YR4/4	織維を含む		
22-②	8住	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/8	織維を含む		
22-③	8住	深鉢	条痕	暗褐色	10YR3/3	織維を含む		
22-④	8住	深鉢	条痕	褐	7.5YR4/4	織維を含む		
23-①	10住	深鉢	口縁、口唇下に網格丁目の刻みが入った隆帯、条痕文	褐	7.5YR4/4	織維を含む		補修孔有り
23-②	10住	深鉢	口縁、口唇下に小突起	暗褐色	7.5YR3/1	織維を含む		
24-①	10住	深鉢	条痕	暗褐色	10YR3/3	多量に含む		
24-②	10住	深鉢	条痕	暗褐色	10YR3/3	織維を含む		
24-③	10住	深鉢	海舟縦線文	褐	10YR4/1	織維を含む		
24-④	10住	深鉢	薄手縦線文	暗褐色	10YR4/1	織維を含む		
24-⑤	10住4	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
24-⑥	10住	深鉢	擦痕	暗褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
24-⑦	10住	深鉢	擦痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		

国番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
24-(6)	10住	深鉢	擦紙	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
24-(9)	10住	深鉢	条痕	にぶい黄褐色	10YR5/4	織維を含む		
24-(10)	10住	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
24-(11)	10住 4	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
25-(1)	11住16	深鉢	口縁	黒褐色	10YR3/2	織維を含む		
25-(2)	11住 5	深鉢	口縁、条痕	褐色	10YR3/3	織維を含む		
25-(3)	11住 P1	深鉢	織文	褐色	10YR4/4	織維を含む		
25-(4)	11住11	深鉢	沈縞	褐色	10YR4/4	織維を含む		
25-(5)	11住	深鉢	擦紙	明褐色	10YR3/3	織維を含む		
25-(6)	11住	深鉢	薄手指頭伝直	褐色	10YR4/1	織維を含む		
26-(1)	12住51	条痕		褐色	7.5YR4/6			
26-(2)	12住51	深鉢	口縁、条痕、陰雷格子目の組み	褐色	7.5YR4/6	織維を含む		
26-(3)	12住51	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
26-(4)	12住51	深鉢	条痕	褐色	10YR4/1	織維を含む		
26-(5)	12住24	深鉢	擦紙	黃褐色	10YR5/6	織維を含む		
26-(6)	12住51	深鉢	条痕	黒褐色	10YR3/2	織維を含む		
26-(7)	12住	深鉢	口縁、口縁斜続山形の刻み、薄手指頭伝直織文	にぶい黄褐色	10YR7/3	織維を含む		
26-(8)	12住51	深鉢	薄手指頭伝直織文	にぶい黄褐色	10YR4/3	織維を含む		
26-(9)	12住51	深鉢	条痕	灰褐色	10YR4/2	織維を含む		
26-(10)	12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/6	織維を含む		
26-(11)	12住、12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/3	織維を含む		
26-(12)	12住51	深鉢	条痕	褐色	10YR5/6	織維を含む		
26-(13)	12住51	深鉢	条痕	灰褐色	7.5YR5/2	織維を含む		
26-(14)	12住51-11	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
27-(1)	12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/4	織維を含む		
27-(2)	12住51	深鉢	擦紙	褐色	7.5YR4/6	織維を含む		
27-(3)	12住51	深鉢	条痕	褐色	10YR3/3	織維を含む		
27-(4)	12住、12住51	深鉢	条痕	灰褐色	10YR4/2	織維を含む		
27-(5)	12住51	深鉢	擦紙	明褐色	7.5YR3/6	織維を含む		
27-(6)	12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
27-(7)	12住51	深鉢	薄手指頭伝直織文	黒褐色	7.5YR3/1	織維を含む		
27-(8)	12住51	深鉢	擦紙	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		
27-(9)	12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/4	織維を含む		
27-(10)	12住、12住43	深鉢	繩?	にぶい黄褐色	10YR7/3	多量に含む		
27-(11)	12住、12住46	深鉢	繩?	にぶい黄褐色	10YR7/4	多量に含む		
27-(12)	12住42	羽状織文		褐色	7.5YR4/6	織維を含む		
27-(13)	12住14	織文		黄褐色	10YR5/6	織維を含む		
27-(14)	12住	擦紙		暗褐色	7.5YR3/3	織維を含む		
27-(15)	12住	織文		褐色	7.5YR4/4	織維を含む		
27-(16)	12住51	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/6	織維を含む		
27-(17)	12住51	深鉢	薄手指頭伝直織文	褐色	7.5YR6/8	織維を含む		
31-(1)	17住 No.3 下層	深鉢	条痕	褐色	7.5YR4/4	織維を含む		
31-(2)	17住 No.3 下層	深鉢	薄手指頭伝直織文	明褐色	7.5YR5/6	-		
32-(1)	17住、17住 No.3、17住下層	深鉢	跡番1本が混る。条痕文土器、座帯 上に指頭直痕が數在	褐色	7.5YR4/4	織維を含む		
32-(2)	17住	深鉢	口縁に4單位の突起、口唇と筋感に 座帯、薄手指頭伝直織文	明褐色	7.5YR5/6	織維を含む		

図番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
33-①	18住 F 2 - 1	灰釉陶器皿	ロクロによる水引き、内湾気味に大きく開く	灰白	7.5Y7/1	極わずか砂利を含む	13.0	(2.2)
33-②	18住 3	灰釉陶器皿	ロクロによる水引き	灰白	7.5Y7/2	砂粒を含む	17.5	(4.5)
33-③	18住 D 4	高台村上部器	ロクロによる水引き、高台内側はわずかに盛上がる	灰白	7.5Y7/4	砂粒を含む		
34-①	20住13下	深鉢	口唇下に太い垂帶由上から左下へ斜行する刻み目がつく、柔軟	褐	7.5YR4/6	繊維を含む		
34-②	20住13	深鉢	太い隆脊がめぐり右上から左下へ斜行する刻み目がつく、条痕下部充満している	明褐色	7.5YR5/8	繊維を含む		
34-③	20住15	深鉢	口縁調整は朱痕、8単位の波状口縁、沈線による横方向区画の中に溝つき、波状のモチーフが引かれる	褐	7.5YR4/3	繊維少量		
34-④	20住 2	深鉢	4単位の波状口縁、隆脊2本	に赤い黄褐色	4/3	繊維を含む		
34-⑤	20住 3	深鉢	網部、縦縞、下方が赤變	褐	7.5YR4/6	繊維を含む		
34-⑥	20住上	深鉢	口縁、波状口縁、口唇とその下角等、沈線の横方向、波状のモチーフが引かれる	明褐色	7.5YR5/6	繊維少量		
34-⑦	20住 1 下	深鉢	肥厚口縁、羽状圖文十器	明褐色	7.5YR5/6	繊維を含む		
35-①	20住13下	深鉢	口縁、剥落のはげしい、朱痕	褐	10YR4/4	多量		
35-②	20住13	深鉢	剥落	黄褐色	10YR5/6	繊維を含む		
35-③	20住14	深鉢	柔軟	に赤い黄褐色	10YR4/3	繊維を含む		
35-④	20住13下	深鉢	口縁、太い隆脊がめぐり右上から左下へ斜行する刻み目がつく	明黄褐色	10YR6/6	繊維を含む		
35-⑤	20住14	深鉢	柔軟	に赤い黄褐色	10YR5/3	繊維を含む		
35-⑥	20住14	深鉢	剥落	に赤い黄褐色	10YR5/4	繊維を含む		
35-⑦	20住14下	深鉢	剥落	に赤い黄褐色	10YR5/4	繊維を含む		
35-⑧	20住13	深鉢	剥落	に赤い黄褐色	10YR5/3	繊維を含む		
35-⑨	20住14下	深鉢	剥落、削落著しい	暗褐色	10YR3/3	繊維を含む		
35-⑩	20住14	深鉢	剥落	暗褐色	10YR3/3	繊維を含む		
35-⑪	20住14下	深鉢	剥落	暗褐色	10YR3/3	繊維を含む		
35-⑫	20住14	深鉢	剥落	に赤い黄褐色	10YR5/4	繊維を含む		
35-⑬	20住13	深鉢	剥落、削落著しい	に赤い黄褐色	10YR5/4	繊維を含む		
35-⑭	20住 2, 20住 3	深鉢	剥落	褐	7.5YR4/4	繊維を含む、多量の砂粒を含む		
36-①	20住 3	深鉢	剥落	明褐色	7.5YR5/8	繊維含む		
36-②	20住 2	深鉢	剥落	明褐色	7.5YR5/8	繊維含む		
36-③	20住 3	深鉢	剥落	明褐色	7.5YR5/8	繊維含む		
36-④	20住 3	深鉢	条痕(内側)	明褐色	7.5YR5/8	繊維含む		
36-⑤	20住13	深鉢	条痕(内側)	褐	7.5YR4/6	繊維含む		
36-⑥	20住 2	深鉢	剥落	褐	7.5YR4/4	繊維含む		
36-⑦	20住 2	深鉢	剥落	明褐色	7.5YR5/8	繊維含む		
36-⑧	20住14下	深鉢	剥落、底部	明褐色	7.5YR5/6	繊維含む		
36-⑨	20住	深鉢	圓文	黒褐色	10YR2/2	繊維含む		20住 1 下の中から出土。
37-①	22住 1	深鉢	丸子指捺印痕細縞文	褐	7.5YR4/4	繊維含む		
37-②	22住 1	深鉢	丸子指捺印痕細縞文	褐	7.5YR4/4	少量		
37-③	23住 5	深鉢	山縞、格子条痕斜行する刻み目	に赤い黄褐色	7.5YR5/4	繊維を含む		
37-④	23住	深鉢	柔軟	褐	7.5YR4/6	繊維を含む		

回番号	当十区法記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
37-⑤	23住	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
37-⑥	23住 6	深鉢	条痕 余痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
37-⑦	23住	深鉢	条痕	黒褐色	10YR3/2 繊維を含む			補修孔有り
37-⑧	23住	深鉢	なで、擦痕	褐	10YR4/6 繊維を含む			
37-⑨	23住	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
37-⑩	23住	深鉢	条痕部分に割み有り	黒褐色	10YR3/1 繊維を含む			
37-⑪	23住	深鉢	条痕	黒褐色	10YR3/1 繊維を含む			
37-⑫	23住	深鉢	条痕 余痕	黒褐色	10YR3/1 繊維を含む			
37-⑬	23住	深鉢	条痕	黒褐色	10YR3/2 繊維を含む			
37-⑭	23住	深鉢	条痕	褐	7.5YR4/3 繊維を含む			
37-⑮	23住	深鉢	条痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
38-①	24住 1	深鉢	口縁、隆唇と口唇の間に格子状の周縁	明褐色	10YR3/3 繊維を含む			
38-②	24住 9	深鉢	口縁、隆唇と口唇の間に格子状の周縁	明褐色	10YR6/6 繊維を含む			
38-③	24住 12	深鉢	擦痕	褐	10YR1/4 繊維を含む			
38-④	24住 7	深鉢	背手、擦痕	墨褐色	10YR3/2 繊維を含む			
38-⑤	24住 9	深鉢	薄手指頭圧痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
38-⑥	24住 8	深鉢	薄手指頭圧痕、細縞文	暗褐色	7.5YR3/3 繊維を含む			
38-⑦	24住	深鉢	薄手指頭圧痕、粗縞文	にぶい黄褐色	7.5YR6/4 繊維を含む			
38-⑧	24住 12	深鉢	交差する条痕文	褐	7.5YR6/6 繊維を含む			内側に炭化物 多量に付着
38-⑨	24住 8	深鉢	底部	褐	7.5YR4/6 繊維を含む			
38-⑩	25住 10	深鉢	擦痕	明褐色	7.5YR4/6 繊維を含む			
38-⑪	25住 9	深鉢	擦痕	褐	7.5YR4/4 繊維を含む			
39-①	26住	深鉢	口縁、擦痕著しく不明	橙	7.5YR6/8 繊維を含む			
39-②	26住	深鉢	口縁、口唇底面下に降留有り	明褐色	7.5YR5/8 繊維を含む			
39-③	26住	深鉢	口縁、隆唇部	暗褐色	10YR3/3 繊維を含む			
39-④	26住	深鉢	条痕	褐	10YR4/6 繊維を含む			
39-⑤	26住	深鉢	条痕	褐灰	10YR4/1 繊維を含む			
39-⑥	26住	深鉢	泥縞	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
39-⑦	26住 20	深鉢	泥縞	暗褐色	7.5YR3/3 繊維を含む			
39-⑧	26住 33	深鉢	擦痕	褐	10YR4/4 多量			
39-⑨	26住	深鉢	薄手指頭圧痕底	暗褐色	10YR3/4 繊維を含む			
39-⑩	26住	深鉢	泥縞	褐	7.5YR4/4 繊維を含む			
39-⑪	26住	深鉢	薄手指頭圧痕縞文	黄褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
39-⑫	26住	深鉢	薄手指頭圧痕縞文	にぶい黄褐色	10YR7/4 繊維を含む			
39-⑬	26住	深鉢	薄手指頭圧痕縞文、隆唇付	暗褐色	10YR3/3 繊維を含む			
39-⑭	26住 19	深鉢	薄手指頭圧痕縞文	黄褐色	10YR5/6 繊維を含む			
39-⑮	26住	深鉢	薄手指頭圧痕縞文	褐	7.5YR4/6 繊維を含む			
39-⑯	26住	深鉢	海千指頭圧痕縞文	黒褐色	10YR3/2 繊維を含む			
40-①	26住	深鉢	縞文	にぶい黄褐色	10YR5/4 繊維を含む			
40-②	26住	深鉢	縞文	にぶい黄褐色	10YR5/4 繊維を含む			
40-③	26住 26	深鉢	条痕文	黒褐色	10YR3/1 繊維を含む			
40-④	26住	深鉢	条痕	褐	10YR4/4 繊維を含む			
40-⑤	26住	深鉢	条痕	褐	7.5YR6/8 繊維を含む			
40-⑥	26住	深鉢	擦痕	明褐色	7.5YR5/6 繊維を含む			
40-⑦	26住	深鉢	泥縞縞文	にぶい黄褐色	10YR4/3 繊維を含む			

図番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	船上	口径cm	高さcm	備考
40-⑥	26住	深鉢	純文	墨黒 10YR3/1	織維を含む			
40-⑨	26住	深鉢	肥厚口縁、純文	にぶい黄褐 10YR4/3	織維を含む			
40-⑩	26住	深鉢	捺糸文	黄褐色 10YR6/6	織維を含む			
40-⑪	26住43	深鉢	捺糸文	褐 7.5YR4/3	織維を含む			
40-⑫	26住	深鉢	純文	褐灰 10YR4/1	織維を含む			
41-①	27住 2	深鉢	薄手指頭圧痕	褐 7.5YR4/4	織維を含む			
41-②	27住 E	深鉢	肥厚口縁、条痕	褐 7.5YR4/4	織維を含む			
41-③	27住	深鉢	口縁、口唇部欠損、陸帝左上から右下に割切る刻み口	褐 7.5YR4/4	織維を含む			
41-④	27住 E	深鉢	擦痕	灰黄褐 10YR4/2	織維を含む			補修口有り
41-⑤	27住 E	深鉢	口縁、口唇に格目、薄手指頭圧痕 純文	にぶい黄褐 10YR5/3	織維を含む			
42-①	27住 E	深鉢	擦痕	明褐色 7.5YR3/6	織維を含む			
42-②	27住 E	深鉢	擦痕	黄褐 10YR5/6	織維を含む			
42-③	27住 E	深鉢	全底	暗褐 10YR3/3	織維を含む			
42-④	27住 E	深鉢	沈痕	明褐色 7.5YR5/6	織維を含む			
42-⑤	27住 2	深鉢	薄手指頭圧痕	にぶい黄褐 10YR4/3	織維を含む			
42-⑥	27住 E	深鉢	箒手	明褐色 7.5YR5/6	織維を含む			
42-⑦	27住	深鉢	燃糸	褐 7.5YR4/4	織維を含む			
42-⑧	28住	深鉢	口縁、口唇に斜帶、右七から左下に割み目の中横なで、条板	暗褐 10YR3/3	織維を含む			
42-⑨	28住 E	深鉢	口縁、口唇下に割み目、羽状巻垂、割み目右上から左下	灰黄褐 10YR4/2	織維を含む			補修口有り
42-⑩	28住	深鉢	口縁、口唇下に斜帶	褐 7.5YR4/4	織維を含む			
42-⑪	28住 3	深鉢	口縁半斜帯	明褐色 7.5YR5/6	織維含む			
42-⑫	28住 9	深鉢	条痕	明褐色 7.5YR5/6	織維含む			
42-⑬	28住	深鉢	純文	にぶい黄褐 10YR5/3	織維含む			
42-⑭	28住 10	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR4/3	織維含む			
42-⑮	28住 10	深鉢	擦痕	褐 7.5YR4/3	織維含む			
42-⑯	28住 6	深鉢	半斜竹管	にぶい黄褐 10YR4/3	織維含む			
43-①	29住 1	深鉢	擦痕	褐 7.5YR4/6	織維含む			
43-②	29住	深鉢	条痕	明褐色 10YR6/6	織維含む			
43-③	29住	深鉢	条痕	暗褐 10YR3/3	織維含む			
43-④	29住	深鉢	薄手	黄褐 10YR5/6	織維含む			
43-⑤	29住	深鉢	条板	褐灰 7.5YR4/1	織維含む多量			
43-⑥	30住 1	深鉢	貝殻模様	褐 7.5YR4/4	織維含む多量			
43-⑦	30住 1	深鉢	口縁、口唇部欠損、斜帶右上から左下に割み目	暗褐 7.5YR3/4	織維含む			
43-⑧	30住 1	深鉢	貝殻模様	褐 7.5YR4/4	織維含む多量			
43-⑨	30住	深鉢	彫刻、平行及び波状の斜十相點付け、薄手指頭圧痕、細縞文	灰黄褐 10YR4/2	-			
43-⑩	30住	深鉢	純文	灰黄褐 10YR5/2	織維含む多量			
44-①	31住 7	深鉢	口縁、斜十相點付け、薄手指頭圧痕、波状縞模文	黒褐 10YR2/2	織維含む			
44-②	31住 35	深鉢	口縁、口唇に斜上波状結節、薄手指頭圧痕、波状縞模文	黒褐 10YR3/2	織維含む			
44-③	31住 11	深鉢	薄手指頭圧痕純文	黒褐 10YR3/2	織維含む			
44-④	31住 23	深鉢	薄手指頭圧痕	黒褐 10YR3/2	織維含む			

調査番号	出上区注記	器種	採法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
44-⑤	31住	深鉢	薄手断頭灰、波状縦線	黒褐	10YR2/2	織維含む		
44-⑥	31住 NE	深鉢	薄手断頭灰	黒褐	10YR3/2	織維含む		
44-⑦	31住 SW	深鉢	薄手断頭灰	褐	10YR4/4	織維含む		
44-⑧	31住17	深鉢	波状U線内外条痕文	褐	7.5YR4/4	織維含む		
44-⑨	31住	深鉢	条痕	黒褐	7.5YR3/1	織維含む		
45-①	31住 SW	深鉢	口縁、口唇に削み目、口唇下に断面 三角の隆起、条痕	褐	7.5YR4/4	織維含む		
45-②	31住17	深鉢	口縁、口唇外側に削み目、断面二角 の隆起状に削み目、なで	暗褐	10YR3/4	ほとんど含 まず		
45-③	31住 SW	深鉢	口縁、口唇欠損、薄手断頭灰供	褐	7.5YR4/4	ほとんど含 まず		
45-④	31住	深鉢	口縁、口唇下に隆起、条痕	褐	7.5YR4/4	ほとんど含 まず		
45-⑤	31住	深鉢	口縁、口唇外側に削み目、口唇直 下に隆起有	褐	7.5YR4/3	織維含む		
45-⑥	31住	深鉢	口縁、口唇部欠損、隆起	明黄褐	10YR6/6	織維含む		
45-⑦	31住 SW	深鉢	脚部、朱痕、なで	褐	7.5YR6/6	織維含む		
45-⑧	31住 SW	深鉢	条痕	褐	7.5YR4/3	織維含む		
45-⑨	31住18	深鉢	条痕	褐	10YR4/4	織維含む		
45-⑩	31住19	深鉢	条痕	黒褐	10YR3/2	織維含む		
45-⑪	31住	深鉢	条痕			織維含む		
45-⑫	31住 SW	深鉢	条痕、なで	褐	7.5YR4/4	織維含む		
45-⑬	31住	深鉢	全痕			織維含む		
45-⑭	31住	深鉢	条痕			織維含む		
45-⑮	31住34	深鉢	条痕			暗赤褐	5YR2/6	織維含む
45-⑯	31住 NE	深鉢	条痕			暗褐	10YR3/2	織維含む
45-⑰	31住	深鉢	条痕			炭灰	10YR4/1	織維含む
45-⑱	31住 5	深鉢	条痕			暗褐	10YR3/3	織維含む
45-⑲	31住 SW	深鉢	条痕			暗褐	10YR3/3	多い
45-⑳	31住 SW	深鉢	擦痕			暗褐	7.5YR3/4	多い
45-㉑	31住 SW	深鉢	沈痕			にぶい青褐	10YR5/4	織維含む
45-㉒	31住 SW	深鉢	条痕			黒褐	10YR3/2	織維含む
45-㉓	31住	深鉢	LI縁、LI唇欠損横走擬走する隆唇、 隆唇状に削み目、擬走する隆唇系部 に階級帶状模			明黄褐	10YR6/6	織維含む
45-㉔	31住 SW	深鉢	擦痕			暗灰	10YR4/1	織維含む
45-㉕	31住 SW	深鉢	擦痕			褐	7.5YR4/4	織維含む
45-㉖	31住 SW	深鉢	擦痕			褐	7.5YR4/4	織維含む
45-㉗	31住 8	深鉢	擦痕			褐	7.5YR4/3	織維含む
45-㉘	31住	深鉢	沈痕			明黄褐	10YR6/6	織維含む
45-㉙	31住21	深鉢	口縁、朱痕上擦痕			黒褐	10YR2/3	織維含む
45-㉚	31住24	深鉢	擦余文			にぶい青褐	10YR4/3	織維含む
45-㉛	31住23	深鉢	擦痕			褐	7.5YR4/6	織維含む
45-㉜	31住13	深鉢	薄手断頭灰、網線文			褐	7.5YR4/4	織維含む
45-㉝	31住13	深鉢	擦痕			にぶい赤褐	5YR4/4	織維含む
45-㉞	31住 7	深鉢	条痕			暗褐	7.5YR3/4	織維含む
46-①	31住26	深鉢	条痕			灰褐	7.5YR5/2	多量
46-②	31住 4	深鉢	LI縁、口唇部に条痕、隆唇以下剥落			暗灰	10YR4/1	多量
46-③	31住23	深鉢	条痕			暗褐	7.5YR5/6	多量
46-④	31住24	深鉢	条痕			灰褐	7.5YR3/2	多量
46-⑤	31住 SW	深鉢	沈痕			明褐	7.5YR3/6	織維含む

回収番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	断土	口径cm	高さcm	備考
46-⑥	31住43	深鉢	条痕	にぶい黄褐色 10YR5/3	繊維含む			
46-⑦	31住 SW	深鉢	縦文	黒褐色 10YR4/1	多量			
46-⑧	31住	深鉢	羽状縞文	にぶい黄褐色 10YR5/4	繊維含む			
46-⑨	31住 6	深鉢	羽状縞文	黄褐色 10YR5/6	繊維含む			
46-⑩	31住 SW	深鉢	縦文	黒褐色 10YR3/2	多量			
46-11	31住 6	深鉢	縦文	黒褐色 10YR3/2	繊維含む			
46-12	31住 NE	深鉢	口縁、縦文	黒褐色 10YR3/2	繊維含む			
46-13	31住 SW	深鉢	縦文	黒褐色 10YR3/2	繊維含む			
46-14	31住 7	深鉢	羽状縞文	褐 7.5YR4/3	繊維含む			
46-15	31住 7	深鉢	縦文	褐 7.5YR6/6	繊維含む			
46-16	31住14	深鉢	羽状縞文	にぶい黄褐色 10YR5/4	繊維含む			
46-17	31住 7	深鉢	縦文	暗褐色 10YR3/3	多量			
46-18	31住	深鉢	縦文	黄褐色 10YR5/6	繊維含む			
46-19	31住 9	深鉢	縦文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46-20	31住 SW	深鉢	縦文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46-21	31住 SW	深鉢	縦文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46-22	31住 NE	深鉢	縦文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46-23	31住14	深鉢	縦文	暗褐色 10YR3/4	繊維含む			
46-24	31住 SW	深鉢	羽状縞文	にぶい黄褐色 10YR3/3	繊維含む			
46-25	31住	深鉢	縦文	褐 7.5YR4/3	繊維含む			
46-26	31住23	深鉢	縦文	明褐色 7.5YR5/6	多量			
46-27	31住	深鉢	縦文	黒 7.5YR2/1	多量			
46-28	31住	深鉢	羽状縞文	にぶい黄褐色 10YR6/3	繊維含む			
46-29	31住 8	深鉢	縦文	明褐色 10YR6/6	繊維含む			
46-30	31住 SW	深鉢	縦文	にぶい黄褐色 10YR5/3	繊維含む			
48-①	34住16	深鉢	口縁、両手指壓印痕、波状口縁、柄上縁2本貼り付、口唇熱土絆の組み目	にぶい水褐色 45YR4/4	繊維含む			
48-②	34住11	深鉢	L1縁、擦痕	黒褐色 10YR3/2	多量			
48-③	34住 7	深鉢	条痕	羽褐色 7.5YR5/6	繊維含有			
48-④	34住	深鉢	条痕	褐 7.5YR4/3	繊維含有			
48-⑤	34住	深鉢	条痕	褐 7.5YR4/3	繊維含有			
48-⑥	34住11	深鉢	条痕	黒褐色 10YR3/2	繊維含有			
48-⑦	34住21	深鉢	比較	にぶい黄褐色 10YR6/3	繊維含有			
48-⑧	34住	深鉢	擦痕	にぶい水褐色 5YR4/4	繊維含有			
48-⑨	34住15	深鉢	縦文	明黄褐色 10YR6/6	繊維含有			
48-10	34住	深鉢	縦文	明黄褐色 10YR6/8	繊維含有			
48-11	34住24	深鉢	擦痕	黄褐色 10YR5/6	多量			
48-12	34住	深鉢	擦条	黒褐色 10YR3/1	繊維含有			
48-13	34住16	深鉢	縦文	にぶい黄褐色 10YR5/3	繊維含有			
48-14	34住16	深鉢	縦文	にぶい黄褐色 10YR5/3	繊維含有			
48-15	34住	深鉢	縦文	黒褐色 10YR5/1	繊維含有			

図番号	出土区注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
48-⑯	34住II	深鉢	縦文	にぶい黄褐色 10YR4/3	繊維含有			
48-⑰	34住16	深鉢	縦文	灰黄褐色 10YR4/2	繊維含有			
48-⑯	34住II	深鉢	羽状縞文	褐 10YR4/4	繊維含有			
48-⑰	34住II	深鉢	羽状縞文	褐 10YR4/6	繊維含有			
48-⑱	34住17	深鉢	縦文	明黄褐色 10YR6/6	繊維含有			
48-⑲	34住24	深鉢	縦文	にぶい黄褐色 10YR4/3	繊維含有			
49-①	35住1、3	灰釉陶器 段皿	口縁による水引き、 台面に凹部が残る、底部から斜面的に開き、段が付いた所から若干立上る	胎上10YR8/灰白 釉 2.5YR8/2灰白	砂粒を含む	13.0	2.2	釉素液剥け
49-②	37住E	深鉢	口縁、斜行する羅帯のトを企図する、其紋痕跡	にぶい黄褐色 10YR5/4	繊維含む			
49-③	37住W	深鉢	口縁、口唇部欠損、羅帯状格子日の割み	黒褐色 10YR5/1	繊維含む			
49-④	37住E	深鉢	条痕	にぶい褐 7.5YR5/3	繊維含む			
49-⑤	37住E	深鉢	羽状縞文	灰褐色 7.5YR4/2	繊維含む			
55-②	54土	深鉢	口縁、口唇部欠損、格子日の割みのある降帯、条痕文	にぶい黄褐色 10YR4/2	多量			
55-③	54土	深鉢	筋節羅帶、条痕文	明褐色 7.5YR5/6	ごく少量			55-⑤と同一
55-④	54土3	深鉢	条痕文	明褐色 7.5YR5/8	繊維含む			
55-⑤	54土	深鉢	筋節羅帶、条痕文	明褐色 7.5YR6/6	ごく少量			55-③と同一
55-⑥	54土2	深鉢	口縁、降帯付、条痕文	にぶい黄褐色 10YR5/4	繊維含む			
55-⑦	54土	深鉢	口縁、口唇に刻み有、低い壁面に格子日の刻み目	褐 7.5YR4/3	多量			
55-⑧	54土4	深鉢	羽状縞文	黄褐色 10YR5/6	繊維含む			
55-⑨	54土	深鉢	口縁、口唇からわずかに垂下する小隆帯有り、なで	黒褐色 10YR3/2	繊維含む			
55-⑩	54土	深鉢	口縁、筋節羅帶	褐 7.5YR6/8	ほんどう含まず			
55-⑪	54土	深鉢	条痕	黄褐色 10YR5/6	繊維含む			
55-⑫	54土	深鉢	厚手凸腹陶灰釉陶器文	にぶい黄褐色 10YR6/3	繊維含む			
60-①	179上	深鉢	厚手凸腹灰縞織文、貼付けの軸十、柄は筋線波状で溢る	にぶい黄褐色 10YR6/3	繊維含む			
60-②	185土	深鉢	厚手凸腹灰縞、貼付け軸十上、斜行筋節羅帶	灰褐色 10YR5/2	繊維含む			
61-①	207土	深鉢	条痕	にぶい黄褐色 10YR7/4	繊維含む			
64-①	F11	深鉢	灰青縞文土器、羽状を呈す、口唇も 縞文有	灰黄褐色 10YR6/2	繊維含む			
64-②	S-Q	深鉢	口縁、降帯、口唇欠損、浅い格子日の割み	にぶい黄褐色 10YR4/3	多量			
64-③	K-9	深鉢	波状口縁、带帯断面三角、なで、擦痕	褐 10YR4/1	繊維含む			
64-④	1600-1	深鉢	口縁、口唇羅帶貼付け	明黄褐色 10YR7/6	繊維含む			
64-⑤	1896-N	深鉢	条痕、沈線	明褐色 7.5YR5/8	繊維含む			
64-⑥	9-O	深鉢	条痕、粘土縁、貝殻模様	褐 7.5YR4/6	繊維含む			
64-⑦	8K	深鉢	条痕、低い降帯状を貝殻模様	にぶい赤褐色 5YR4/3	繊維含む			
64-⑧	J12	深鉢	口縁、降帯付	明赤褐色 10YR7/6	繊維含む			
64-⑨	J8	深鉢	条痕	黄褐色 10YR5/6	多量			
64-⑩	P-0	深鉢	沈線	にぶい黄褐色 10YR4/3	多量			
64-⑪	8K	深鉢	沈線	明黄褐色 10YR6/6	繊維含む			
64-⑫	K-9	深鉢	条痕	明黄褐色 10YR6/6	多量			

固有番号	出土品注記	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	口径cm	高さcm	備考
64-⑩	K-9	深鉢	朱痕	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
64-⑪	6-V	深鉢	擦痕	10YR5/4	多量			
64-⑫		深鉢	条痕	黒褐色	鐵錫合む			
64-⑬	K-9	深鉢	沈線	褐	7.5YR4/4	鐵錫合む		
64-⑭	2Z	深鉢	沈線	褐灰	10YR4/1	多量		
64-⑮	8K	深鉢	口縁、薄手指頭圧模、細線文、口唇に交差する沈線	褐	7.5YR4/4	鐵錫合む		
64-⑯	L-9	深鉢	薄手指頭圧模、口唇下に波状唇唇	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
				10YR5/4				
64-㉑	K9	深鉢	口縁、交差する沈線、内領貝殻条痕	褐	7.5YR4/3	鐵錫合む		
64-㉒	K-9	深鉢	口縁、口唇部欠損	褐	7.5YR6/6	鐵錫合む		
64-㉓	8K	深鉢	薄手指頭圧模細線文	明褐色	7.5YR5/6	鐵錫合む		
64-㉔	6-L	深鉢	薄手指頭圧模細線文	褐	10YR4/4	鐵錫合む		
64-㉕	8K	深鉢	薄手指頭圧模細線文	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
				10YR6/3				
64-㉖	5-J	深鉢	薄手指頭圧模細線文	明赤褐色	SYR5/6	鐵錫合む		
64-㉗	K8	深鉢	薄手指頭圧模細線文	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
				10YR7/3				
64-㉘	8K	深鉢	薄手指頭圧模細線文	灰黃褐色	10YR4/2	鐵錫合む		
64-㉙	8K	深鉢	薄手指頭圧模細線文	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
				10YR5/3				
64-㉚	P-9	深鉢	薄手指頭圧模細線文	灰黃褐色	10YR5/2	鐵錫合む		
64-㉛	P-9	深鉢	薄手指頭圧模細線文	にぶい黄褐色	鐵錫合む			
				10YR4/3				
64-㉜	J2	深鉢	口縁、次第底部から盛下する隆背、横模様	褐	7.5YR4/4	多量		
64-㉝	J-9	深鉢	口縁、肥広、純文	黃褐色	10YR5/6	多量		
64-㉞	8K	深鉢	口縁、口唇外に聞く、純文	明褐色	7.5YR5/6	多量		
64-㉟	K9	深鉢	擦糸	明褐色	7.5YR5/8	多量		
64-㉟	K-9	深鉢	純文	褐	7.5YR6/8	鐵錫合む		
64-㉟	2N	深鉢	羽状繩文	明黃褐色	10YR6/6	鐵錫合む		
64-㉟	K-9	深鉢	貝殻条痕	褐	7.5YR6/6	鐵錫合む		
64-㉟	6-V	深鉢	純文	褐	7.5YR7/6	鐵錫合む		
70-①	表	深鉢	口縁、隆背付	褐	7.5YR4/3	多量に含む		
70-②	表	深鉢	口縁、隆背付、直行する刻み	褐	7.5YR4/3	多量に含む		
70-③	表	深鉢	口縁、口唇外側に聞く、隆背右にから左下に斜行する尾み目沈線	褐	7.5YR4/3	多量		
70-④	表	深鉢	滑手細繩文	褐	7.5YR4/3	多量		
70-⑤	表	深鉢	山縁、口唇剥落、条痕	褐	7.5YR4/3	多量		
70-⑥	表	深鉢	口縁、隆背付、擦糸	褐	7.5YR4/3	多量		
70-⑦	表	浅鉢	内側に沈線	褐	10YR4/4	鐵錫合む		後期
70-⑧	表	浅鉢	薄手指頭圧模細線文	暗褐色	10YR3/3	鐵錫合む		
70-⑨	表	浅鉢	横線の大目	暗褐色	10YR3/4	-		
70-⑩	清表採	肩	大目	黑	10YR2/1	-		

③石器分類表

図番号	出土区件記	分類	石 材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備考
11-⑨	1住6	刃部調整の 有る縛	緑色岩	11.28	9.88	2.94	336.8	ほぼ完形	
14-⑩	3住b	石鎚	黒曜石	1.83	1.82	0.34	0.8	ほぼ完形	片脚欠損、頭部衝撃剝離有り
14-⑪	3住a	石鎚	黒曜石	1.62	1.2	0.32	0.5	完形	
14-⑫	3住14	両整削の 有る剥片	緑色岩	7.4	8.92	2.38	104.5		
16-⑬	4住E	石鎚	黒曜石	3.3	1.77	0.42			
16-⑭	4住f	石鎚	黒曜石	2.34	1.72	0.46	1.0	ほぼ完形	節理面か?
16-⑮	4住a	石鎚	黒曜石	1.76	1.5	0.45	0.7	ほぼ完形	
16-⑯	4住b	石鎚	黒曜石	1.83	1.43	0.38	0.6	ほぼ完形	節理面か?
16-⑰	4住e	石鎚	黒曜石	1.39	1.5	0.38	0.5	ほぼ完形	
16-⑱	4住d	石鎚	黒曜石	2.13	1.17	0.4	0.8	頭部わずかに欠損	両脚欠損
16-⑲	4住-c	石鎚	黒曜石	2.34	1.56	0.47	1.0	片脚欠損	
17-⑳	5住47	刃部調整の 有る縛	緑色岩	13.32	10.37	6.72	1145.0		
17-㉑	5住	打製石斧	玄武岩	12.62	5.2	1.82	155.2		
17-㉒	5住46	四石	安山岩	11.0	7.5	5.0	600		
17-㉓	5住	石鎚	黒曜石	3.66	0.9	0.75	1.9	完形	
18-①	5住	固定石皿	安山岩	44.4	27.6	8.7	1850		
18-②	5住49	固定石皿	安山岩	36.5	26.9	10.0	1470		
20-㉔	6住2下	石鎚	黒曜石	1.70	1.64	0.3	0.5	完形	
20-㉕	6住a	石鎚	黒曜石	1.46	1.62	0.28	0.5	ほぼ完形	微細剝離痕有り
20-㉖	6住c	石鎚	黒曜石	1.76	1.04	0.53	0.8	ほぼ完形	
20-㉗	6住b	石鎚	黒曜石	2.23	1.68	0.46	1.0	ほぼ完形	頭部わずかに欠損
20-㉘	6住7	剥離痕の 有る縛	砂岩	8.5	5.4	4.1	225.3		
20-㉙	6住	剥離状器	黒曜石	4.01	3.62	1.2	16.9		
20-㉚	6住27	四石	安山岩	7.82	7.35	3.34	280		
22-㉛	8住	石鎚	黒曜石	2.82	1.20	0.8	1.9		
22-㉜	8住5	刃部調整の 有る縛	緑色岩	9.7	9.9	5.45	670		
22-㉝	8住7	固定石皿	安山岩	3.86	2.8	1.15	1370		
23-㉞	9住	石鎚	黒曜石	1.48	1.55	0.31	0.4	完形	
24-㉟	10住1	四石	緑色岩	8.83	8.01	3.36	440		
25-㉟	11住	縛器	黒曜石	3.80	3.75	1.42	17		
25-㉟	11住1	固定石皿	安山岩	41	33.5	9.0	1800		
28-㉟	12住12	磨石	砂岩	9.64	10.18	2.94	339.9		
28-㉟	12住45	四石	安山岩	13.0	9.7	4.95	830		
28-㉟	12住1	固定石皿	安山岩	34.3	26.0	5.8	7900		
29-㉟	14住	石鎚	黒曜石	2.20	1.56	0.44	1.1	完形	
30-㉟	15住②	四石	安山岩	12.52	9.91	4.98	890		
30-㉟	15住1	固定石皿	安山岩	32.3	32.0	7.5	9100		
31-㉟	16住	石鎚	黒曜石	2.06	1.18	0.44	0.6	ほぼ完形	頭部わずかに欠損
32-㉟	17住35	石鎚	黒曜石	2.02	1.4	0.39	0.9	ほぼ完形	頭部わずかに欠損
32-㉟	17住	固定石皿	安山岩	30.1	24.0	8.8	7800		
36-㉟	20住13	石鎚	黒曜石	2.55	1.98	0.50	1.5	片脚欠損	
36-㉟	20住9	固定石皿	安山岩	41.9	27.3	6.3	1070		
37-㉟	22住	両整削の 有る縛	緑色岩	17.0	4.35	2.78	284		
37-㉟	23住	石鎚	黒曜石	2.14	1.73	0.61	2.0	ほぼ完形	
37-㉟	22住	石鎚	黒曜石	1.80	1.58	0.36	0.7	ほぼ完形	頭部欠損

番号	出土地記	分類	石 材	最大長cm	最大幅cm	最小厚cm	重量g	保存状態	備考
38-⑩	24件	石錐	黒曜石	1.94	1.53	0.48	1.1	両側欠損	
38-11	25件13	磨製石斧		4.0	3.12	0.89	16.4	上部欠損	
38-12	25件	剥離痕のある 石錐	変成岩	11.86	9.0	3.75	510		
38-13	25件5	凹石	安山岩	8.85	6.28	2.74	180		
40-14	26件	石錐	安山岩	1.52	1.24	0.36	0.5	ほぼ完形	
40-15	26件	石錐		5.6	1.8	0.8	7.4	完形	
40-16	26件a	門石	安山岩	8.55	7.24	4.03	336.4		
40-17	26件12	凹石	安山岩	9.18	6.62	3.32	280		
40-18	26件b	門石	安山岩	12.77	7.85	3.34	494		
42-④	27件	石錐	黒曜石	1.76	0.9	0.4	0.6	ほぼ完形	
42-⑤	27件	磨製石斧	青色 変成岩	1.98	1.82	0.85	2.4		
42-⑥	27件1	特殊形状石	安山岩	11.45	8.7	6.06	900		
47-11	31件c	石錐	黒曜石	1.53	1.18	0.42	0.7	東・脚部欠損	
47-12	31件16	石錐	黒曜石	2.32	1.65	0.44	1.1	ほぼ完形	
47-13	31件b	石錐	黒曜石	1.42	1.06	0.38	0.5	完形	
47-14	31件	石錐	黒曜石	2.03	1.04	0.64	1.2	ほぼ完形	
47-15	31件a	石錐	黒曜石	2.9	2.0	0.9	4.5	ほぼ完形	
47-16	31件	磨製石斧	変成岩	2.49	2.4	1.0	4		
47-17	31件2	磨製石斧	変成岩	4.65	2.81	0.95	20.3	ほぼ完形	
47-18	31件3	凹石	安山岩	11.88	6.0	3.28	286.8		
47-19	31件	門石	安山岩	9.03	7.25	4.35	345.0		
47-20	31件39	凹石	安山岩	10.73	6.5	4.12	364.7		
47-21	31件42	門石	安山岩	14.72	7.11	5.45	295.0		
47-22	31件10	凹石	綠色岩	12.54	9.18	3.41	650		
48-12	34件12-b	門石	砂岩	12.16	7.02	4.65	650	上下裏面欠損	擦而有
48-13	34件12-a	凹石	安山岩	9.82	7.80	4.78	492.0		
50-①	F3	器物	黒曜石	2.75	2.3	1.2	6.3		
51-①	焼土5	石錐	黒曜石	2.42	1.47	0.6	1.4	ほぼ完形	
52-①	16F	石錐	黒曜石	2.80	1.06	0.56	1.4		
53-①	2 F sc	石錐	黒曜石	3.15	2.0	0.8		古い剥離面	
53-②	2 F sb	石錐	黒曜石	1.82	1.40	0.33	0.6	先端部、衝撃剥離	
53-③	2 F sm	石錐	黒曜石	2.33	1.81	0.44	1.3	ほぼ完形	
53-④	9 F 1	打製石斧	緑色岩	12.0	8.4	4.15	412.0	下部欠損	
53-⑤	9 F 3	調整痕のある 剥片	緑色岩	14.12	10.43	2.52	385.0		
53-⑥	9 F 2	調整痕のある 剥片	緑色岩	10.18	11.8	2.3	267.7		
53-⑦	42F	打製石斧	緑色岩	8.65	4.25	1.28	25		
56-①	58F	調整痕のある 扁平円錐	-	11.46	6.0	1.25	11.19		
61-②	219エ	調整痕のある 扁平円錐	-	9.58	11.7	1.65	222.2		
62-①	清5	調整痕のある 石錐	緑色岩	8.6	6.92	3.93	307.3		
62-②	清5	調整痕のある 剥片	緑色岩	11.3	7.57	1.66	172.2		
63-①	J-11 カク足	ナイフ形石 器	黒曜石	5.01	3.42	0.7	9.5		
65-②	K 9 カク足	器物	黒曜石	4.95	3.03	0.95	13.4		
65-③	J 7	石錐	黒曜石	1.81	1.35	0.42	0.9	完形	
65-④	200-13	石錐	黒曜石	2.73	1.80	0.56	2.0	ほぼ完形	
65-⑤	2-O	石錐	黒曜石	1.9	1.38	0.38	0.6	完形	

国番号	出土区注記	分類	石材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備考
65-(6)	1601	石鐵	黒曜石	2.04	1.47	0.32	0.8	ほぼ完形	
65-(7)	NWa	石鐵	黒曜石	2.05	1.68	0.29	0.6	ほぼ完形	
65-(8)	2K	石鐵	黒曜石	1.50	1.15	0.34	0.4	脚部欠損	
65-(9)	9-P	石鐵	黒曜石	2.24	1.67	0.35	0.8	完形	
65-(10)	2Nb	石鐵	黒曜石	2.0	1.57	0.43	0.9	ほぼ完形	
65-(11)	12トレ N	石鐵	黒曜石	1.73	1.44	0.34	0.5	脚部欠損	
65-(12)	G12-13	石鐵	黒曜石	1.56	1.34	0.22	0.3	脚部欠損	
65-(13)	F-8	石鐵	黒曜石	1.77	1.32	0.34	0.7	頭・脚部欠損	
65-(14)	3N	石鐵	黒曜石	1.72	1.10	0.39	0.4	脚部欠損	
65-(15)	K-9	石鐵	黒曜石	2.42	1.50	0.40	0.9	脚部欠損	
65-(16)	NWb	石鐵	黒曜石	2.20	1.20	0.39	0.7		
65-(17)	2Na	石鐵	黒曜石	2.02	1.36	0.32	0.6	脚部欠損	
65-(18)	E-8	石鐵	黒曜石	2.25	1.56	0.53	1.2	脚部欠損	
65-(19)	I-3	石鐵	黒曜石	2.65	0.94	0.66	1.5	完形	
65-(20)	9Q	石匙	黒曜石	2.95	5.00	0.74			
65-(21)	J7	石鍬	黒曜石	2.30	1.08	0.46	1.0		
65-(22)	5J	石鍬	黒曜石	3.13	1.32	0.71	2.4		
65-(23)	I-14	石匙		4.18	5.06	0.93	16.5		
66-(1)	F8	調整板の有る剝片	緑色岩	3.55	11.80	1.40	55.2		
66-(2)	K10-B		緑色岩	5.66	8.48	0.75	49.4		
66-(3)	K10-C		緑色岩	6.62	10.20	1.46	101.9		
66-(4)	8P-a	調整板の有る剝片	変成岩	9.14	7.60	2.10	116.1		
66-(5)	8P	調整板の有る剝片	変成岩	9.77	4.82	1.30	78.8		
66-(6)	P-6	調整板の有る剝片	変成岩	13.74	8.90	3.00	410		
66-(7)	2P	横刃型石斧	緑色岩	11.67	5.12	1.73	116.9		
66-(8)	K10-A	調整板の有る剝片	緑色岩	10.08	6.58	1.80	142.5		
66-(9)	2K	打製石斧	泥板岩	14.25	7.53	2.10	239.8		
67-(1)	5N	打製石斧	泥板岩	13.33	5.58	2.48	200.6		
67-(2)	J-8	研石	緑色岩	20.35	4.45	4.04	610.0	後に調整板有り	
67-(3)	6-P	調整板の有る剝片	変成岩	11.95	8.15	3.30	414.0		
67-(4)	I-5	調整板の有る剝片	砂岩	16.22	4.86	3.34	27.45		
67-(5)	9Q	凹石	安山岩	11.8	7.2	3.20	295.8	岩石を転用したもの	
67-(6)	8P-6	ハンマー	緑色岩	10.5	4.82	2.24	167.0		
67-(7)	5N	調整板の有る剝片	泥板岩	11.83	14.66	3.50	790.0		
68-(1)	6-O	調整板の有る剝片	緑色岩	12.5	6.36	2.68	279.8		
68-(2)	9N-C	凹石	安山岩	11.02	9.80	4.15	520		
68-(3)	5-O	調整板の有る剝片	砂岩	13.69	6.87	2.9	335.8		
68-(4)	9N-b	凹石	安山岩	12.98	9.30	4.30	540		
68-(5)	6P-a	凹石	安山岩	11.08	7.80	3.83	4.92		
68-(6)	8P-c	凹石	安山岩	11.10	8.20	3.10	357.5		
68-(7)	9N-b	凹石	安山岩	9.67	9.10	3.90	385.5		
68-(8)	9N-a	凹石	安山岩	9.44	7.94	3.46	310.6		
69-(1)	L-10	凹石	安山岩	9.14	9.48	3.10	336.1		
69-(2)	8P-6	凹石	安山岩	9.50	5.27	4.00	236.8		

図番号	出土区注記	分類	石 材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備 考
69-③	5-N-A	凹石	安山岩	12.18	9.32	4.58	640g		
69-④	1-12	凹石	安山岩	12.53	5.70	4.82	394.7		
69-⑤	6P-b	凹石	安山岩	11.15	8.86	4.42	471	上部欠損	
69-⑥	K-11	凹石	安山岩	10.58	4.98	2.95	196.7	I部表面欠損	
69-⑦	8P-a	凹石	安山岩	9.04	10.05	5.4	62.0	上部欠損	
69-⑧	9-O	凹石	綠色岩	10.77	6.48	4.16	366.8	I部欠損	一部に剥離痕有り
70-⑨	表a	石鏡	黒曜石	1.93	1.98	0.46	1.1	ほぼ完形	
70-⑩	表	石鏡	黒曜石	1.80	1.36	0.27	0.6	先端部から左側縁にかけて欠損	
70-⑪	表b	石鏡	黒曜石	1.22	1.56	0.25	0.3	先端部欠損	
70-⑫		石鏡	黒曜石	3.05	0.85	0.51	1.1		
70-⑬	表	石鏡	黒曜石	3.00	2.47	1.25	7.1		

④黒耀石出土量表

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1住居	30.1	48				
2住居	135.3	39				
3住居	1105.4	224	チャート	22.6	2	
4住居	720.4	147	チャート	1.4	1	
5住居	522.4	117				
6住居	294.4	76	チャート	50.9	1	
7住居	22.0	8				
8住居	137.3	27				
9住居	52.5	11				
10住居	137.1	44				
11住居	266.3	16				
12住居	101.4	31				
13住居	4.2	2				
14住居	2.4	2				
15住居	76.1	1				
16住居	0.6	1				
17住居	344.8	100				
18住居	8.9	3				
19住居	2.8	2				
20住居	72.1	23				
22住居	54.9	10				
23住居	45.2	22				
24住居	192.4	52				
25住居	60.5	6				
26住居	368.9	99	チャート	1.0	1	
27住居	302.7	74	チャート	4.4	2	
28住居	95.7	25				
29住居	27.8	16				
30住居	69.0	29				
31住居	618.6	196				
34住居	155.6	55				
37住居	100.1	5				
38住居	1.7	1				
39住居	1.8	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
2土坑	163.5	62				
10上坑	6.3	2				
11土坑	9.6	1				
13土坑	3.9	1				
15土坑	1.8	2				
16土坑	22.2	3				
18土坑	28.6	3				
19土坑	36.0	3				
36上坑	26.0	2				
52土坑	39.6	11				
54上坑	69.4	17				
75土坑	4.3	2				
99土坑	18.1	2				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
100上坑	13.2	1				
106土坑	3.8	1				
131土坑	3.6	2				
134土坑	2.2	1				
141土坑	2.7	1				
143土坑	3.5	1				
148土坑	5.3	2				
175土坑	17.6	8				
178土坑	2.0	1				
182土坑	0.9	1				
185土坑	5.0	3				
188土坑	1.6	1				
219土坑	24.8	8				
226土坑	22.2	3				
227土坑	11.4	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1焼土	43.4	12				
2焼土	53.7	16				
3焼土	107.2	37				
4焼土	16.9	8				
5焼土	5.6	3				
6焼土	92.1	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
集石仰	11.3	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1卵	95.6	1				
1溝2	20.5	8				
1溝4	5.2	2				
1溝5	23.8	6				
1溝6	15.9	4				

グリッド	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
E10	9.9	4				
F8	201.1	67				
F11	29.3	2				
G5	3.5	1				
G10	25.2	11				
G11	134.0	18				
G12-13	54.6	9				
G15	17.7	1				
H7	6.9	1				
H19	121.6	37				
H13	4.8	1				
I3	65.6	5				

グリッド	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
I 4	91.2	14				
I 5	144.7	36				
I 11	12.9	4				
II 4	30.4	2	チャート	4.5	1	
J 5	50.6	10				
J 6	68.1	16				
J 7	254.2	74				
J 8	117.0	28				
J 9	43.8	12				
J 10	47.8	20	チャート	8.0	1	
J 11	58.4	13				
J 12	68.5	15				
K 1	16.2	2				
K 2	66.2	20				
K 8	169.1	43				
K 9	386.9	34				
K 11	251.4	59				
K 13	44.9	5				
L 2	41.7	6				
L 4	53.2	23				
L 9	90.8	30				
L 10	18.0	6				
M 5	76.8	36				
M 10	49.4	9				
N 2	71.9	18				
N 3	52.6	14				
N 7	15.3	1				
N 9	1.0	1				
N 10	306.4	65				
O 2	92.9	48				
O 6	45.4	13				
O 7	19.8	1				
O 9	100.4	22				
P 2	22.6	12				
P 6	82.8	25				
P 8	65.2	13				
P 9	318.2	84				
Q 2	30.0	11				
Q 7	7.9	1				
Q 8	116.4	25				
Q 9	4.8	1				
W - 2	6.1	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1600 I 番地	620.1	20				
1601 番地	0.8	1				
1614-1 番地	1319.1	438				
200-13 番地	1.9	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
2トントンチ	5.1	4				
29トントンチ	30.1	1				
55トントンチ	36.6	11				

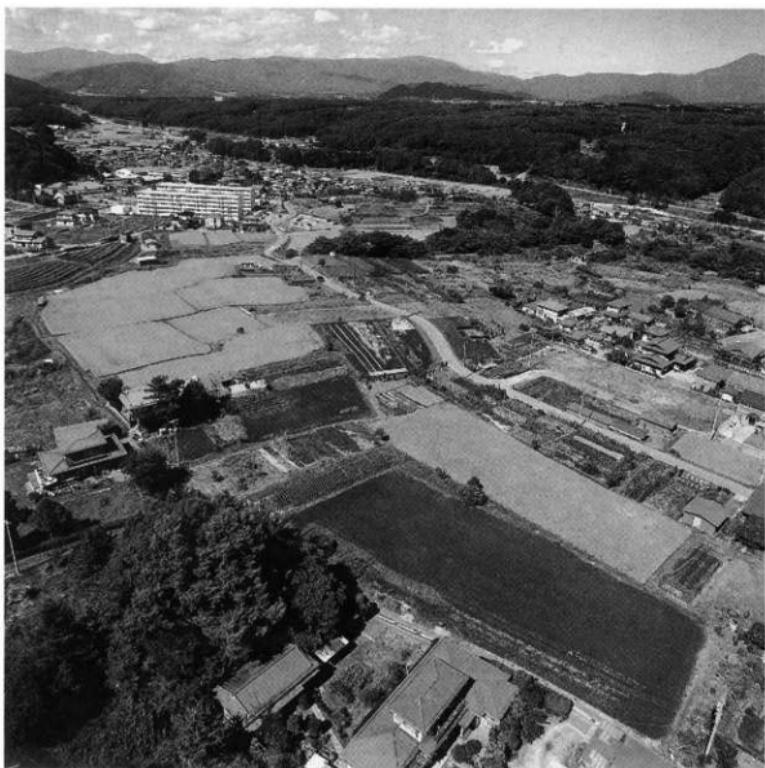
出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
ローム	0.9	1				
マウンド						

出土位置・重減(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
遺構削出時	89.5	10			
表探	1285.4	223	チャート	10.3	2
総計	14870.3	3501		113.4	13

図 版



①芥沢遺跡調査前全景（西側から）左側の水田が平成15年度調査区・奥が平成16年度調査区

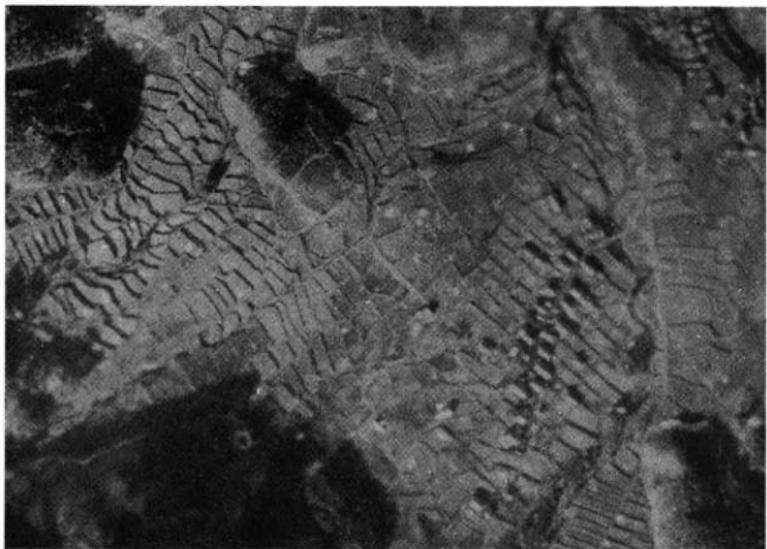


②芥沢遺跡調査前全景（南側から）手前左側の森の中に溝水がある

図版2



①芥沢遺跡遠景航空写真（南側から）左上は諏訪湖



②1947年（昭和22年）の芥沢遺跡周辺（米軍撮影）中央左上が天狗山

図版3



①平成14年度試掘調査の表土剥ぎ



⑤同平成16年度調査区北側（西側から）



②同調査区全景（北東側から）



⑥同平成16年度調査区南側（北西側から）



③同平成15年度調査区（東側から）



④同平成15年度調査区北部（西側から）



⑦同北端部計測作業（東側から）

図版4



①平成15年度表土剥離



②平成15年度堆積検出作業



③平成16年度発掘作業

①豊平小6年1部球場施設活用指定学級体験実習



②茅野北部中職場体験



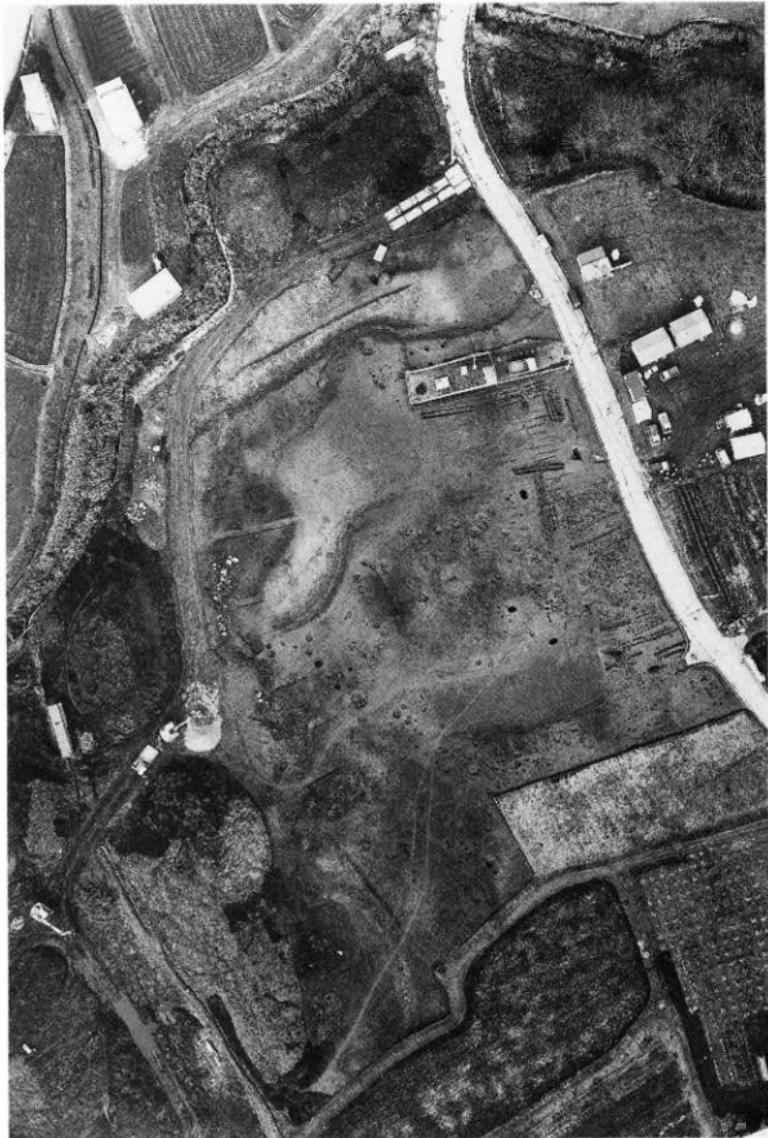
③岡谷北部中職場体験



図版6

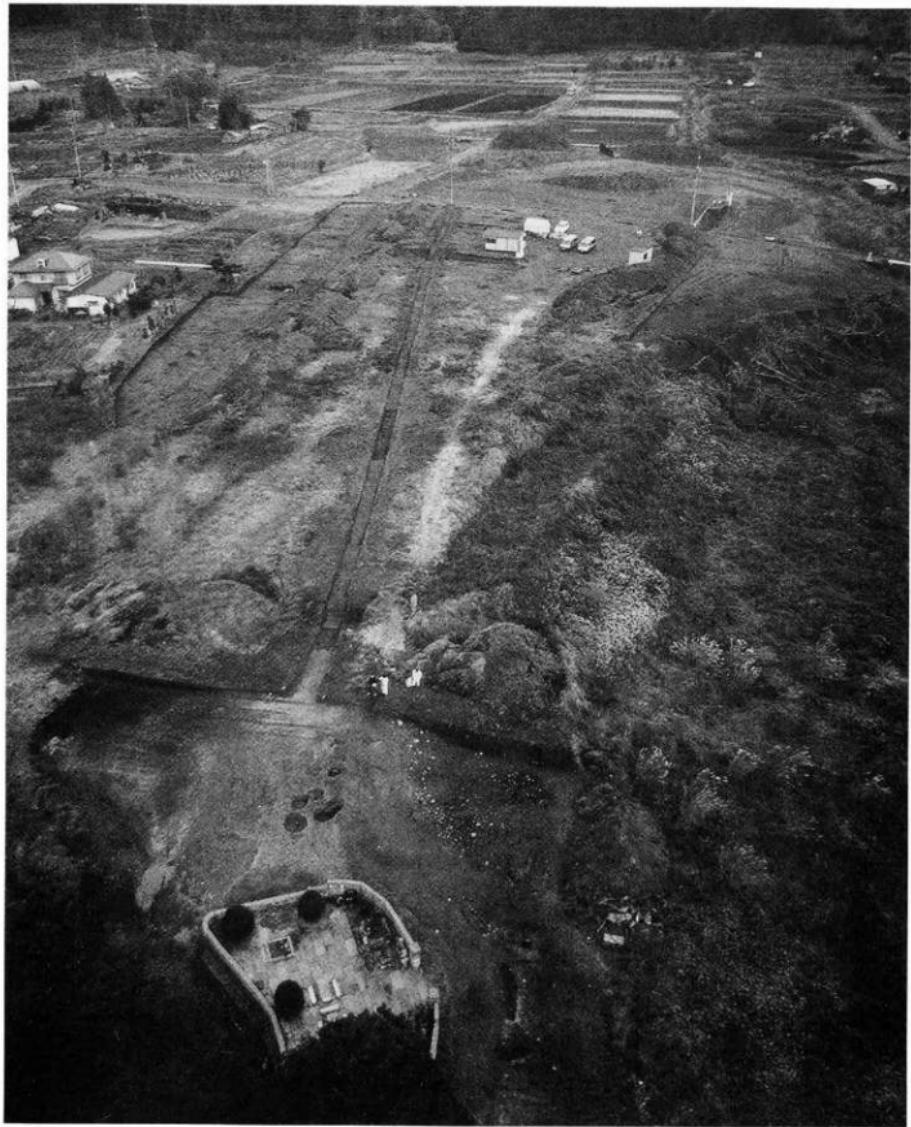


①平成15年度調査区全景（地形計測時）



①平成15年度調査区全景（遭構計測時）

図版8



①平成16年度調査区全景（東側から）

図版9

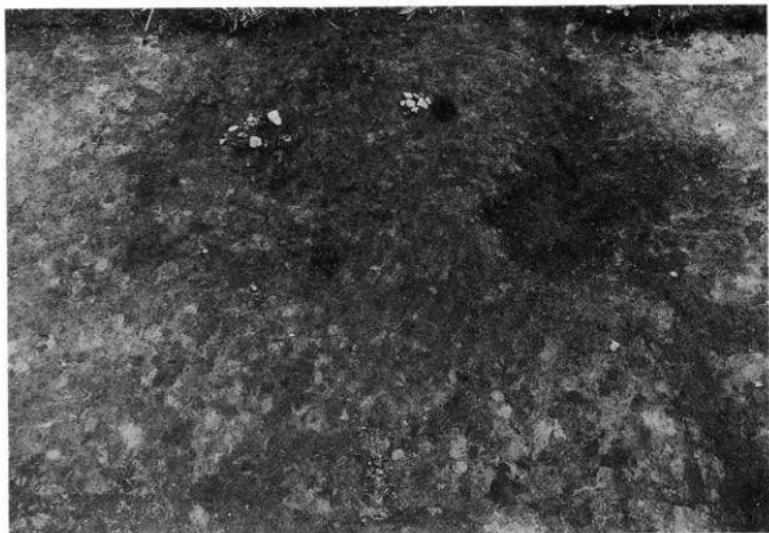


図版10

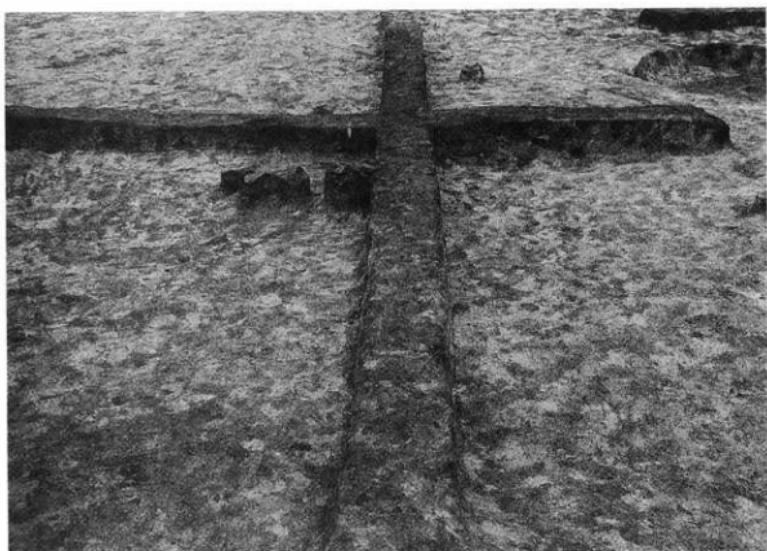


①平成16年度南側調査区西側及び中央調査トレンチ住居検出部分航空写真

②同東側遺構確認状況航空写真



①第1号住居址検出状況（北側から）

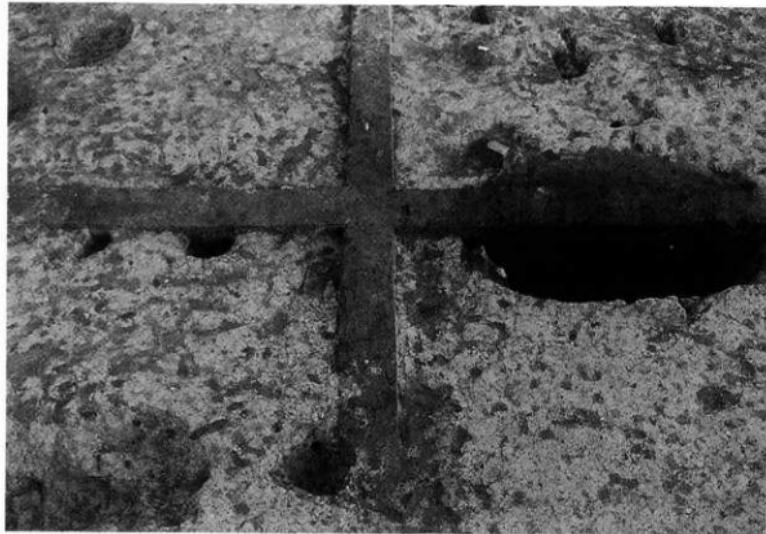


②第1号住居址遺物出土状況（東側から）

図版12



①第2号住居址遺物出土状況（北側から）落し穴との切り合い関係がよく判る



②第2号住居址検出状況（南側から）左側は斬り合っている落し穴



①第3号住居址遺物出土状況（北側から）

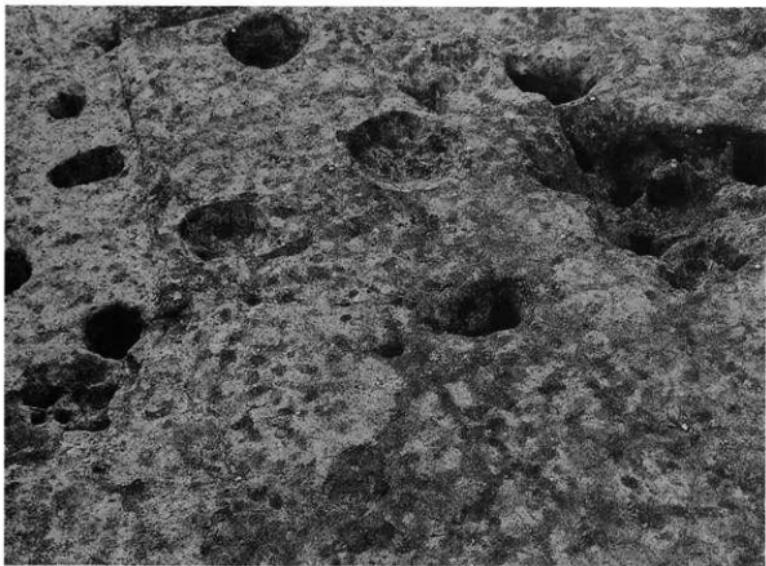


②第3号住居址発掘状況（南側から）

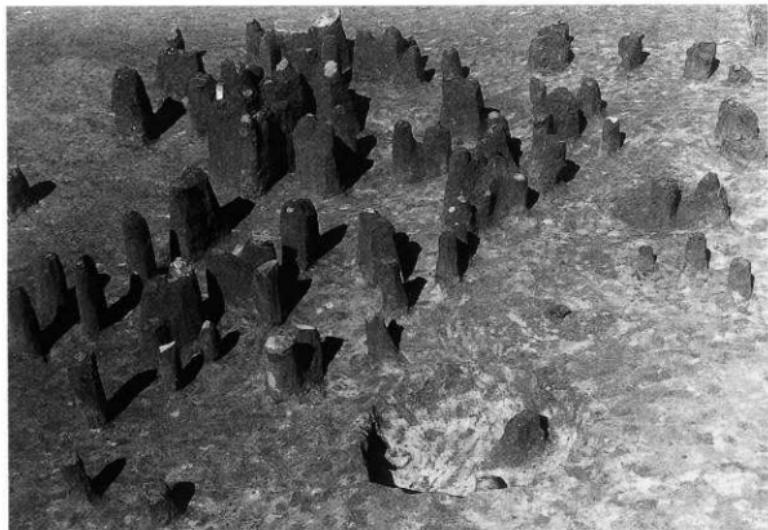
図版14



①第4号住居址遺物出土状況（西側から）



②第4号住居址完掘状況（東側から）



①第5号住居址遺物出土状況（南東側から）

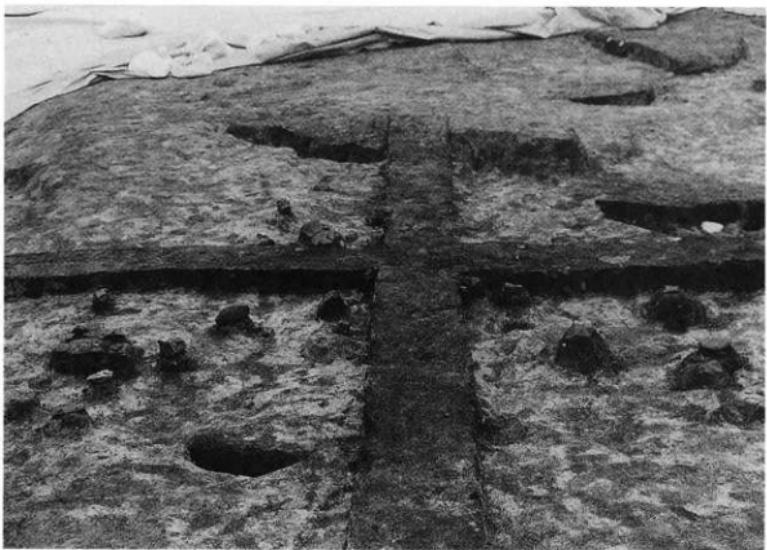


②第5号住居址土器検出状況（北側から）断面に現われた土器洞部

図版16



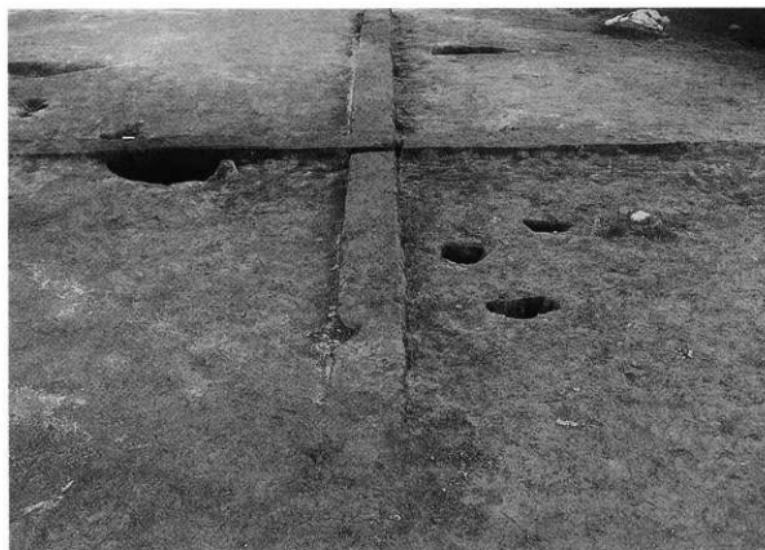
①第6号住居址検出状況（南側から）



②第6号住居址遺物出土状況（西側から）

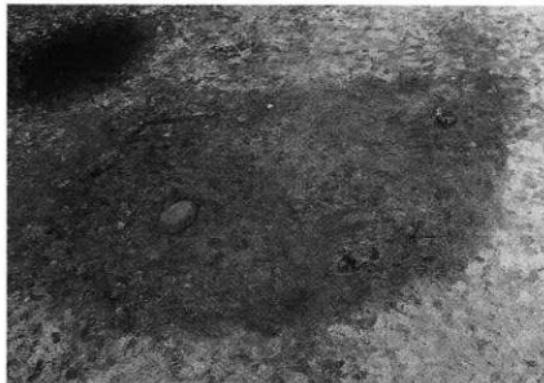


①第7号住居址検出状況（南側から）



②第7号住居址遺物出土状況（北側から）

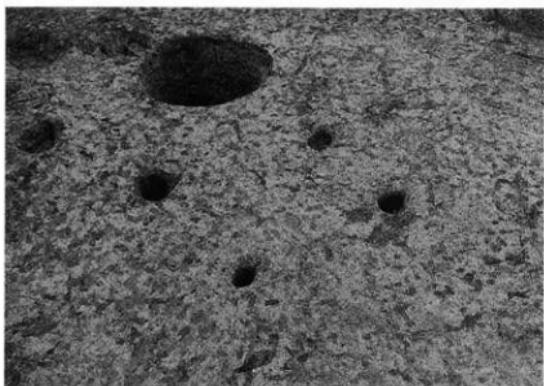
図版18



①第8号住居址検出状況（南側から）



②第8号住居址出土土器（南側から）



③第8号住居址発掘状況（南側から）



①第9号住居址断面（南側から） 右は第91号土坑

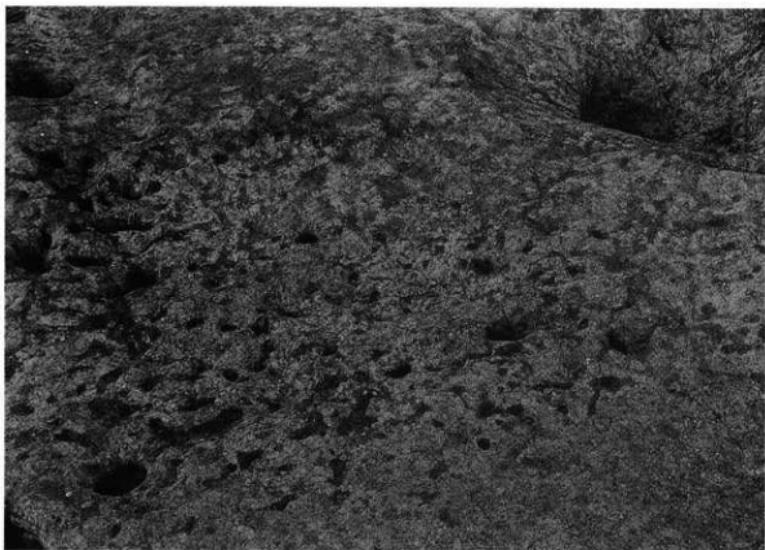


②第9号住居址完掘状況（南側から）

図版20



①第10号住居址検出状況（南側から）



②第10号住居址完掘状況（南側から）



①第11号住居址検出状況（南側から）



②第11号住居址完掘状況（南側から）

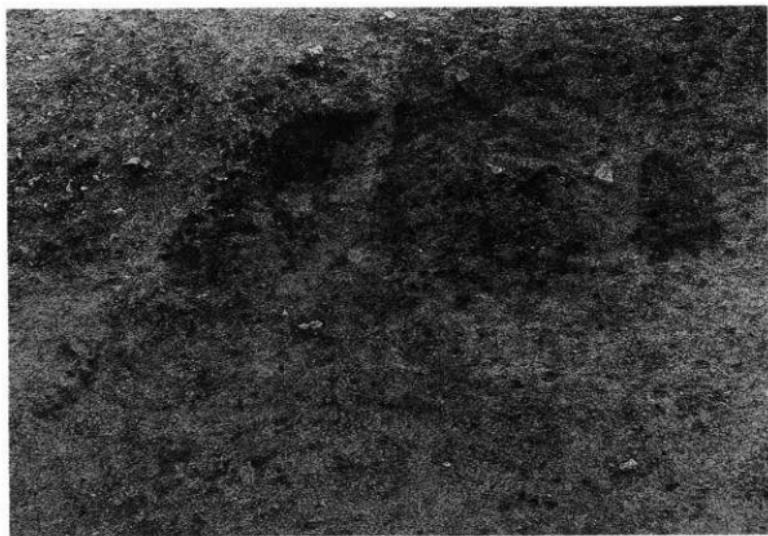
図版22



①第12号住居址検出状況（南側から）



②第12号住居址遺物出土状況（南側から）

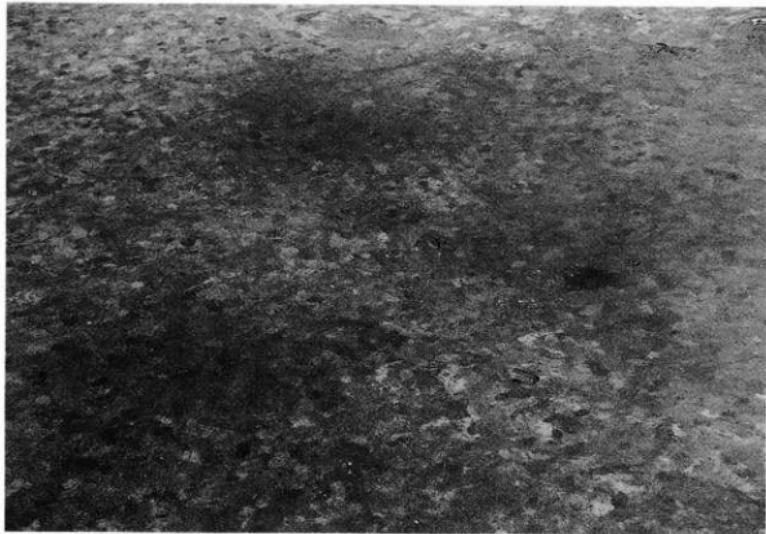


①第13号住居址検出状況（西側から）



②第13号住居址遺物出土状況（南側から）

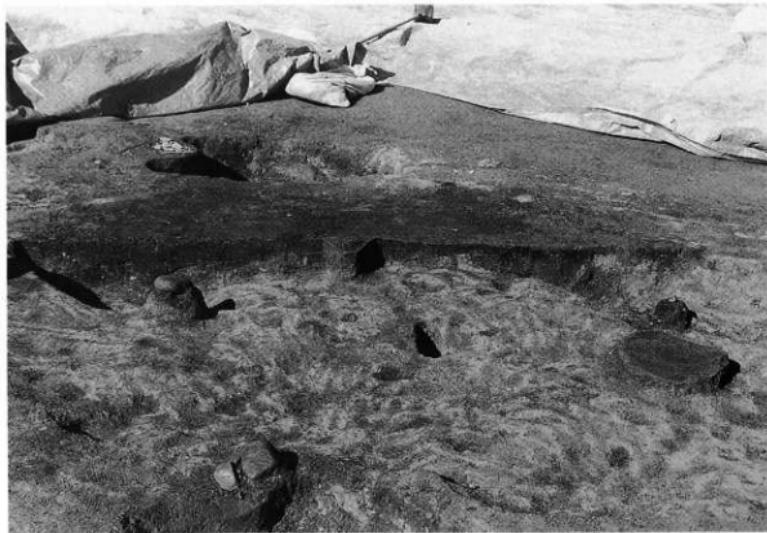
図版24



①第14号住居址検出状況（南側から）



②第14号住居址遺物出土状況（南東側から）



①第15号住居址遺物出土状況（南東側から）

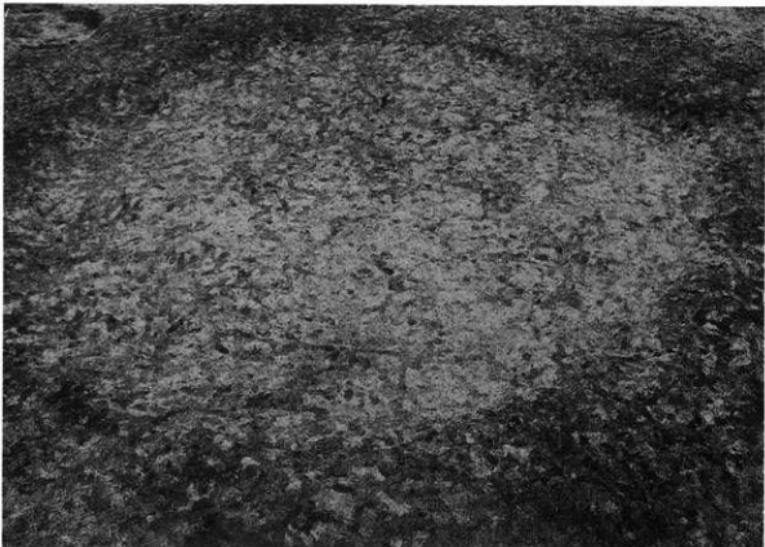


②第15号住居址完掘状況（南側から）

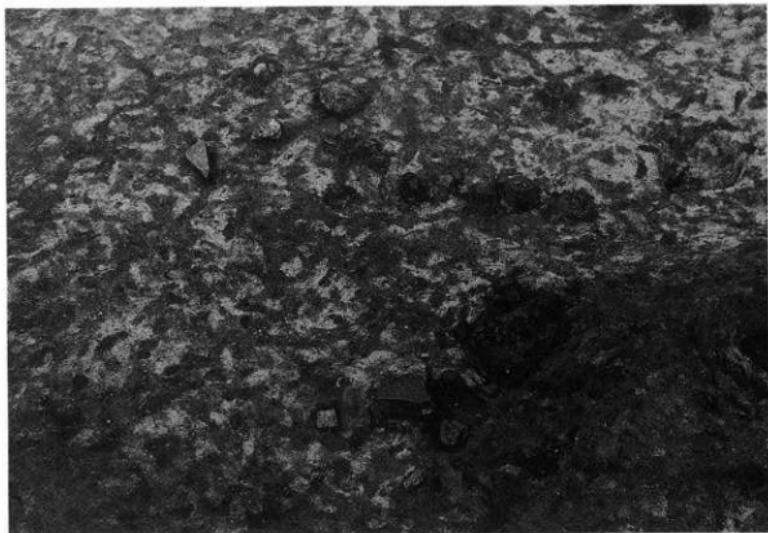
図版26



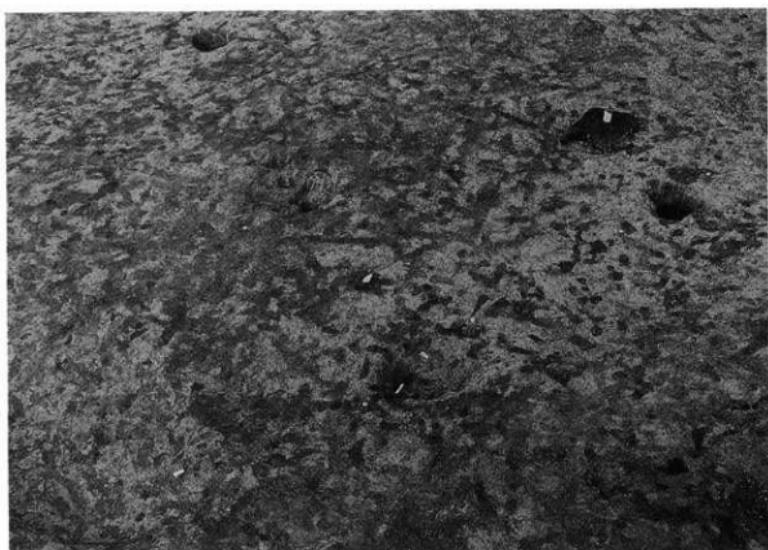
①第16号住居址検出状況（南東側から）



②第16号住居址完掘状況（南側から）

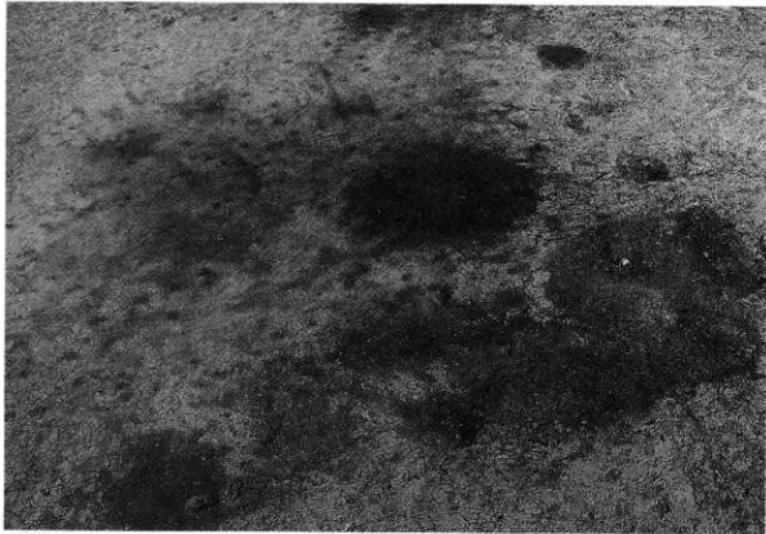


①第17号住居址遺物出土状況（南側から）

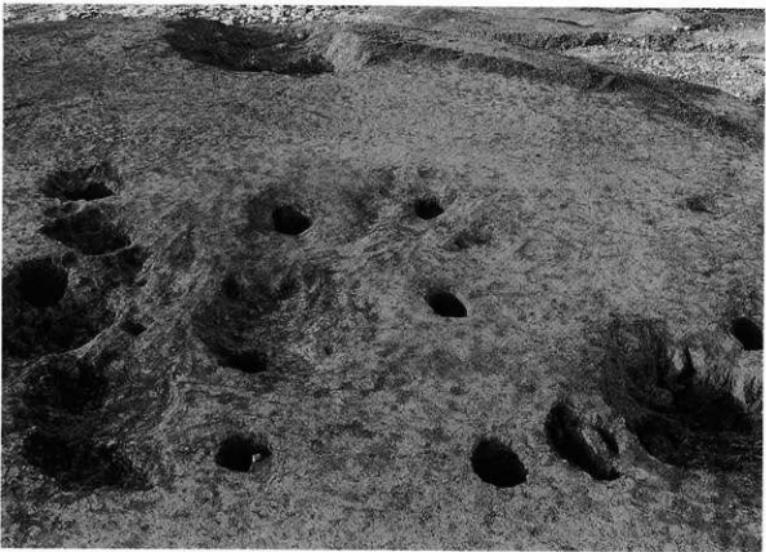


②第17号住居址完掘状況（西側から）

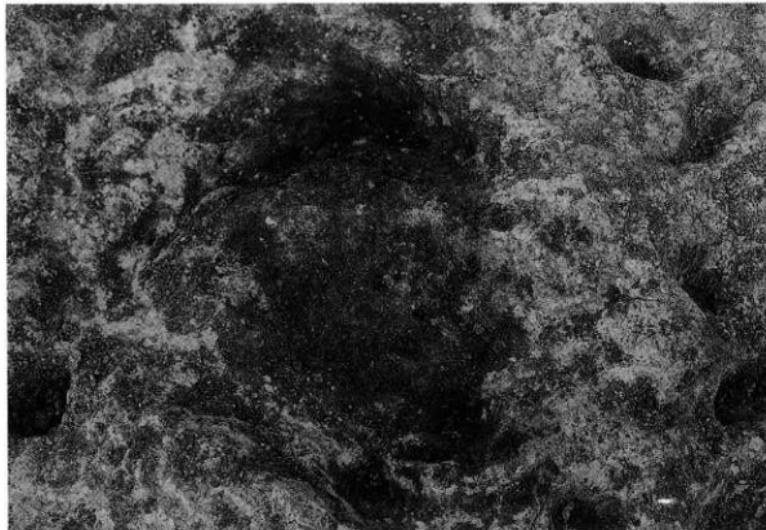
図版28



①第18号住居址検出状況（西側から）



②第18号住居址完掘状況（南側から）

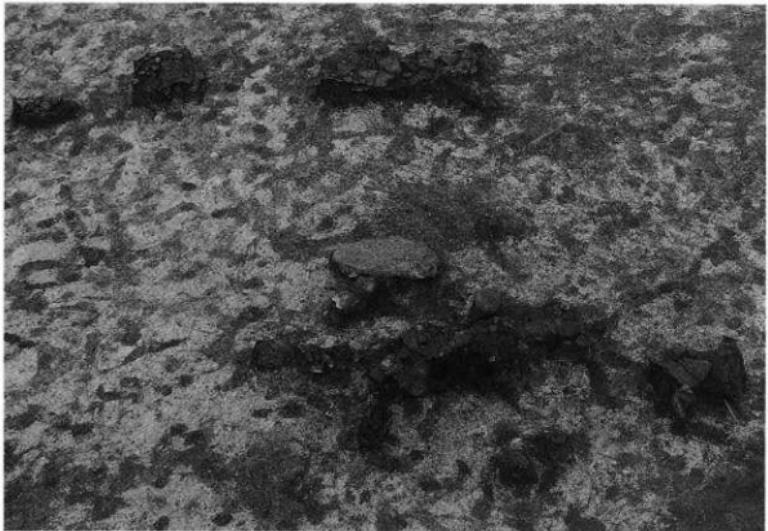


①第19号住居址炉（南側から）



②第19・22号住居址完掘状況

図版30



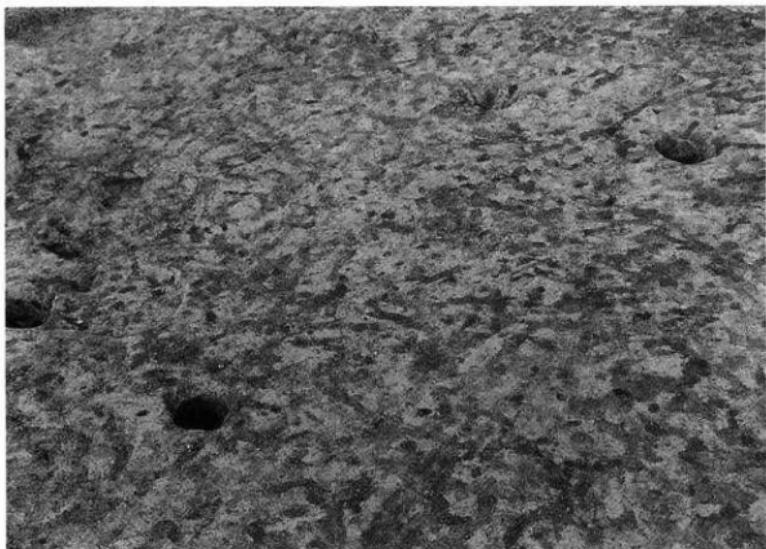
①第20号住居址遺物出土状況（南側から）



②第20号住居址遺物出土状況（北側から）

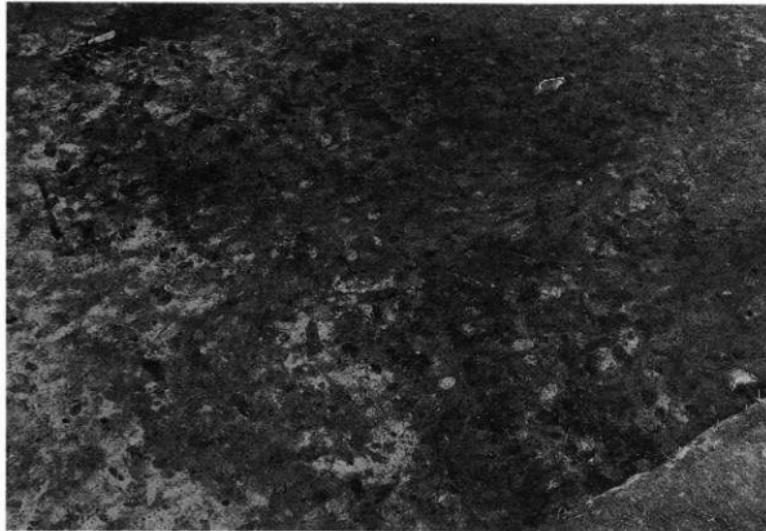


①第20号住居址土器出土状況（北側から）



②第20号住居址完掘状況（南側から）

図版32



①第22・32号住居址検出状況（南街から）



②第22・32号住居址遺物出土状況（北東側から）



①第23号住居址発出状況（南側から）



②第23号住居址遺物出土状況（南側から）

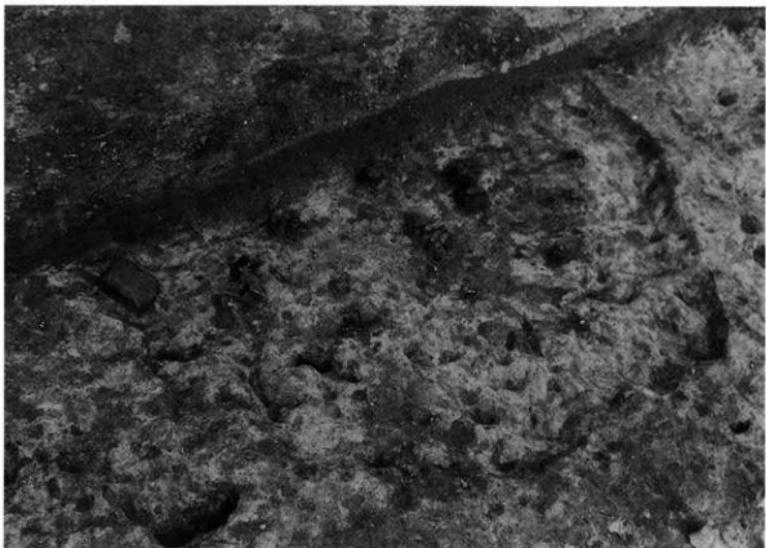


③第23号住居址遺物出土状況

図版34



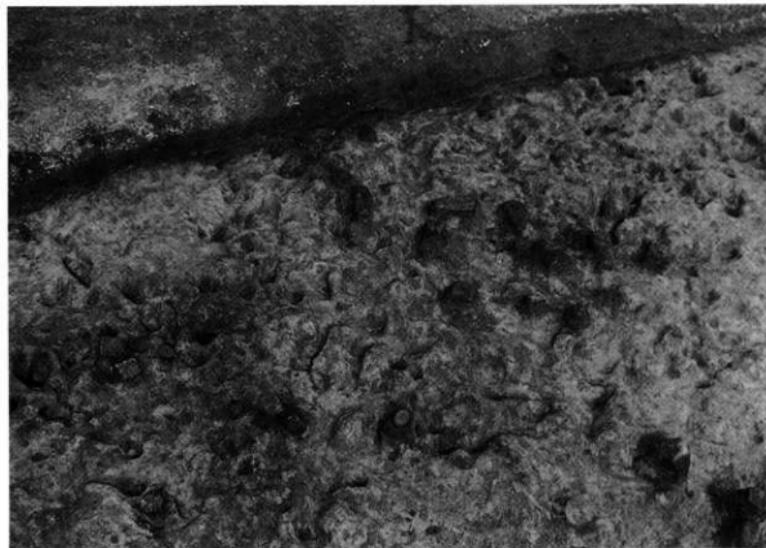
①第24号住居址検出状況（南側から）



②第24号住居址遺物出土状況（南側から）



①第25号住居址検出状況（南側から）

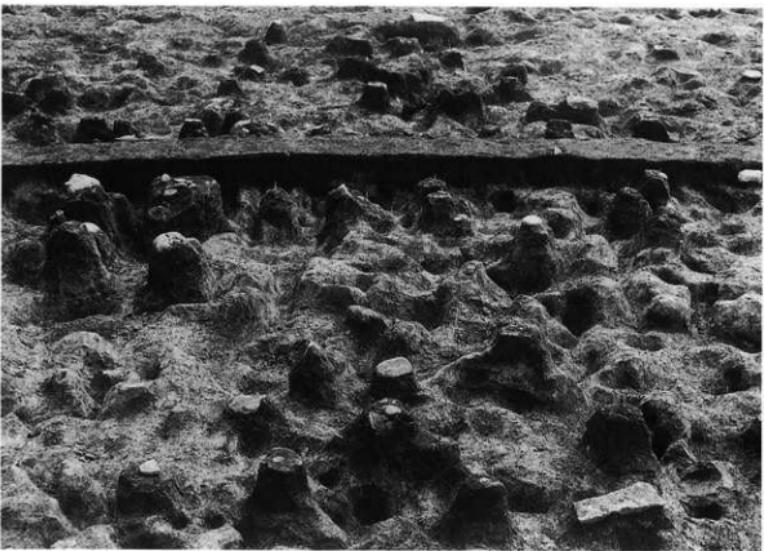


②第25号住居址遺物出土状況（南側から）

図版36



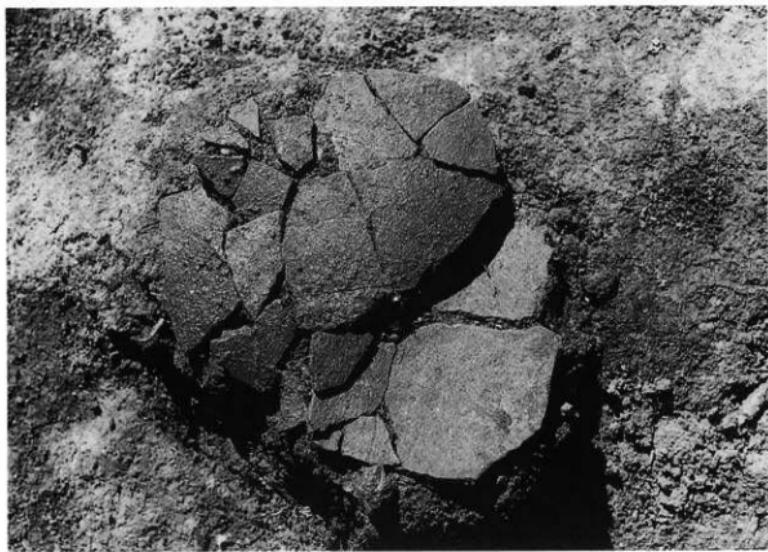
①第26・33号住居址検出状況（南側から）



②第26号住居址遺物出土状況（北側から）



①第27号住居址検出状況（南側から）

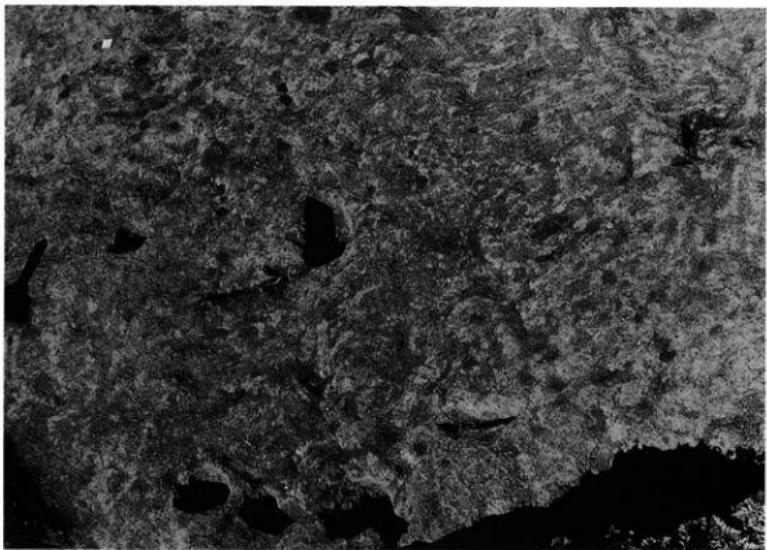


②第27号住居址土器出土状況（北側から）

図版38



①第28号住居址検出状況（西側から）



②第28号住居址遺物出土状況（南側から）



①第29号住居址検出状況（西側から）



②第29号住居址（西側から） 焼土を残して掘り上げた状態

図版40



①第30号住居址遺物出土状況（南側から）



②第30号住居址検出状況（南側から）

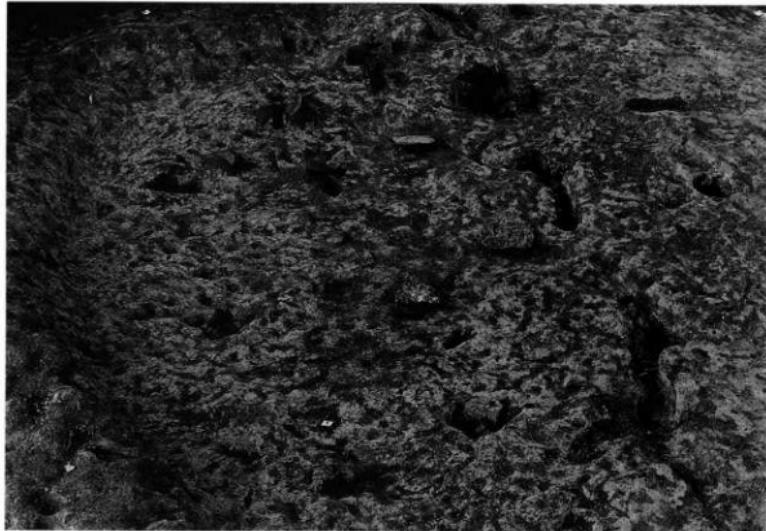


①第31・34号住居址検出状況（南側から）



②第31・34号住居址遺物出土状況（南側から）

図版42



①第31号住居址床直上遺物出土状況（南側から）



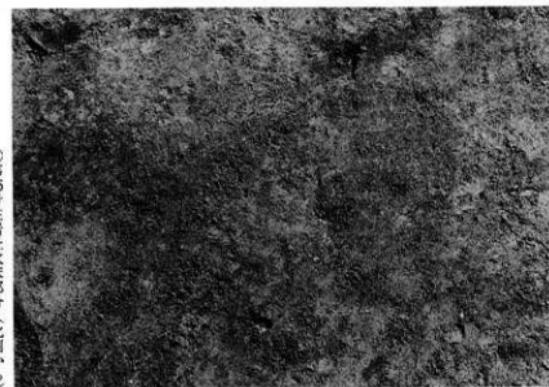
②第31・34号住居址完掘状況（南側から）



①第35号住居址遺物出土状況（西側から）



②第35号住居址遺物出土状況（北側から）



③第36号住居北火床部分（北側から）

図版44



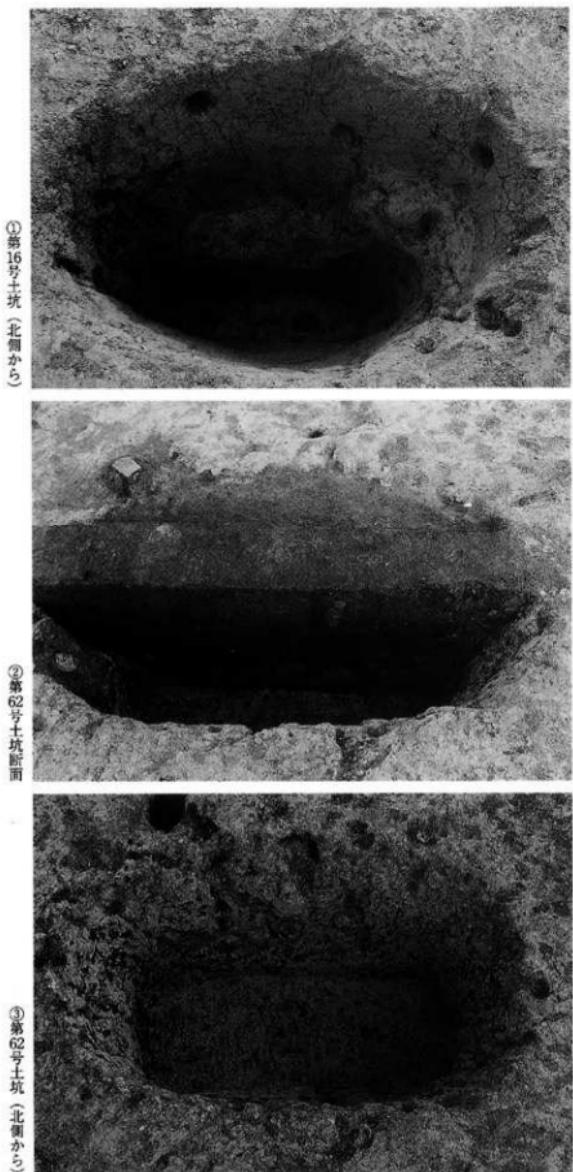
①2年度にわたる調査区に統く
落し穴位置



②第8号土坑
(北側から)



③第16号土坑断面
(南側から)



図版46





図版48



①第14号土坑
(東側から)



②第14号土坑
(東側から)



③第15号土坑断面
(西側から)



① 第25号土坑発出状況（西側から）



② 第25号土坑遺物出土状況（南側から）



③ 第25号土坑発出状況（北側から）

図版50



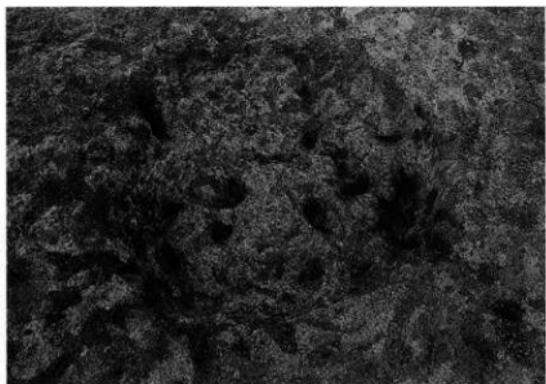
①第228号土坑断面（北側から）



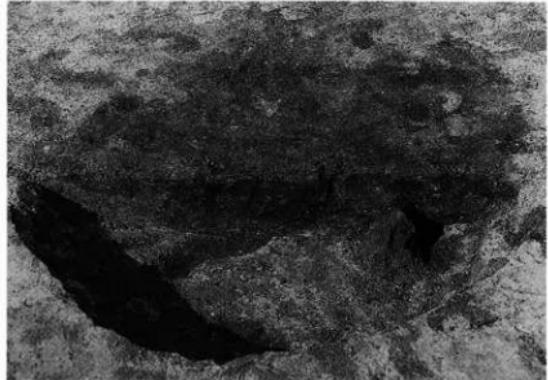
②第227号土坑断面（東側から）



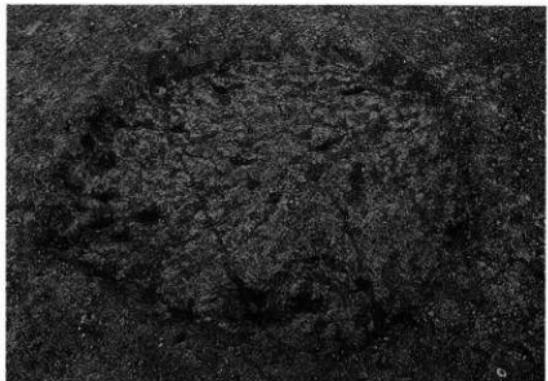
③第227号土坑（西側から）



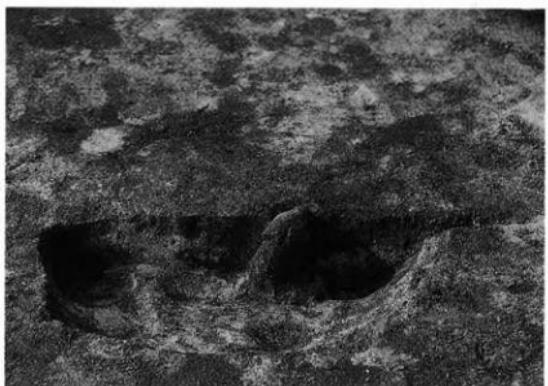
図版52



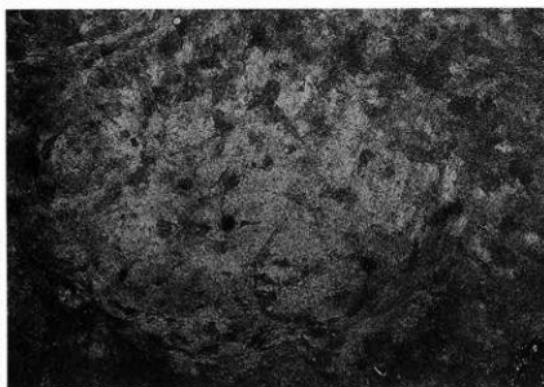
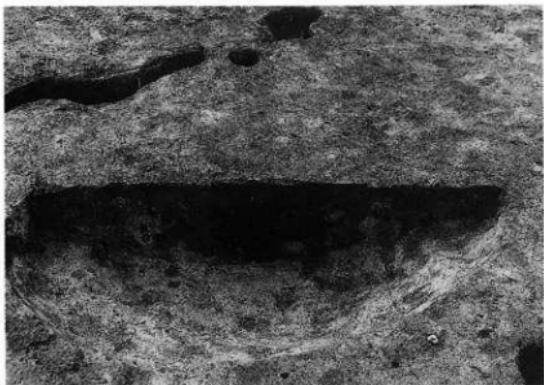
①第13号土坑断面
(南側から)



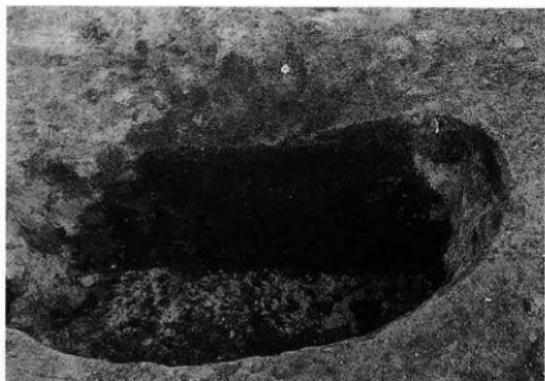
②第19号土坑
(西側から)

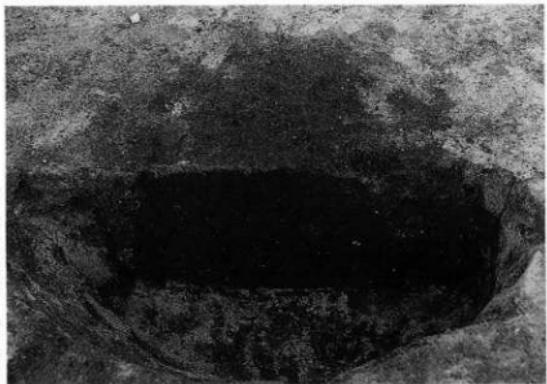


③第20号土坑断面
(南東側から)

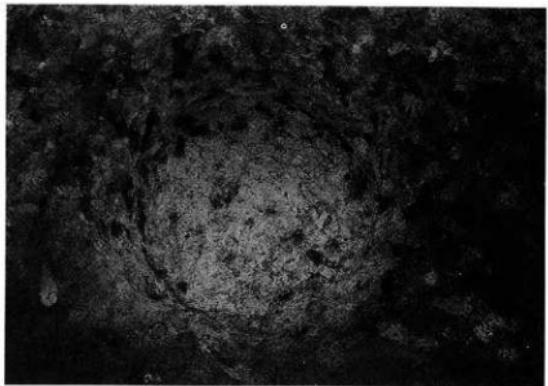


図版54





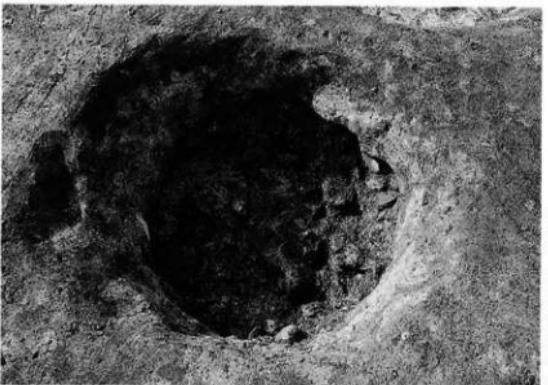
図版56



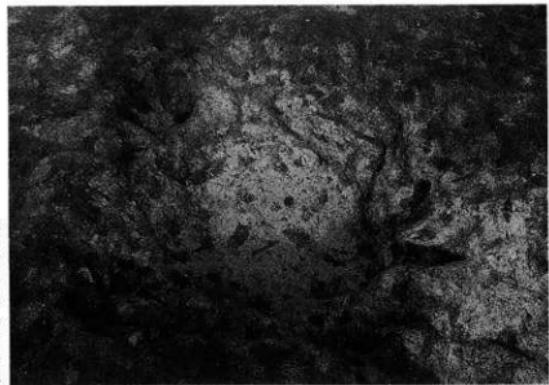
①第56号土坑
(西側から)



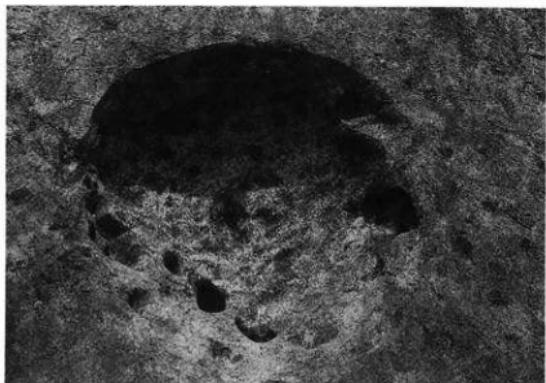
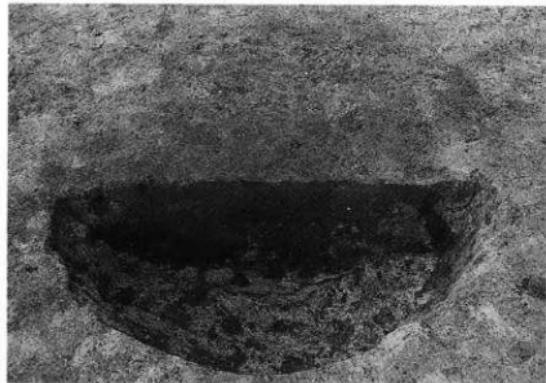
②第55号土坑断面
(南東側から)

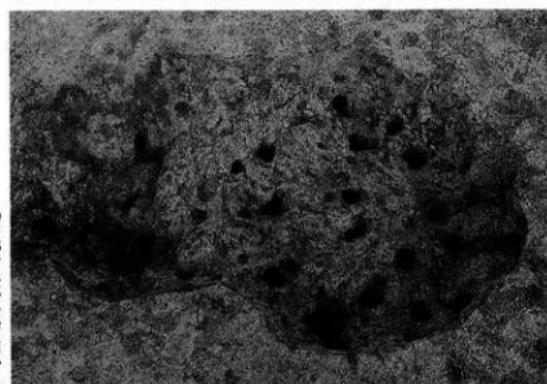
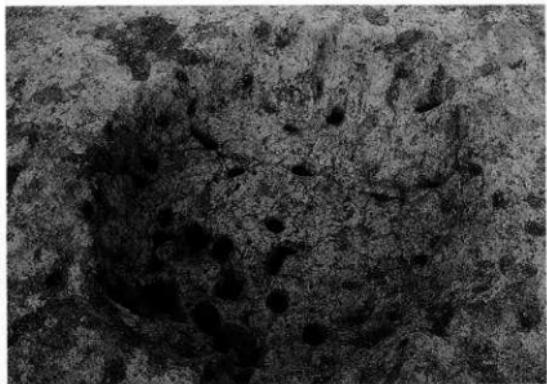


③第55号土坑
(南東側から)

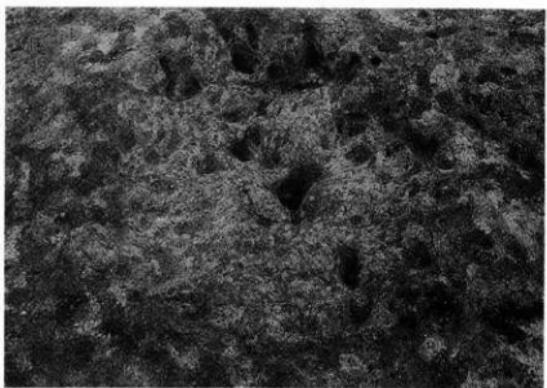
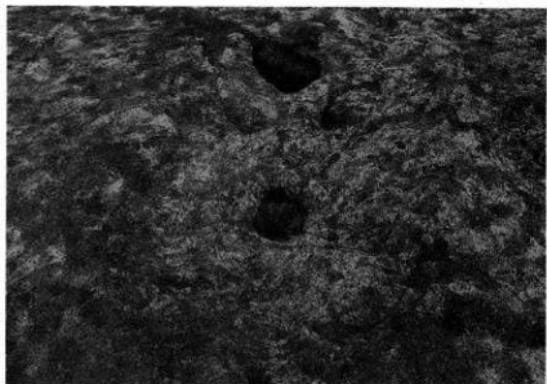


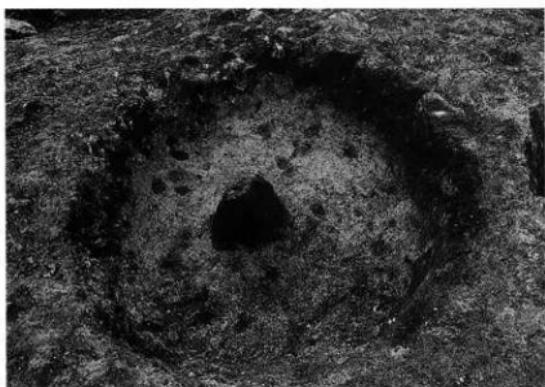
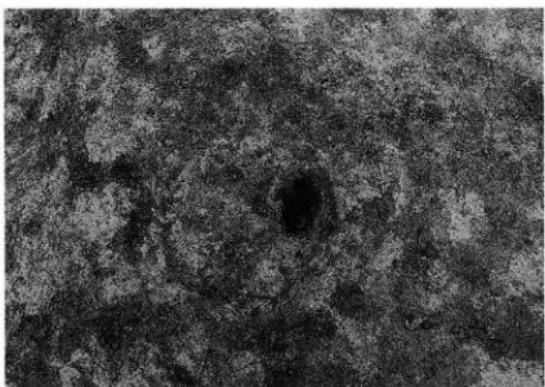
図版58





図版60

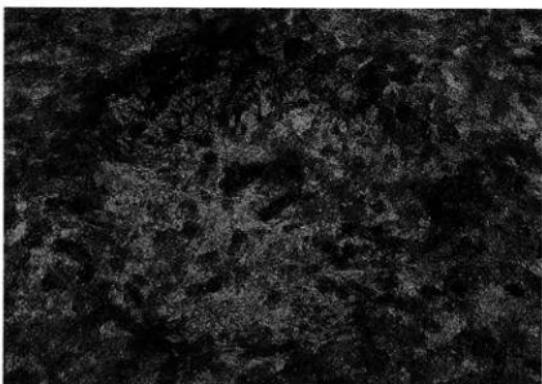




図版62



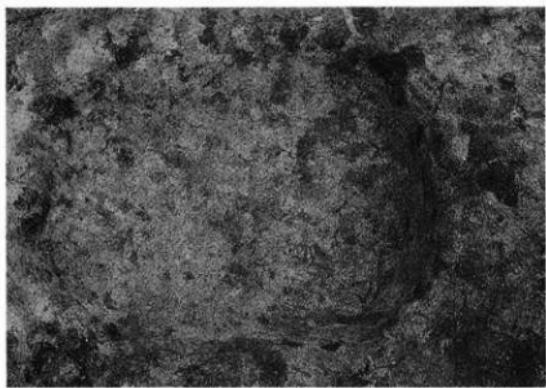
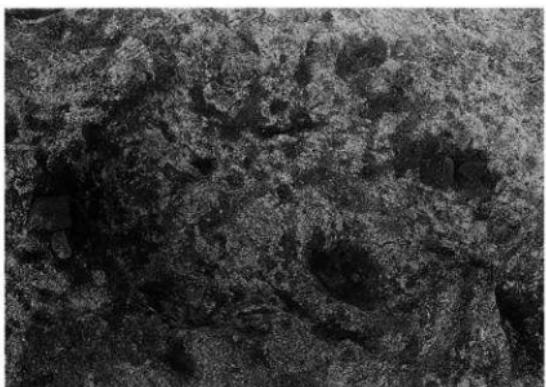
①第95号土坑断面
(北側から)



②第95号土坑
(西側から)

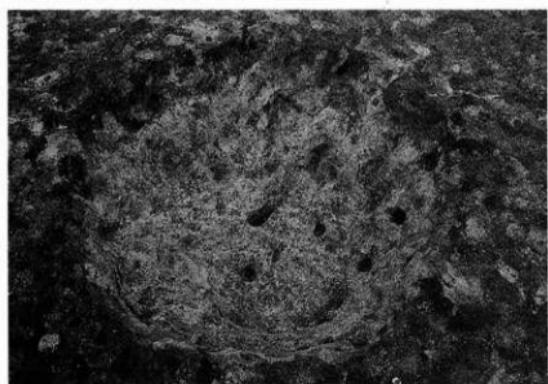
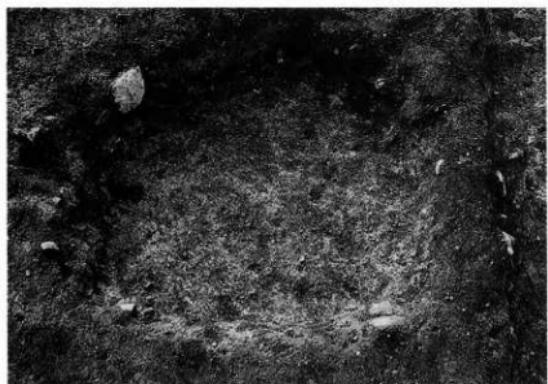
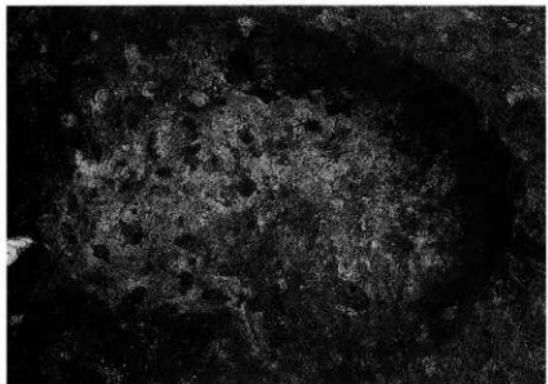


③第98号土坑断面
(南東側から)

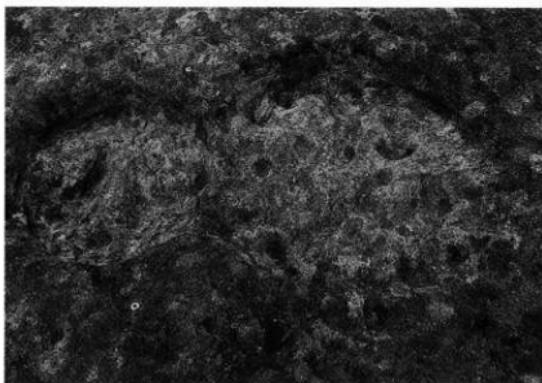
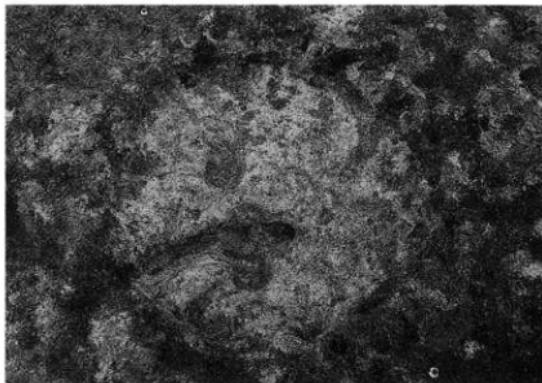


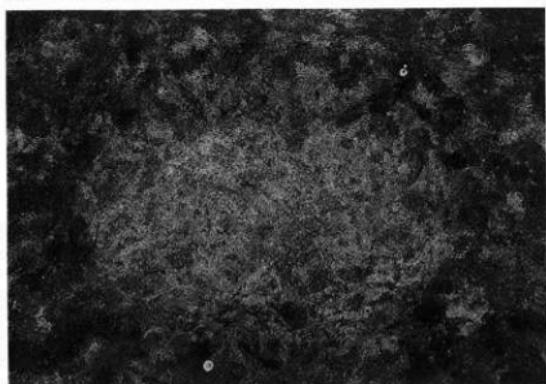
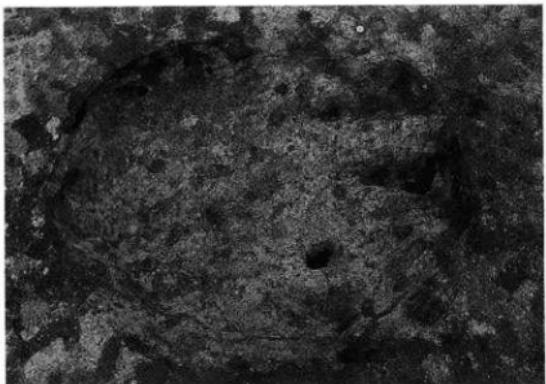
図版64



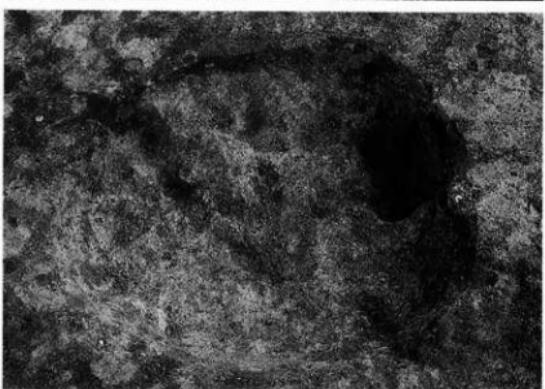
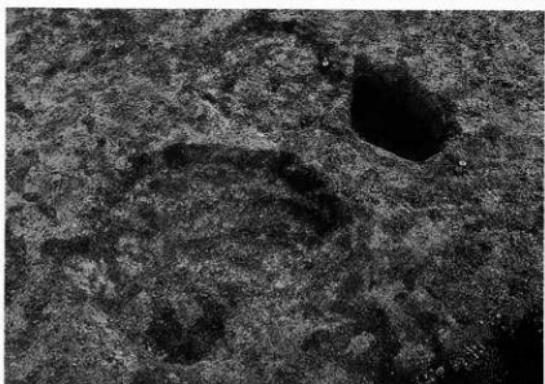
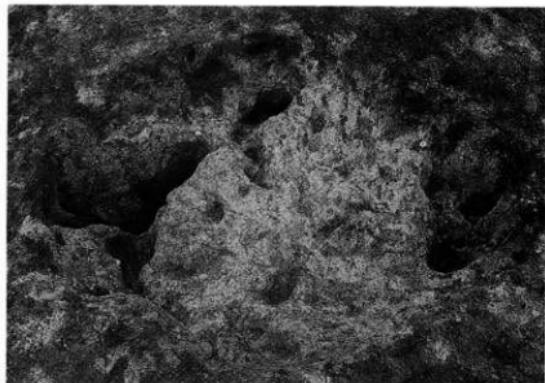


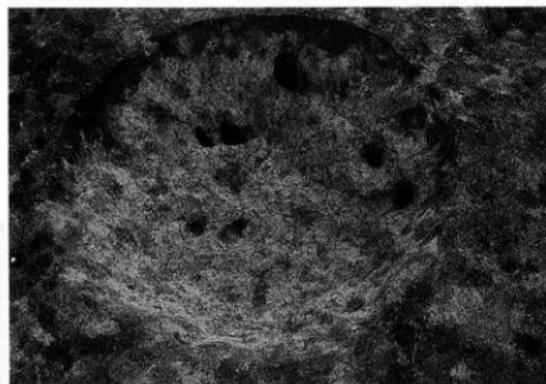
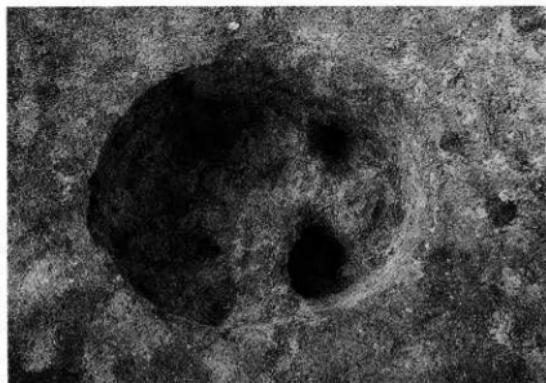
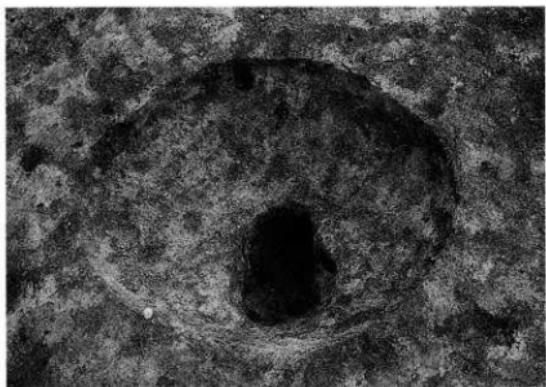
図版66



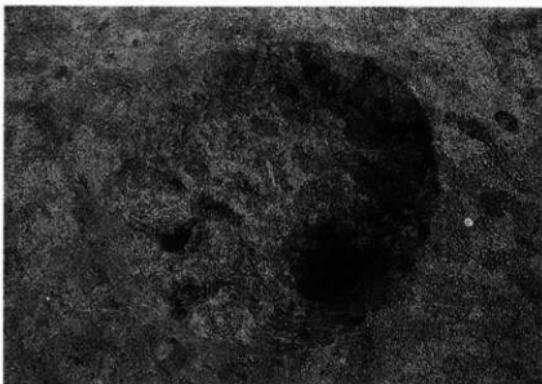
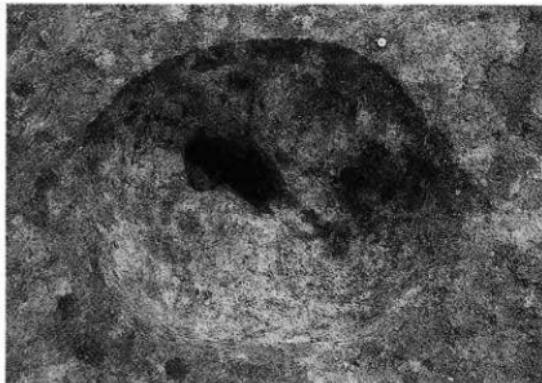


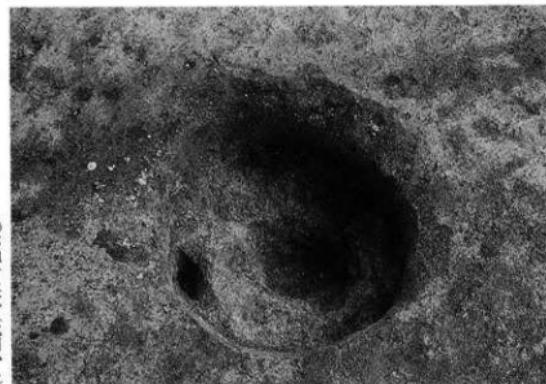
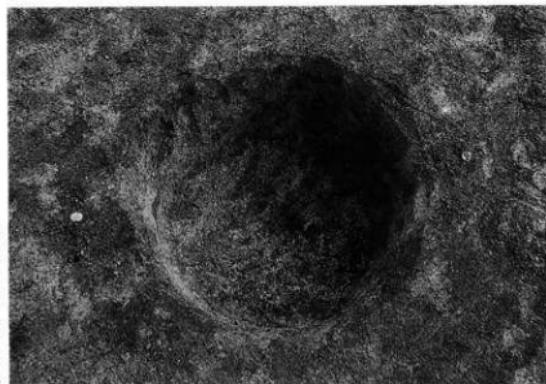
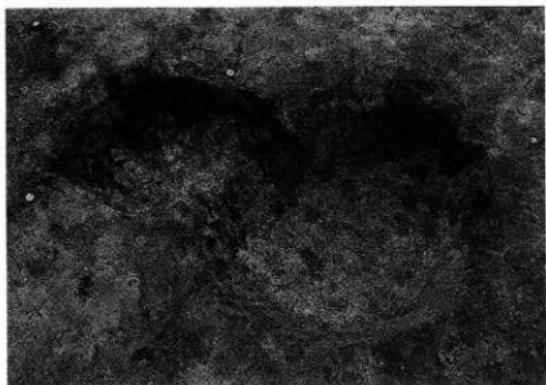
図版68



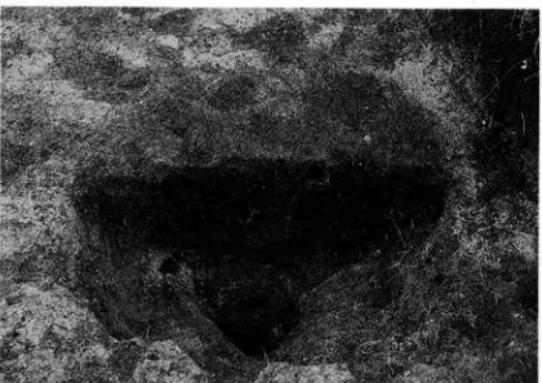
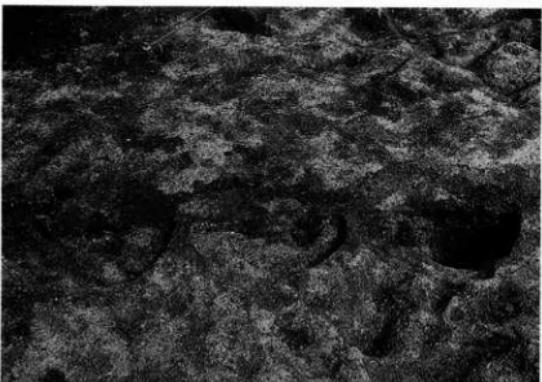


図版70





図版72





①第186号土坑断面
(東側から)



②第149号土坑
(西側から)



③第149号土坑断面
(南側から)

図版74



①第190号土坑（南側から）



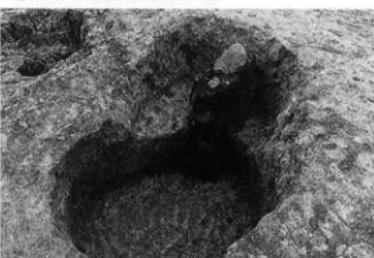
②第189・190号土坑



③第189・190号土坑の地割れ



④第191号土坑断面（南側から）



⑤第191・222号土坑（東側から）



⑥第192号土坑（南側から）



⑦第192・224号土坑（西側から）



①第191・192・223・224号土坑（東側から）



②第223号土坑（南側から）



③第193・194号土坑断面（南西側から）



④第220号土坑断面（西側から）



⑤第222号土坑断面（東側から）



⑥第228・229・231号土坑断面（西側から）



⑦第232号土坑断面



⑧第239号土坑断面（西側から）

図版76



①第1号集石炉検出状況（東側から）



②第1号集石炉断面（西側から）



③第2号集石炉（南西から）



①第1号石窯の発出状況
(南側から)



②第1号石窯
石組みの状況
(西側から)



③第1号石窯
盛黒曜石出土状況
(西側から)

図版78



①第1号溝址出土状況（南側から）



②第1号溝址上段部全景（北側から）



③第2号溝址（南側から）



①平成16年度南側調査区盛土保存部遭損露出状況



②平成15年度調査区西側破砕帯部分（南側から）

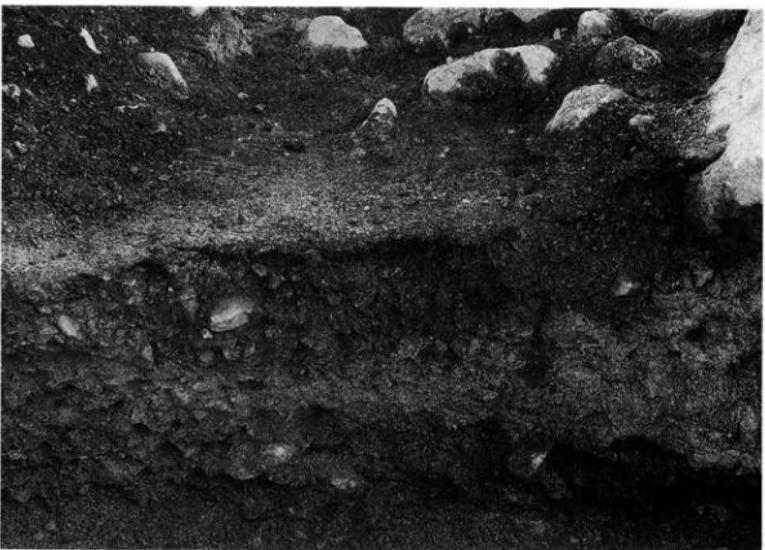


③平成15年度西側隣接部水山部分の破砕帯露出状況

図版80



①平成15年度構造線境界断面



②平成15年度構造線断面（平底の落ち込みが見える）



①第1号住居址出土土器



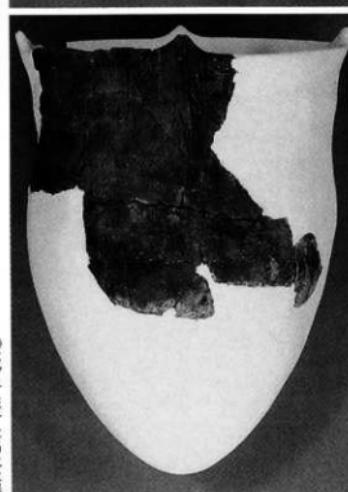
②第6号住居址出土土器



③第8号住居址出土土器



④第12号住居址出土土器

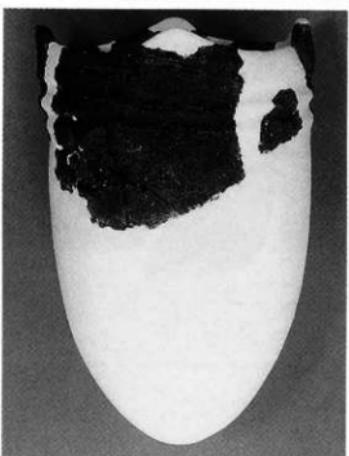


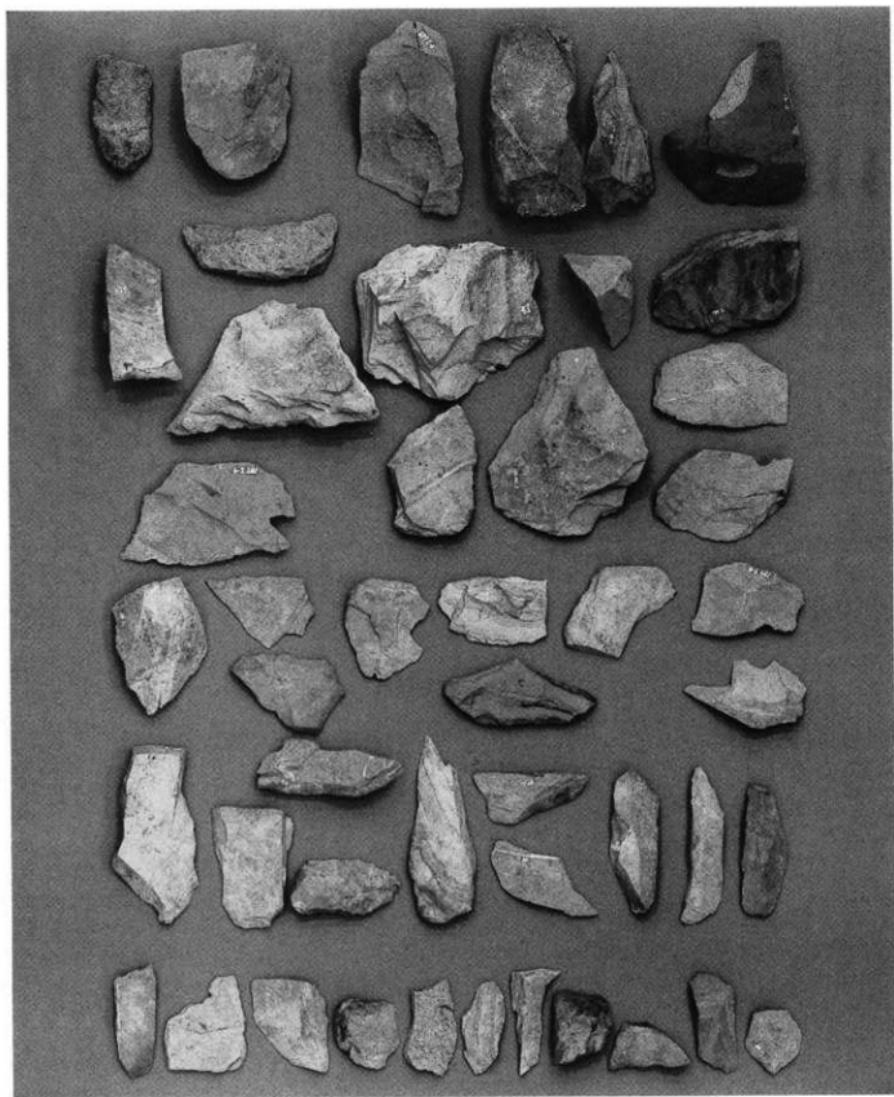
⑤第17号住居址出土土器



⑥第17号住居址出土土器

図版82





①芥沢遺跡出土緑色岩の原石、石器類

図版84



▲①基準坑測量



②平成15年度のヘリコプターによる航空測量▶



▲①航空測量現地校正



②平成16年度のラジコンヘリによる航空測量▶

①平成17年度本工事の遺跡保存地用ロームの切出し



②同廃土作業



③同廃土確保確認作業



図版86



①金沢歴史同好会の現地見学



②③現地見学説明会（上②平成15年 下③平成16年）



④平成15年度発掘に協力いただいた方々



⑤平成16年度発掘に参加いただいた方々

報告書抄録

ふりがな	ごみっさわいせきⅡ							
書名	芥沢遺跡Ⅱ							
副書名	「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	百瀬 一郎							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒 391-8501 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号 Tel.0266-72-2101							
発行年月日	西暦2007年3月22日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
芥沢	茅野市金沢	20214	189	35度 56分 21秒	138度 11分 37秒	20030618 ～ 20031215 20040802 ～ 20041125	12.615m ²	農業基盤整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
芥沢	集落跡	縄文早期末期初頭 縄文中期 平安	縄文住居-37 平安住居-4 土坑-229	ナイフ形石器-旧 石器- 土器、石器-縄文 早期末前期、中期、 後期- 土師器、灰釉陶器、 土鍥ほか-平安- 内耳土器-中世- 整理箱18	糸魚川静岡構造線上に広がる本遺跡は阿久遺跡の集落が形成されていく前段階の縄文時代早期末前期初頭の大遺跡で平安時代の住居址も検出している。時期、規模、保存されている現況、時期不明ではあるが落し穴のあり方等から貴重な遺跡である。			

芥沢遺跡Ⅱ

――「原営中山間総合整備事業 御柱の
里地区」に伴う発掘調査報告書――

平成19年3月19日 印刷

平成19年3月22日 発行

福集茅野市教育委員会

発行 長野県茅野市塙原二丁目6番1号

fm0266-72-2101

印刷水明社 印刷所

長野県茅野市塙原二丁目12番30号

